大正十一年九月十三日第三種郵便物認可
大正十二年七月一日發行大正十二年六月十三日印刷納本

THE JOSEI KAIZO

女性改造

第二巻第七號

良品廉價

ハリキン石鹸

東京日本橋馬喰町
ハリキン石鹸本舗
ハリキン化粧品株式會社



うれしき旅の
ハリキン日記



海岸の數日
心氣爽快
男性の美を
發揮して盛
に泳ぐ

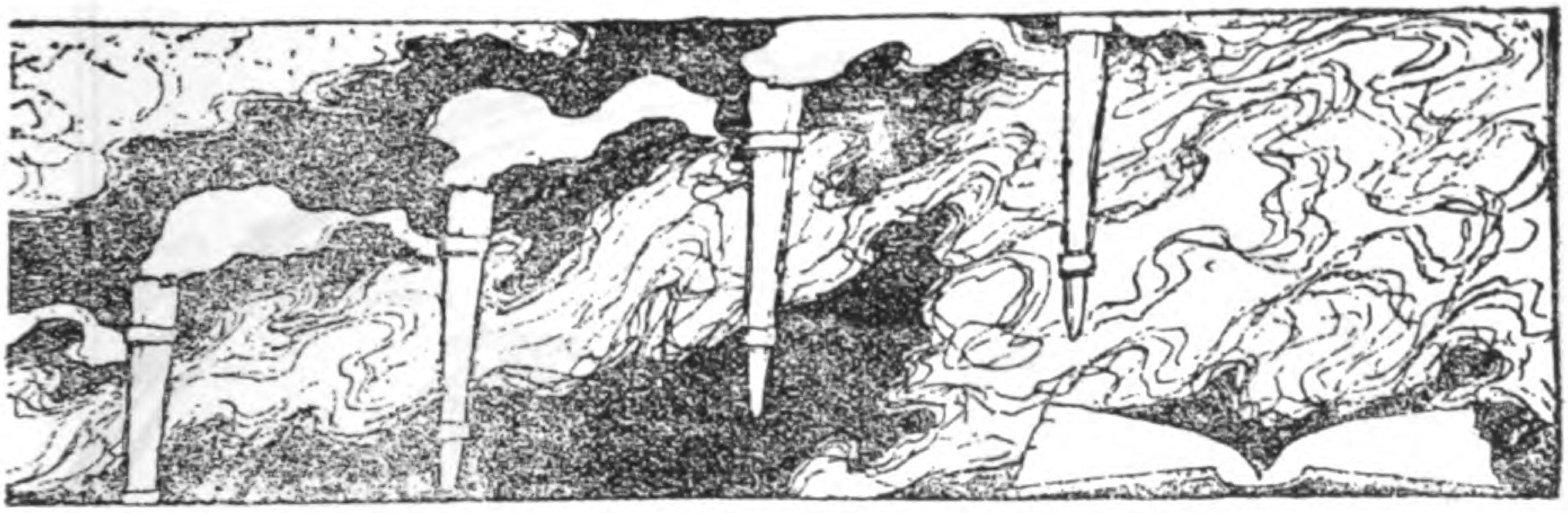


日本アルプス
の旬日
仙境に遊ぶ
の思ひ



温泉の
氣分
又豊なり

愛用の
ハリキン石鹸
は到る處で
僕を
愉快にして
くれた



女性改造七月號目次

リッケルト原著
小川義章譯

（リッケルト全集一卷）

定價貳圓八拾錢
送料二十一錢

リッケルト全集第一卷
生の哲學

六版

「生」は宇宙の中心である、總ての哲學は一切を「生」に關係づけられると斷定して、生の根本思想を解明し、人生に於ける眞の「生の意義」を明にしたものが本書である、人間が前進するに當つてその據砦となる進出地點を提供するものが實に生の哲學である。リッケルト氏が新理想主義派の巨頭であることは苟も哲學を念とするものの知れる所だ、氏は生の概念を以て總體的世界觀、人生觀を樹立した我々人間の恩人だ、此一書が我々にいかに生命の重要さを語り、そして生命の高貴な光を生への躍動に向つて導いて居るか、「生」の幽玄なる使命を知らんとするものは一讀せ。本書はリッケルト全集第一卷として公刊しましたものです。

東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

中西伊之助作

長編小説

農夫喜兵衛の死

四六判
上製

定價壹圓七拾錢
書留送料拾五錢

農民小説の魁をなせる本書を一讀して下さい。

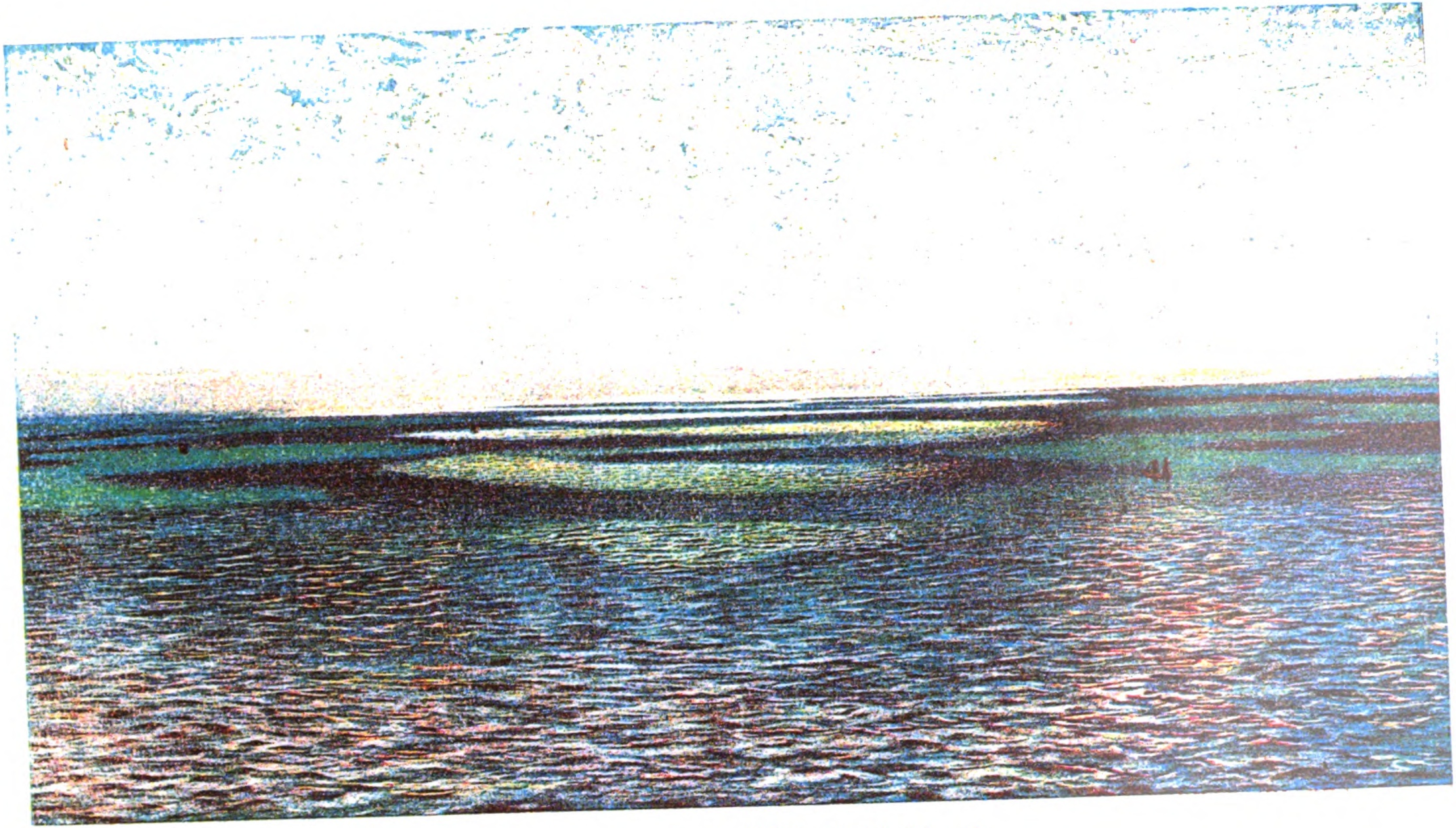
◇小作農喜兵衛の伜は兵に徴されて滿洲で戰死し、その娘は賣られて朝鮮に赴きました、そして朴訥の聞え高かつた彼は地主からいぢめられて水に溺れました。◇本書を讀めば小作人がいかに地主にいぢめられ、そして小作人の娘や、作が悲しい人生觀を抱いて雜遊するか農民生活のみじめさがしみじみと身にしみて來ます◇農村は年と共に荒廢して　きます、そして地主と小作人との階級意識も年と共に熾烈になる、經世家が第一に注目すべきは此點です◇彼等はしかくいぢめられて死より强き反抗心を子々孫々に傳へます◇そして一面蹴られ、擲ぐられても戀愛は彼自身の好きな方面に芽生え、生長して行きます、彼の戀愛の前には資本家の猛烈な壓迫も及びもつきません◇プロ文壇の第一人者たる中西君のメスがいかに鋭く彼等の叫ばんとする處を突き刺したか精讀して下さい◇時代に魁せんとする人々はこの虐げらるる人々の眞相を了解して下さい。

中西伊之助著
長編小説 赭土に芽ぐむもの
十版
定價三圓
送料十九錢

中西伊之助著
長編小説 汝等の背後より
十版
定價二圓卅錢
送料十七錢

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京八四〇二

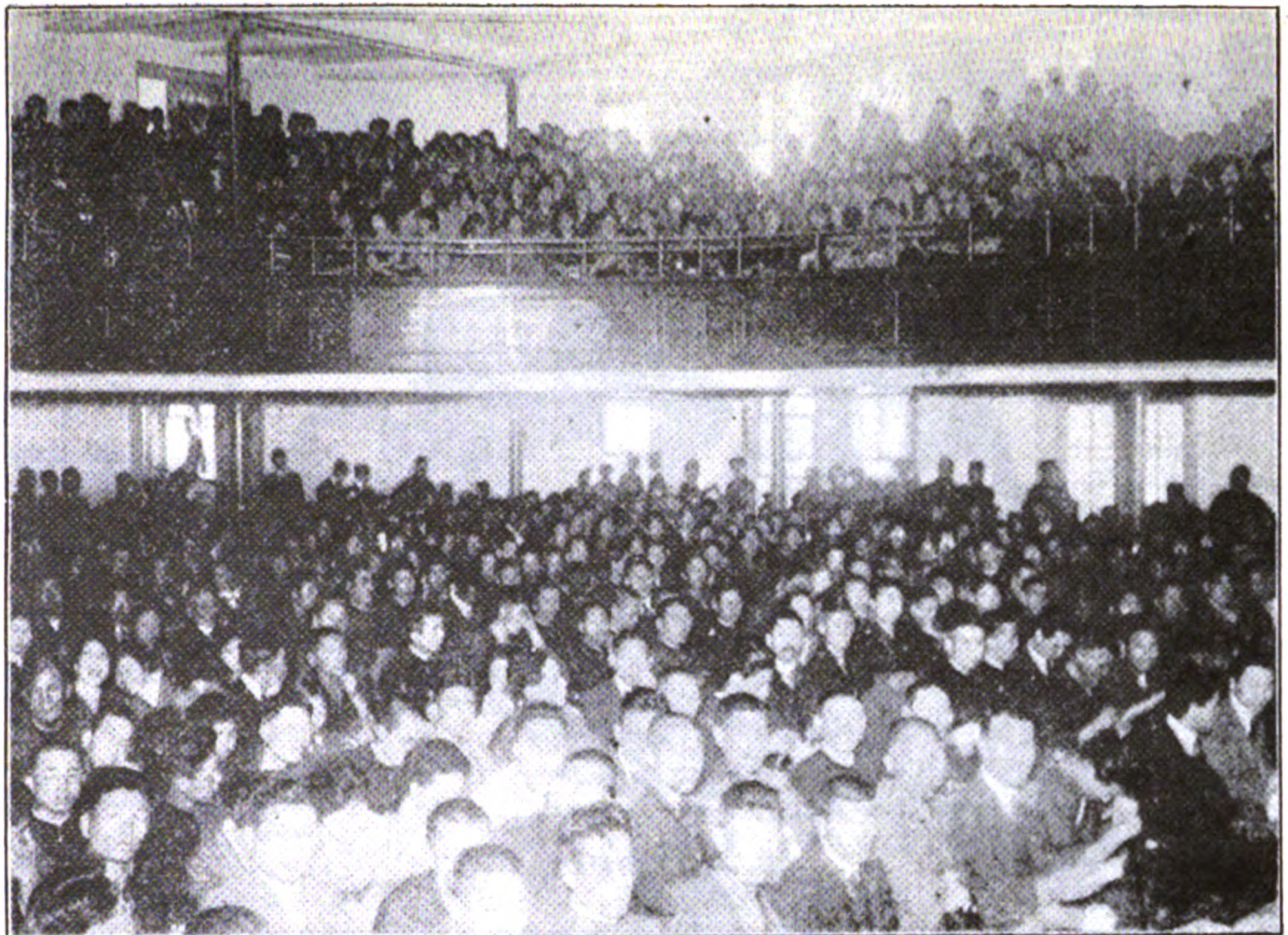

香水界空前の快擧
四月一日より御買上げの方に
（有名化粧品店藥店にて販賣す）
小瓶二個ニ壹枚
中瓶一個ニ壹枚
大瓶一個ニ貳枚
特大瓶一個ニ四枚
宛進呈
宮内省御買上品
原料香水
オリヂナル
香水用ハンカチフ
ローン製優美花模様入
無代進呈
カオール本舗
株式會社安藤井筒堂
東京日本橋區水天宮前



ダーセットシャーの懸崖より（ジョン・ブレット）



本誌主催文藝講演者（向つて前列右より芥川氏　厨川氏　久米氏　後列　右より長谷川氏　有島氏）



本誌主催文藝講演會の盛況

熊谷一彌著（忽十六版）

定價貳圓參拾錢

送料十七錢

四六判上製

改造社運動叢書

テニス

本書によりて革命されたるテニス界を見よ

今回のオリンピック競技は勿論、世界の男女競技のすべてが硬球式になりました、日本でも軟球を用ゆる人は時代後れです、新に興りて全世界の球界を征服したる此硬球式を斯界の世界的名選手が心血を濺いで書いた名著です、今後の庭球は本書なくしては語れません 本書なくしては競技も出來ないだらうと思はれる我國に唯一の硬球式テニスの權威ある著書です。

硬球式名著出づ——

學校家庭に競ひ讀まる

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

爽の氣持を基礎とし、組織的に登山を讃美し、登山に必要なる精神の鍛錬を說き、千丈の岩角も、萬尺の雪山も怖るゝに足らざるを說く、我々は思はず氏の名文によりて登山の趣味の最高頂を味ひ、一氣に本書を讀過することが出來る。今夏中の讀物中の壓卷である。

本夏中第一の讀物

谷崎

重版三種

圓 錢

女性競技への感想

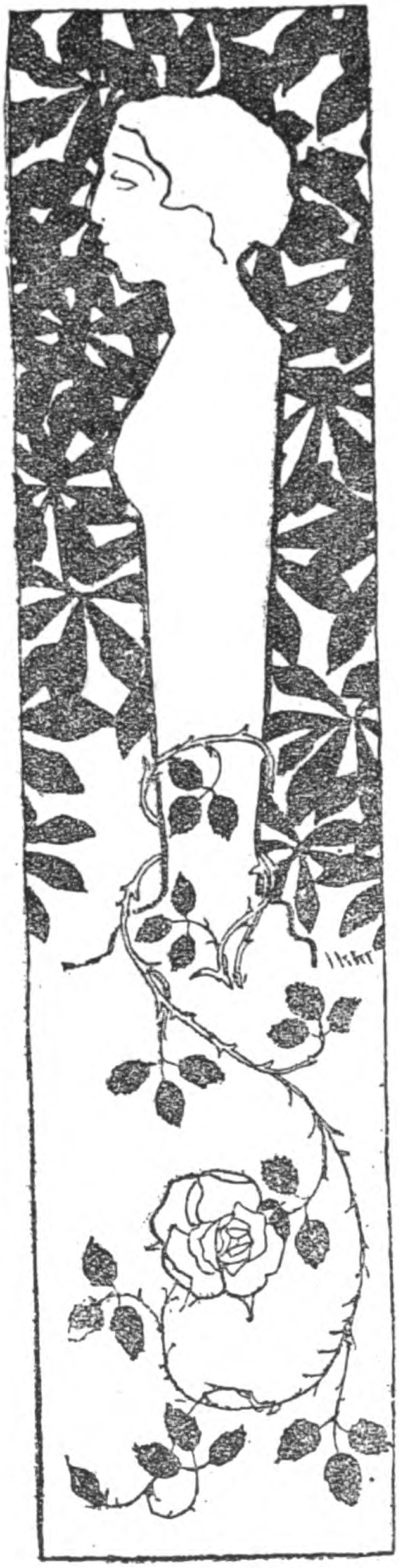
卷頭言

女性の運動が旺盛となるのは日本女性が世界的となる一兆向であり、純日本より國際日本への首途を意義づける喜ばしき現象です。惜に日本女性は今回大阪で擧行された國際競技を轉機として世界女性への一段階を飛躍しました。

女性の黎明を象徴するものは、婦人參政權の獲得にもあるが、しかし國際競技に於て、國際心を挑發し、國際信義を涵養し、そして團體的行動を身自ら感ずることによつて日本女性の地位と、覺悟とをどれほど培養するか、私どもは前者の運動に奔馳するより後者がより多くの黎明的可能への道だとさへ感じた位ゐであつた。

眞に健康に生きることが、眞に美に生くることであり、眞の輝かしい生命に生きることである、また生命の奥底に徹する所以でもある、私どもの生命は前へ／＼と鋭く、強く生きねばなりません、この鋭く、強く生きることは實に健康に生きることです、精神上、肉體上のすべての問題が――自分のオリヂナル、自分の生一本――を基本とし、據點として解決せなくてはならぬ關係上、あなた方の肉體は男子と同等、歐米人と同等にまで進まなくてはなりません。そして自分の單一體を社會の中心と考へ、小宇宙と考へて大宇宙への考察を進めたくてはなりませぬ

此意味からして、私どもは流行心理に患ひされざる國際競技のます／＼隆になることを祈るものです。



女性美の種々の段階に就いて

倉田百三

一

女性は美しい。造化は美しきものとして女性を創つたに相違ない。少くとも美の秘密の種子を女性の内に播いたに相違ない。天には星、地には花、そして人には女がある。然も女は靈魂を有するものとして、其の美は最も複雑に、微妙に、且つ生々とし、特に成長して行くことの出來るものとして、星や花よりも、一層深き美に對する造化の密意がこもつて居るに相違ない。恐らく女は法界に於いて最も美しきものとして造化が意匠したものに相違ない。此の意味に於て、自分は「女性的なるもの」の美を崇拜する。自分のかゝる見方は恐らく甘き、ロマンチックなるものとして銳利ではあるが淺薄なる

現實家の一笑を買ふに過ぎないであらう。もとより星や花が完成されたる美であると異り、女は常に可能性としての美であるのみならず、往々にして其れは醜であり、或る意味に於いては女は低卑と纖弱と邪惡と——約言すれば醜の爲めに意匠され、宇宙に於いて最も醜きものとして創られたるもの丶如き觀を呈する。併し乍ら女性の內なる斯くの如き醜は美を豐富にする爲めの陰影として與へられたるものである。造化は何よりも貧寒を厭ふ。世界に於いて最も美しき女性美を創り出さんが爲めには、其の素材として出來得る限り豐富なる原料を與へ、其の中より撰擇し、精練せしめなければならない。其れは我々が藝術的心境に於いて、一度び「物を創らんとする意識」に沒入して、造物主の意匠に參與する瞬間、我々に明かに洞察出來る消息である。我々は最も美しきものを創らんと欲するならば、そして其處に時間と空間と物質との——約言すれば經濟的制約が存在しないならば、必ず先づ凡そ美として生かし得る總ゆる材料を用意するであらう。其れが如何に不純なる混淆物を含むで居てもそれは恐れるに足りない。併し美として生かし得る要素を唯一つでも逸する事は取り返しのつかぬ缺損である。何となれば、永遠の時間に於いて、不純なる混淆物は精練し得るけれども、逸したる要素は如何ともする事が出來ないからである。況して醜を以て反つて美を創る事は造化の最深の手法である。密意である。女性が其の內に如何に多くの醜を含んで居るかと云ふ事は女性が醜きものとして創られたと云ふ證據ではなく、反つて最も美しきものとして創られたと云ふ證據である。其の複雜なる醜と執拗なる惡とは其の內から最も豐富なる、神秘なる美の輝き出づる暗である。現實の個々の女性は如何に醜であつても、「女性的なるもの」は何處迄も美である。自分の斯くの如き女性觀に就いては「靜思」中の「女性崇拜に就いて」の中に詳しく書いたから此處には再び繰り返さない。現實の世界に於ては男性は女性よりも優越して居るが、ある可き世界に於いては恐らく女性は男性よりも優越するであらう。女性は男性よりも造化に愛されて居る。惠まれて居る。女性の優越の根據は此處に存する。蓋しある可き世界、永遠の世界が來たる迄は其處には暴力や、敵を防ぎ、惡と鬪ひ、自然力を征服し、物質を處理する（衣食住の爲めの勞働の如きは此れである。）爲め

に必要なる能力がすぐれたる男性が、女性に優越する事は免れない。併しながらかゝる能力は永遠の世界に於いては不必要なる能力である。斯くの如き能力は如何にすぐれて居ても其れは永遠の世界に於いては德とはならない。永遠の世界に於いては積極的なる德のみが譽れある德である。我々は純粹に價値に就いて考察する時此の觀點を忘れてはならない。現實の世界に於いて女性が男性に下屬しなければならないのは、斯くの如き永遠の世界に於ては、不必要なる能力の缺けて居る爲めである。例へば、暴力の如き野蠻なる力が支配する世界に於いては女性は男性に壓迫されるであらう。パンの爲めに勞働する能力が根本的に全生活の基礎を支配する世界に於いては、勞働に適せざる女性は從屬せざるを得ないであらう。併しパンのための勞働に適せないといふ事は永遠の世界に於いては、決して恥辱ではない。其處ではもはやパンの爲めに勞働する必要がないからである。(固より地上に於てはパンのための勞働は尊い。此の事に就いては後に再び述べるであらう。)惡を防ぎ、自然力を征服する爲めの能力の如きも亦ある可き世界に於いては其の必要を失ふであらう。斯くて純粹に其の人格の積極的なる德を以て、男性と相對峙する時、其處に支配するものは造化が男性と女性とに豫め與へたる「位」の優劣である。其れ以上に我々は優劣の根據を考へる事は出來ない。「陶物師が一つの器を尊く一つの器を卑しく造る」如くに、造化が其の創造的遊戲の意匠に於いて、男性と女性とに附與したる位置が兩性の優劣を決定するであらう。其れは恐らく優劣と呼ぶ可きものではないであらう。寧ろ演ずる(シユピーレン)役割(ロルレ)の相違である。造化の意匠の構圖を成就する爲めに各々相應しき處に就くのである。創られたるものは其の位置を以つて安んず可きである。我々が作品に於いて、例へば一人の貴夫人と一人の騎士とを描くが如く、男性と女性の占む可き位は造化に於いては其の創造的構圖の中に於いて定まつて居るのである。然も調和的に定まつて居るのである。則ち斯くの如く兩者の位置が定められる事が、本質として最も相應しく、從つて男性にとつても、女性にとつても、最も祝福であるやうに定められて居るのである。我々は此の調和を信仰して、定められたる位置を感謝して享けなければならない。此れ從順なる歸依である。我々は造化が女性を男性

よりも高く定めたからと云つて呟いてはならない。又かゝる不平が男性に生じないやうに、則ち男性が其の特色を以て女性と對立し、且つ女性を稍々高き位置に置いて此れを尊敬する事に於いて、其の性的滿足を感じ得るやうに創られて居るに相違ない。自分は斯くの如き事を決して猥りに想像するのではない。自分の內に斯くの如く想像せしめる一種の深き根據を感ずるのである。自分は現實の世界に於ける男性の女性に對する優越は、反つて其の性質に於いて、永遠の世界に於ける女性に對する從屬を證據立てるものである如く考へる。其の智略や、鬪爭的本能や又凡て其の働く事に有能（トユヒチツヒ）なる性能は凡て下屬するものゝ性質である。女性の優しき愛や、纖細なる性能や、ものを育む心や、働く事に能力を缺ぎ、凡てかしづき、護られなければ存在する事の出來ない性質は凡て上置さるゝものゝ性質である　現實の世界に於ける貴夫人と騎士との關係は、必ずしも其の德に依らず、然も不合理なる力を根據とする社會制度より生じたるものとして、永遠の世界に於ける男性と女性との地位の關係と比することは素より不適當であるが、然も我々が經濟的階級ではなく、德に依る——寧ろ造化の「位定め」に依る階級に依つて、最深の意味に於いて合理的に成立する事を想像し得る男性と女性との關係の型をそれによつて髣髴する事が出來る。我々は會々現在の社會的事情に於いて、如何に經濟の問題が重要であり、階級の撤廢が急務であるからと云つて、此れのみの視點より價値其のものを眺めてはならない。凡そものとものとの上置と下屬との關係、秩序の意識は我々が經濟的制約を離れ得た後に於いても、合理的に存在し得る。其れは決して我々の調和の觀念と相容れないものばかりではなく、寧ろ此れに缺ぐ可からざるものである。若し神に從屬する事を欲しない人間（モータル）があるならば、其の關係を決して調和せしめる事は出來ない。又我々は神の前に頭を下げる事に依つて、自分の威嚴が傷いたと感じないのである。法界の「位定め」は歸依を以て承認されなければならない、我々は主を持つ事を欲する本能をもつて居る、主を持たなければ寂しい心を與へられて居る。我々が忠義の德を斯く迄高く値踏みするのは其の本能の爲めである。主從の意識は實に深い。經濟的階級の世界に於いて、主從の關係は人格の侮蔑であらう。併し神的秩序の世界に於いては決して卑屈

若しくは盲從ではない。德に於いて優れたる者を高き席に据ゑる事は我々の喜びである。進化の「位定め」に於いて、ものの「境涯」と「品」とに於いてより高きものをより高き位置に置いて、此れを仰ぐことは我々の最深の滿足である。若し此の本能が處を得ないならば、我々の靈魂は滿足しないであらう。自ら働かざるものゝ爲に働く事は、必ず如何なる場合に於いても、我々にとつて苦痛なのではない。我々は愛するもの、尊ぶもの、守るもの、祀るものの爲に働く事は悅びである。自分は嘗つて廣島の病院に居た時に、一人の勞働者が自分は殆んどシャツとズボンとの他衣類を持たざる程にして、自分の妻には美くしく裝はせて居るのを見た。其の勞働者は、自分が寵愛物を樂むで眺める爲に、若くは恰も豚を飼ふ者が自分がやがて屠らむが爲に、其の豚が肥え太つてゐるのを見る事を悅んで多くの食物を與へるが如き、利己的なる心からかくなして居たのではない。妻の美しい事を誇りに思つて居たのである。自分は裸かになつても、妻が美しい事に悅びを感じて居たのである。騎士が貴婦人の爲に其の手袋を拾ふ時、彼れは自分の人格の誇りの傷く事を感ずるのではない。我々が天女や、聖母を仰ぐ時、吾々の內に男性としての最深の滿足を感ずるのである。我々は高くして、調和ある世界を心に描く時、「女なるもの」を「男なるもの」より上置する事を欲する、不思議な靈魂的要求をあたへられて居るのである。彼のダンテの神曲に於いて、ベアトリチエがダンテに導かれる事よりも、ベアトリチエがダンテを導く事に於いて我々は遙かに淨くして、天的なる美を感ずるのである。

我々は又女子が子供を生む事を以て此れを地上的なるものと考へ、女子は生殖の爲の機關に過ぎない如く考へる。かくて男子の暴力が支配する時代に於いては、男子は其の胤の爲に只女子の胎を借りるに過ぎず、此れに育兒と哺乳との事を司らしむるに過ぎない。又其の生殖の事を以て、女人を淺ましく、業深きものと考へる。自分は生物學的な見地を離れて、純粹に靈魂的な立場より見る時、現實の世界に於いてはかゝる見方に然るべき根據がある事を認めないわけには行かない。生殖は地上の方式である。凡そ「地的なるもの」の絶頂である。我々は「天的なるもの」（ダスヒムリッセ）と「地的なるもの」（ダスイルディッセ）とを感じ分

ける時、肉交や、姙娠や、分娩や、哺育等を天的なるものとして感ずる事は出來ない。其の激情や、醜くして不調和なる形や、不安の狀態や、官能的にして盲目的なる徵候等を天的なるものとして、表象する事は出來ない。それは確かに淺ましきものゝ觀念と結合して居る。地的なるものゝシンボルである。然し乍ら現實世界に於いて、かくの如く地的なる此れ等のものも、此れを永遠の世界に高める時、其れは却つて不思議に天的なるものゝ理念を構成する。我々は彼のものを生み創る力、物を攝容れる德、物を育ぐむ性能、一言に約せば母性の理念を最も天的なるものとして思ひ浮べる事が出來るのである。彼の聖母は此れである。子供を抱いて居るマリアの姿は如何に天的であらう。我々はマリアを處女たらしめ、その肉體的なる性徵と、盲目的なる激情を淨化して、此處に最も美くしくして調和ある天的なる像(ビルド)を造り上げるのである。此の點に於いては、自分は嬰兒に乳房を啣ませて居るルーベンスのマドンナの繪を好む事が出來ない。彼のファン・エックの高貴にして靜かなる聖母の像を其の發展すべき方向に徹底したる最も天的なる聖母の像となすものである。(聖母に就いては後にまた書くであらう。)女性は現實の世界に於いては、男性よりも凡ゆる點に於いて醜惡、劣弱、低卑である如く見えても、永遠の世界に於いては美くしく、淨く、高貴なるものとして約束されて居るものである。

然し乍ら其れはもとより永遠の世界に於いて、女性が造化より附與されたる豐富にして複雜なる素材を精練し、淨化し、其の可能性を發展せしめたる究極であつて、其れに達する迄には無限の段階が存在する。然し乍ら其の凡ゆる段階は一つの「女性的なるもの」の美が其れ自身を分化發展する過程であるが故に、それ〳〵の段階に於いて其の程度の美を持つて居る。逆に云へば凡ゆる階段に於ける同一なる女性美である。もとより其の素材が生かし切られる迄は、其の內に種々の不純なるもの、醜や惡を含んで居る事は免れない。然し其れは醜や惡を持ち乍らも美である。凡ゆる段階に於いて、それ〳〵に特殊な美を持つて居る 寧ろ其れは現實の世界に於いては、常に地上的なる美として我々に認識されるのであつて、只理念の世界に於いて、藝術の作品に於いて、其の天的なる美を我々は髣髴し得るに過ぎない。然し乍ら女性美が天

的なるものとして我々に認識される機會がかくの如く乏しく、且つ假象としてのみ其の姿を現じても、其れは決して空しきものではない。此の段階あるが故に女性美の價値が支へられるのである。天的なるべきものとして意匠されたる女性美の、地上的なる現はれとして初めて凡ゆる現實の女性美が價値を持ち得るのである。我々が女性を崇拜する事が出來るのは只かゝる天的なるものとして約束されて居る事を信じ得るからに過ぎない。若し女性が此の理念と假象との美を斥けて、地上的なる美の段階を以て終始するならば、それは自己を見くびる者であり、永久に男性に下屬する地位を以て甘んずる外はないであらう。又若し男性が女性にかくの如き美をのみ要求して滿足するならば、其れは男性が自分の願望の高貴でない事を證しするものである。與へられた眞珠を踏み躙る豚の如くに愚かである。自分は以下鬼女より聖母に到る迄の、凡ゆる階段に於ける女性美の特殊的なる種々の型を列擧して、それが如何なる意味に於いて美であり、如何なる段階に屬するかに就いて考へて見度いと思ふ。

二

自分は前節に於いて女性美は凡ゆる階段に於いて悉くそれ〲に美くしいと云つた。恐らく女性を造つた造化の眼より見れば、凡ゆる女性が悉く美くしいものとして其の愛を惹き得るに相違ない。造化は愛し得ないものを造る筈はないからである。然し乍らそれは造化に於いて初めて可能な立場である。我々は造化の意匠に參じ、造化の心と一つに成る德を得る事に依つて初めて凡ゆる女性を愛する事が出來る。我々が美を見出し得るには我々の德が必要である。我々の德の如何に依つて我々が愛し得る女の範圍及び其の深さの程度は甚だしく相違する。例へば或る種の人々にとつては聖母の如きは美として感じられないかも知れない。凡そ我々が假象若しくは理念として描き得るに過ぎない女性美の如きは空に等しいかも知れない。又或る種の人々には我々が美を見出し得る貴婦人や、皇后や、侍女の如き階級的なる意識の上に初めて成

立し得る女性美は、美として感じ得ないかも知れない。又或る種の人々には、我々が愛し得る鬼女や、淫女や、毒婦の如き女性に美を見出し得ないかも知れない。それは其の人の現に攝取し得たる世界の廣さに依る事である。然らば自分は凡ゆる女性を愛し得るか。自分は愛し得ん事を欲する。然し乍ら造化の如く自由であり得ない現在の自分には、自分の德の力を以てしては愛する事の出來ない數種の女性がある。自分は其等の女性が必ずしも醜惡を持つて居るが故に愛し得ないのではない。其の意味に於いては地上的なる女性美は必ず多少とも醜惡を含むで居るのである。只其等の醜惡の質の中に自分の力を以てしては、其れを美の中に攝取する事の出來ない種類のものがあるのである。即ち此の種の醜惡を持つて居る限り、他に如何なる美點があつても其れを全體として美として感ずる事が出來ないのである。其れは如何なる種類のものであるか、第一に自分は彼の繼母を美として感ずる事が出來ない。繼母は聖母の反極である。母性の、「母らしきもの」の否定である。自分は「繼母らしきもの」を愛する事が出來ない。素より其れは繼母としての地位にあるもの丶名稱を指すのではない。繼母の地位にあつても母らしき女は、素より美しい。又假令繼母の地位になくても、「繼母らしさ」は愛する事が出來ない。其れは淺ましく、憎々しい。彼の中將姬の母の如きは此れである。又政子の如き女は繼母らしき女である。然し乍ら、自ら繼母の地位に立つ時、繼母らしき感情の生ずる事は恐るべき運命である。我々はそれに同情しなければならない。然しかくの如き女は多くは母らしき繼母である。自分は繼母らしき繼母を愛する事は出來ない。自分は又彼の繼母らしき姑や小姑をも此の種の型の中に數へ度い。次に自分は彼の鴇母を愛する事が出來ない。此れは憎むべく卑しむべき者である。我々は或る種の遊女を愛する事は出來る。然し鴇母は如何なる意味に於いても愛する事は出來ない。其れは女の油を搾るもの丶手先きとなつて、此れを苛む一種の獄吏である。遊女や、幇間と成り得る事は猶其の人の人らしさの脉膊に於いて絕望的ではない。然し鴇母となり得る事は、今の自分の力では、人らしきものとしての神經を信ずる事が出來ない。次に桂庵と賣女とを自分は愛する事が出來ない。自分は情事の媒介をなす者は愛する事が出來る。美くしき戀の使

は彼の花と花との間をなかだちする蝶の如くに美くしい事もあり得る。然し利の爲にとりもつ者を愛する事は出來ない。賣女は然も不義の情事を、例へば富みたる好色家と貧しき處女との賣淫を金を取つてとりもつ者を愛する事は出來ない。賣女は已むを得ざる事情なくして色を賣る女であつて、自分は此れを遊女と區別する。假令遊女にあらざるも利の爲に身を任かす女は賣女である。又假令利の爲に非ざるも、矜りなくして男子に身を任かせ若しくは男子に媚びる事を好む甘すぎる女は賣女の型である。自分は矜りなき女を愛する事は出來ない。次に不貞腐れを自分は愛し得ない。不貞腐れは賣女の闘太きものである。其の醜惡を露出し、恥づる處なきものである。其等の或者は嘘をつき或ひは白ばくれる。彼女等に悔悟せしめる事は不可能に近い。彼女等は自ら他人の心を傷つけ若し此れを責めればめそめそと泣き、恰も自ら傷つけられたる者の如く見せかける。然も心を緩めれば直ちに懐に飛び込むで怖るべき害を與へる。實に度し難き女である。次に或る種の貴婦人を愛し得ない。其の地位を誇り、さかしらであり、且つ吝嗇である時には貴婦人は最も厭ふべきものとなる。殊に其の美くしさを鼻にかけて居る時、猶更らである。次に姦しき女を愛し得ない。出しやばり易く、不必要な事に嘴を入れ、呟き易く、荒々しき女は實に醜い。御しやべりする勝氣な女はそれが無邪氣である時には、一種の美しさを持つて居る　然し小さかしく、さし出がましく、口はしたなき女は愛する事は出來ない。次に自分は或る種の後家を愛し得ない。素より貞淑にして亡き主人の遺志を守り、家の名譽を保ち、遺兒の扶養と教育とに、身を捧げてゐる後家は特に美くしい。我々は彼の剃髪して亡き夫の菩提を弔ふ尼に於いでかゝる後家を愛する。然し主人を失つて常に物欲しさうに男子を求め、其の殘されたる遺産に依つて主人の生前の良妻賢母的なる忠實と反對に懶惰、淫亂となり、特に年少の男子を溺愛する後家は實に醜い。それが放逸若しくは驕奢と云ふ感じでなく、其の反對に秘密且つ吝嗇に行はれる時更らに醜い。

此の種の女性は其の醜惡の質が今の自分が美として包攝出來ない種類のものであつて、此等の性質が具つて居る限りは、他に如何なる美點を有するも、自分は美くしき女性として感じ得ないのである。此の點に於いて醜惡を持ち乍らも美

しき女性と感じ得る他の總ての地上的なる女性美とは、今の自分にとつては明瞭に區別されなければならない。而して總ての醜きものゝ中、女の醜きものは最も醜きものである。それは面を反けしむる、吐き出しさうな、鼻持ちのならぬ醜くさである。腐つた女の圖太さと、意地惡き女の面憎さと、矜なき女の卑しさと、誇る女の鳴滸がましさと、姦しき女の淺ましさとは、地上に於いて最も厭はしき種類のものである。此の意味に於いて女性は其の素質の内に呪咀を與へられてゐる、業深きものである。かくの如く最も美くしきもの、又最も醜きものとなり得る素質を與へられたる點に於いて、女性の運命は深刻である。即ち造化が多く賭けたる勞作である。其れは最深の意味に於いて、女性が男性よりも多く受けて居る惠みである。

三

以下自分は自分が愛する事の出來る種々の階段の女性美を數へてゆきたい。

自分は第一に鬼女を愛する。鬼女は鬼に成つた女である。異界のもの異形のものと化した女である。その靈魂がその强くして深き念願を、此の地上の生活の形式を以て遂げる事が出來なかつた時、彼女等は人身の境涯より轉身(メタモルフォース)して他の生命の形式に入り、其の念願を貫かむとするのである。或ひは其のあきらめ難き念願の爲に彷徨するのである。其の一筋の、思ひ込むだる念願が純熱なるものであるが故にこそ、其の靈魂は安息する事が出來ないのである。故に鬼女たり得る事は其の女の性格の純粹にして一筋なる證據である。宗敎的素質を具へて居る證據である。移り氣な、もしくは利害に敏なる女は鬼女となる事は出來ない。又たゞ常識的に優しく、善良にして、無性格な女も亦鬼女となる事は出來ない。鬼女たり得る女は賴むに足る女である。若し運命が順であつたならば、貞女となり、尼となる筈であつた女である。もとよりそれが鬼女であつて妄執の爲めにさまよひ、靜かな涅槃に入り得ない限り、其れは一つの外道であり、物凄きものである事は

免れない。併し我々は彼女等が此の地上に執着し、人間性の味を忘れ得ず、魂魄此の土に止まつて、その永き悲哀と怨恨の爲めに、或ひは慟哭し、或ひは掻き口說き、或ひは異形の相となつて恐ろしき沈默をたもつのは、我々の深き憐愍に値ひする。我々は涅槃の世界が如何に淨くして美しきものであつても、特別に此の現象界に執着する。此の地の匂ひと、人間の愛と賛ひと色香と――其等のものに牽かるゝ心は憐れむ可きものである。彼女等は其の願つて與へられなかつた幸福や、斯くも嬉しかつた暫くの契りや、又自分の眼前から奪はれた自分の命を賭けて居た者の面影を忘れる事が出來ないのである。彼の蛇となつて道成寺の梵鐘にどくろを捲いた淸姫を我々は深刻なる女性美として愛する事が出來る。又牡丹燈籠の灯影に立つお露の亡靈を、凄艶にして可憐なるものとして愛する事が出來る。又韓國に使ひした夫を慕つて、其の去り行く船を招いて領巾(ひれ)を振つたまゝ石と化した佐用姫を深き痛みを以て愛悼する。自分は殊に人身以外の野干の類や、草木の精が緣あつて人間と化して、假りの契りを結び、時來たつて愛する者と別れねばならなくなつた時、其の受けた恩愛を忘れ兼て一種の靈(スピリット)となつて、懷しき家の周りをさまよふ心を特に深き同情を以て愛憐する。彼の狐の變化であつた葛の葉や、熊野の柳の精であつたお柳の如きは此れである。殊に彼女等は子までなしたのである。我々は狐火の燃える薄の原に其の子に乳を與へる葛の葉や、幼き童女に引かれて行く斷られた柳の木の精に云ひ難き悲哀を罩めた愛を感じないではゐられない。彼女等は皆恐く愛するに堪へるものである。其處には一種深刻なる宗教的な輝きさへあるのである。併し乍ら其れは如何に同情出來ても、眞如ではなく、涅槃ではない。彼女達の靈魂は安らかな處を撰ばなければならなかつたのである。其の傷ましき運命から解脫して、美しき佛となる可き筈であつたのである。彼女等は依然として輪廻に迷ふ淺ましき存在である事は免れない。自分は又彼の淫女を愛する。淫女は色深き女である。其の素質の中に男性に依つて其の運命の契機を感ずるやうに創られて居る女である。彼女等は男性に依つて生き且つ死に、其れに依つて生活の意味と主導機とを感ずるのである。彼女等が男性に牽かれるのは、彼女等に取つては浮薄ではなく、氣紛れでもなく、さうせずには居られな

いのである、其れは彼の浮氣なる蓮葉女とは區別しなければならない。蓮葉女は戀愛の感情のインテンシテイ弱く戀愛に賭ける心を缺ぎ、從つて戀愛に依つて其の一生の運命を破綻せしめるが如き危險なく、極めて輕き氣分を以て戀愛を享樂するものである。故に其の羽を傷つける事なくして、たゞ其の蜜のみを啜つて花より花に移る蜂の如く戀を漁るのである。故に浮氣女は多くの場合拔け目なき悧巧者であり最良の場合に於いても人の好い輕薄者であるこれは色深いのでなく色淺いのである。淫女には結ばれ易く、善良なる、愛情深き女性が多い。少くとも其れは手應へある女である。敲けば鳴り返す女である。觸れゝば密やかに絡み、心を捧げ、深く喰ひ入る事の出來る女である。淫女は男を騙きす女ではなく、男に騙され易き女である。故に淫女は又鬼女と同じく佛縁に近き女性である。彼女等が一度び決心した時には道心に入り易く、靈魂の純潔に却つて感じ易い。彼のマグダラのマリアの如きは此れである。又彼女等は男性の内に善と眞とを見出さむとする感覺の强きものである。蓋し戀愛は男性と女性との、心と心との問題であり、假令其れが官能的のものであつても、尙且つ美の意識と結合したものである。故に色深き女は人の心と心との交りや、其の明暗や、持味――約言すれば人物の味に牽かれるのである。其の人物の味を官覺的な色香に溶かして其の中に耽溺したいのである。彼女等が多く感情耽溺家であるのは、彼女等は人間らしく、潤ひある心の持主だからである。故に其處には對人關係の愛と誠と涙との支配する機會が多い。彼女等が男性に牽かれるのは純粹に色情の爲めであつて利害の爲めではない。且つ節度を踏み外し易く、拔目なく振まふ事能はず、社會生活に於いて、無防禦である點に於いて、彼の悧巧な貴婦人の遊戲的戀愛や、身の振方に鋭敏な令孃の求婚的戀愛や等に比して、はるかに色情に關する純粹さを持つて居る。彼女等が男性と結ばれ易いのは絶えず自己の心に適ふ男性を覓めて居るからである。彼女等が或ひは粹な俠客や、おとなしき小姓や、善良なる若旦那や、凛々しき武士や、時としては純潔なる僧や、忠實なる下男等に牽かれるのは、其等の對象の中に「男なるもの」の美と眞とを見出すからである。彼女等は男なるものゝ美を覓めて遍歷するのである。故に彼女等が自己の心に適ふ最も美しき男性に出逢ひた

る時、貞と操を捧げる事は多い。基督に對するマグダラのマリアや、ドミトリイに對するグルーシエンカや、ホウガッツアロの聖者に對する彼の淫女や、皆相手の靈魂の内の純潔なるものに最も牽きつけられて居るのである。彼女等は少くとも惡意を以て男に對するのではない。寧ろ彼女等は男に躓き易く、欺かれ易いものである。淫女は多くの場合一方尼らしき素質を具へて居るものである。彼の維摩經に佛が身を現じて淫女となり、諸々の色を好む者と結緣して佛智に入らしむと云ふが如きも肯く事の出來る消息である。世人から淫女として非難されて居る白蓮女の如きも善良にして、むすぼれ易く愛す可き女性である。自分は彼女が病める友の爲に水垢離して觀音經を書寫した誠實を忘れない。彼女への世人の非難は當つて居るとは思へない。併し乍ら其れが淫女である限り、則ち其の戀愛に於いて、或る堅さと愼ましさとを缺ぎ、やゝもすれば官能的となり易く、且つ其の感情が浪費さるゝ點に於いて、淫女はたしかに非難に價する。其れは決して彼の淑女の如く尊ばれるべきものではなく、又其の一筋さに於いて鬼女の如く同情される事は出來ない。そして其の感情耽溺と官能的大食とが超克されない限り、淫女は白日の女ではなく、鬼女と共に夜陰の女である。夜半に其の洞窟を出でて愛する者の家の周りをさまよひ、若しくは其の閨に忍び入つても、陽と共に姿を隱さねばならぬ女である。併し乍ら自分は如何なる女性であつても、何等かの形に於いて鬼女と淫女との素質を持つて居る女性でないならば、趣味として牽き着けられない。此の性質を全然缺いで居る女性は愛人として如何に賴り無く、又魅力なきものであらう。自分は寧ろ此の二つの素質を具へて居る女性が、其の缺點を超克して、淑女となり、聖母となる事に依つて、最も自分の心に適ふ女性に達し得る氣がする。其處に或執拗さと、深刻さと、善良さと、又地獄に陷るだけの耽溺に堪へ得る賦ける心と、蜜の如き魅力と、水も洩さぬ程にひた〳〵と湛へる隈なさがある。此等の性質は其れが淸められ、高められた時には彼のフラ・アンゼリコの天使や、藥師寺の吉祥天の如き眞に優美にして生命ある女性となる材料であるからである。自分は鬼女と淫女に對しては其の醜惡を知悉し乍ら、猶其の素質に善と美とを認め、全體としては、一つの女性美の段階として愛する事が出來るもので

ある。自分は又彼の遊女を愛し得る。遊女は其の不幸な運命に依つて、春を賣る事を強いられたる女性である。或ひは無慈悲な親や誘拐者から強制され、或ひは愛する者の爲めに自から進むで身を賣つたのである。併し何れにもせよ「卑しむ可きものに就いて」の中に書いた如く、彼女等が自己の弱さの爲めに己の人格を他人の翻弄に委ねたと云ふ事は許される事は出來ない。其れは輕蔑に價する。併し乍ら其の罪悪はもとより積極的な惡意に依るものではなく、弱さに依る受身のものである。其の多くはまだ年齢も行かぬ娘のうちに賣られたのである。我々は彼女等を非難する前に憐みに打勝たれる。もとより彼女等の中には野卑、低劣であつて、我々が到底愛し得ぬ者があるであらう。併し斯くの如きものは寧ろ此れを賣女として區別す可きである。遊女は賣る事を欲せずして、其の誇りを傷けて、賣ることを強いられて居る女である。かゝる遊女の中には我々は愛すべき者を見出し得る。高尾の如き氣位ある遊女は稀であるとしても、猶三千歳や、小春や、梅川や、お俊やの如き義理と誠に感じ易き、又一筋な捧げた心を有する遊女は少くないのであらう。愛する者と共に戀に殉死する事は容易に出來ることではない。義理に絡まれ易き事は心情美しきものである。又其處には其の世界に於ける趣と美と意氣地との教養がある。此の教養に依つて磨かれたる美は又一種の特別な美である事も認め得る。其處には或一點に於いては、良家の婦女に見出し得ざる洗練さがあるであらう。其處では先づ家庭の婦女に於ける、衣食住の爲めに必要な實利的性能から放たれる。次に家庭に伴ふ事を常とする樣々の虚僞とコンヴエンションから自由になる。斯くて純粹に女性の性の方面だけを切り放して教養される。即ち「遊び女」である。故に彼の浮世繪の畫家が見出したる如き一種の驚く可き美を作り出す事が出來たのである。併し乍ら其の美は人格の或一部を切放して洗練したるものなるが故に、はじめより不自然である。其の不自然さは其の美に於いても、頽廢的要素となつて表はれずにはおかない。其れは寧ろ男性から寵愛するによろしく、翫弄するに便宜なるものとして教養されたのである。故にかゝる頽廢的要素も斯くの如き男性の要求より見れば、反つて美とされるのであらう。併し斯くの如きは美感ではなく、一つの質感である。浮世繪の中の頽廢

的要素は我々の實感にアッピールするのである。此の意味に於いて「遊女」と「遊行する天女」とは明瞭に區別されなければならない。遊行する天女の美しさは我々の實感を除去して、美感を徹底せしめて出ずる「樂」の境地である。遊女の美は斯くの如き「樂」の要素と實感との混淆である。我々は彼の浮世繪の美を愛する時に此の事を忘れてはならない。我々が遊女を女性美の或階段として愛し得るのは其の卑屈と弱さと頽廢と醜惡とを知悉した上に於て、猶其の特殊な美を認めるのでなければならない。自分は又彼の醜婦を愛し得る。もとより其の心も其の形の如く醜き女は愛する事は出來ない。併し其の產みつけられたる顏容(かたち)の醜きにも關らず、其の心の美しき醜婦は又一種の特殊な美を持ち得る。眞心ある醜婦は可憐である。德高く品位ある醜婦は或力ある美を持つて居る。又決心した時の醜婦の顏は美しい。少くとも其れは美しさの鼻につく美人や、しなだれかかる賣女よりは遙に愛に價する。板額の如きは力ある美を持つて居る。又其の眞心に依つて良人から愛されたる瀧氏の妻の如きも此れである。自分は又彼の毒婦を愛し得る。毒婦はもとより其の心の內に毒を含む女である。其れが醜惡である事は云ふ迄もない。併し乍ら毒婦の持つて居る辛さと冷めたさとは、甘過ぎる女や、人形の如き無性格な女やに對して、少くとも其の點に於て優れて居る。其れは女の甘たるさが女性美の一種の醜惡であるのに對して、一種の藥味であり、防腐劑である。彼の稻妻お光や、妲妃のお百の如き女はもとより其れが惡辣である事は愛し得ないが、其の齒切れの良さに於いて、一つの性格を持つて居る點に於いて、一種の冷めたい美を持つて居る。特に女が多くは甘くして脆く、男子の寵愛物であるのに反して、甘き紳士や、蟲の良き四十男や、好色なる守錢奴等に逆に女の又侮る可からざるものである事を示し得る點に於いて、一つの役目を持つて居る。殊に彼女等が其の自己の罪惡を罪惡として認めて居る時に、それは我々の愛に堪へる。我々は彼の啖呵を切る女白浪を野中の觀音堂や、辻の地藏尊に對立せしめる時、そして彼女の惡運の盡きる時を豫感して居る時に、我々は此の世相の無限なる意識の中に、猶彼女達を愛すべきものとして包攝する事が出來る。自分は又彼の姐御を愛し得る。姐御は俠客の妻である。姐御はもとより教養なき身分低き者の

配偶として其の美は優美なものではなく況して高貴なものではない併し乍ら男を磨く俠客の妻として、義理と人情とを尊び、卑劣と無節操とを卑しむ男伊達の内助者として其處には善と力と誠とに對する趣味と感覺とが支配して居る。然も亦多くの血氣にはやる無頼の若者を養ひ、心服せしめる親分の女房として、或度量がなければならない。如何なる意味に於いても陰吝である事は出來ない。又かゝる不敵の若者に對して自分の地位を保つ爲めには、侮り難き威を具へてゐなければならない。其の上に恐らくはまた身持の治らない多くの乾分達の爲めに、或ひは戒め、或ひは同情して、何くれとなく世話をしてやらなければならない一種の母親らしき優しさと、又譯の分かつた苦勞人としての頭のよさがなければならない。然も男を賣る稼業として、何時危險に遭遇するかも知れない覺悟を定めて居なければならない點に於いて、其れは武士の妻に似た決心を要する。然も其れは常に公儀の法度の下に身分低きものとして、常に無防備なる地位であり、彼の長兵衛の妻の如きは、討死する事の分つて居る正成と別れる妻と同じ境遇である。其れは容易な決心ではない。殊に彼女等の美しいのは其の夫との結合が多くは心と心で意氣に感じて生じた戀愛や、少くとも人目を忍むで愛し合つた義理に絡つた深き結合である。かゝる夫婦は美しい。彼の腕の喜三郎の妻の如きも此れである。更に美しいのは此等の俠客は其の氣を負ふた性質が、人倫の關係に對する實に稀な義理堅さと結合して居る事である。彼等は法度を重んじ、社會の約束を重んじ、人倫の義理を重んじる。其の法度に對する神妙さや、目上に對する禮儀正しさや、主に對する恩義の情の強さは美しい。かの腕の喜三郎夫妻の舊主人と其の娘とに對する忠誠の如きは感動せしめる。姐御は女性としての美しさが、男性的要素の混淆に依つて、其の女性としての誇りを守る必要以上に、不自然となつて居る事は免れないが、其れは猶或段階の女性美として我々の愛を牽くに充分な價値を持つて居る。自分は又或種の妾を愛する。妾は其れが妻でない點に於いて、則ち禮を以て迎へられざる、人と人との正しくして對等なる結合でない點に於いて、卑しきものである事は免れない。他人の妾として甘んじ得る事は慥かに卑屈である。其れは男子に對する誇りなき從屬である。併し乍ら一夫一婦が原則となつて居る

時代の社會制度の下に於いて　妻ある男子と愛し合ふ女が、自から衣食を得る力なき時、愛する男子に養はれる事が、自から妾としての地位をつくる時、斯くの如き妾は愛なき男子に利害の爲めに身を任せてゐる「圍ひ者」と同一視する事は出來ない。女性が自から衣食の爲めに勞働する事に依つて、其の美と教養とを保つ事能はず、又侮りを防ぐ事能はざる時、愛する者の保護を受ける事はさまで恥づ可き事ではない。況して二人の間に愛と誠實とがあり、男子が此れを保護する事を恩がらせて居ない時、其の社會的名稱の如きは本質的意義を持たない。或妾は或夫人よりも愛す可き女である事は少くない。彼の靜御前や、巴御前の如き誠實なる妾をもただ其れが妾なる故のみを以つて、愛し得ない事は隘吝である。又或種の人々の如く、唯だ養はれて居る故のみを以て、妻妾を賣淫と同一視するが如きは、粗野にして淺薄である。もとより衣食の爲めに愛なき男子に身を任せ、若しくは養ふ事を恩がらせる男子の扶養を謝絶する事能はざる妻妾は一種の賣淫である。併し乍ら男子の奉仕としての扶養を受ける事は賣淫ではない。抑々我々人間が衣食を得る權利の根據は勞働にあるのではなく、造化の恵みにあるのである。此の點に於いては男子も妻妾も神に養はれて生きるのである。男子が妻妾を養つて居ると考へるのは僭越である。我々は最も正しく、深き意味に於て「養はれて生き」て差支へないのである。妻妾が其の人格全體の爲めに、男子に養はれる事が適當である時、斯くの如き扶養を受くる事は止むを得ない。もとより其れは自己の無能力である點に於いて、人格の缺點である。併し乍ら衣食の爲めに猶一層人格の侮蔑を忍ばなければならないならば、愛し合ふ男子からの贈り物を、神の名に依つて受ける事は左迄非難す可き事ではない、少くとも決して賣淫ではない。純粋に經濟的なる缺點は、道德上最も許し易き輕微なものであつて、人格の價値を決定すべき重要なるものではない。もとより自活して居る女は養はれて居る妻妾より其の點に於いて勝つてをり、特にかくの如き職業婦人が自己の人格の矜りを傷つける事なくして、殊に今日の如き社會組織の下に於いて其の美を保つ事が出來て居るならばそれは見上げていゝ。(此の種の女に就いては後に書くであらう。)併し乍ら我々は自から働いて衣食を得る醜惡なる自活の女よりも、心を捧げて義經に從ひ、

美しくして操ある靜御前をより美しきものとして愛し得るものである。其處には又夫人とは異なれる特殊な美が存在する。妾に於いては、妻の如き地位を誇る心や、家政上の事務や、凡て社會的實際的なる利害關係をはなれて、純粹に戀愛のみに依る結合が生じ易い。妻よりも妾との間に純粹なる結合の存在する事は稀でない。もとより懶惰にして、奢侈であり、愛と操なき妾は賣女であつて卑しむ可きは云ふ迄もない。又如何に理想的なる妾であつても、其れが妾である限り、卑屈である事は免れない。併し其等の點はあり乍ら、或種の妾は猶女性美の或る段階として我々の愛に價するものである。

（一九一三・五・三一）（續く）

性道德問題の更一深

原田實

一　所謂新性道德

道德が、活力に滿ちた社會に於て、即ち活力ある個人を多數に抱擁してをる社會に於て、常に飛躍を試みつゝ進展變化してをるといふことは、說いて識らせ得る眞理であるといふよりは、寧ろ、指して眼に視せ得る事實であるといつた方が適切であるかも知れない。舊式な或る道德が破れて、新しい或る道德が代つたなどと言ふ場合は、この事實を言ふに外ならぬ。

これを人の性的關係の方面に就いて觀るに、新鮮なみづみづしい感情と濁らない正しい批判の眼と生き〳〵した勇敢な意志とを持つた個人が、多くなつて來たにつれて、即ち、自分自身の感情と叡智と意志とに開眼した個人が、だん〳〵と多くなつて來たにつれて、生活は自律でなければならぬことが常識として流通するに至り、從つて、親權と法律と因襲とに抑されてか或ひは護られてか行はれた男女の性的關係の常態が變化して、さういふ自己の力以外の力の壓抑や庇護に依つてゞなく、自己の力に依り、即ち自律を以て、行はるゝやうになつて來た。つまり、男性が支配者の位置に立つて女性が服從者の位置に立ち、また男性が保護者の位置に立つて女性が阿諛者の位置に立つといふことが、兩性關係の持續に於ける形式であつたものを、相互の理解と愛情とを內容として兩性が對等の位置に立つといふことを以て、原則的形式だと考へるやうになつて來たのである。

要するに、兩性の關係に就いての道德が變化したのである。これを文化史的に見れば、その道德が進展向上したのである。これは、實際に、新興の時代を代表する若き男女に直接に質して見れば直ぐにわかることである。如何なる男女でも、今日の新時代に屬する男女なら、相互の間に理解と愛情との明白に成り立つてゐない兩性の關係を以て、これを道德的であるとなすはあるまい。殆ど皆一樣に、相互の理解と愛情とに依つて對等に兩性は結ばれねばならぬと答へるに違ひない。

たとひ、親權がそれを如何に支持し、法律がこれを如何に保障し、因襲がこれを如何に擁護しようとも、この返答に曖昧が加はるといふやうなことはよも無いと言つてよからう否、却つて、さういふ場合には、對照の爲めに際立つて、その返答は明白に斷言せられるに違ひない。

而して兩性の間のこの相互理解と愛情とは、戀愛といふ言葉に依つて、更に適切に言ひ現はされる。即ち、戀愛が兩性關係の道德的基礎であると言ひ換へられるわけである。

兎も角、これが新たに顯現して來た性道德である。今の所謂新しい性道德である。

二　戀愛現實化の問題

この所謂新性道德――戀愛を條件として相互に對等に結ばれる兩性關係でなければ道德的な性關係でないといふ見解、即ち性道德の根本基礎を戀愛に置かうとする見解は、今日では、改めて檢討を試みるの必要なきまでに、少なくも、自律的生活を以て生活中の生活であると觀る者の間に於ては、明白な常識となつてゐる。これは、既に全く問題でない。

從つて、男女兩性の性的關係を內容として始めて成り立つところの結婚をして、最も道德的なものたらしめようとすれば、その條件として戀愛の存在といふことを以てせなければならぬ。性道德の根本基礎が戀愛にあるのであるから、これは言ふまでもないことである。そこで、結婚には戀愛が大切だ、戀愛を輕視してはならぬといふことは、誰れにでも明白であると言つてよろしい。尤も、戀愛至上主義などゝ鹿爪らしく出られると、その至上といふことが決して生活の他のあらゆる作用を超えての至上といふことを意味するのであるかどうか、若しもさういふ意味であるといふならば、人間の生活は兩性の性的關係からのみ成り立つ事實でないのだから、確かにそれに賛成することは出來ぬといつたやうな意見も、當然起きて來ねばならぬと思ふのであるが、然し、普通のすなほな言葉で、結婚には戀愛が伴うてをらねばならぬと言ふならば、これは確かに何人にも反對されぬところであらう。

して、戀愛の大切であるといふことはそれでいゝとして、今度は、その戀愛とは、何を意味するかと言ふに、およそ戀愛觀なるものも色々あるわけであるけれども、先づ所謂靈肉合致論が最も正しからう。靈肉合致論とは、性的衝動即ち性欲の上に於ける一致和合と同時に、精神の上に於ける一致和合が、或る二人の男女兩性の間に相ひ混融して湧き燃えることを以て戀愛となすといふ論で、つまり、性的衝動を滿たさんとの所謂感覺的吸引の一致とともに、活き活きした精神の結合、思ひやりの自由な交流、心靈の交感、仕事の上の共働、友愛の樂しさ等が、男女兩人の間に醱酵することを以て戀愛となすところの觀方である。戀愛に對するこの觀方は、何と

言つても、今日では、一番同感者の多い、寧ろ常識となつてゐると觀て差支へのない、而して正しい觀方である。

そこで、新しい性道德の根本的基礎が戀愛であることもわかり、そしてまたその戀愛の意義が靈肉合致觀に依つて解さるべきものであるといふことも先づ納得の行くことであると言つていゝわけであるが、然しながら、なほこゝに、この新性道德を實際に體現しようとすれば、即ち戀愛を現實化しようとすれば、多くの、少なくも困難な、問題がのこされてあると言はねばならぬ。即ち平俗に言へば、靈肉合致のその戀愛をば如何にして事實にすべきかの問題である。精神的愛情は、その男女兩人のかたく\/が他よりも强烈にこれを持ち、また豐富にこれを持つたにしても、一致和合の上にさまたげなく、そこに問題は起らぬとも見られるか知れぬ。然しながら、肉的方面、感覺的方面、即ち性的衝動の方面に於ては、その發動の上に兩者の間に强弱の度合ひの差異あるべく、その時に兩者がよく常に一致和合し得べきか。また常に一致和合するとしても、それを盡く皆、從つて發動すれば從つて現實化し解放してよろしいか。この點にどうしても問題が存すると言はねばならぬ。

性道德の根本は戀愛に依る相互對等の結合にあるといつた具合に、年から年中判で押したやうに鸚鵡かなぞの如く何時も何時も同じ言葉を繰り返して不滿を感じないやうな非現實的な、單に言葉の上だけの性問題研究者ならば即ち已む。若しさうでなく、眞に戀愛の現實化を考へるものにとつては、性道德の問題は、今や更に一深化して、性的衝動を如何に處理すべきかの問題に觸れて來なければならぬと考へる。

三　性的衝動處理の問題

腦裡や言ひわけの上では、新しい性道德の歸依者遵奉者が、今日やゝもすれば、愚劣な、また悲慘な、また悔いの多い、また馬鹿らしい、性關係上の失敗を重ねつゝあるは、その原因もとより一に止まるまいが、實は、或る程度までは主として、戀愛に於ける性的衝動處理の問題があやふやであるからではあるまいか。性的衝動處理の問題は、從來は、未婚者、即ち未だ戀愛の相手を見出さゞる者の場合にありては若干問題とされたこともあるが、然しながらその性的衝動處理の問題は、結婚後乃至戀愛中の者の間においても問題とされねばならぬ。その理由を擧げることは困難でない。買淫の原因に關しては、種々の項目が擧げられる。現代社會に於ける經濟組織の不完全はその第一項であらう。然しながら貧乏の爲めに妻の持てないもののみが買淫するのではない。寧ろ妻帶者の方が買淫者に多いかも知れない。妾婦を持つものは盡く妻帶者だらう。買淫の原因の第二項第三項の擧げられねばならぬ所以である。而して、有妻買淫者、有妾者の盡くが、

その妻との間に戀愛が必ずしもなくなつてゐるのではないと思ふ。

　これらの事實は、性的衝動處理に關する問題を思ひつかせずにはおかぬ現象ではあるまいか。なほまた、買淫等の全然行はれない夫妻の間に於ても、併しながら、性的衝動處理の問題がないのではない。

　こゝに一つのエピソードを挾む。ありのまゝに言ふ。今から十二三年前のことである。私が私立早稻田大學の一學生であつた時分である。當時學校の周圍に曖昧屋が多く、それらへ出入する學生が少なくなかつたと見えて、なんでも、一部の學生がこれを矯めんとして淫賣退治といふ聲明のもとに示威運動をして近傍の町筋を練り歩いたりしたことがあつた。多分これら學生の主催であつたらしいが、學校の講堂で或る日矯風講演會といふものが開かれ、數人の先輩達が講演をした。誰れ〲が講演したか殆ど忘れてしまつたが、このうちの一人に向軍治氏があつた。そして彼の言つたことの一部分を今も忘れかねてゐる。

　向氏は、全く齒にきぬ着せない態度で、性欲の抑制せねばならぬことを力說し、自己の白髮を指しながら、自分はまだ老年ではないが、斯く白髮となつてしまつたのは年少時に美少年であつた祟りだとおもふと述べ、學生諸君は自瀆をやめなければならぬ、今夜から直ちにやめるといふ決心をしろと、亂暴な言葉で警告したのだつた。して、學生達が比較的しんみりと聽いてゐるのに、そこへ臨席してゐた數人の教師來賓どもは、この言葉を聞くと、妙に高くとまつたやうなほゝゑみを口角に現はして自分等だけは大人だと言つた風に場内を見下してゐた。聽衆の間にゐた私は、それが小癪にさはつたことを今も覺えてゐる。と、この教師來賓どもの態度に氣附いたものと見えて、壇上の向氏が突拍子もない聲で怒鳴り出した。何を笑ふんだ、馬鹿め、おれは學生にだけ言つてるんぢやないぞ、相手が妻君だらうと何だらうとこの問題は同じだ、カヽア持ちも今夜から氣を附けろ――こんな意味の咆吼だつた。言葉は極めて粗野だつたが、效果は極めて痛烈だつたことを私は今も忘れないでゐるのである。

「相手が妻君だらうと何だらうと、この問題は同じだ」。私はその時も、この言葉を非常にサヂエスチーヴにきいたのだつたが、今もなほ大いにこれはサヂエスチーヴだと思ふ。感覺愛を拔きにした戀愛論の無意味なことは無論わかつてゐる。新性道德が、感覺愛を含む戀愛を根本基礎とすることも、勿論、よく了得される。併しながら、だからと言つて、この性的衝動の處理問題を差し措いて、それで眞に我々の現實生活を導く力ある道德たることが出來ようか。

　自然は、一個の生命を創造する爲めに往々にして數萬の種子を置く。この自然のトリックに易々として我々は、從うて

行くべきものであらうか。衝動のまゝに、妻以外、夫以外の異性に向つて性交渉を結ぶことの問題であるは言ふまでもなく夫婦間に於いてもまたこれは、問題とならざるを得ない。私は、性道德の更一深化を痛切に要求せざるを得ぬものである。

四　性的衝動の崇高化

静かに考ふれば、戀愛は靈肉合致の全生活に關する問題である。即ち、生活全體の問題である。從つて完全なる戀愛に於ては、感覺的な性的衝動と、精神的な他の生活上の衝動とが、もと〳〵自然に巧みに調和されるものであるかも知れない。而して私は、或る程度までそれは可能だと思ひ、またさうあらんことを切望するのである。

が然し、性的衝動の强さは、普通の場合に於ては、なかなか容易の程度でない。性欲を以て、あらゆる人間活動の資源の如く解釋する學者もある。あらゆると言はぬまでも、文化的事業、殊に藝術の如きは、性欲を資源として花咲くとなしてるものは少なくない。私も、主として直感からではあるが、或る程度まではさやうであらうと考へる。即ち、電氣を力に轉化し得るやうに、性欲はこれを他の創造力に轉化せしめることが大いに可能であると信ずる。我々は、もとより生命の創造を我々の生活から除外することは出來ぬ。少なくもそれは聰明な處置でない。さりとて、生命の創造以外の創造をすべて我々の生活から除外することも、我々の生活が豊かに實のり多く營まるゝ所以とはならぬことは、眼前の事實だ。そこで、或る程度まで——それは餘程多くの程度であるかも知れぬ——性的衝動を抑壓貯藏して、これを他の文化的方面の創造力にまで轉化せしめることをせねばならぬと考へざるを得ぬ。それは單なる生活上の二三の便宜の爲めからではない。正しい充實した生活を營まんとする良心の問題としてゞある。

性欲を抑へよと言へば、昔からの說法臭味を如何にも伴ふやうだが、たしかにこの警告は、今後更に新しい論據と解釋とを以て、萬人の間に大いに普及されねばならぬものと、私は確信する。

フロイドは、性欲の崇高化を說いてゐる。新性道德は、フロイドの所謂性欲の崇高化から多くの暗示を酌むことが出來やう。兎も角も、新性道德の問題は、この方面に向つて速かに更一深化するを要する。（十二年五月二十九日）



赤ん坊の漂着

賀川豊彦

赤ん坊が漂着した。地球の岸に天空から打ち上げられた。

珍らしいものが、天から降つて來た。猿にも似てゐるようであるし、天の使にも似てゐる。顏の形は猿に近いが、身體に毛の生えて居ら無いのは天の使に似てゐる。絹のような皮膚、蠟石のような色艷、菫の花の形をした唇、弓形の小さい顎、握りしめた指、幻を見てゐるような眼、それらはみな下界に見られない美しい姿である。アンゼリコの古畫から抜け出して來たようだ。

或人は烟筒から白鷺が落して行つたのだとも云ふた。また或人は天の煤を掃いて廻る鵞鳥に乘つた阿婆さんが星の世界から掃き落したのだと、マザー、グースのような話をした。

兎に角、赤ん坊が、地球の一角に漂着したことだけは爭はれ無い事實である。赤ん坊が到着した。不思議な實在が流れて

來た。ヨナが魚の腹から吐き出された時のように、赤ん坊はまだなんにも言を云は無い。さぞ疲れたことであらう。十ケ月の漂流に——その漂流が決定せられてゐた潮筋であつたとは云へ、まだものを云ふには、あまりに疲れ過ぎてゐる。赤ん坊は眼を閉ぢた儘凝乎としてゐる。折々悲鳴をあげる。他の世界で見て來た事が思ひ出されるのか、漂流の思ひ出が悲しいのか、見苦しい地球に漂着したことが悲しいのか微かに眼を見張つて、何處で覺えた言葉であるか、『オアー、オアー』と發音して泣く。

私はすぐ希臘の哲人プラトーの云ふたことを思ひ出した。「實在は凡て回想である」記憶の再現が此の世の智識であると。それは永い永い智慧の連鎖に繋つてゐるのだ。

赤ん坊は此世に生れて、何にも新しいことを發見し無いのであらう。それはたゞ過去の記憶を再現して行くだけなのであらう。その幻のような眼に映つて行くことは、別に不思議なものでも無からう。それは遠い遠い昔の出來事の再現であらう。

神秘の世界の約束を、この赤ん坊は見て來てゐて、それを漂流の失神の爲めに、全く忘却してゐたものを、今また記憶の表に再現して行くのだらう。

赤ん坊は、天地の創造の前を知つて居るような顔をしてゐる それは天の使が羽根を切り落されたような形をしてゐる。一寸前まで飛んでゐたのぢや無いか？何處か、脊中の上方に羽根の着いてゐた跡形でも無いか？

私は不思議な眼を見張つて調べてみたが、そんな證據は少しも無かつた。然し、私の幻には吾が見だと人の云ふこの姿の實在が翼を打かわせて天の使の群の中に飛び廻つて居るのを見る。今この地球の一角に到着したこの怪しき實在こそ

は實に不思議な生物である。

それには母とか、父とか云ふ關係は全く認められ無い。誰がそんな賤しい名前をつけたのであらうか。勿論それは妻が苦しんで產んだのに違ゐは無い。然しそれが何んで、母とその名を以つて呼ばる可きものであらうか？ 妻は結婚して九年間も、子が無かつたでは無いか？「子が欲しい」と云ひ出して何年經つであらうか？ もう子が無いと諦めて何年經つであらう。世界の一割の女は石女では無いか？ 產みたいと考へて產れるものなら、石女は何故子を產むのであらう。また產むことが當然のことだとしても、あの不思議な實在を十ケ月の中に完成する力は母の力であらうか？ 母に聞いてもそれは預り知ら無いと云ふ。凡てが無意識の中に、次から次へと運ばれて行く、その不思議な運動に私は神秘な神の指先の動くのを見る。

凡てが、神の約束の儘に運ばれて行くのだ。私はただ、記憶の再現によつて、神の條件を創造前に歸つて回想するだけである。

天地創造の前に溯つて回想するが善い。

『ガブリエルよ、おまへの職分は何だ？』そう創造主が、天使の一人に尋ねられた。

『はい、私の職分は凡ての乙女を祝福することにあります。その中の一人に聖母マリアがあります。然し私はマリアの外に凡ての處女を祝福いたします。』そうガブリエルが答へてゐるのを私は聞く。

天地が未だ成らざりし前、神は天空の中に一滴の液體を置くことを考へられた。その水滴は軸を以つて廻轉し、軸が二十三度半傾ける爲めに春夏秋冬のあることを決定せられた。

神は春を造る爲めに、球體を二十三度半傾けただけである。何と云ふ不可思議な理法であらう。

創造の前に、神は世界に熱を與へる爲めに、原子の中に電子を据えた。熱とは電子の突撃すると云ふことである。つまり神は世界の爲めに熱なきものの中に熱を隱した。神は水の中に熱を作り、氷の中に二千度の熱を隱した。

私は創造前を見た。その舞臺裝置は簡單である。それは混沌の前である。それは『無』の前である。それは零と無限の中間である。

靜かに、神が曙を呼び醒ました。そして萬物がみな延び上つた。

創造前の世界に、靜かな「理法」の蜘蛛の巣は世界の隅々にまで張られた。その糸は透明で「春」の魂にも「電子」の影にも隱されてあつた。

「理法」は神の神經系統であつた。

そうだ——創造の前に、神は自らを自らの中に創造した。

神とは「無」から「有」を創造するものと云ふことだ。神に於ては「無」から自らをも創造の出來ないことは無い。

神とは目的の爲めに目的を創り得ると云ふことだ。價値の爲めに、價値を、實在の爲めに、實在を……それ自身が破壞で、それ自身が實在だ。

創造前の神を見たか？　赤ん坊よ！

それは、脱皮する蠶に似て居たか？

時間に對して、どんな考へを持つてゐたか？

發展の中に價値を發見する『不完全の完全』は永遠に不完全なのが善いとは云は無かつたか？
相對と絕對との繫ぎ目を、何處に持つて行くと云ふてゐたか？
それを聞いて來たか？ おゝ 繫なき天の使よ、おまへはそれを聞き落して來たか？ 殘念なことをした。
回想して見よ、思ひ出してみよ！ 或は創造前の神秘を もう一度呼び戾すことが出來るかも知れぬ。
私も、努力して回想してみる。然し、もう地上の生活が永びくと共に、回想の力が鈍れ、地殼のように固くなつた腦髓はところどころ罅が這入つて、思つたように聯想がつゞか無い。
殊に、梅毒と酒亂の爲めに、地上の腦味噌は相當に膿んでゐる。
おゝ 新しく生れたる嬰兒よ、おまへの新鮮なる記憶は 何か天來の福音を傳へはせぬか？
地上は もう腐つた上に、腐つた。こんな腐肉の上に、どれだけ革命を積み上げても望みは無い。それはみな腦梅毒の革命だ！ 酒亂人の亂チキ騷ぎだ！ 殺人狂者の興奮狀態だ！ 望みなき腐肉の興奮を見よ。あれで何が出來るものか！
腦味噌から改造して來い。梅毒患者よ、カインの末裔よ、人が殺したければ、殺したいだけ殺すが善い。カインの鈍色の血が、おまへにも廻つてゐるのだ。地殼の上に發狂者が勝利を得て以來――――眞理と神とは地球を見捨て無ければならなかつた。
アレキサンダー大王も酒亂で死んだ。
ジユリアス、シーザーは癲癇やみであつた。
ナポレオンも半狂亂の癲癇やみであつた。

カイザルも發狂してゐる。
王冠を狂人に與へよ、それは彼等の遊戯に適するであらう。殺人遊戯…………ネロとタイベリアスと、ダイオクリスチヤンと四十二人の羅馬の皇帝は、殺人遊戯の創作家であつた。
彼等の血が民衆に傳染して來た。凡ての人が權威者になりたくなつた。凡ての人間が皇帝のやうな飯を食ふて、皇帝のような家に住みたくなつた。そして資本家といふ二本足の動物は狂犬病患者のように、人肉を食ひ荒らした。そして腦梅毒の遺傳者と低腦兒を多く產んだ。彼等は 先祖の食ひ荒らした人肉を今猶續けて食ひ荒らしてゐる。
カインの血が凡ての人に廻つてゐる。そして腐つた肉の持主を倒したものが、また血を腐らす。同じことだ。
あゝ カインの末裔よ――――おまへは呪はれてゐる。
憎惡と、虛無と、暗黑の福音を述べひろめよ。それはおまへに適するであらう――カインの末裔よ。
制度と云ふものは、たゞ腐つた肉を氷漬めにして置くと云ふことだ。氷がきれる日に――その日を革命と人は云ふ――腐肉が冷藏庫から飛び出してくる。千年間氷漬めにせられてあつた殺人鬼の膿血が一度に跳り出す。
跳れよ、殺人鬼よ、今日はおまへのかき入れ日だ！ 人が殺したくて仕方のなかつたおまへも、今日は飽く程、人を殺すことが出來よう、千百年もかゝつておまへの血を冷やしてゐたが――今日は一度にそれが取り去られた。
道德も、宗教も、教育も――つまり總ての冷藏庫裝置は碧血の腐肉兒の爲めには何の意味も無い。道德とは腐肉のくさりどめだ。宗教とは防臭器だ。教育とは腐肉を誤魔化す染色法だ。跳れよ、殺人鬼よ、恐怖政治よ、跳梁せよ、それはおまへが千百年の氷漬の報酬に適するであらう。トランクに首と胴體を詰めて、小包にして送れ、それはおまへの仕事に

は適する。罪には罰を！　氷漬めには氷漬めを！　カインの末裔よ、神と眞理はおまへには無用のものだ。それを早く葬式せよ。

私は、その暴力の政治に、毎日泣いて居る。カインの血は私にも續いてゐる。

目的も無き腐肉の跳梁と、貧乏に名を借りて　猶發狂せんとするモルヒネ中毒患者は神の創作した地殻を完全に冒瀆した。

ファチスチも、ボルセヴヰキも、アナキズムも、インペリアリズムも、みな腐肉の發明したる新しき氷漬めの制度だ。

それは新しき創造では無い。氷漬めの延長だ。

この惱みの日に――――天から白鷺が嬰兒を私の家に投げ込んで行つた。

彼はまだ、創造前の幻から醒め無い。

彼が、その幻より醒める日に、彼はどんな聲を出すであらうか？

彼は「わが生れし日よ、呪はれよ」とヨブの云つたやうなことを云ふかも知れぬ。

彼の骨はまだ硬くは無い。肉も柔かい。見よ、その櫻色の皮膚を。何と云ふ美しい彫刻であらう。それはロダンの「青銅時代」の筋肉の曲線美を總て備へてゐる。それを白鷺が私の宅に投げ込んで行つてくれた。

私の視力は疾患の爲めに弱れたが、神はその代償として、新しき生命の創作を私に與へてくれた。

何時間見てゐても　それは飽か無いではないか、寢てゐるときには　寢顔が美しい。醒めてゐる時には醒めてゐる時で美しい。

白鷺が投げ込んで行つた藝術品は、笑と歡喜と、希望を私達に投げ與へる。それは疲れた私の魂に幻を見せてくれた。私はまた創造前の幻に歸る。
赤ん坊が漂着した、赤ん坊が！　それは私には、新しい幻であり、新しい創作である。
私は地球の一角に立つて、この天來の珍客を受け取つた。
私はこの漂流者が、何を語り出すかを、今樂しみにして待つてゐる。

（一九二三、五、二六）

雨に就いて

藤原咲平

迄も時間がないから御斷りをしましたが、今汽車の中で一寸暇にあり付いたから感想の樣なものを書きます、手許に材料もないことですから、つまらないかも知れません、そうだつたら沒書して頂きたい。

九段の靖國神社の御祭が春季と秋季とにあります。此頃では春季は四月三十日の前後三日で秋季は十月廿三日前後三日ですが、大正二年迄は春季も秋季も日は五日六日七日で月は五月と十月であつたと思ひます。此御祭には涙雨と云ふてきまつて雨がふると土地の人達は一般に申して居ります。ほんとに左樣かどうかを調べて見ました。ところが今年か逆〳て廿三年間中の春秋の例祭三日間に全然雨の降らなかつたのが只の六回切りで殘り三十九回は雨でありました。確度として示せば靖國神社例祭三日間に雨の降る確度は〇、八七で降らない確度は〇、一三になります。即ち靖國神社の御祭には八分七厘迄は雨がある事になります。此結果は涙雨の事實を肯定するものであります。併し科學としての次の問題は此事實は如何にして起るかと云ふ事です。もし此季節が雨の多い季節ならば此樣になるのに不思議はありません。前中央氣象臺長中村精男博士の調査せられた「東京の雨」と云ふ報告が氣象臺の氣象雜纂第二卷第三に出て居りますが、此報告には四十三年間に於て觀測された東京毎日の雨の統計が出て居ります。一月一日から十二月三十一日迄各日に對する降雨の確度が計算されて居ります。一例を申せば一月二日に雨の降つたのは三日しかないとか、前の天長節即十一月三日は極めて雨の少ない日であるとか云ふ事が明瞭になつて居ります。此報告から五月上旬とか十月上旬又は下旬とかの平均の降雨の確度を求めて是を右の九段の例祭の時のと比べて見ますと、可なりに近い數字が與へられます。即〇、一粍以上の雨が三日間に

一度でも降る確度は春と秋とで違ひますが、大略〇、八から〇、九の間で實際降つたのは〇、八位になります（前の〇、八七は〇、一以下の雨をも含む）依つて招魂祭に於て降つた雨は其季節として大體は相當であるが少し少いと云ふ結果になりました。何故少し少なかつたと云ふ事はまだ私には解りません、夫れが偶然の事か、夫れとも神樣の手加減か、其段になれば私共の智慧ではどうともならない問題です。

右の小話の調査は陸軍の木村さんの調べられたので統計氣象學の行き方を例により說明した樣なものでありまして、兎も角東京では三日つゞけて晴天と云ふ事は滅多に起り得ない事を示して居ます。併し此統計丈けでは天氣豫報は出來ません。過去の實例で百日の中九十九日降らなかつたからとて今現に曇りで低氣壓も近くに迫つて居る樣な場合に晴れと云ふ豫報は出せません。今世間に流布して居る暦類似のものゝ中に一年中毎日の天氣豫報を出したものがあります、是れの中にも色々あり英國邊にさへ矢張同種類のものがありますが、其中で比較的當りの多いものは右に述べた統計法を採用したものであります。從つて是れは其統計の材料を取つた土地で比較的有効であります、が此方法は勿論的確ではないので有名な話ではナポレオンのモスクワの失敗があります。露西亞遠征の前にナポレオンは時の大學者なるラプラースに雪が降るか否かを尋ねた。ラプラースは統計の結果により先づ大した雪はあるまいと答へた所が實際は大雪ですつかり敗戰になつた。實に每年遠征をするのならば一度失敗した所で他の年には取り返しが付くが戰爭の樣なものは一度失敗したらそれ切りでありますから、此樣な場合に統計的方法に信賴する事には危險の伴ふ事を忘れてはなりません。此外卜筮によるものは五分五分にしか當りません。

天氣豫報のやり方も統計的方法から次第に推理的方法に變つて居りますが茲ではそれをば申しません、只氣象臺として說明して置きたいのは雨とか小雨とか晴れとか曇りとか云ふ豫報用語の意味です、是等は誠に明々白々のものですが實際は誤解を招き易い、在來は只明日雨が降るか降らぬかと云ふ事に重きを置いた爲に曇りと出した場合に三粒でも雨が降ればもう豫報は外れとした、併し世の中が進歩したので、單に降るか降らぬか丈では滿足しない、少なくとももつと深く聞きたがる傾向が出て來ました。其爲に此頃は文句を長たらしくして例へば「北西の風で曇りなれども次第に良き方に向ふ、但し尚驟雨の模樣あり」と云ふ風のものを出す、こちらは本氣になつて細かく考へて出すので、是れで滿足して下さる方が

勿論多いが或一部の人は尙舊式の降るか降らぬか丈の考へに捕はれて居り、右の樣な豫報に對して氣象臺は横着だと申されます。「何だ、曇りと晴れ？と雨とを出して置いたらばはづれつこがない」と云ふ批評をされます。一寸誠に御尤の事で恐縮する次第ですが、一日十二時間は相當に長いのでほんとに右の樣な三樣な天氣が起る事があります。毎日右の樣な豫報を出して居るならたしかに横着か馬鹿かでありますが、時々其樣な見込の時丈出すのですから、それで御諒解を願ひ度いものです。現に此間木曜日に右の樣な豫報を出した所其新聞に早速豫報あいまいの爲に學習院女學部の先生達が金曜日の遠足をやらうか、延ばさうかで大困りをした樣に出て居りました。實際金曜日は曇りで正午前後稍強い驟雨があり、其後はずん／＼天氣が直つて夕方は夕日がさす程になりました。豫報は當て樣と思へば御神託の樣にどちらにでも取れる文句を出せばよいので、昔は相當まで此所謂豫言術を西洋でさへも利用されたものですが、今日では學問の進歩によつて其必要がなくなりました。

雨に就いては氣象臺として云ひ度い事は澤山あります。其量、其利害、其性質、其分布等澤山ありますが茲では夫れ等を一々ことはり切れません、又雨の降るからくり等も昔の說と餘程變つた事になりましたが夫れも省きまして、只一言岡田博士著の「雨」と云ふ本は外國にも類のない立派な本である事と、日本は比較的多雨國であるが、我々は非常に其爲に益を受けてゐる事と、將來電氣が動力の源となる點から見て、澤山の水力電氣を起し得る此多雨の日本は祝福された國である事を申して此稿をとぢませう。雨の爲に道が惡くて困るなど云ふても護謨の長靴が流行り出してからは餘程其不平は低まつた樣に思ひます。この上堅固な道路でも築かれさへすれば其苦情はなくなる事と考へます。（大正十二、五　十九、中央線汽車中にて）

所謂獨逸の同性戀愛

黑田禮二

元來がろくでなしの人間は何處へ放つて置いても矢張ろくなことは仕ないものだ。小人閑居して不善を爲すと言ふけれど僕の樣な小人は閑居も爲ないで歐羅巴くんだりまで流れて行つても依然として不善計り働く。大したことはしない。小人だから。でも僞札相場の關係やなんかで少し計りお錢が出來るとお稚兒さんの珈琲店なんかを迂路ついて顚倒の世界の本氣を煙草の煙りに費して行く。僕の生れは土佐の國だが、元來小供の時から諸々を放浪したので、人間に床しい封建的な土の匂ひがある譯でもなく、從つて土佐だとか薩摩だとか佐賀だとかに蔓つて居た××沙汰の習慣を始めから詳しく知つて居た譯でも何でもない。だが僕一個人の趣味から言ふと元來、何でもまつ直ぐなことが嫌ひな質の人間です。從つて不誠實な不正直なもの、ひつくり返つたもの、蜻蛉返りをしたもの、逆樣になつたもの、曲りくねつたもの、古いものが新しく革たまるものなら何んでもかでも大好きだ。自分乍ら極めて惡趣味だと感心する。此の惡趣味の拔けない僕は西洋へ行つても××珈琲店が矢張り面白かつた。一體女が男に惚れたり、男が女を可愛がる、そんな平凡なことは李兵衛でも吾作でも『文化』謳歌者でも石部金吉氏で、誰れでもやらかす。誠に無趣味な極である。處が、反對に女が女に艷書を描く、男が男に求婚をすると言ふんだから奇拔だ。こんな痛快なことはない。之れが流行してご覽なさい。在來の月並みな人間の苦勞は半減する。在來の×××崇拜神聖化を中心とし之れに×××××袋をかぶせて祭り上げ、高く神樣の世界にまで屆く樣に拵へた道德と言ふものには根本的に大革變が起るであらう。尠くとも「神聖な戀愛」「スイート・ホーム」「產兒制限」「人口過剩を奈如せんや」「戰爭」なんて道德がサロメの着物見たいにだん〲薄くなつて功利の世界へ進んで行く過程の問題が霧の樣に消えて了つて人間は皆天の使ひの次ぎくらゐになるであらう。フロイド博士の弟子のコロナイと言ひ

ふ男が『ボリシエヰズムはプロ階級の總括的リビドの無意識的『Perversだ』と言つて居るが、Perversは個人的な問題計りぢやなく群集全體にも、國民にも階級にも在るものと見える。Perversが固定したら今度はそれが本當の基礎となつて在來の倫理も道德も宗教も今度は反對にPerversとなつて了ふ。今に飛行器が盛んに利用されて僕等が燕返しでも何でも出來る樣になつたら「丸ビル」が屋根で逆立ちしたり自動車が蜻蛉返りしたり四ツ足の馬が後しざりに走つたりすることであらう。面白い極みだ。

左樣、伯林で僕は能く『美少年』の出はいりする珈琲へ定連の樣に繋げ込んだ、でも『美少年』を別に追つかけたりなんかは仕なかつた。何？、しらばくれるなつて。いゝや、しらばくれる必要はない。本統の話だ。伯林の『友を求むる美少年』の一團は一種のプロスチチューションなんだもの××××××××××××××××××××ブルリタリア（或はブロジョアか）が、××××××かと追つかけたりする必要はないさ。でも考へても見て呉れ給へ、諸君。相手の『美少年』と言ふものの年は十八九から廿歳位でも骸骨逞しい六尺偉大の壯漢ですぞ、××。それに『××之事』は獨逸の刑法でも特に條文に書いて禁止してある所、一寸間違へた契約をして、しこたま前金を捲き上げられた上、いざと言ふ段にその六尺の偉丈夫に急に態度を變へられ、『一體あなたは何を爲さらうと言ふのか？、我が獨逸の法律では××××××は重い刑罰だ。早くお歸りなさい。さうでないと私は警察へ訴へて出ますぞ！』と×××××見給へ。それはよくあることで其の手にかゝつた日本の高位高官のお方も現に居られるが、それはまあ内密々々。それにしても僕は矢張り面白いからそんな所へよく出はいりしたものだ。面白いから、好きだからと正直に告白する丈け矢張り僕も可愛い人間だと思ふ。よく西洋を漫遊せらるゝ日本からの實業家、大學のプロフエッサア、曰く何々伯爵曰く陸軍の武官……とか言はれる諸氏の中には伯林の風俗紊亂道義地を拂ひて世は澆季となれる狀態を慷慨され、寧ろ日本の腐敗してない所を賞揚し、湧然として愛國の熱を沸かす、『結局毛唐の文明は墮落しちょる。我々大和民族の力には尠とも二千六百年來鍊へて來た健全さがある』と反り身になる『然し――』その然しから先きが一寸怪しい。然し、我々は或る一面から言へば矢張り日本人を代表して來た樣なものだ。短日月に漫遊するのに

書齋に閉ち籠つて參考書計り漁つて居ても仕樣がない。少くとも出來る丈け多方面に實地を見學して置かんと折角日本から大金を遣つて西洋に迄來たのに對して相濟まん話だ……』愈々本音が出た！『殊に社會の裏面の事情の如き百聞一見に如かず、客觀的に觀察して置くことは決して無意味なことでない。其の意味で我輩もさう言ふ唾棄すべき方面をも參考のために見て置かうと思ふ。聞けば黑川君などはその方大分やつて居られるらしいが、怎うです今夜あたり一つ案內して下さらんか……。』結局はさう來る 男色沙汰のひやかしに滔々數萬言、抑々建國の大義から、大和民族の愛國心を前提に置いて、樂屋落ちに落ちるんだから誠に始末にいけない。其他伯林で春畫を買ふ。春畫の蒐集は日本人が一番多いさうだ。多いつて別に恥づることはない。日本人は元來が××だから。天賦の然らしむる所、それは神を怨んでも仕方のないことだ。ちや『春畫は面白い。一人旅をして居れば何となく×××××××××××××××××』と淡泊に言つて退けりや宜いものを。そこを又婉曲に文化哲學を說く。ベデカ案內書と寫眞機とを持つて博物館を巡禮して居る留學生は言ふ。『由來春畫なるものは一種の古美術だ、あの捨て難い曲線と色彩とは怎うしてもキュリオを蒐集する人士にとつて等閑に附し得ざる所だ。僕はさう大して澤山は要らんが古美術の參考として一二枚取つて置かうと思つたら、本屋の爺怖ろしく安い値段に負けやがつてとう〱百枚計り買はされた。誠に持て餘したものだ』と悲嘆にくれて居る。歷史專攻と言ふ老博士は言ふ『春畫は矢張り其の國、其の國の民族の特徵を表はした居る。だから一枚は參考に取つておいても宜いと思つて居たら周旋する奴がこんなに澤山持つて來やがつた』と。其の實參考の方は鞄に一杯も買込んでるが肝心の歷史書はまだ一冊も買つて居ない樣だ。又有名な某實業家は言ふ『春畫やなんてたわいもないもんだ。そんなもん私や一つも要らんが友達に××の奴が多いよつてお土產物買ふていんてやらんと收まりよらん……』と。或る主義者の旅行家は言ふ『僕は今日フツクスの性慾史を買つたぜ。兎に角フツクスは一種の共產主義者だからね……』と 種々まあ都合のいゝ勝手な自分の歌をうたふが宜い、通には各自の虐げられた『性慾』が正直に顏丈け出して舌をペロリと吐いてるから！

何處へ行つても大和民族は倫理を說き道義を垂れる。それに僕の樣に赤ん坊の時から兩親も知らず方々を放浪して不良なこと計りして來た人間、從つて忠孝仁義と言ふことは成る程小學校で聞いたことはある樣なものゝ實際親に孝行とは怎

うすることがまるで觀念にしつくり來ないで大人になつた樣な人間には、その倫理道徳の講釋が誠に厄介で仕樣がない。そんなことと言つても言はなくつても結局臭い所に行く奴は行くんだから、何なら行つて來ますとでも言つて行くか、それとも默つて行つて貰ひたいものだと思つた、愛國心の發揚にも程度があらうに。誰しも便所へ這入つてしやがんで居る時神妙樣に熱烈な祈禱を獻げる敎會信者もあるまい、臭い所に居る時には何もかも知らん顏をして居ればいゝ。××茶屋見たいな臭い所に出入りする其の場所が已に腐つて居る。そこへ行く人間も矢張腐つた淫ターナシナリストなんだ　毛唐は怪からんと息卷いて見たり堂々と愛國熱を振りまいたりすると興も何もさめる。伯林のシャロッテンブルグにランドハウスと言ふ下等な踊り場があつて、僕もよくお訪ねしたものだが、或る時日本人が殺されたと言ふので恐れをなしてもう行くのを止した。それは或る司法省の留學生が其處で一爲替相場の豪遊一を極め日本の國威の此の樣な場所に迄發揚されて居るのに有頂天となり、三鞭酒の醉ひが廻るにつれ傍若無人の態度を執つた。躊躇たる足取りで藝者でも追つ掛ける樣に西洋の婦人を段梯子から突き落したり銅鑼聲で詩吟を呻つたりしたとのことで、傍のお客に制止されたが中々聽かなかつた。其の上奏樂の樂手に向つて成り金の樣に紙幣を摑んで與へ『我が日本の爲めに君ケ代を奏樂しろ』と注文する。一回で止せば宜いのに二回も三回も執拗に强要する。傍のお客（米國人だと聞いた）が見るに見兼ねて止めに來る。「何つ毛唐の癖に生意氣だ日本男兒を見逃へるな」と胸ぐらを摑む。其處で大亂鬪となり、其の先生『毛唐』のお客にビール壜で擲り殺された。一體そんな腐つた處に來る奴はどいつも、といつも人間の糟粕なんだからその時丈けは國粹の發揮をやらなくてもよさ相なものだのに、餘り宜い氣になつて息卷くものだから掬り斃ばされるのだ。恥かしい次第だ。氣持が惡いから以來僕は其處へ足踏みをしなかつた。

然し僕の樣に國威發揚熱の尠い人間にも困つたものだらう。僕の樣なろくでなしを歐羅巴に出したつて、何一つ御國の爲めにならん。然し何處も同じコスモポリタンの身にとつて僕の故郷の友田吾作を褒めたり、お三の美を苦しんで賞揚したりするのは土臺煩さくつてやり切れぬ　從つて西洋人のブルジョアの女房なんか知つたか振りに「ラフカヂオ・ハーンは實に宜う御座んすわ　あれで私尠くとも詩の樣な日本櫻の花の國を想像することが出來るんですよ、あゝあの富士ヤーマ、ゲイーシャ、あの優美なキモーノ!!』と來る。何と煩

きいことではないか『いや奧様、私日本人ちやないんです。私何も知らん支那人です』と答へておく『おやさう でも支那も日本も同じですわ。支那の瀨戸物は美しいですこと。支那は世界歷史中の一番古い文明國ですわねえ、私も支那へ旅行して見たいものです、其の時はあなた案內して下さいますわね、一體支那と言ふ…』『いや奧様、僕は支那の屬國のチヨーセンと言ふ所から來たものでね、實は支那のことも餘り充分に知らないもんですから…』『チヨーセン？、そりや何に？、國ですか？、始めて伺ひますわねえ。ちやマイヤアの百科辭典を調べて見ますわ』會話が永遠に續くのでこれぢやとても助からん。

然しもつと煩さいのは無學文盲の徒だ、獨逸人には統計上文盲は居ない筈で何れも何々中學卒業だとか女學校卒業なんて連中計りの筈であるのに在來の官僚的教育、詰め込み主義の教育の弊として一般に常識のないこと夥しい、其の點は獨逸教育の模倣をやつた日本の方がもつと酷いかも知れぬ 例へば日本の田舍へ行つて田吾作にアルゼンチンとは何だと尋ねても、何のこつたか分りましねえ、だ。だから獨逸の無教育な人間に日本、日本と吹聽したつて正可國の名前位は誰れでも知つて居るかも知れないが、それ以上の智識と言へば先づ平均して 例の富士ヤマ ゲイシヤ、キモノ位が關の山だらう その手合ひの質問に答へるほど馬鹿氣て居て、煩さいものはない 僕の友達などはその質問の馬鹿氣てゐるのに一々眼に角を立てゝ怒鳴つたり、憤慨して仰山な說明をしたりして居た。僕は一々逃げて廻つた。

『日本にも電氣燈や瓦斯燈がありますか？』よく出る質問だ。『馬鹿、日本の電氣は憚り乍ら獨逸以上だぜ、貧民でも五燭の電氣は點けてらあね。獨逸見たいに石油ランプなんか吊つてる所はもう田舍の隅々へいつたつてないぜ。獨逸の建築が立派だつて皆四階か五階ぢやないか。日本へ往つたらね、例へば「丸ビル」と言つて九階の建物がある。そんな摩天樓が田舍の隅々まで一杯なんだ』と大きく出るのが普通なんだ。國粹黨が勢ひさう大きく答へさせる。そんな處に、まるでお國自慢のない僕は始めから煩さいから『いゝや何にも無い』と答へて置く。

『日本に汽車や電車は有るかね？』

『ない』

『ちや電信は？』

『そんな氣の利いたものは無い。』

『ちや交通が不便だらう。怎うしてる』

『草鞋と言ふものを履いて歩くのさ。』

『今でも大抵日本人は豚尾の樣な丁髷を垂れて歩いてるかね？』

『歩いてるよ』

『阿片は吸ふかい？』

『あゝ吸ふとも。』

『日本人は細君を幾人まで持つのが普通かね？』

『幾人でも持たれる』

此の調子で行つておくと世話はない。質問先生自分の空想で描いた夢の樣な日本を其の儘裏書きして貰つて獨りで面白がつて居る。こつちも怎う思はれたつて平氣な男だから、煩さい敵を擊退して獨り滿足がつて居る、僕は萬事それでやつた。誠に國の爲めにならぬ奴だ。

そんなやくざ者だから變態性慾の場所なんかへ、男味を持つてろ附くのさ。伯林で五十以上もある女同志、男同志の珈琲店のうち、僕はよくシユウエリン街の一地下室にある女同志の舞蹈場（男が這入つても斷りはせぬ）、クライスト街のホーエンツオーラアン珈琲店（之も女同志）、ニユルンベルグ街の同名チーン（男丈けの會合所）には能く行つて其の三ケ所の門番にも給仕人にも知合が多かつたものだ。別に變態性慾の社會學的考察に行くのでもない。そんな學問は大嫌ひ。僕は又お醫者でもない。生理的に變態者の統計を取つて見たり、そんな奴等の××××××を計つて見たつて、馬鹿氣てるから　別に研究興味なんか持合せがない　持ち合せてるのは變つたものが好きだと言ふ顚倒興味と賭、相場で浮き上つたあぶくの錢計りだ。

でも同性戀愛珈琲店は日本人が一番持てるので面白い。日本でも藝妓なんかを連れて遠出などするのは氣が利かぬが、お角力の贔屓になつて大きな關取りを連れて歩く位威勢の宜いものはないと言ふが、西洋へ行つても正に其の通り　つまらぬ洋人の女郎や賣女の後を追つ掛けたりするよりは、六尺偕大のお稚兒さんに取り卷かれて他愛もない話に時間を潰すのも面白いものだ。勉強も仕ないで誠に勿體ない奴だとお叱りを受けるかも知れぬ。けれど勉強しないでお叱りに値するなら、他の何々留學生諸君でも中々勉強は仕てない樣だぜ。本買ひなどしてごろ〳〵寢臺にひつくり返つてるのでも、僕の樣なぐうたらでも、勉強しない點に於て結果はお互に同じだから、要するに西洋なんかへは高い金を出して留學生を送らぬこと。それに限る〳〵。

然るにそのもてると言ふ變態性慾珈琲店に僕は×××のお

客が極めて尠いのは怎ふ言ふ譯か知らと、珈琲店經營者は不思議がつて居る。(從つて偶々僕の樣な奴が舞ひ込んでいつてももてる譯なんだ)

『××はホモセクズアリテートの本場だと聞いて居たのに我々の珈琲店へ餘りお客の見えられぬのは何故でせう。』と給仕人が尋ねる。

『矢張り日本人には物珍しいから女の方が面白いでしやう』

『さうかなあ。我々はこんな珈琲店を開いたら日本の方が續々見えると思つて居たんですが。何しろ我々歐洲人はもう腐敗して居ます。異性の爲めに一切の生活能力を枯渇されて居ます。同性に對する友情は古は希臘に盛んだつたもの今日の我が獨逸に於ける流行は日本から來たものだ相ですが……』

成る程斯樣な會合所の名前は大抵日本に關係のあるものから取つてある。カフエ・ミカド、カフエ・ミヤコ、カフエ・ハラキリ、ヤパンクルブ等の文字に依つても大抵其の有樣が察せられる。西洋では昔から悪いものは東から來るに極つて居た。之れは巴里の話であるが、巴里のある諷刺新聞に『東の方から種々の色のついた禍災が巴里を襲ふ。曰く、黃禍、赤禍、白禍。黃禍は日本から來る黃色文明の來襲、赤禍は言ふまでもなく露西亞のソヰエツト、白禍は獨逸人の持つて來る白い粉末、卽ちコカイン吸入の風習』と。之れは笑談だが伯林では『獨逸人丈けは性慾行爲に特種の惡習はないが外國は皆頽廢し變態して居る』と意張つてる。異性間の變態的風習は佛蘭西から來るものとして、之れをフランツエージツシエ・マニエールと謂ふ。露西亞からは怪からぬソドミイの風習が來る。日本からは同性戀愛が來ると唱へて居る。其の實以上の三者は、その所謂外國よりも獨逸自身の中に大に蔓延し、獨逸が今ではその何れものゝ本場になつて居る次第だ。

一體變態性慾と言ふ奴はどんな人間にも多少あるもので、唯だ各人が意識しないまでだと或る醫者は言つた。それはさうかも知れん。自分で意識に上る樣になればもう病氣が膏肓に這入つて居るのだと言ふ。意識しない人間は自分では極くノルマルで正常だと自惚れて居るが、扨て性欲のノルマルとは果してどんなものか、其の標準はお醫者の力でも一定して居ないとの事。要するに八釜敷く言へば人間のリビトを種々の原因で抑壓するに依つて、それが堰を破つて迴り出る水の樣に左に飛び出したり右に溢れ出たり、××××××、飛んで跳ね出したりするものだ相だ。然し其の發現は何か性慾充滿の對照になる可き目的物の力に流れ出るもので其の迸流は其の目的物となる可きものを意識的無意識に探し求める。

それは極めて微妙な心理的の、獨逸語で言へば一種のDarstellungであるが、人間は其の作用を潜在意識や又習慣に依つて固定させて了ふ。從つて其の態樣は各人に依つて種々樣々に異つて現はれる。それが特種のエロチックな「Darstellung」でもう習慣で一定の型に這入つて了ふと、他の對照方法や目的物は消えて跡形を隱すと言ふ、女房にのろい人間とか貞婦の鏡なんて言ふ人間は特別な社會的經濟的從つて倫理的の習慣で、怎うしても自分の女房に限る自分の夫に限ると其の性慾のDarstellungが一定して來るから世に龜鑑とすべき美談が出來上るのだ。從つて一寸した社會的以下の原因に變動が起ると性慾發現の對照に標準がとれなくなつて各人勝手なDarstellungをやる。社會が變態であると從つて各人のその方面變態で複雜を極める。醫者の問題は其の原因を探るに觸れたものでなく、其の結果の診斷的考察に役立つ計りだ。例へば僕の生れた土佐の國では藩政時代に男色が大變盛んだつた『男色の衰ふるは士氣の頽廢する也』と武士が憤慨してゐた程男色は一種の倫理觀に溶け込んで居た。それは特に當時の土佐の武家青年に特種な病理學的原因を持つて居たのでも何でもなく、要するにそれは當時の社會制度の然らしむる原因が、左樣な變態病理的狀態に作用したのである　德川幕府の參勤交代制度は、德川幕府自身の政策としては極めて自己を安泰な地位に置き、各外藩をして叛亂を起さしめざる都合の宜い者であつたに違ひない。薩摩だとか土州の如き江戸から距離の遠い外藩は三年に一度の參勤にどれ丈け疲弊せしめられて苦しんだか分らないのである　交通の不便な當時、天氣を見て帆船を無事浪花の津に寄せることや、河止めの大井川に蓮臺の渡しを待つ事や、足柄山に鳥毛の足輕を先頭に立て五十足目の草鞋を締め直す事などは並大抵の骨折でなく、隨分費用もかゝつた事と思ふ。今日東京から伯林などへ汽船の一等に乘つて與太を飛ばし乍ら旅行するのに比し幾倍の困難であつたか。今日無事な泰平の逸遊をやつても獨り旅には巴里の歡樂やピカデリーの散步にうき身を窶す節制の文化人が多いのだもの、女は金で買へるものとの社會觀を持つて居た昔の田舍の土臭い侍士どもが、お江戸に着いて娼樓に登ること程愉快な、又自然に叶つたことはなかつたであらう。お江戸は歡樂と淫靡の巷だつたが然しそれ丈けで田舍に妻子ある侍士を誘惑するのに足りないと見て取つた幕府は、三百里の道中に宿場女郎を置いて參勤の藩士の旅情を慰め、旅はそんなに辛いものでない、時には中々儲け物もあるものだと信じさせる樣に釣つた處の當時の政策は誠に旨いものだ。そ

れでも各藩の城下へ女郎屋などを置いておくと侍士連中が喜んで田舍に尻を落ちつけ、中々上京して來なくなるからとあつて、例へば土佐の城下などへは女郎屋を設置することは御法度になつて居た。成可く田舍などにぐず〳〵して居るのをつまらなくさせ、三年に一度お江戸に上ることを樂しみにさせたものだ。從つて國の城下では女色に對する淫靡な習慣は百姓町人の女房擔ぎ沙汰や夜這ひ沙汰になつて表はれては居たけれど、お武家の階級には女色の代りに××の横行となつたのだ。德川の大地主的搾取の制度が妙な結果を生んで××道德提唱の域に發達したのである。伯林を見てご覽なさい、矢張さうだ、同性戀愛の沙汰は戰爭前ならオスカア・ワイルドやヴエルレーンや、又はアラン・ボーの樣な腐つたデカダン文士の遊戲位ひに思つて居たものだ　それが戰爭が濟んだら怎うか。一方戰爭に動物の樣になつて氣を腐らして居る士官兵卒の連中は休暇歸京の度に伯林の子女に對して白晝公然の道德紊亂行爲をやる。又伯林の愛國的な母や妻や娘はそれ等の虎狼の餌食となることを××××××××××××。――(これは現にその餌食に自ら進んでなつた、而して今悔しがつてる一人の女からの實談)雲霞の如き兵士にとつてはそれ丈けではまだ〳〵不足だ。明日とも知れぬ、はかない露の命の前には眼に見えぬ、觀念的な「國の爲め」にその偶像以外に誰か考ふことは具體的な情慾と喰ひ意地のこと計り。從つて戰線では附近の農婦に對する强姦や、××××××××、同性間の戀愛沙汰等を盛んに行つたと言ふ。やがて戰爭には負けた。早速銃劍を放つて置いて歸京。歸つたら自分達の職業は皆な女に取られて居る。男女間の職業の競爭――失業。無理に工場に這入つたり商店に勤めたりしても乞食に劣る苦力賃銀しか得られない。それでは女房や子供を喰はせて行く譯には行かぬ――離緣。若い人間で結婚することなどは到底得て望まれぬ。家屋拂底で居る處もない。女房を貰ふことは乞食がダイヤモンドを望むよりも贅澤なことだ。それで獨身者は增へる。女の方だつて折角持參金を親に溜めて貰つて居たものが爲替相場の變動で靴一足も買へない樣な悲境に陷つて許婚の金指輪は質に曲げると言ふ始末。然し結婚が出來ないからと言つて戰爭中に恐しく解放された其節制の本能は習慣上何等かの形式で充さなければ止まぬ。それに女の力は尠くとも戰爭中種々の社會施設に携はつたり、實際の職業を探つたりした爲めに如何に馬鹿な人間と雖も多少の智惠が附いて居る。一方新たに歸京した野獸の樣な軍人は、中には高等學校や大學を中途で止したものもあるが、生

き殘つた多くは當時十七八歳でまだ智惠も附かない大切の時期を兵隊に出てまるで五年間野獸の樣な肉慾生活と人殺しの方法と計り敎はつた若物なのでまるで敎養も糞もあつたものでない。折角期待して居た許婚の娘でも、新婚早々の若嫁さんでも・自分逹の方は多少生意氣に社會的な智識が進んで居るのに、歸つて來た對手の男の方は原人か、狒々猿見たいな馬鹿計りだ。これではスイートホームにも何にも成つたもんぢやない。從つて其の幻滅を感じた敏こい獨逸の女子は自分の許婚を破棄するやら、離婚の訴訟を提出するやら大騷ぎ。思へば一九一九年から廿年にかけての獨逸の離婚率の多かつたことは前後に絶えて居るであらう。總て英吉利から、佛蘭西から資本主義社會に必須な流行が見舞つて來る。五年間其の方面を閉鎖されて居た獨逸の子女の虛榮心は堤を斷つた大河の樣に溢れ出す。流行は資本主義文明になくてならぬ魁けである、ノスケの一流に輕々と虐殺された共產黨員の夢は破れた。スチンネスが出でチーゼンが現はれ獨逸は再びカイザア時代よりも劣惡な新しい資本主義が芽を吹き始める。クーアフユルステンダムは流行の巷となる。三鞭酒の泡は爲替成金や・地方のシーバーに依つて湧き上がる。萬事金だ金だ！、然も亞米利加の弗に限ろ！・多少自棄氣味になつてる伯林の子女はもう愼しみも何も忘れてコヽツトとなる。街頭彷徨ふ！、どうせ短い生命なら美しい流行の着物を纏つて、面白い三昧に日を送つて死んだ方が悧巧なやり方と言ふもの。五ケ年間に多少智識の開けた婦女子の悧巧さはそんな方面の功利をめがけて收まつて了つた。神聖な戀愛も何もあつたものでない、馬鹿な兵隊上りや腦味噌の足りぬ士官の古手を相手にするよりは五年間同じ部屋に起居同棲して居た隣りの事務所の娘の方が餘つ程可愛いゝ。其處で女性の戀愛關係が出來る。始めに一方が男となつて、エロチツクの所謂 l'aistellunq をやり乍ら・艶書の取りやりなんかして居るうちに其の習慣が固定して了つて、退つ引きならぬ女同志の戀愛に變態して了ふ。他の一方男の方でも故鄕へ歸つて見れば女には逃げられる。どの新しい女を見ても何れも生意氣で跳つ返りで面白くもない。却つて戰線に居た時に幼年兵士なんか相手にして騷いで居た當時の方が氣が利いてる。……そんな社會心理になつてる時に、又其處は資本主義の弊害として之れを利用するものが雨後の筍の如く殖えて來た。流行――ジヤーナリズム――企業。先づ或る伯林の高等學校の哲學敎授は『エロス』なる書物を書く。同性戀愛の哲學を高潮し敎育者に在るまじき行爲とあつて監獄に叩き込まれたが、それが又ジヤーナリス

ト連中の利用する處となつて社交界の會話の主題に上ぼせたり、新聞雜誌に書きたてたりする。（此の文章を書き立てゝ居る僕自身も少々擽つたいて！）曰く『同性戀愛の哲學』を知らぬ者共に文化生活をなし得る人類でない。シュタイナハー、アインシュタイン、ホモセクズリアリテート。同性戀愛の社會的流行期は熟した。其處で今度は企業家が現はれる。舊式の賣春婦や何かかを抱へるカフエーを開店するのは氣が利かない。先づカフエーを開店するなら流行の同性戀愛式の奴に限る。曰くカフエー・ミカド。曰くカフエー・ヘラキリ。以上初めに掲げた樣な奴はかゝる經緯を經て續々と起つたものだ。起る丈けの理由があつて伯林の諸街頭に現はれたものだ！

そこで研究が必要だらう。何事も『學理の研究』でなければ夜の明けぬ國の獨逸だ、『同性戀愛の社會的效果』『精神分析學と同性戀愛』『變態病理學より見たる同性戀愛』、曰く何、曰く何。こゝ四五年來に同性戀愛に關し筆を染むる教授博士の論文は汗牛充棟！、古い處ではフオレル氏を始め、同性戀愛で大きな高さ四吋もあり相な名著をした、河豚の樣な顏をしたマグヌス・ヒルシフエルト氏！

其處まで來るとブル文化はもうその專門學術研究所の設立の必要がある。青年精神病學大家クロンフエルト博士は私財を投じてチヤガリテンの綠したゝる池畔に變態性慾研究所を建てた。名刺を携へて訪問し、社會學研究の資料を得んが爲めに案内を乞ふと（よく日本人のやり相なことだ！）瀟洒たる猶太人學者クロンフエルト氏はモーニングの大きな腹を突き出し莞爾として一々御自身に説明して下さつた。第一室――各國民族×××××臘細工模型、あるは〱奇々怪々。第二室――變態性慾者の生理的研究寫眞が山の樣に積まれて居る。患者の生理的特徵とあつて髭が怎うの、脚の長さが怎うの頭の鉢の恰好が怎うのと、統計材料やらヂアグランマやら　第三室は病理的及び法理學的特徵とあつて不思議な器具機械を始め着物猿股ふんどしの類、××××。次に歴史的研究と言ふ奴がある。古の尼僧の閨又はモナスチールに於ける修道僧の×××××××××、ポール・ウエルレーンがアルチユールランボーに送つた艶書やら、オスカー・ワイルド自署の寫眞やら。又傍の圖書館には同性戀愛に關する醫學的科學的研究の名著（！）がきつちり詰つてる。矢張り文部省あたりでは例に依つて道德堅固で愛國心に燃ゆる留學生二十人計り派遣する必要があると確信した。最後の一室は患者の病院である。

『同性戀愛の弊害を意識して治療を乞ふて來る患者もあるんですかね？』

『ありますとも、御覽の通り病院は滿員です。今に病院は增築しなくちや收容し切れんです。』

成る程一方にはそんな風潮が起る樣に社會的にあほつて置いて、それを病院で救濟する。盜賊を作つて置いては懲役に送るのと同じ筆法だなと感心する。一方に貧民を作つておく原因を除かないで居て、それを材料にして「貧民の研究」「社會政策」「文化村の建設」「カントに歸れ」とやつて來る 無產者にはもう其の恩惠の光りに眼が暗んで階級の自覺も何も在りや仕ない 中々旨く丸められる。それを所謂「文化」と言ふ。よくしたものだ。

變態性慾の患者は白いシーツの病床に坐つて種々の治療を受けて居る。入院者もあれば通ひもある。白髮混りの五拾男がラヂウムの器械を××××××××××。十八九の若い娘さんがお腰のあたりにエツキス光線の光りを浴びて居る。

『何しろ獨逸では同性戀愛は法律で矢釜しいですからな。其の邊を自覺した患者は――卽ち自己の病氣を意識した患者はですな――こんな工合に治療を請ひに來るのです。主として良家の子女が多い。之に依つて正常な結婚の道に再歸することが出來るのです。』

『で、一體ラヂウムやX光線で怎うするのです―』

『なあに、先づ此の療法で性慾の昂進を減退させるのです。それから次第に正當なエロチツクの書物や繪畫を見せたり、全身にマツサージを施したりして精神的に肉體的に正當な性慾の恢復を計るのです。』

『中々長くかゝるでしやうな。』

『左樣先づ一二年ですな。多少長くかゝつても矢張り良家の子女が多いもんですから、幸ひにゆつくり治療に來て呉れます。お蔭で當研究所も中々繁昌すると言ふ樣な譯で』

まだ若いのに矢張り猶太人は爭はれないづるい營業のことを言ふ。

餘り長いことぐず〱して居ると、その五十男や娘さん達、余計な外來者が闖入して來たものだと言ふ樣に額に皺を寄せて睨んで居るので早速其處を去る。聽けばラヂウムに中ると姙娠能力が缺如するから××××××目的で治療を受けに來る連中もあると言ふ。そんな患者は初めのプロセス丈けでもう顏を出さなくなるらしい。

それから去年の春に第一回全國性慾學大會なるものが伯林に開催された。どうせ「淫ターナショナル」な問題だからこ

んなものも一遍は當然開かれるものと思つて居た。果せる哉總幹事は矢張り此の研究所長のクロンフィルド博士で、會議の座長には前記「同性戀愛」の著者伯林のマグヌス ヒルンフエルド氏であつた。それに依つて堂々と同會議の綱領やら宣言やら決議文が發表され五日に亘る討議が繼續した。それから最後には伯林醫科大學の附屬になつて居るウイルヒウム研究所の教室で大講演會が開かれて滿堂立錐の餘地なき聽衆を集めた。次回には日本からも國際聯盟見たいに、代表者を派遣する必要があらう。報告の材料は今に澤山出來るだらう。銀座邊へは軈て例の珈琲店もチーレも。實を白狀すると去年のその大會へは五日の會期日を僕は皆勤したものだ。然しそれで以て僕にとつてはもう髮の毛を顯微鏡で覗いたり××の目方をカンカンに掛けたりするお醫者の研究の興味には愛想が盡きた「同性戀愛の惡影響を一掃すべし」なんかと敦圉いて性慾教育の根本が怎うの兒童指導訓育の方針如何なんて枝葉の問題に拘泥して決議文なんか出してそれが何の役に立つ?、獨逸自身を見ても分るぢやないか何もかも社會組織の根本なんだ。其處に立脚して深く考へたら何もかも明瞭な筈。獨逸に何故こんな怪しからん現象が多いか?、と多少ヒントになることを此の惡文で述べた積り。此の邊で先づ締切つて筆を擱く。もう「變態性慾の專門」は止した。

――(四・三〇)

夏期の讀ものにつき

夏休み中にどんな書物をよむだらいいかと質問してくる方が多い、私どもが推薦したい書籍には、哲學書では先づ第一にリツケルト氏の「生の哲學」がよいと思ひます。氏の哲學は新獨逸に太陽の如く光つています。そして新しき人々に新しき人生觀、世界觀を提示して總ての人々に眞の人生道あることを教へています。それから隨筆では阿部次郎氏「北郊雜記」葛西善藏氏「哀しき父」芥川氏「沙羅の花」谷崎氏「愛すればこそ」「愛なき人々」ラッセル氏「愛國心の功過」山本有三氏「戯曲集」賀川氏著「星より星への通路」室伏氏「靈の王國」松本博士著「心理學講話」等は夏期の讀みものとして皆香高き名著と思ひます。すべて夏期中の讀みものは數日を此事にのみ費して大事を取つた方がいいと思ひます。市井のくだらぬ安價書籍に煩ひされぬことを心にかけていたゞきたい。



日陰者の研究

男性支配と私有制度

堺利彦

一　メカケ、嫉妬、貞操、

普通に『日かげ者』と云へば、メカケ（或は圍ひ者）と其の子供との事を意味してゐる。いづれメカケを持つほどの男は、財力に餘りのある人で、從つてメカケも、其の子供も、先づ生活には困らぬ筈である。さすれば大した問題にはならない筈である。

然し本妻側から見れば、夫との性的生活の一部分、或は半分、或はそれ以上を奪はれるわけで、そこに不快を感ずるのは當り前である。女は嫉妬の深いものとか、嫉妬は女の愼しむべき所とかいふ、女大學式の教訓があるが、他にすがつて生活する者は總て嫉妬心を持つので、女に限つた事はない。けれども女の大部分は男にすがつて生活してゐるのだから矢張り一般に女は嫉妬ぶかいといふ事になる。そして、すがられる男の側から見れば、すがる者が餘り嫉妬心を持たないのが便利であるから、嫉妬を愼しめといふ教訓を拵へるのも

當り前である。所が、女としては、その教訓にばかり從つてゐられない。女は貞操といふ責道具を以て縛られてゐるのだから、性的生活は只だ夫との間に限られてゐる。それを幾分なり奪はれる事は不快な筈である。若し女にも、夫以外の男と接する自由があるなら、嫉妬といふ事は滅多に起らないだらう。勿論、そうした場合、先の一組の夫婦が別れて、新らしい二組の夫婦を生ずる事になるのが多いだらうが、それなら何も面倒な問題にはならないわけである。然るに、そういふ手輕いわけに行かないのは、女が男にすがつて生活してゐるといふ根本の事實があるからだ。

旣に男が女を支配してゐる以上、女は男の從屬者としての地位を堅める事が第一の事業になる。そこで純粹に性的生活の問題ばかりでなく、更に夫から與へられた社會的資格、及びそれに伴ふ衣食住の程度を失ふまいとする事になる。然るにメカケ及び其の子供は、本妻の地位に對する恐ろしい競爭者である。そこで問題がいよ〳〵面倒になる。こんな事は云はないでも、分りきつてゐる。

メカケとしては、其の地位に對する法律上の保護がないし、又男から社會的地位を分與して貰ふわけに行かないので、そこが日かげ者の悲しさとされてゐるが、さりとて社會から全く日かげにされてゐるわけでもない。メカケであらうと、圍ひ者であらうと、相當の收入を持つて生活してゐる以上、近處となりも、出入の御用聞も、別だんそれを輕蔑するわけではない。だから本妻に對して地位の競爭をしない限り、メカケは存外安樂な生活をする事が出來る。然し男が死ぬるとか、氣が變るとか、或は從來どほりの見つぎをするだけの財力が無くなるとかした場合、そこに問題が起るのは止むを得ない。殊に、其の子供は或る程度まで法律上の保護を受けてゐるので、いろ〳〵複雜な問題を起す事が出來る。

凡そかういふような事柄は、男が（殊に少數の男が）財力を握つて女を支配してゐる以上、そして法律が財産相續權を種々に擁護してゐる以上、どうしても除くことの出來ない面倒である。道德だの、愛情だの、貞操だのと、一般的な事を云つて見たところで、到底おつつくわけのものでない。男の支配が無くなり、財産擁護の法律が無くなつた時、はじめて解決の出來る問題だ。

二　內緣の妻、貞操蹂躙

內緣の妻といふものも、法律上から嚴密に云へば日かげ者の一種に過ぎない。法律は、結婚の屆出がない限り、夫婦といふ關係は認めない事になつてゐる。

然し性的生活の實際上から云へば、そんな事は殆んど問題にならない。男女二人がお互ひの間に永く性的生活を續ける積りでゐる以上、法律がそれを認めようと、認めまいと、何

んでもない。社交上にも、友人關係の上にも、法律上の屆出の有無は全く問題にされてゐない。又、法律は屆出の無い以上、特別の保護を與へないといふだけの事で、別だん無屆の性的關係に對しては妨害はしない。だから本人同志が法律の保護を必要としない限り、內縁の夫婦と、本統の夫婦との差別はない。元來、內縁などといふ言葉がをかしいのである。

尤も、子供が生れた時、それが私生兒になるといふ多少の不便がある。然しそれもだ、特に法律上の保護を要求しない限り、どうでもいゝわけだ。財産の相續とか、分配とか、子供を父親が養ふか母親が養ふかといふ問題がない限り、私生兒も公生兒も差別はない。父親の文字を名乘るのと、母親の文字を名乘るのとに、何らの違ひはない筈である。

然し、相續とか、分配とか、子供を養育する責任とかいふ事が、經濟生活の實際上とは、いつでも大切な問題になる。又、男の氣が變つて女と別れたくなつたが、女の方ではそれを迷惑とする場合、法律上の保護がないと女の不利益になる。そこで女は多くの場合、結婚の屆出を要求するが、男の方ではそれを拒絶し若しくは突き延ばす場合がある つまり別れる時の便利を考へるからである。そこで近來は頻々として『貞操蹂躙の訴へ』が起つてゐる 貞操蹂躙とは其の實 女の賣り物に對する男の買ひ倒しといふ事だ。昔しはザックバランに『手切金』といふ事があつた。今はそれが『慰藉料』と變名されてゐるに過ぎない。

こういふ事も、現世の財産制度が續く限り、何んとも仕方がない。經濟上の事に少しも頓着しないだけの覺悟のある者は、結婚に關する法律など全く無視していゝが、そういふわけに行かない者は、最初から嚴重に屆出を行ふが當然だ。先づ屆出をしてから同棲すると云ふのが、女の利益を擁護する道だ。然しそれが出來なくて、中途で故障にブツかつた者は、慰藉料なり、貞操蹂躙なり、幾らでも美しい言葉を使つて、取れるだけ手切金を取る事だ。遠慮は少しも入らない。

三　買淫、私通、情婦、密通

日かげ者といふ言葉から離れて、秘密の兩性關係を少し考へて見る。

第一は賣淫もしくは買淫。然しこれは、秘密とは云はれないかも知れない。法律上に認められた公娼は秘密でない筈だ。紳士が藝者買をする事は、法律上には秘密の筈であつても、社交上には公然だ。貧乏人の獨身男が私娼に行くより外に道がない事は、固より知れきつてゐる。けれども、法律上にか、社交上にか、どちらかに多少の秘密があるのだから、兎にかく秘密の兩性關係としておく。

所で此の關係は、經濟的に見て二つに分れる。一つは、財力に餘りのある男が、財力のない美しい女をオモチヤにする

事。今一つは 儲る力も買ふ力も貧乏の爲で 男は兎にかく夫で僅かに性慾を充たし、女は夫で全く(或は甚だしく)性的生活を破壊する。此現象も 現世の財産制度の續く限り 決して除去する事の出來ないもので、クリスチヤンの廢娼運動も 善人君子の道德よばわりも、何らの效果を生ずべきものでない。

次には青年男女の『私通』といふ事がある。これは『内縁の夫婦』と同じだと見れば、問題にはならないわけだが、世間一般の見方はそうでない 然らば其の差異はどこにあるか。今日の道德では、ほゞ獨立した經濟生活の出來る者でなくては、性的生活をすべきでないといふ事になつてゐる。だから親がゝりの青年男女、或は徒弟、小僧、寄食者の類、或は極く薄給者が、性的關係を持つ事は不道德である。若し彼等がそれをやれば卽ち『私通』として責められる。現在の社會的事情としては、此の『道德』を我慢して守る事が青年男女本人の爲でもあるのだから、成るべくそうせよと云ふより外はない。然し經濟上の壓迫が次第に多く晩婚を餘儀なくさせる世の中に在つて、此の道德が次第に多く破られるのは當然だ。青年男女の性的慾求をいつまで抑へ盡す事の出來ないのは、分りきつてゐる。私通を無くするには、相當の年齡で結婚させるより外に道がない。結婚を早くさせるには、皆が生活に困らないようにするより外はない。所が、そういふ事は今の社會組織では不可能と極つてゐる。

今一つ(情婦)といふ奴がある。これは前項の『私通』と同じ場合もあるが、違ふ場合もある。妻のある男が『情婦』を持つのがそれだ。メカケを置くといふほどの財力のある男でなく、何かの事情で或女と關係を作るのが隨分ある。それは矢張り男性支配の社會に於ける男の勝手我儘の一つの現れでもあるが、然し又一方には、晩婚(もしくば獨身)の女が多いといふ事からも起つてゐる。

『密通』は右の反對で、人の妻と通ずる事を云ふのだが、其の男が獨身者であると、結婚者であるとを問はない。これの原因の中にも 經濟的壓迫の爲に夫婦仲が惡くなつてゐる事、夫婦仲が惡くなつてゐるに係はらずなほその夫婦生活を續けて居らねばならぬ事、或は最初から無理な結婚をさせられた事、金錢結婚、政略結婚を强いられた事、或は獨身の男が多い事などを擧げ得る。

財力のある男が、女工や職業婦人をもてあそぶのは、藝者を買ふのとも違ひ、メカケを置くのとも違ふ、一種の男性横暴である。然し其の女工なり職業婦人なりとしては、いつも收入の不足に苦しんでゐる境遇として、そうなるのは實に止むを得ない成行である。又、財力のある男が、其の財力の誘惑を以て他人の妻をもてあそぶ場合もある。それは殊に甚だしい横暴であるが、女の方としては、亦た實にそうなりやすい經濟的事情があるのである。

四　未亡人、私生兒

未亡人の情夫、これは特に氣の毒な事情がある。道德に依つて縛られた未亡人、遺産、恩給、扶助料等に依つて縛られた未亡人、その他、種々なる家族的事情に依つて縛られた未亡人が、永くその性慾を縛り盡す事は困難である。そこで何かの機會で『情夫』が出來る。そして其の結果は多く、非難、攻擊、嘲笑、侮辱を浴せられそれが爲め、或は自暴自棄の醜態に陷り、或は悲慘な最後を遂げるに至る。實にこれほど冷酷な、これほど思ひやりのない事が、又とあらうかと思はれる。然し、男性支配の財產制度（私有制度）を維持する爲には、敢て其の冷酷を忍び、其の思ひやりを揉みけし、儼然として『貞操道德』を說く事が必要になつてゐるのである。それが文明社會數千年來の仕來りである。恐ろしい文明である。×××××××である。

右の中、或る諸項の結果として、私生兒の出來る場合が多い。私生兒の運命には種々の悲慘がある。勞農ロシヤの法律が、私生兒と公生兒との間に何らの差別を置かぬばかりでなく、特に私生兒の自由と權利とを公認してゐるのを見て、我々は他の文明諸國に於ける不自由を痛感せずに居られない。

私は又、このついでに極めて面白い一つの事件を思ひだす。もう二十年ばかり前の事だが、私の懇意にしてゐた若い獨身の婦人が姙娠した。すると直ぐに、友人間に種々の物議が起つた。大抵、相手の見當はついてゐたが、然し其の男とは、近親ではないまでも、親戚關係であるので、まさかと云ふ人々もあつた。そうこうする中、赤ん坊が生れた。問題はいよ〳〵やかましくなつた。或る道德的な二三の友人等は、遂に其の婦人に對して訊問をやつた。『一體、その子は誰の子ですか。』所が其の婦人の答が面白い。『私の子です。』さすがの道德家達も、これには一言もなかつたさうだ。

妾論

大沼利道

一

妾は人生の闇に咲く花である、花に譬ふれが夕闇にほのかに匂ふ月見草と品定めすべき女である、月見草は同じ花の中でも夕顏のやうに何となく淋しい氣を人に與へる、其處には

桃の艶もなく、又梅の氣品もなく、櫻のあでやかさもないが、何となく雨に惱む海棠のやうな憂愁があるやうに思へてならぬ、戀に惱み乍らも、胸のやるせなさを人に祕めて、日に月に痩せゆきし昔の艸草紙などに出て來る緋鹿子友禪の娘心にも似てゐる、彼女は水に色ある濱町河岸に最もふさわしき人である、彼女の棲む家は現代的なケバ／＼した洋館作りであつてはならない、物語などにあるやうに純な日本式の見越の松を配置した黑塀式でなくてはならぬ、中から洩るゝ音樂もヴイオリンや、ピアノや、セロ等の洋樂であつてはならない、どこまでも三筋の糸に絡る戀の調べでなくてはならない、歌も民衆本位の八木節や出雲節ではなくて、長唄、淸元、常盤津等の純日本樂でなくてはならぬ、食べるものも洋食や支那料理でなくて、血の色のやうな鮪等であつてほしい、着物は勿論三越製でせめてお召か大島でなくてはならぬ、髮は曲線美に富むハイボラ線を多く持つ丸髷か、銀杏返しがよい、雀の巣のやうな近代式のルイズ卷は不釣合である、此等の諸點から考へて來ると、妾其人が或る程度迄豐かな肉附と、黑い多くの髮、星のやうな眼、大理石のやうに滑な皮膚を持たねばならぬ、殊に美しい手を持たねばならぬ、顏の美しい人は多いが手の美しい人は少い、美しい白い手にこそダイヤの指輪も星のやうに美しく光るのである。

彼女は闇に咲く花であるから、幾分顏に憂愁の影があるがよい、圓顏に愁少き人であつてはならない、半衿一つにも生の淋しみが水のやうに流れてほしい、鏡花作中の女こそは妾のタイプで、自分の好きな妾タイプの例證は河合である、意地もあり張りもあるが、唯だ戀を云へば淋しみが足らぬ。

二

妾の本場は今日では緋縮緬の世界である、相撲を赤裸宗とすれば、妾の本場は狩衣宗である香水と白粉の最大消費者である色の世界こそ妾の產地である、東京市内に於ける藝者の分布を考へて來ると、最も妾に適する素質を多く有する所は日本橋の女である、日本橋の女とは、檜物町、數寄屋町、上槇町、下槇町、新右衛門町、元大工町、呉服町邊の藝者を云ふのである、容貌、衣裳は新橋に劣るが、魚河岸や日本橋商人の氣立の面白い人々を相手にする丈け、氣前のいゝ所があつて面白い、鏡花の「日本橋」を思ひ出さずに居れぬ、戀に狂へば九寸五分に紫の血を出す位の事は朝飯前である。

若し其藝と姿を取るならば、柳橋新橋殊に今春藝者を選ばねばならぬ、蓋し粹人柳花の推賞せる小照、春吉、小光（新橋）小清、阿十、小常、阿菜、梅吉（柳橋）の如き、容姿絕美、沈靜寡言、品格高尚なるものを今に於て求むることは困難である。

德川時代に於ては勿論今日に於ても多數人は經濟的生活許

りでなく、其人格的生活に於ても可なり窮屈な思ひをしてゐる、人は其本來の無限に延びたい人格的生活を特に味ふべく、貞操を除いては殆んど自由の天地と云ふべき緋縮緬の世界に、心よき羽搏きを欲するのである、而して人間の獨占心は暴君の如く働くも滿足せずして、花を剪つて瓶裏に挾み、玆に相對性の原理を高調するに至る。

三

我國史中妾の代表的體驗者は秀吉と家康である。然し二者各々其見る所を異にし、從つて相手方選擇の態度も全然其趣を異にしてゐる、當時にありては、妾は子孫繁榮の爲め缺く可からざる必要的罪惡であつて、秀吉、家康と雖も又此見地から出發したことは明な事實である、日南翁の云ひし如く、秀吉は其相手方選定の標準を門地、容貌に求め、家康は玉石共に燒くの觀があつた、秀吉は外觀本位であり、家康は實質本位であつた、これ半面兩者の經歷、境遇差異より來る見解の相違である、家康一生の事績に鑑みるに、彼は常に德川家の爲めに働き、家の將來、子孫の計を樹つるには自我を殺したことが少くない、色に溺れて家を忘れることなく、反之秀吉も家康と同じく子孫の計を樹つる念ありしも、稍もすれば其本能の爲めに家を忘れ、身を忘れたことが多い、其淀君に於ける寧ろ一種の變態性慾に陷つて居つた感がないでもない、彼女の美貌と天禀の才能は、秀吉の弱點に心ゆく許り喰入り、遂に政治に容喙するに至り豐臣の天下を亡ぼすに至つた、淀君の死んだのは其肉に溢に人間美の充實した三十三才であつた、豐公の背後には幾多の美姬が毒炎を吐いてゐることを忘れてはならぬ、「多く婦女を姦せるものは令終なし」とは古哲の言である、半面の眞理を有力に物語つてゐる。

四

妾は何も近世の産物ではない、賣娼婦と同じく父系中心の法制が生んだ一種の罪惡である、妾は遠く希臘時代から存在し、大雄辯家デモスセネスすらも公認して居つた、當時にあつては夫は妻の上に絕對權を有すると同時に、多數の妾婢を蓄へて居つた、正妻は夫を呼ぶに良人を以てしたが、妾は主人と呼ぶことになつて居つた、妾は我封建時代に於ても正妻と同樣の待遇を與へられてはゐなかつた、武家諸法度は國主、城主、壹萬石以上並に近習物頭等の婚姻に對しては「私に婚姻を結ぶべからざる事」を定め、其婚姻を結ぶ際には奉行所に屆出で、差圖を請けなくてはならぬ事を嚴達して居つた、故に妾を漫りに妻となすが如きことは當時餘り行はれなかつたらしい、日本財政經濟史料に依れば、享保九年甲辰七月九日の御觸書にも次のやうにある。

妾を妻としたる場合

妾を妻に仕候儀、猥には有之間敷事に候得共若品も有之及其儀候はゞ、向後萬石以上月番の老中、其外向々之頭支配へ可被達置候、無左候得者妻忌服、又は養母等の忌服まぎらはしく候に付申通候。

右の通寄々可被通申候。

尚ほ同資料に依ると、文政二年己卯十月に小笠原信濃守の家來が、御目付森川金右衛門へ次のやうな伺ひを立てゝ、却下になつた例がある。

父の妾に幼年より養育に預候に付、繼母に仕度と父へ願の儀は相成間敷候哉。

妾が常時常に正妻より社會的地位低かりしことは爭はれぬ事實であつて、たゞ丈夫屆の場合には本腹、妾腹に差別を設けなかつたらしい、安政四年丁巳七月水野の出羽守家來原田次郎の伺書に依れば。

本腹へ出生の男子病弱に付、其砌相屆不申處、其後丈夫罷成候はゞ、丈夫屆相成可申哉、都而大丈夫屆と申儀は妾腹に限りも御座候哉。

但丈夫屆之儀、八歳以上以下にて濟不濟と申差別も御座候哉。

然るに之に對して次のやうな解答がある。

書面の通は本腹妾腹の無差別丈夫屆致不苦義と存候、但書之趣は御定等無之候得共、十八九歳迄の内屆差出不苦義と存候。

五

妾發生の原因及沿革を考へると、父系中心の家族制度と共經濟的關係より生じたものと見ることが出來る。血統本位の家族制度から見れば、正妻に子なき時妾を容れて子孫の繁榮を計つたことは、當時の社會組織から見れば已むを得ざるものと謂はねばならぬ。大寶の律令中其儀制令に於ても、妾を二等親の親族と認め、又維新後發布せられたる新律要綱も明かに妾を二等親の親族として認めて居つた。

又他面經濟組織の關係は妻妾間に分業が行はれたらしい、この事に關し河田博士は其著「家族制度の發達」(一〇二頁)中に下の如く述べてゐる。

多妻制若くは蓄妾制の行はれる所に在ては多妻若くは蓄妾間に經濟的分業行はるゝを常とし、若くして美なるものは專ら家に在りて家內經濟のことに任じ、老いて醜なるものは野に出でて男子の業を助くるを例とす可し、又妻妾間に在りては通常妻は家內經濟を司り、妾は生産的方面の仕事に用ひらるゝを例とする也、然れ共多數の民族に之を見るに各妻若くは妻妾間の關係は極めて複雜なるものにして一概に之を論ずるを得ざるもの多し、唯各妻若くは妻妾が住居を異にするものに在ては其間に分業の圓滑に行はるゝこと多きや論な

し。

六

妾の意義を考へると妾(concubine)とは、結婚の意思なくして男と同棲を持續する女を謂ふのである、即ち a kept mistressである。

古代ヘブリュー人の間では、妾は原則として子なき妻女(Baren wife)の代理者(substitute)として働き(代理生殖)、其子供は私生子(illegitimate)とは思はれてゐなかつた、而して其子の相續權は父から賦與されたのである。ローマでは妾とは法律上の妻がない場合に法律が認めたquns-pie である、然し相手男子の地位及び財產を繼承する權利なく、其子女は法律上の結婚で生れたものとは看做されなかつた、然し相續權はある制限の下に行はれ、兩親が結婚すれば嫡出子と認められた。

ローマ法では妾と其相手男子との關係を(Concubinatus)と稱し、其間の子供は自然兒(Liberi naturales)なる名稱の下に、私生子とは全然異なる待遇を與へられて居つた。

今日の法律では妾關係の成立を認めないからローマ法の如き解釋を採ることは出來ない、又身分不釣合の結婚とも見ることが出來ない、何となれば今日の法律では婚姻とは男女が終生の共同生活を目的とする要式行爲である、然らば妾關係は民法上の雇傭契約(民法六二三條)かと云ふにさうでもない。我民法に於ける契約とは主として債權發生の原因を指すから、例へ當時者の合意であつても、妾關係を契約と見ることは出來ない、況んや公序善俗に反するをや。

茲に注意すべきは妾關係は內緣關係とは全然區別して考へねばならぬ、後者は結婚の意思はあり乍ら法律上の手續を履行しない丈けである、故に結婚の意思なくして同棲を持續するものは 明に妾關係と謂はねばならぬ。

七

近世の資本主義は家族制度の崩壞を來し、一方妾の社會的、經濟的地位を奪ひ去り、他方性の遊戲化は茲に彼女の歷史的使命を失はしめ、單に過去の遺物として其屍を白日の下に曝すに至つた、今日の法律から見れば妾關係はどうしても一種の賣淫制度である。賣淫とは佛國の性慾學者レーの云ふが如く「淫行を目的とする婦人が、代償を得て男子に自己を提供する」ことである。今日に於ては一夫多妻主義の變形とも云ふべき畜妾制度は賣淫と同じく正しき結婚外の淫行を遂げんが爲めに起れる文化生活上の一大罪惡である。

今や彼女は過去の美しき夢を見つゝ現實の憂愁に泣いて居る、世に時めく伯爵の愛妾が愛の子を殘して春雨煙ぶる湘南の海に投じた憐れな物語は、妾の資本化を有力に物語るもの

で、是れやがて此程女性の多くの群れが味ふ人間苦である、彼女の運命こそ籬に絡む朝顔の夕を待たで萎れゆく花の悲しみに似て、其美しき眉毛には今も戀のやさしき涙がシットリと宿るのみである。

沙翁は「弱き者よ、汝の名は女なり」と歌つた、これやがて現代の資本化されつゝある彼女の歩みゆく運命ではなからうか。

今や彼女は資本化され、其顏に既に一種のタイプを作ると共に茲に大正の妾氣質が生れ、妾町をも現出しつゝある、而して彼女は人生の闇の中で秋の虫のやうに、惻々と糸より細き聲で人生の悲しき歌を絶えず歌つてゐる。

大發明家エヂソンの貴い次の言葉を彼女及社會の女性改造者に呈したい。

何故多くの人は何事も爲し得ないのか。何となれば彼等は考へないからだ。

Why do manymen never amount to anthing?

Becaus they don't think.

一九二三、五、二〇

監獄で生れた女

澤田撫松

一

女教誨師のM氏は、筆者に次の樣な話をした。以下私と言ふのはM氏のことである。

私が△△女囚監の教誨師になつてから、もう二十年になります。その間には種々の女囚も扱ひましたけれど、霧島親子ほど哀れな運命を持つた女はありますまいと思ひます。私がこの女囚監に教誨師として參りましたその年の秋でした。

霧島お仙と言ふ女が、女囚監へ這入つて參りました。このお仙がどうして女囚監へ送られたかと申しますと、これには悲しい事情があるのです。お仙は子供の時分に兩親に死別れ、叔父の家に世話になつて居たのですが、十八の年に、霧島貞之助と言ふ人の所へ嫁に行きました。一年ばかりは何事もなく暮して居ましたところ、郵便局へ勤めて居りました夫の貞之助が病みつきまして、どつと床に就いてしまつたもんですから、局の方も罷めねばならぬことになり、生活にも困る樣

になりました。夫の病氣は肋膜炎だと言ふのですゆへ、急に治りさうもなく、軀は靜かにして居なければならぬので、仕事は出來ず、それに飲んだくれの安三と言ふ父親があります爲め、お仙は夫の介抱をしながら、簾編の手仕事をして、やつと其の日を送つて居ましたが、安三が毎日酒を飲みますので、夫には藥も飲まされないのを、お仙は歎かずには居られませんでした。貞之助は安三の實の子でなく、安三の兄の子でしたが、兄の家が死に絶えた爲め、貞之助は安三の家へ引取られて養子になりました。その時分は安三も蠣殼町で仲買店を開いて居ましたが、安三の女房が死んでから道樂を始めましたもんですから、家は破産をしますし、安三の身持は段段惡くなるので、下谷御徒町へ移つてからは、貞之助一人で氣を揉むで居ました。それでも、貞之助が郵便局へ出て、細細ながらも暮しを立てゝ居ましたので、安三と貞之助との仲はそれほど惡くはなかつたのです。それが、貞之助にお仙と言ふ女房の出來ましてからは、どうしたのか、安三と貞之助との仲が險惡になつて行くのでした。これにはお仙も弱つて居ましたから、逃げださうと思つたことは度々あつたさうですが、實家のないお仙には、それが出來ませんでしたので、じつと辛抱をして居ますと、恐ろしいことが分つて來たのです。最初の中は、舅と夫とが何でこんなに仲が惡いのかと、不思議に思つて居たお仙は、舅が自分に不倫な考へを持つて居ることを知つて、戰慄するほど怖しがりました。それを知つてからは、二度ばかり家出をしたことがあつたのですけれど、自分の歸る家がないのと、夫が氣の毒なのとで、家へ戻つて我慢をして居ると夫の病氣となり、一人で氣を揉まねばならぬことゝなつたのでした。

二

お仙が夜の目も碌々眠らないで、賃仕事に精を出して居ても、夫に藥も飲ませないのが殘念でなりませんでした。賣藥ぐらゐ買へないことはなかつたのですが、どうで死ぬ人間に藥を飲ますのは無駄なことだと言つて、安三が藥を買ふ金を横取りして、その金で酒を飲むでしまうのでした。これだけでさへも、お仙としては堪忍がなりませんのに、貞之助が床の上で苦しむで居ますところへ、安三が酒に醉つて歸つて來まして、お仙の手を把つて淫なことをしやうとするのです。あまりのことにお仙は腹を立て、把られた手を振り離さうとしましたが、安三は握つた手を離さないばかりでなく、兩方の手でお仙の軀を抱き締しめましたので、お仙は思はず悲鳴をあげますと、苦しむで居ました貞之助も見て居られませんから、立ちあがつて、二人を引き離さうとしました時、生意氣なことをさらすなと安三が呶鳴りながら、足をあげて貞之助の横腹を蹴りましたから堪りません、貞之助はお仙が編むで

居ました縁の上へ倒れました。倒れた貞之助の右の手から血が流れまして痛みを感じましたので、無意識に手を握りますと、お仙が縁の竹を削ります小刀の柄を握つたのでした。それが小刀であることを知つた貞之助は、無理に起きあがると安三を刺さうとしました。その腕を握つた安三は、何をさらすと言ひながら、貞之助の腕を逆に捻て、其所へ押し倒すと馬乗りになり、螺蠑の様な握拳で、所きらはず撲り倒しますので、病人の貞之助はひい〱言つて居ました。それを見ましたお仙は、夫の手から小刀を取りますと、安三の脇腹を刺したのでした。急所の痛手に、安三はそのまゝ息が絶えましたので、お仙は殺人犯として女囚監へ這入つて來たのでした。日本の裁判所では、尊屬親を殺した者は、どんな理由がありましても、死刑にすることにきめて居ますから、お仙も亦死刑の判決が確定したのでした。ところが、お仙は姙娠して居ましたので、死刑を執行することを延期せねばならぬことになつたのです。死刑の判決が確定した女囚が姙娠して居る場合には、分娩さして、生れた子が百日經つてからでなければ、死刑を執行することが出來ない法律の規定になつて居りますから、お仙の死刑も延期しまして、獄中で分娩さしますと、女の子が生れました。生れた子が健に育ちますと、百日間子供に乳を飲まさしまして、百一日目に死刑を執行することになつて居ましたので、お仙は生れた子に美津子と言ふ名をつけて、毎日乳を飲まして居ましたが、一日々々に子供が發育して行くのを見る嬉しさと、一日々々死刑に近づいて行く悲しさとで、普通の人間が想像することの出來ない心理狀態になつて居ました。私は教誨師になりましてから、死刑の宣告を受けた女囚を隨分扱ひましたが、獄中で子供を生んで、百日經つてから死刑を執行される女囚に接する時ほど、いやな氣持になることはありません。子供の發育を悦びながら、自分の死の近づくのを悲しむで居る女囚の傍へ行きますのは、役目とは言ひながら、實に苦しい思ひをいたします。教誨師の私でさへもさうなんですから、當人になつたらどんなに苦しいことでせう。罪人とは申しながら、ほんとうに氣の毒なことだと思ひます。生むだ子供に、百日間乳を飲まさす爲めに、死刑の執行を延期すると言ふことは、お慈悲には違ひありますまいが、考へ様に依つては、これほど殘酷なことはないと思ひます。子供を生むで直ぐならば、まだしもですが、百日間も親につけて置いて、お乳を飲む時に笑顔を見せる樣になつてから、引き離して死刑を執行すると言ふことは、死刑と言ふ一つの刑罰の外に、百日間精神的に苦しめると言ふ別な刑罰を加へる樣に思はれます。

三

話が飛んだ方へ外れましたが、生れた美津子はどうなつた

かと言ひますと、母親のお仙は死刑になつてしまひましたし、父親の貞之助は、お仙の入獄後病氣が重くなつて、死んでしまひましたから、引取られて行く所がありませんゆへ、孤兒院へ送ることになりました。然し孤兒院の方でも、乳母を養育する設備が出來て居ませんので、美津子は池袋の上杉善作と言ふ百姓家へ里子に預けられましたところ、善作夫婦は子供を死なして淋しがつて居ましたのと、美津子がよく馴染むで可愛らしいのとで、監獄で生れた子でもかまはない、我が子に貰ひたいと言ひますから、美津子はとう／＼善作の家へ貰はれて行くことになりました。善作夫婦は誠に氣前のよい人でしたから、美津子をほんとうの子の様に可愛がられて居ましたので美しう育ちまして十二になりましたが、その年の夏、赤痢が流行りました時、善作夫婦は赤痢に罹りまして、前後して二人とも死んでしまひました。養ひ親に死なれて、行く所のなくなつた美津子は、善作の女房と懇意にして居ましたお龜と言ふ女髪結が、養女にすると言ひましたので、美津子はお龜の家へ引取られて養女になりました。お龜は最初は美津子を手にして使つて居ましたが、美津子が十五になりますと、淺草の銘酒屋へ賣り飛ばしました。監獄で生れた日陰者の美津子は、世の中の明るみへ出ることが出來ないで、闇に働く曖昧女の群へ落されたのでした。何にも知らない、清淨無垢の美津子は、生血を吸取る悪魔の巣窟に捕はれて身も心もずた／＼に嘖まれたのでした。泣くにも泣かれぬ地獄の責苦に逢ふて居ましたので、天女の様に美しかつた美津子の顏も、色艶がなくなり、頭の毛色も悪くなつて、體にはいやな腫物を見る様になりましたから、銘酒屋の方でも、かうなつては使へないと言つて、親元へかへして來ました。黴毒が外まで出る様になつたのですもの、歩くのにも息切れがして、輕からぬ容態になつて居ましたから、自分の家へ戻つて來ました美津子は、寢てばかり居たのです。すると、お龜は美津子を叩き起して、この世智辛い世の中にごろ／＼寢て居る奴があるかと、口ぎたなく罵つた上、無理無體に旦那取りをさすのでした。けれども、商人がその氣にならないのと、體に腫物があるのとで、よい旦那もつかないもんですから、お龜は業を煮やし、横濱の密航婦買ひに賣込むで、美津子を新嘉坡へやつてしまうことにしたのです。そして、愈々横濱へ連れて行く日になりますと、お龜は美津子に白粉を塗れとか、着物を着更へとかやかましい指圖をして居ました。その時美津子は、新嘉坡へやられるのがいやさに、自分の黑髪を切り落さうとして、鏡臺の抽斗から剃刀を取り出しました。頭に毛のない女は、いくら密航婦買ひでも連れて行くまいと思つたからです。それを見たお龜は、この阿魔なんしやがると言つて、美津子の手から剃刀を取らうとしたのですが、美津子は又それを渡すまいとしましたので、二人が爭ふて居

ます中に、どうした拍子か、剃刀がお絹の頬に當つて、さつと血が流れますと、お絹は人殺しと大きな聲をあげたのです。人殺しと言ふ聲が耳に入ると美津子は喇と逆上せました。自分がこんな體になつたのも、みんなこのお絹の仕業だと思ふと、抑へ〳〵して居た胸の裡の憤りが一時に發して、持つて居た剃刀が無意識に動きましたから、お絹は血塗になつて其所へ倒れました。かうしたことから女囚監へ這入て來ました美津子は、矢張り尊屬親を殺したと言ふので、減刑の恩典もなく、絞首臺に若い命を落しました。私は鷲嶋親子が二人とも死刑になつたのを見まして、尊屬親を尊ぶと言ふことも程度問題だと言ふことを、つく〴〵感じました。

女性改造の編輯者より、日蔭者と言ふことで一文を書けと言ふことであつたから、女教誨師M氏の話を紹介することにした

（終り）

男子中心と社會と私生兒問題

早田正雄

一

人は此世に於て何ものに對しても選擇權があるのに、たゞ親を選擇する權利はない。神は何處にも居れぬから、其代りに母親を造つたと云ふ聖句がタルマッドの經典中にある、人の母たるものは深く子の爲めに考へねばならぬ。

私生子と云ふ言葉は內緣の妻なる言葉と共に少くとも現代生性には悲しい響を與へるもの丶一である。獨逸では私生子のことを通俗には「愛の子供」と呼んでゐる、其實質を表はす言葉としては味のある言葉である、若し結婚の要素が戀愛であるならば、親や親類が強制した結婚に依つて生れた子供は多くの場合愛の子供ではない、理想としては結婚の背景は戀でありたい、然し現在の社會では戀なくして結婚が成立することが多い、法律上から見れば結婚とは終生の共同生活を目的とする男女間の合意である、而かも我が法律はこれを一の要式行爲として居るから、日比谷大神宮で三々九度の式を擧げても、戸籍吏に屆出でなければ法律上妻としての權利を享けることが出來ないのみか、其間に生れた子供は親の認知あるまでは私生子になり、家督相續に於ても嫡出子及び庶子（父の認知した私生子）よりも其相續順位が後になり、又遺

產相續に於ても共相續は庶子と同じく嫡出子の二分の一である。

二

アインスタイン氏が日本最初の印象記に「日本人は子供を大切にします」とある。

日本の親は此言葉をどう解釋するであらうか、自分は此言葉に擽ぐつたい氣がする、一體日本人は子供が泣いたとては叱る、一寸惡戲しても叱る、然し子供が泣かなかつたり、惡戲しなくなつたらどうでせう、人形のやうになつたらどうするでせう、大きくなつて社會に出れば欠伸一つも氣兼ねをしなくてはならぬ、せめて泣ける時泣かせたい、惡戲の出來る時いやと云ふ程惡戲もさせてやりたい、これが眞の親心ではあるまいか。

又日本の父は今も子供を愛することは親の威嚴に係るものと考へて、子供の前ではわざと澁面をしてゐる、恐いものは地震、雷、火事、親父と昔からの喩へにもある。

右に述べたやうな譯で父と子との關係が隔たり行くこともある、然し何と云つても世の中で純なものは親子の愛である。

父たることを意識しない動物の雛にも親の愛があるのに、人間として自分の子であり乍ら（私生子）それを自分の子と認めない父が我々の世界に居る、己れは汝を子と呼ぶには身分が許さぬ、世間體が惡い、一言の下に自分の子（私生子）を叱り付けた親も居る、子供が現行民法施行前に生れた許りに認知は斥けられ、彼は法律の前に泣いて居る、親が子を扶養せぬを理由として損害賠償をなせば間接に認知せしむることが出來ぬでもない、然し眞の親子であり乍ら、血で血を洗ふ訴訟沙汰はどんなものか。

又廿年前に別れた顏も本籍も生死の程も分らぬ父の行方を搜してゐる現代の石童丸も居る、菊池寛氏の「父歸る」は一篇のドラマではない。

三

現代は男性中心の社會である、家族制度は父系中心の法制を生んだ、而して父系中心の法制は女性と兒童の美しい個性の芽を摘み去つた、人間の結婚史は女性の苦悶を緯とし、兒童の虐待を經とした涙の記錄である、經濟生活の分岐發展はやがて結婚をも遊戲化した、人間始祖の禁果の報ひは今新しく世界に甦つて吾人の靈肉を苦しめ拔いて居る、人の世は鬼は住まねど住み惡い、智慧の木は若き男女の眼前に常に植ゑられてゐる、浮世の波風知らぬ若き彼等は人にも法にも呪はるゝことも知らで、智慧の實を摘みて白日の下に泣くべき運命を自ら辿ることが少くない。

マガレットに罪なき子を抱かしめたメフヰストは今我々の住む世界にも居る、蜘蛛の床に戀を囁き、家庭の樂しさを夢んだ乙女が、男に捨てられて死出の旅に急いだ憐れな物語や、親の許さぬ不義いたづらから因果の子を闇から闇へ葬り、法の前に泣き崩れた虐げられた女もある、世に貧乏と無知程恐ろしいものはない、人を戀ふれば嘆きあり。

峰の白雪、麓の氷、今は互に隔てゝ居れど、やがて嬉しき溶けて流れて添ふのぢやわいな。

一時の戀の甘味に煩惱地獄に陷るとも知らで、虹の如き美しき未來を夢んでお伽噺の結末がくるものだと考へてはならぬ。

四

今大正十一年刊行に係る國勢院の統計に依れば大正八年中の男女出生數一、七七八、六八五人で、內嫡出子一、六三二、二三一人、庶子五七、四五六人、私生子八八、九九八人である、而して私生子の最も多きは北海道、大阪、東京、愛知、兵庫の地方である、尚ほ之れを東京市內の各區に徵するに大正八年度の東京市統計によると、其私生子出產數最も多きは、淺草、芝、本所、深川の各區である、之れを歐洲諸國に徵するに、私生子數は次表の示すが如くである。(チャイルド一九二三年二月號より)

國名	年次	數	人口一萬に對する生產
英國及ウエールス	一九二一	三八、六一八人	四五五人
スコットランド	一九二一	八、七五六	七一一
佛國	一九一三	六五、五六八	八七九
伊太利	一九一七	三二、九三三	四七七
白耳義	一九一三	一〇、九七五	六四一
ポーランド	一九二〇	四、一一二	二一三
ノルウエー	一九一七	四、四六六	六九九
瑞典	一九一七	一八、〇六〇	一、四九四
丁抹	一九一七	七、一七〇	一、〇四三

北米合衆國に於ても私生子に關する詳細な統計を缺いてをるが、大體每年十萬人生れるとは同國識者の探算せる所である、又獨逸に於ては每年廿萬人を數へてをる、尤も我國のみならず歐洲諸國に於ても私生子出產率は漸次減少の傾向を示してゐる。

更に之を犯罪方面より考察すると嫡出子に比し私生子は犯罪が多い、今試みに墺利亞の例を揭ぐれば次の通りである。

年次＼性別	男
一八九六年 犯罪總數	二四、八三三
一八九六年 私生子 總數	二、〇九五
一八九六年 私生子 犯罪一〇〇に對し	八、四
一八九七年 犯罪總數	二八、九八四
一八九七年 私生子 總數	二、八三八
一八九七年 私生子 犯罪一〇〇に對し	九、七

女	四、〇六五	六三二	一五、二	四、六七九	六四三	一三、七
計	二八、八九八	二、七二六	九、三	三三、六六三	三、四八〇	一〇、三

（ボンガー氏著犯罪と經濟狀態より）

マリーシャールリーブス氏の數ふる所によれば、私生子の死亡率は一般に嫡出幼兒の二倍以上であつて一千人中一〇二に對し二〇五の割合である、此恐しい幼兒死亡率は主に生後第一週日間である、殊にその第一日目である、今假りに幼兒第一日目の死亡率を一〇〇とすれば、私生子の死亡率は二三五に當る、生後三月間に此危險は二八一になる、平均生後十二ケ月間の損害が二一一である。

五

上述の如く犯罪及死亡率の點のみを考へても私生子問題は國家及社會の眞劍なる注意を喚起するに足る問題の一である。

私生子問題に對する近代思潮の趨勢及法制の傾向を知る爲めには、先づ私生子問題と最も密接の關係ある棄兒收容所の施設及沿革を一覽せねばならぬ、歐米に於ては勿論我國に於ても近世まで棄兒の大多數は私生子であつた、而して棄兒に對する社會政策的立法は東西其揆を一にして居るのは人間愛の東西異らざる所以を明にするものと謂はねばならぬ、我幕府時代に於ては屢々御觸書中に棄兒制禁を宣傳して居つた、其後も度々棄兒制禁令が出て居る所を見ると、常時如何に私生子の多かつたかゞわかる。

歐洲殊に伊太利に於ける棄兒收容所の歷史は已に千年以上の歲月を經て居る、今日最もよく管理されて居る現代式のものは永遠の都を一眸の中に眺め得るジャニクラス山上にあるブレフォートロリオである、一時歐米では棄兒院は其影を潜めた、夫れは主として一時幼兒の死亡率七〇％以上に上れることゝ、他は母性の惡化及び父母たる責任觀の墮落を恐れた爲めであつた、近時獨逸に於ては墮胎等による幼兒死亡率の增大と、一九一九年九月ライン河に陷入り死亡せる幼兒の數多きを加へ茲に古代に於ける棄兒院制度の精神を掬み—新要求に接したる古代施設の復興—兒童保護所が獨逸ミュニッヒに設立された、是れは秘密に子供を生まんとする母にホームを提供し、一方一般病院及產科病院と連絡を保ち、子供の避難所を作ると共に他方其父母に接しその保護を享けしむるまで國家は子供の父として又教育者として注意せねばならぬと云ふのである。

六

更に法制の傾向を考察するに、我が法律の如く未だ私生子に對して何等保護の規定なきものもある、我民法に於ては其

國等に比し庶子の制度を設けて幾分保護はしてをるが、法規としてはたゞ民法、戸籍法、人事訴訟法、國籍法等に申譯的二、三の規定がある許りで、實は何等の社會政策的立法はない。英國の如きも本年三月二日下院に於て離婚法と同時に私生子保護の法案が第二讀會を通過して居る、勞農露國は既に法律上私生子公生子に對し平等の相續權を認めて居る。

世界で私生子を人間として取扱つた最初の國はノルウヱー、瑞典、丁抹である、一九一五年ノルウヱーに於ては社會事業家に依つて私生子の權利法案が宣言され、其中で「合法の子と私生子とは法律上同等の權利を持つ」とされた、又北米のミネソタの新法では私生子の母及特別官吏の訴願に依り、私生子の父は地方院に於て審問を受け、其犯狀を承認せば裁判所は子供の父と裁定し其子の扶養教育の義務を負はしめ、若し父に於て其義務を果さないと刑に處せらるゝのである。

私生子の母は大概其子の扶養に非常なる重荷を脊負つて居るが、父は新生者の將來に對して全然責任を有して居らぬ、家庭生活は一の組合で、母は人的奉仕を爲し、父は家を維持する物的奉仕を爲すべきである、然し又父は家庭生活に於てある役割を演じ、家庭生活の重荷を脊負つてゐる。純良な牛乳、適當な家、新鮮な空氣、一人の乳母よりも父の存在がいかに母の負擔を輕減し、子供に平和と慰安とを齎すかを忘れてはならぬ、善良なる父の住む所、健全なる母の住む所にのみ大都會は建設されると詩人は歌つてゐる。

私生子に對し社會政策的立法の必要なることは勿論であるが、少くとも社會學者等の説くやうに其父に對して母と同じく經濟上の責任を負はしむることは焦眉の急務である。

あゝ世の母よ、世の妻よ、又世の許嫁よ、青春の血を戀に盛りて人生の春に泣くもよい、されど毒もつ舌とも針とも知らで、智慧の實を摘みて罪なき子を抱き人生の巷に立つ勿れ、神は許すとも法は冷たき鞭を振ふのである。

（一九二三、五、二〇）

日蔭者の生む悲劇

新居　格

世間で意味する日蔭ものとは、僻してそれが女である場合には通常、妾と云ふ名で呼ばれてゐるやうだ。大分前、永井

荷風氏の「妾宅」と云ふ作品を讀んだことがあるが、あゝした物の見方をすると妾乃至妾宅と云ふものも、色彩の豐かなものになつて仕舞ふ。それにはデカタンのうすら寂しい情趣が洒脱で描いた畫のやうに出てゐたと記憶する。

「二人妻」(明星所載)のなかにも荷風氏は妾を點綴して描寫してあつた。が、妾はブルジョア趣味の不健全な趣味ではあるが、氏のやうな豐麗な筆になると歌舞伎芝居の一幕でも見せられてるやうな氣がする。舞臺の上の背景、小道具としての瀟洒な構へ、忍び返し、柳の枝、洒落れた調度、閑散な雰圍氣、配して美貌の女。

妾の概念に、ブルジョア好みの綺麗なお化粧を加へて行くと歌舞伎劇の要素もあらう。

が、さうした想像は、よしんば想像にした所で、許されるべく、あまりに時代意識が嚴肅にして峻烈である。

「姉は恥かしいから逢はぬと歎く。女の身體の切り刻まれる處が見たいかと叱るんだね」と妾になつた女の悲しみを鏡花氏が「日本橋」の一節で、弟にしてその小說の主人公に述懷させてある。さうした心持のひけ目に、既に日蔭ものとしての悲劇的發芽がある。

日蔭ものは文字通り、肩身の狹まいものとされてゐる。狹まいとするのが本當の心持でもあらう。何しろ、誇るに値する存在ではありやうがないのであるから。

成程、生活は保障されもするだらう。體裁のいゝ住宅と、衣食と、物見見物と云つたやうな享樂的機會と閑散とが與へられてあるかも知れぬ。が、恥づべきことは人間らしさを賣入れして云はゞ生きた玩具の存在になつてるからだらう、詰り、女の身體を切り刻まれる狀態に置くからなんだ。

しかし、僕はさうした日蔭もの丶存在のそれよりも、さうした存在がありうる所の社會組織と習俗とに反感が持てる。何故かと云へばそれは私有財產制を前提としてのみ考へ得られる性問題の一種なのだから。象徵的に云へば日蔭ものは私有財產制の濕地に生育する苔の花であるからだ。金と關係が密接である。結局、ブルジョアジーの性的放縱が私有財產肯定の原理(特に金錢)と連結して發生する譯のものだ。

それがパンの艱みのために戀愛や結婚を差控へてゐる男性、女性の多くがある社會に許されていゝ理由がない。このことは妾を持つ一部の富裕階級にたいする抗議であるが、日陰ものゝ女を考へると、正常な勞働よりも、閑散にして收入の多い(無論、惡るい方法だが)手段をとつたのか、さうでなくとも詮ずる所、生活のために、いゝの惡るいのと云ふ問題を考へることもなくなつてる場合が少くないかも知れぬ。考へやうの如何によつては、(生活の點に立脚して)妻も、妾も、賣春婦も五十歩、百歩だとも云へる。社會の組織惡の改訂と男性特に女性の自覺とが相俟てば日蔭ものなぞはなくな

り、妻の地位も從屬的でなくなるであらう。

それらは兎も角として、私は日陰ものゝ生む悲劇に就いて考へやう。

日陰もの卽ち妾の發生的因由は別としてもそれは發生的に悲劇を胚胎してゐる。

日陰ものには法律的地位がない。婚姻では無論ない。雇傭契約でもない。性的勞務を內容とする契約は公秩善良の風俗に反するであらう。と云つて內緣の妻でもない。矢張り、妾なのだ。所謂日陰ものなのだ。法律の事はよくは知らないから餘計なことを云ふのはよすが、生れた子供は私生兒、認知されて庶子。

日陰ものは地位的にも悲劇出生の危險が多い。最近新聞紙が報道した何某伯爵(?)の妾の悲劇を見よ。妾である女は活動寫眞の新派悲劇によくあるやうに海に身を投じて死んだ。

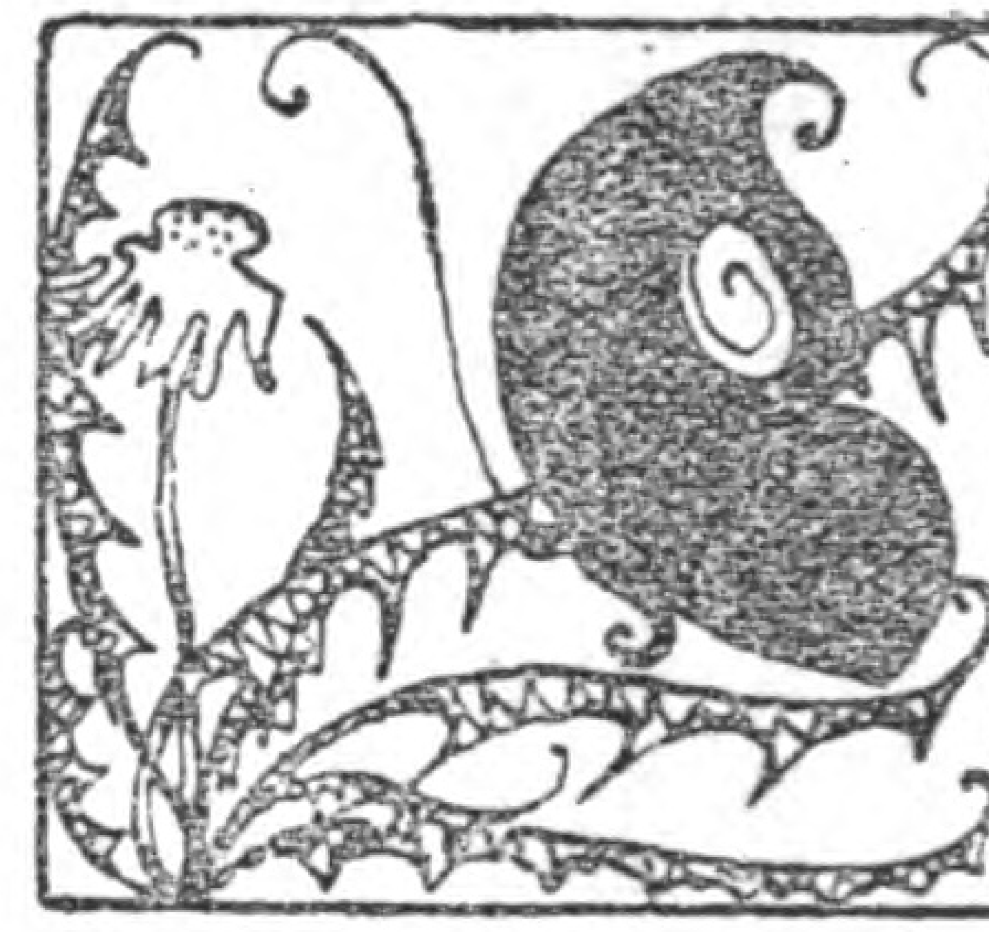
何某伯が朧夜の春宵に見初めた一校書を若干の徑路を辿つて妾にしたと云ふのだ。

女は閑散と不自由のない生活に置かれた。併して幾人かの子供が生れた。長男が何某家の嗣兒たるべく定まらうとしたが、素性賤しき歌妓の子であるのと、長男は何某伯に似てないとかで沙汰止みで、女は暗鬱になりヒステリーになつて死んだと云ふのだ。それが日陰ものゝ生む悲劇の最近の一例だとされてゐる。

僕の見る所、素性が賤しいの何のと云ふやうなことは問題ではないのだ。何が賤しくて何が尊いのだ。そんなものはない。よしあつても五十步百步のけぢめに過ぎない。貴族などが自分の惡德を棚に上げて、理由のない窮屈な旣成道德を振り廻すのも滑稽だが、そのために一人の人間を死に導いたことは何しろ惡るいことだ。

一人の男性と二人の女性の問題に就いての心理的葛藤はシユミツド・ボンの「伯爵夫人」によく書いてあつたが、何某伯の細君は最初の承諾にも拘らずだん〱嫉妬を感じ出したらしい。

よくあることだ。またありうべきが當然だが僕は何がいい、何が惡るいなぞと云ふよりも日陰ものは割の惡い、存在だと云ふの外はない。併して結論的に考へることはやつぱりさうした存在をあらしめる狀態卽ち社會組織の持つ缺陷と云ふことである。それだけだ。



燈籠繪の追憶

＝七月が生んだ明治の玩具＝

正岡いるゝ

燈籠繪——。

といつてもいまのひとにはわかりにくいかもしれない。舊文明が生んだ最もさゝやかな藝術的感興の下に作られた秋のおもちやである。歎きのおもちやである。

影繪、虫賣、金魚屋、緣日といふやうな下町の夏——といふよりもお盆——あの草市の立つころの風趣を思ふとき、私は燈籠繪をともに思ひ出さずにおくことは出來ない。

燈籠繪は、芝居の道具をそのまゝに切りこまざいて張りあはせて、それを燈籠繪の舞臺といふざつな木と木でつなぎあはせたかりそめの舞臺に仕立てゝ、夜になると灯を入れて遊ぶといふのが、その大體の段取りだつた。性根だつた。

私がいとけなきころの淺草住居には、まだ燈籠繪が、よしお雛樣やお幟りのやうに上下貴賤を通じての行事ではあらずとも、下町ではそれによつて七月の夜に、一ばんふさはしい戲れを得やうといふ人たちが殘つてゐたらしく、梅雨があがつて、入谷に朝顏の客がしげくなるころになると、仲見世の並ゐる繪草紙屋にはきつと千代紙や役者の番附、細見などゝ一しよにこの燈籠繪がつりさげられた。

芝居見立の、それも役者は大てい圓右あたりが用ひたがる明治の江戸役者——九代目とか五代目とか、左團次とか壽美藏とか秀調とかみんな故人が多くつて、よつぽど古く板を刻んでそれ以來板を變へなかつたものと覺しく、沒つた段四郎

あたりでもいつまで經つてもコクメイに猿之助と書かれてゐた——の錦繪にみるやうな紫、紅、金、銀。所作事の遠見のやうなその花やかな彩りが譯もなく私の胸を躍らせた。その舞臺さながらにみるやうなばら／＼の錦繪が戀のやうに涙ぐまれた。

だが、その繪の作者は誰であるか、とにかく豐國のおちつきはなかつた。國貞のこまやかさは見られなかつた。

その彩り、その顔だち、すべてがそこを支配するものは、やつぱり梅幸百種を絶品とした豐原國周の綺麗ごとであつた。たまに殊更じつとりと物寂びた繪の具の利かせ方をしたのもあつたが、いはうならそれも「今樣擬源氏」の寂びしさであつた。あくまで芳幾を遠く出なかつた。

元より遠見の山とか海とか、乃至は夏の夕の河岸の景色とか、それも廣重の線ではなく、電信柱に文明開化の月がほゝゑむ芳年であり淸親であつた。

遠く亡びつくされた江戸の匂ひでなく、黒門が燒けたあとも未練たらしくこびりついてゐる明治の江戸であつた。

だが、それは「人間萬事金世中」や「スペンサー」の風船乘をかいた默阿彌のやうに、やつぱり私はその不思議な悲哀と絢爛に滿ちた明治の江戸を愛さない譯にはゆかない。西洋手品を鬼術とかき、幻燈や寫し繪がもて囃された所謂「ざんぎり」文明として一味の哀惜を有つてゐぬ譯にはゆかない。

燈籠繪——少くとも私の知つてゐる範圍の燈籠繪は、されば江戸といふよりも明治初年——いひ換れば默阿彌の江戸である。淸親や芳年や芳幾の江戸である。秋葉ケ原にチャリネの曲馬が靑と紅との色濃きスカートを歡んだころの江戸である。——こうしたムードに秘められた錦繪の變態——錦繪の立體化的遊戯として私はこのおもちやを尊むのである。

燈籠繪は七月の玩具である。

そこに私は又、舊文明に棲息してゐた人たちがいかに詩人であつたかを知るものである。なぜならば、一文獅子に通り神樂、梅にも春の年立ちて「氣の知れぬ人通り」と古川柳から唸はれた元日の夜には、彼らは雙六のまどゐを案出してゐる。みかんやお菓子に小僧も手代も下女もすべてが振袖長きお孃樣やお齒黒を染めた御新造と、春の一夜を娟々として圓きやさしき行燈の下、相樂しむにはいかにふさはしき東海道五十三次の道中めぐりであらう。さらに人間怨恨の趣を遊戯の上にとり入れた百人一首歌がるたの、すゞろ物戀しき早春の宵々にはいかにしつくりとくる泪ぐましき戯れであらう。——さうして、一とせの半をすぎて（今でこそお盆はリボンクンサンやラズベリーやシトロンが中元に格好の御贈答用として會社の重役の玄關口に山をなすため電車のなかに大きな廣告が貼り出されるといふにすぎぬお盆であるが）今は亡きひ

とく〱の御靈を迎へ參らせんため瓜と茄子とみそはぎと蒲、もの哀れな露草のみをとりあつめて、靈棚を作らへ、夕お迎ひ火の煙ほそ〲とまだ明るき空の半月を淡れば、「お盆――お盆がきた」と、彼の西方異土の聖敎徒の安息日にもましてしみ〲と物やさしいおやすみの日にひたるころ、役者小道具中屋體、遠見も霞む燈籠繪、ほんとうにそれこそ「繪からぬけ出た」紙人形の大見得に、ほんのり點るほそ蠟の灯はどんなに秋の思ひをいや增さしめることであらう。黑き影曳いてゆら〱とゆらめく誰彼の人形、南北や治助や默阿彌の殺し場によくみるやうな造り物の月や星、私が燈籠繪を影のおもちや、淚のおもちや、歎きのおもちや、秋のおもちやといつたのはこゝである。――これにもましてしみ〲と七月(斷つておくが江戸の詩人たちは生活の蕪雜を厭ふため、亡き魂を招く日として陽暦の七月を選ぶほど非藝術ではなかつたのだ!)の哀れに流れ入つてなつかしくはかない戲れがあるであらうか。

私は夏になると燈籠繪を買ひあつめた。さうして自ら作らへることに餘念がなかつた。三枚つゞき、五枚つゞきが普通で、二枚つゞきといふやうな小さなものがあるかと思ふと七枚つゞき十二枚つゞきといふやうなものもあつた。

それにはみんな間口何尺、奧行何尺としたゝめてあつた。それに似合つた大きさの舞臺がお祭りの黃色く染めた幟に達磨やさいころのついた襷をうつたり、水中花やあぶり出しや水出しや線香花火を店る家へゆくと間に合ふのであつた。三枚つゞきでも二重屋體や宙乘りのあるのは天井の高い舞臺でなければならなかつた。五枚つゞきでも小さな舞臺に無事におさまるものもあつた。

どの繪にも一ばん上の紙(右の肩を絲でとぢてあるのであるが)に似顏役者が殘らずゐた。その次が小道具や屋體や、とにかく少し舞臺で幅をするもので、たまに仕出しの人形があつた。――遠見はどの繪でも一ばんおしまひにあつた。

さうして役者の刷つてある繪に金と紅とで看板のやうにふちどつてある「出來上り」があつた。その中に忠臣藏なら忠臣藏、中將姫なら中將姫、そこに出て來る人物背景の指定書である。模型である。それをみてこの櫻はどこだとか、この人はどこだとかゞわきまへられた。

振上げた役者の刀は大てい銀粉で、別にどこかにその刀尖丈けはなれてゐた。振袖や腕や少しふくらんでみえなければならない部分も、又、貼りつけてふくらませるやうにはなされてゐた。馬の脚などは殊に四つ別々になつてゐた。岩のふくらんだのはぎざ〱にはみさを入れてふくらますべく手順がつけられてゐた。――兩足をひらいて立つてゐる人の股倉には

別の部分に用ふ岩や波が入つてゐた。それを取出すには箸で豆をひろひ得る私たち日本人を驚嘆する以上に外國人は吃驚するにちがひないほど巧妙な鋏のつかひやうが必要だつた。――私は學校の手工はいつも點が惡く自分でもきらひだつたが燈籠繪の細工なら、それこそりう／＼たるものであつた。

こうしてはなれ／＼の手や足や立木はその各に○とか×とか△とか今ならあるはべつとの御厄介になる所であらうが幸にしてその不調和を取入れることをしらなかつた當時の人たちは草双紙にみられるやうな上記の符合を用ひた。私たちはそれを違へぬやうにあはせてゆけばよかつた。

一ばん道具立でむづかしいのは文覺上人の瀧だつた。半紙大一枚の威勢のいゝ瀧の水にそれに相應した岩を兩方から點綴してゆくのはとてもむづかしいものだつた。十二段目の引揚げとか日吉丸矢矧橋とか、橋も仲々子供には出來なかつた。忠信や妹脊山の御殿や山門も折角出來たと思ふとぐにやりつぶれた。兒雷也の藤橋もさうだつた。私はよくひとりでいら／＼と泣いたりした。

私はうらうちをしないでこしらへた。だがほんとうはうらを厚い美濃紙で貼るのがよかつた。木や人や門殿や、だがそれに順じての厚い紙でのつゝかい棒は私も樹てた。

袖萩や討入りや中將姫や雪のふる芝居があつた。それは舞臺一面に白紙を貼つた。さうしてその上へ綿を貼つた。ふつてくる雪も巧みに絲で釣つた。――桶狹間の戰ひのやうな稻妻や雨を用ふのがあつた。やつぱり白い絲を天地へ斜めにぴんと張らせて白雨の風情をみせた。

そのころは子供よりも大人が多くやつてゐた。職人たちが夜のあひまにこしらへては見世へならべておいたりした。今はなくなつたが、あの本郷三丁目の梅本といふ色物の寄席の大きな看板の出てゐる日蔭町へ曲る角に瓦をどつさり表へ積んだ瓦屋がある。そこの瓦の上に小さくはあつたがこの燈籠繪のかざられてあつたのを覺えてゐる。

燈籠繪も大きいのは職人たちの手あそびであつた。殊に提灯屋の店先にはよくかざられてあつたものである。それは私たちのこしらへるやうなチヤチなものとはちがつて實に巧みなものであつた。――そのころの提灯屋はみんなこうした小さな藝術に醉ふすべを心得てゐた。清元の一くさり位は必然的に知つてゐた。

今のやうに提灯行列や園遊會に朝野の名士に踏み倒されてめちや／＼になる低劣なほうづき提灯の連續を引受けることに無上の光榮と滿足を有する他國者の商賣人ではなかつた。而し燈籠繪は影繪のやうに背ざめたグロテスクではなかつた。

それはあのころのことである。

その匂ひに見出させる享樂的な愁滿的なものは否まれない

が、どちらかといへばそれも兒雷也の忍びの術位でしかなかつた。錦繪のやうな血なまぐさゝはなかつた。

「五人男」の勢揃ひ、「鏡山」の奥庭、「忠臣藏」の大序おかる勘平道行城渡し、五段目、七段目、討入、奥庭、引揚げ、それから「妹脊山」の御殿、「千本櫻」の御殿、鞘當、治郎左衞門の百人斬、中將姫雪責、日吉丸矢矧の橋、富士の巻狩、賴政宇治の戰ひ、桶狹間の合戰、本能寺合戰、伊賀越の仇討、まだ數多いことであらうが思ひ出すものゝ中でポピュラーなのは先づこんなものである。これらは大てい五枚續き、三枚續きであつた。

三枚續きに天竺德兵衞の蟇へのつてゐる裏手水門の場があつた。薄桃色の紙へ刷られた十手やさすまたや當時の捕物道具が少年の日の私の感興をひいた。——捕物といへば忠彌の壕端と召捕があつた。そのころ宮戸座で訥子がよくやつた捕物のとほりなあの青笹藪にむらがる提灯の光。私は三つ太鼓の音を偲び乍らよく切りこまさいていつた。

兒雷也は勇美之助と大蛇丸と藤橋だんまりがあつた。——それから雪ふる新潟の海岸で捕手が澤山かゝつて、綱手はなめくじに大蛇丸は大蛇に、各ゆく所があつた。

五右衞門は山門のほかに藤の森召捕が珍だつた。いろはでそろへるあの大鳥居の足場がとても私たちは出來ないものとあきらめてゐた。——と、そのうち、それのしつくり出來上つたのをどこかでみて私は頗る羨望したものだつた。

八犬傳では芳流閣の信乃と現八があつた。一ばん私の今でもあり〳〵と覺えてゐるのは、仁田四郎人穴めぐりである。洞穴の中から現はれた乙姫のやうな美姫、松火をかざして凜々しく立つた四郎忠常、二人の郎黨は倒れてゐる。芝居なら山颪しの絶えず鳴りさうな、さうして「崖石峨々として人跡絶え」と大薩摩の欲しい岩屋である。むさゝびが一つ飛んで、その穴から流れる水は廻るやうにと車の仕かけになつてゐる。——私はかうした僅か三枚續きでこんな巧妙な仕かけのある繪をほかに知らない。——それにはその全體の繪の其のいろのうす眠くとろ〳〵として、尙、底を流れる病的な甘美。私はその洞の中の御光の滴るやうないちご色と褐色にうすぼやけた岩石とのいかに怪奇な調和美を示してゐたかを忘れることが出來ない。——だがその燈籠繪、ものがものだけによつぽど作れなかつたものとみえて、當時隨分氣をつけてみたが私のほかに作つてゐる店にも、又出來上つたものにもみあたらなかつた。

そのほかに十二枚つゞきといふやうなもので日淸戰爭、日露戰爭の激戰があつた。これも、私が買ひあさつた明治四十三四年ごろには殆んど店ざらしにのこつてゐる位だつた。

やゝ文明開化の明治趣味を殘してゐるものにはやはり七八枚つゞきの汽車があつた。東海の絶景を繞りゆく汽車であつ

た。

それから廻覽車とか、博覽會の春の賑ひがあつた。これも長いものだつた。

この二つは、當時、淺草玉姫町の玉姫學校の近くにある、ひねこびた駄菓子屋で手に入れたものであつた。

燈籠繪の珍品といへば、そのころのことにして殆んど東京中にありとあらゆる燈籠繪を輯めて滿足した子供作らに徹底した趣味的暴君であつた當年の私が、先づ記憶してゐるものではこの位である。

これ丈けのことにして、燈籠繪の材とする所は頗る健全である。そこに血みどろの返り討がない。清玄や法界坊や――その他のあらゆる幽靈がない。草双紙や錦繪や寫し繪とはこの點が恐しく異つてゐる。

お客が子供相手であつたゝめかもしれない。

それとも明治になつて文明開化の新人はそんな舊弊な血のいろにもはや興味はひかなかつたのであらうか。

芳年や淸親は隨分血と肉とを露骨に描いてゐるではないか。さらに默阿彌はどうだ。如皐はどうだ。

私は考へる。

亡き人の魂を迎へ、打ち水のあとにもはや冷え〴〵と新秋の肌寒を覺える當時の夜毎の戯れに、哀れな蠟の灯を透してみる幻影に、さらぬだに似顔の役者はみつめてあれば仄青き笑ひを投げかねまじき氣配である。姿である。――そこでもうそれ以上、グロテスクのためのグロテスクは藥が利き過ぎて、文明といひ開化といつても、まだ西郷星の妖聞ある明治である。ピストル强盗や夜嵐お絹や高橋お傳の草双紙式怪事ある明治である、それこそ今度はほんとにおびえずばならなくなつたからぢやあるまいか！

燈籠繪の濫觴はいつであるかしらない。少くとも嘉永天保以後と信じるが、不幸にして私はそのころの燈籠繪のさしゑをみない。すけつちをよまない。

或はもつと下つて幻燈時代の産物かもしれない。――雙六に豐國ゑがくは多々みても、私は國芳、國貞、國長の燈籠繪にふれたことがない。（切りこまさく物丈に絶滅も早いには違ひないが）

だが、なんにしても燈籠繪は今日いはうなら立體派の錦繪である。それも今日の表現派にちかいものである。

「燈籠繪は表現派だ」

私は嘗て水島爾保布氏の宅でかういつたことがある。――所が先の日、竹久夢二氏からも同様の嘆稱をきいた。

紋所の桐、圖案化された現實にない櫻や梅をそのまゝ樹に咲かせていつぱしの氣でゐた江戸後期の錦繪作家を、泰西の印象派の畫家に比べるひとがあるなら、私はこの名もないひとの筆に描かれた三枚つゞき、五枚つゞきの燈籠繪も、當世流行の表現派でございゝ！と威張りたいものである。

この燈籠繪——。

私のもつてゐたのはすべて牧金之助版としてあつた。さうして明治二十四五年版が殆どであつた。

私は、ほかの版元の名をみたことがない。

作者追記——頃日小泉迂外氏とも談偶々この燈籠繪に至つたがやはり明治の產物潮菊左全盛期の產物であらうといふ事になつた岡本（綺堂）先生は切組燈籠といはれ、浪花では立版古とよんでゐる。ほんとうは何といふのか私は燈籠繪とよんでゐる。詳しくは追憶續記によつて又いつの日かまみえることにしよう。

童謡募集

本誌八月號に童謡を募集します。左の募集規約に從つて多數の御投稿を待ちます。

募集規約

一、原稿は十行以内のこと。

一、原稿には住所氏名を明記すること。

一、封筒に「童謡」と朱書すること。

一、〆切日六月廿五日

一、當選者一名に薄謝金拾圓佳作の方數名に本誌一部を進呈致します。

女性改造編輯部

むかしの童話こぶとりぢゝい新作画です

（其の二）



むかしの童話 こぶとりぢゞいの新作畫ばなし（其二）

岸田劉生

説明

（一）左こぶぢいさんうらやましい
一間のうちにとぢこもり
きせるくわえて
思案投首

（二）しやくにさわるがしかたがない
となりのぢいさんのところへやつてくる
下げた事のないあたまとこぶを
はじめて下げていさいを聞く
こぶとりぢいさん氣がるなもので
すぐに氣もちよく話してくれる
（そうするとそこへ鬼が來ましてナ……）

（三）あくる朝は早くから
左こぶのおぢいさん
なれない肩に斧をかついで山へ行く

（四）中々雨がふり出さない
（早く雨がふつてくれろ）

（五）其中におあつらへむきに
かみなり様がなり出す
ぢいさん大喜びしてこわがる

（六）『木のうろにかくれて、と
早く鬼が出ればいゝナ

（七）そろそろやつて來たナ
なる程こいつはきみがわるい

（八）こわいけれどもがまんして
やつこらさつととび出す

（九）ぢいさんもとよりおどりは知らず
でたらめおどりの手ふり足ふみ
とくりをけとばすお皿をこわす
はては鬼どもの足をふむ
おなかをける
鬼ども大おどろき

（十）とう〳〵鬼奴がおこり出す
『こんなおどりつていねい
『昨日のこぶを返してやるから
とつと歸れ

十一）あつといふ間に右の頰ぺたへ
となりのぢいさんのこぶが
ポンととんで來てくつついた

（十二）これでおしまい
いちがさかえましたとサ






四













決勝點を見詰めて

戀を知る頃――自叙傳の二

澤田正二郎

立身とか、出世とかいふことのほかに希望のなかつた幼少時代が去つて、私の上にも、戀といふものを知り初むる青春の時代が來た。前の號に書いた幾頁かの文章は、あれは、朧氣なる幼時の記憶を喚び起しながら、今日の心持をもつてむかしの姿を描いてみた想ひ出にすぎなかつたが、この頁からは、充分には熟しきらないながらも、自分といふものに對して出來てきた人生觀や智識の中から生れた、はつきりとした記錄である。時代々々に變つてゆく心持――私は、私のこの傳記の姿をも變へて、ペンを進めてゆかう。

一

初夏の或る日の朝であつた。中庭に生ひ茂つた一本の桐の木の下の板塀に、一匹の蛞蝓があとを殘して這つてゐるのを座敷の椽側に腰かけてじつと見詰めてゐた少年の心には、ちようど萠え出づる木の芽のやうに、異性に對する戀の意識が芽生えようとしてゐたのであつた。彼は、人生といふものについて考へ始めた。

――何をして暮すのが、人間としての一番ほんたうの生きかたであらうか――

年齢よりはいくらか早熟の方であつた彼の頭腦の神經を、ぴりぴりつと刺戟したものは何であつたか？　女性を對照としての戀愛であつた。

――女性を愛し、女性に愛されて暮すことこそ、人間幸福の至上である――

強烈な電氣にでも觸れたやうに、一時にしてさうした心持を感得した時、彼が今まで考へてゐた、立身とか出世とかいふ幼年時代の希望の前には、曇つた大きな影がさして來た。彼の面貌にさへ、蒼い影を受けてゐるのが判然と認められたのであつた。

―戀愛即人生―

彼は、教科書と一しよに入れておいたノートを鞄の中から取り出して、殆どその全頁に この五字を太々と書き記した

のである。

二

姉が通學してゐた府立第一高等女學校の生徒の中に、彼の眼に映つた一人の女性があつた。彼が、毎日の授業を了へて、神田の開成中學から下谷稻荷町の自宅へ歸る途中、立花子爵邸の横の、俗に大泥溝と稱する、不忍池から流れて來る濁水を落すどん／＼まで來て橋を渡らうとすると、版で捺したやうに、毎日出會す一人の女學生があつた。口元近くに黑子のある色白の顏を、いくらか俯き加減に垂れて、紫の袴を胸高に穿き　水色のパラソルを杖にして、いと快活に歩を運んで來る、すらりとした中脊の女性。それは、眞に、白百合の精にも喩ふべきほど、氣高い乙女であつた。

「美しい女だ。天女のやうな女だ」漸く戀知り初めむとする彼の眼をどうしてそれが射らないではおかう。彼は橋の上に一人佇むだまゝ呟いた。彼の心は異樣にときめかざるを得なかつた。

——俺の戀の對照者は彼の女性のほかにはない。俺はあの女學生を愛しよう。俺はもう、彼の女の姿を見ないでは一日も暮してゆくことは出來ない——

もとより學問の嫌ひであつた彼は、學校へ行つて、髭面な教師の口から面白くない講義を聽くのよりは、學校の歸り途に、どん／＼橋で美しい女學生に逢ふことが目的で、つとめて、學校にも通ふだけは通つた。

今日も彼は授業を濟まして橋の袂まで來てみると、どうしたのか、女學生の姿がまだ見えない。

——もう此橋を往きすぎたのだらうか　未だなのだらうか。或は學校を休むだのではあるまいか——

そんなことを考へながら、橋の上に立つてゐると、二三分とたたないうちに、二三名の學友と話し興じながら近づいて來るのは、誰あらう、彼が心待ちに待ち焦れてゐた女學生であつた。けれども女學生は、橋の上で毎日のやうに逢ふ少年が、自分を、どんな心の眼をもつて眺めてゐるかも知らないものゝやうに、そのまゝ、連れの女生徒と一しよに、橋を渡つて去つてしまつたのである。それでも彼は　其處を去らうとはしずに、後姿の見えなくなるまで、女學生を見送つてから自宅へ歸つて行つたのであつた。どうかした時間の都合で、斯うしたやうなことも數回つゞいたことがあつた。

さうかうしてゐるうちに、彼と女學生との間には、ある小さな接近をみるやうになつた。といつても、言語を交したといふでもなければ、手紙のやりとりをしたといふのでもなかつた。たゞ、これまで、女學生の方では、彼に對して何の意識ももつてゐなかつたのが、この頃になつてから、彼に逢ふと、異樣に羞んでは、その白い、美しい貌の面を朱に染める程度

の接近であつた。赤らめた女學生の顔をみると、彼とても平氣を裝うてはゐられなかつた。自分の心の姿を見拔かれたのではあるまいかと思ふだけに、ほんとうはその方が、自分に取つては嬉しいことではあつても、何だかまた、醜いものをでも見られたかのやうな氣がして、自然と、顔の赤らむのを覺えずにはをられないのであつた。斯うして、二人は、もう十間ばかりの距離に近づくと、双方同時に、ぱつと顔を朱に染めるやうにはなつたが、別に言葉一つ交すではなく、そのまゝいつも別れてしまふのが常であつた。

三

　春は去り、夏も去り、秋が來ても、彼と女學生との、おぞましい、遠い〳〵戀愛の接觸は依然としてつゞいていつた。

――俺はもう、あらゆる反抗からはなれて、安らかな流れの中に身を浸して、靜かに人生を樂まう。その方が、危きに近よらざる君子の進むべき道であるやうだ。爭鬪を避ける文明人のとるべき態度でもあるやうだ――

　支那人として日本人に反抗し、後には日本人として支那人の味方たらうとして來た。ひねくれた彼の心持には、遂に、鈍つた柔かい日影がさして來た。

　冬が來た。彼が通つてゐる學校の授業時間には變更があつた。それがために彼は、時間を定めたやうに、午後三時にはきつとどん〳〵橋の上で逢つてゐた女學生にも逢へなくなつてしまつた。心ないものの仕わざとは云へ、何といふ情ないことであらう。彼は、これを此の上もなく殘念がつた。

　では彼は、そのまゝその女學生と逢はずにしまつたであらうか。彼はもう、女學生を見ないでは一日もをられなかつた。如何にもして女學生の名を知りたいものだと彼は不斷に努力し出した。

『Ｏ・Ｔ子』

　女學生は、或る官吏の令孃で、『Ｏ・Ｔ子』といふ名前の持主であることをまで、彼は知り得たのであつた。さうして、『戀愛即人生』と書き記した彼のノートの幾頁かには、今度は『Ｏ・Ｔ子』の文字が新らしく加へ並べられたのであつた。

四

「ねえお母さん！お正月にはＴ子さんのお宅へ行つてお茶をたてる約束をしましたのよ。行つてもいゝでせう？ね」

「Ｔ子さんのお宅に？　おゝ、行つてお出でなさい！」

「それからねえお母さん！Ｔ子さんを一度、宅に連れて來てもいゝでせう？」

「いゝともさ、――Ｔ子さんはお前よりも年は下だが、お利發で氣立の優しいお孃さんだといふ評判だねえ。――定めしお嫁の口が多いことだらうねえ」

ある日のことであつた。母と姉とが、お茶の稽古をしながら話をしてゐるのを 我ともなしに耳を傾けて聞いてみれば、それは一人の女性を賞め稱へての言葉であつた。しかも話題の主人公がT子その人であるのに彼は少からず驚いた。――そのT子は、俺が此の間まで、どん／＼橋の上で毎日會つてゐた、そして、この頃は逢ふことが出來なくなつて、秘に胸を痛めてゐる女學生である。俺が心で戀してゐるT子は、今俺の母や姉にまでも稱揚されてゐる。さうして姉は、T子を宅に一度連れて來ると云つてゐる。何といふ嬉しいことだ――

彼は次の部屋に坐つて微笑をもらしながら、T子の名前を書き記した例のノートを抱いて、幾度それに接吻をしたことであらう。

――然し待て！ 姉は、俺があのT子を戀してゐるのを知つてゐるのだらうか。また、姉の知己であるといふT子は、姉を、どん／＼橋で毎日逢つては互ひに顔を赤らめ合つてゐた相手の俺の姉であることを知つてゐるのだらうか――

彼の小さな頭腦の中には、次の瞬間に、斯んな疑問が起つて來たのであつた。さうして、若しどつちかでもあるとしたらどうしよう あゝして、橋の上で逢つただけでさへ顔のほてるのを覺える位きまり惡いのだから、ほんたうに宅に來でもして、偶然逢つて何か話しかけられでもしたら何としよう、とそんなことまでが何とはなしに氣がかりでならなかつた。けれども、彼とT子とは、不幸にしてその後逢ふ機會がなかつた。

五

明くる年の春 校庭の櫻も、漸く一齊に咲き揃つた頃、第一高等女學校では校内の運動場に於て春季の運動會が催された。それを前もつて知つてゐた彼は、この機を逸したら、何日またあのT子に逢へるか知れぬと思つたので、姉がその學校に籍を置いてゐるのを幸ひ、姉に頼み込み、學校を缺席して、運動會を觀に行つたのであつた。

アレイ體操をした一團體の中に、何物よりも先に、彼の眼を射たものがあつた。何？云はずもがな、一際立つて品を放つてゐるT子その人の優姿であつた。彼は恍惚としてT子の身邊にのみ視線を向けて、はなさなかつた。

「あれはT子と云つて、校内きつての評判美人だ。花ならば、櫻か、漸く半開といふところかな」

「うむ。なるほど美しい女だ。なか／＼。眞の花をも凌ぐと云ひたい容色だ。愛してみたいね」

生意氣らしい二人の詰襟洋服の男が、傍で話しあつてゐるのを聞くと、それも矢つ張り、彼が意中の人の噂である。彼は自分がT子に想ひを寄せてゐるのを知つて、この洋服男が自分を皮肉つてゐるのではないだらうかなどとも思はれてな

らなかつた。さうなると、もう、きまりが惡いやら嬉しいやらで火のやうに赤くなつて來る自分の顏が、自分自身にもはつきりと解るやうな氣がして、其處にも居たたまらなくなり、折角占めてゐた好い場所を逃げ出して後の方へ引き下つてしまつた。

運動會の催し物がプログラム通りに終ると、最後に、餘興として、美術學校生徒(？)數名のバイオリンの彈奏があつた。女生徒たちは一堂に集つてそれを謹聽した。

幾百名の女生徒は何うあれ　たつた一人のT子の視聽を集注されてゐるバイオリストたる美術學校の學生を、彼はどんなに羨ましく思つたであらう。どんなに嫉ましく眺めたことであらう。

六

街にはもう灯が點てゐる。花見に疲れきつた群衆が、上野の山からぞろ／＼と下りて來る。さうした如何にも春らしい雜閙の中を、彼は一人とぼ　と稻荷町の家へ歸つて行つた。家では既に、姉も運動會から歸つて、夕の食事も濟み、兄は自分の部屋に一人閉ぢ籠つたまゝいつも彼が笑つてゐた學問の勉強をしてゐた。その兄の横顏を薄明るく照らしたランプの灯の燃えるのを、じつと飽かずに見詰めてゐた彼は――いまのいままで戀愛即人生を禮拜謳歌してゐた彼は、さうしてまた、たつた今、自分が思ひ焦れてゐる女學生を前にバイオリンを彈奏した學生を羨み嫉むで歸つて來た彼は――その時何を考へたであらう。戀愛の結果といふことに就て、彼は考へなければならなかつた。

戀愛、燃えるやうな戀愛、その樂しい戀愛時代が何年つゞくだらうか、あの部屋の中を明るく照らしてゐるランプの灯も油がきれてしまへば滅してしまふ。部屋は暗闇となる。今十三か四の自分が、これから戀愛生活に入つたとして、それが何時までつゞくか、恐らく十年とはつゞかずに終るであらう、それが盡きてしまつた後の自分に何が殘る？　夫婦？親子？まだ／＼早い。自分といふものを、油のなくなつた油壺のやうに空つぽとしてしまふことはまだ早い。自分の生活を、灯の消えた後の部屋のやうに眞暗にするにはまだ惜しい。戀愛には年がある。朽ちなんとする前に咲いた花こそ、ほんたうに價値ある花である。花咲き花散り、花咲く花が、果して眞の花であらうか。否。俺は、今眺めようとしてゐる戀愛の花を、花咲き、花散り、花咲くところの花として忘れよう。そして、朽ちなむとする前に咲く花を待たう。花咲き、花散り、花咲く花よ！さらば！　T子よさらば！想ひ出のどん／＼橋の袂よ！さらば！機會もあらばまた逢はうよ。

彼は、大事々々に机の抽斗に藏つて置いたノートを出して引き破り、夕暮の街を一散走りに彼が何處よりも好きであつ

た谷中の墓地へ飛んで行くのであつた。

四邊の樹木は、もう夕闇の中に包まれて、街の騒々しい音も聞えず、崖一つ下の大通りとは、全然別天地のやうに靜寂な夕暮の墓地は、往々にして、極端な、斯うした感傷的な氣持に浸りたがる彼を迎へるに屈境な場所であつた。彼は、仄暗い墓地の小路を辿つて、五重の塔の前に立ちどまり、傍の冷たい石の上に腰かけて、さまざまな冥想に耽るのであつた。

「おゝ、我が最も親しき五重の塔よ！　三重、五重に抑へつけられてゐながらも猶ほ頭部を尖らかしてゐる汝の勇ましき姿よ！　しかもむかしは、何萬卷といふ經書を藏してゐたといふ汝の懷よ！　我れ今より汝を學び、汝とならうぞ！」

彼は突然、闇空を掠つて、高く怪物のやうに聳え立つ五重の塔にむかつて斯う絶叫した。「學ばう、學ばなければならぬ」と堅い決心もした。さうして事實に於て彼は學び出した。然し彼の學びは、單なるマスマテイツクなものではなかつた。飽くまでも人間としての學びを得ることに彼は努力した。あらゆる百般の書に眼を通したのは勿論、時には經書を繙いたことさへもあつた。その頃から流行しだした雜誌をも片ツ端から愛讀した。

七

Ｔ子への戀を捨てゝ學業の道に走つた彼は、一日、校内の研究室に入つて、人間の顏の模型を見、また、可なりに綿密を極めた生理學の講義をも聽かせられたことがあつた。

偶々、彼は、同級中に於ても、稀に見る秀才と云はれてゐたＮの病死に就て、その追弔會に出席して一場の追弔演說を試みたのである。

「亡き友が世の爲に盡すべき筈であつた責任と、自分の責任と、二人分の仕事を自分は致さなければならない」――これは彼が追弔會に於て聲明したところの要旨であつた。

生理學の講義を聽き、今また、親しき友の死に接して、人間の生命の脆きことを泌々と味つた彼は、死、――人間の不幸――といふことに就て考へずにゐられなかつた。

――人間の死が、多く、肉體的の缺陷から來るものならば、また、人間の不幸が、働くことの出來ない虛弱者にあるものならば、人はまづ何を措いても、自己の身體を完全たらしめなければならない。強健たらしめなければならない――

小學校の時から、耳が痛くなるほど聞かせられて來た「健全なる精神は健全なる身體に宿る」といふ格言をも思ひ出した時、彼は、自分の現在の顏を窓の硝子に寫して、稍長い間見据ゑてゐた。

「この蒼白い顏は何だツ！　これが俺の顏だと云ふのか！」

彼は、自分の顏の寫つてゐる硝子戸を、拳骨で力まかせに叩い

た。硝子は微塵に砕けて彼の手からは眞赤な血が流れ出た。

彼はそれをみて、から〳〵と打ち笑ひながら、學びかけた書物を投げ出し、今度は體育に宗旨がへをしたのであつた。野球もやつた。テニスもやつた。また撃劍も勵んだが、彼は柔道に最も熱中した。強度の近視眼であつた彼には、これが何よりも必然的な、手近な運動でもあつた。

その年の冬の日、學校から直ぐ淺草へ遊びに行つての歸りに、木枯風の吹きすさぶ夜の冷たい街を、柔道着をかつぎながら歩いてゐると、不圖幟などの立ち並んだ町に出たことを彼は知つた。そこには彼の眼を異樣に惹きつけずにはおかないものが一つあつた。煌々たる電燈の光に照らされた、開盛座の繪看板のうちに立廻りを書いた一枚の看板、それこそは、彼の好奇心を極度にそゝらないでおかないものであつた。藝題は新派悲劇小松龍三」――彼の姿は、吸ひ込まれるが如く、立見席の中に消えていつた。ちようど舞臺では、勤王の志士と、幕府方の侍とが入り亂れて烈しい爭鬪を演じてゐた。その夜の芝居が、彼の心に何う映じたか。彼は翌日も亦、開盛座の木戸をくゞつた。その翌日も、そのまた翌日も。果は一里、二里の道を歩いて、東京市中の芝居といふ芝居を觀て廻つた。芝居はもう、彼には最も重用な生活の糧となつてしまつたのであつた。後年すゝんで俳優となつた彼も、この時分から將來俳優たらうとはまさかに思つてもゐなかつたし、又、その時代の潮流が、彼をしてその道へ行かしめるには、あまりに後れすぎてもゐたのだけれど、彼が、彼には最も想ひ出深いどん〳〵橋の上に、青い月光を浴びながら、柔道着に竹刀を持つて立つた殺伐な姿は、俳優となつた今日の彼が當り役の一つである、三條橋下に血刀を提げて立つた月形半平太に宛然たるものが確かにありはしなかつただらうか。

八

そのころの彼には、俳優としての望みよりも、もつともつと大きな多くの希望があつた。彼が通つてゐる學校内には、一高熱と江田島熱とが伯仲の勢力をもつて、若い學生らの前途の希望を占領してゐた。學生どもの心の中には、「短劍」と、「柏ツ葉」がごつちやになつて往來してゐた。「春爛漫の花の色」と一高の校歌を高唱するものがあれば、一方には、「短劍下げて……」と海軍兵學校の校歌を歌うて、これに對抗するといふやうなことは、毎日のやうに見る事象であつた。三月の一高の寮祭が來ると、中學生どもは、先を爭うて一高の門をくゞるのを此の上もない誇のやうに思つてゐた。八月の江田島會の優姿は、全校生の羨望の的とならずにはゐなかつた。然るに、先の年に受驗した陸軍中央幼年學校の試驗に於て既に、近視眼の爲に跳ねられて、軍人志望を斷念しなければならなかつた彼は、今は、その一途たる「春爛漫の花の色」

の一高を選ぶより他に道はなかつたのである。

戀愛即人生をはなれて五重の塔たらむとした彼れ、而して又、肉體の健康は人間幸福の家庭なりとして體育に熱中した彼れ、その彼は、今、肉體的な土臺の建設こそ稍完うすることが出來たけれども、學問の力はといふと、未だに、學ばうとしても學び得ず、たゞ落第をしないといふ程度に於て進級してゐるのであつた。斯うして、碌々たる中學の日は、碌碌たる生徒との間に碌々として經過しゆくのであつた。

ところが、こゝに又、彼には、彼が前に一旦捨てた『戀愛即人生』が、復たもや首をもたげなければならなく運命づけられたのである。それは再び變更された授業時間割の關係から、幾年か前に、互ひに顏を赤らめ合つては行き合つてゐたT子と、あのどん〲橋で顏を見合せなければならないことであつた。二年、三年前の彼の心持には、よし戀情はあつても、それは未だ充分には熟しきらないものであつたが、今日の彼の心持には、或る何物かが混入しられてゐることは事實であつた。即ち彼が異性を對照として接する場合、もう彼の心持には、たゞ精神的なもののみでは滿足の出來ない、或る意識が往來するやうになつてゐたのであつた。危いかな。彼は、中學生として最大の月桂冠と信じてゐる高等學校の入學試驗を前にしながら、再び又T子との戀愛心に耽らうとしたのであつた。けれども天はそれを許さなかつた。この一人の女性を、選ばれたる戀人として愛すべきか、否かの分岐點を自然的に與へて呉れたのは天であつた。この時、若し彼が二度彼のT子への戀情に身を浸したならば、彼の人生は、そのまゝ、散り落ちた花のやうに泥にまみれてしまつたかも知れなかつたが、彼も彼の女も、やがて規定の學年を卒へて、共に校門を出なければならなくなつてゐたことは、二人にとつて何よりもの幸福であつた。

三月二十×日、むかし想ひ出のどん〲橋で逢つた、いつものやうに、紫の袴を胸高に穿いて、赤らめた面を心持ち俯むきながら、卒業免狀を手にして歸る彼の女の姿—それは、彼がT子を戀の對照者として眺めた最後の姿であつた。

ああ夢の夢のやうに儚かつた戀よ！　一言も口を利かず、名も名乘り合はずして終つた戀人よ！祈れ！我も祈らむ、汝の上に幸多かれかし、と。

九

高等學校入學試驗も近い五月の末が來た。中學といふ、型にはまつた敎育の窓口から放たれた卒業生どもは、これから、ほんたうの腕と智識とによつて生きなければならなかつた。高等學校へ進まうとする者、兵學校へ入らうとする者、彼らは、自分の學業を誇らうとして、タカヂアスターゼを嚙みながら、その準備に沒頭してゐるにも拘はらず、何故か彼の氣

持は未だに於て緊張しない。「君！もう直ぐぢやないか、高等學校の入學試驗も。勉强したまへ！勉强したまへ！」と、ボートのチャンピオンであつた、彼よりは先輩のKが云つて呉れた深切心を冷笑しながら、彼は眞白な一冊のノートを懐にして、あやめ咲く堀切へ出かけて行つたのである。

「憐れなる友よ！鐵窓にも等しい書齋に蒼い顏をした坐つてゐる友よ！今に試驗の結果を見ろ！誰が一番で及第するか。中學に於ける不天才は、この時初めて眞の腕前をあらはすものであるぞ…」

彼は、心地よい初夏の風に身を浸し、心ゆくまで青葉の氣分を吸ひながら、煤烟に蓋はれたる帝都の空を睨んで囁くのであつた。

日は早西に傾いて來た。用もなげに薄燒けてゐた西空の雲が紫色に變つてゆくと、大地の色までが刻々と變じてゆく。

「春はゆくのだ…」

彼は、咲き誇つた三四本の菖蒲を手にしながら、行く春の夕暮の町を歩いて、何處へ行く。――新綠の若葉に蔭る墨田の堤を北へ〳〵と、言問の渡しを渡つて山谷堀に沿ひ、吉原土手へ彼は出た。

日全く暮れ果てた闇空を劃つて、パノラマのやうに彼の眼の前に浮び出でたのは廓の灯であつた。道徳家たちが、徒らに忌み嫌ふ明るい色街の世界であつた。

彼は吸ひ込まれるがやうに何の躊躇もなく大門を入つていつた。さうして、牛太郎に誘はれるがまゝに登樓した。

…………………………

何の爲にか此の別世界へ身を沈めて、夜毎日毎に變る幾多の客を送つては迎へる遊女の褪せ萎むだ肉體、憂世の苦しみなど何處へやら忘れてでも來たもののやうに、たゞいゝ氣持になつて浮かれ狂うてゐる遊蕩客の顏の色、廓のさんざめきを聞きながら、人間社會の諸相を幻に描いて眺めてゐた彼の心持には、又しても混亂した曇りが湧いて來たのであつた。

彼は上野驛から汽車に乘つて、目的もない旅へ出かけた。

一〇

一高入學試驗の日が來た。幾日間を寢不足のまゝで過ごしたらしい、蒼白な顏をしながら、向陵の青葉の下に集まつた受驗生は一千名にも近かつたらう。彼らは皆、奇蹟をでも待つやうな氣持で、小さな胸を躍らかしてゐるのであつた。嘗て寮祭の時くぐつたことのある門を今日もくぐつて、彼も受驗生の一人としてその中に加はつてゐたのである。けづられた一本の鉛筆を持つて、天の一角を望んでゐた彼は、何を考へてゐたであらう。

試驗が濟んで、待ちに待つた成績發表の日が來た。その日の官報を手に取つて、發表された及第者の連名の中から自分

の名前を見出ださうと一生懸命に拾つてゐた彼は、こゝでもまた、形式的な試驗制度や、他人の作つた學問を嘲笑しなければならなかつた。彼は遂に、自分の名前を發見することが出來なかつたのである。然し彼は、それを些かも、失望もしなければ悲觀もしなかつた。

　彼が一高の入學試驗に落第した年であつた。彼は急性な腳氣病に罹つて、ひどく惱まなければならなかつた。彼の母は、彼の病を氣づかつて、長年住み馴れた下谷の稻荷町から、本郷森川町の高臺に地を變へて居を移した。それは、大學や一高の生徒らの最も多い本郷に越して、その學生らの登校姿を親しく見せたならば、いくら勉强嫌いの彼でも、少しは奮發心を起こすであらうとの、母の温かい慈愛心からでもあつた。けれども彼には、何の反應もなかつた。

　何百人、何千人といふ、本郷通りを歩いてゐる學生どもの悉くが偉い人間になるのだつたら、日本人の偉さ程度も知れてゐる。その數多い平凡な偉人の仲間入をすることが何の望みだ。俺は、俺で俺の學問をするのだ。さうして非凡な偉人となるのだ。どつちが勝を占むるか、今に見て居れ！――

　彼は、一高に入ることの出來なかつた自分を嘲るがやうにさも得意さうな顏をしながら校門を入つてゆく幾多の學生どもを嗤つて反した。さうして、他人によつて作られた學問の破壞を實行しようとして、明治大學や、中央大學や、正則英語學校などを轉々しては廻つたが、もちろん、少しも勉强しようなどとはしかつた。丁度、一年前から馴染となつた開盛座に入りびたつて、或る時は、色街の遊女の冷たい腕に抱かれながら、一編の腳本を書くことに彼は全力を傾倒したのであつた。

　五幕七場の腳本は出來あがつた。『世の中』彼は斯んな題名を附して、その頃から、新派の重鎭として知られてゐた伊井蓉峰氏の、伊藤痴遊氏と一しよに住まつてゐた鶯谷の居を訪ねて、處女作の腳本を見てもらはうとした。然し伊井氏は、名も知れぬ一書生の此の腳本を見て吳れようとはしなかつた。玄關へあらはれて來た番頭(?)によつて、彼のこの賴みは態よく拒絕されたのであつた。

　空しく持ち歸らねばならなかつた腳本を、彼は、病を得て臥してゐた一ばん親しい姉の枕元に座つて讀むで聽かせた。姉は眼に淚さへうかべながら、熱心にそれを聽いてゐた。

「姉さんはどう思ふ？芝居になつてゐると思ひますか？」彼は讀み終つてから姉に質ねてみた。

「えゝ、大へんに面白いと思ひました。すつかり感動しちやつて、泣いてしひました」姉は、弟を失望させまい爲にか斯う答えた。

「有難う。有難う」

姉の返事によつて長い間の努力を報はれたやうに思つた彼

は、この姉の言葉に勇氣づけられて、今度は、當時洋行歸りとして新思潮の先驅者であつた小山内薫氏のところへ持つて行つて賴んだ。「そのうちに見て置きませう」と云つて受け取つた小山内氏からも、讀んで呉れたのか、呉れなかつたのか、いつまで經つても何の便りもなかつた。彼は手紙をもつて小山内氏に催促した。小山内氏は熱海から返事をした。彼はすつかり小山内氏を尊敬しはじめた。

「小山内氏は偉い人だ。伊井氏が見て呉れなかつた俺の拙い長い脚本を讀んで、丁寧な批評を寄せて呉れた。小山内氏はほんたうに偉い人だ」

彼は、當時小山内氏が私費を投じて經營し、左團次氏が無給で出演してゐたといふ自由劇場の公演が、有樂座で催される毎に、出來るだけ多くの友達を勸誘して觀にゆくことに奔走した。

第何回目の公演であつたらうか。有樂座に於て自由劇場の『ボルクマン』を觀てゐた時、彼は思はず微笑を洩らした。さうして思つた。——斯んなことは俺にもやれるぞ——と、俺も俳優になつて、演つてみようか」彼は傍の友だちの顏をみながら、囁いたのであつた それは彼が十七歳のときであつた。

——つゞく——

文壇名家印象記

津田光造

芥川龍之介氏

動坂で電車を降ります。暑くなく、寒くなく、太陽は靜かに鮮やかに行く路を照らして居ます。實に惠まれた五月日和でした。

路傍の店々は夏仕度の陳物が、ケバ〳〵しく人目を引き付けて居ます。夏帽子、女持ちのパラソル、涼しげな水色のヘラ〳〵したレール、そこで幾色かのパラソルを、腰の低い番頭に勸められて居る買出しの奧さんが、その色合やさし工合を好み分けして居るのが眼につきます。夏、さう今年も夏がきたのだなと、今更の樣に思ひながら、小商店屋がセセコマしく路の兩側に立ち並んだ郊外の町の中を、わたしは歩いて行きました。

そこは何う考へても、芥川氏の家へ行くには相應しくない洗錬されない路でした。雨の日の路の惡さが思ひやられる樣な、薄暗い坂の途中を右へ上つて行くと、今度は今迄のむさ苦しいゴミ〳〵した町の中の氣分から、全く救はれた樣な伸びやかな氣持のする高臺でした。こゝに現文壇に眞珠の如く床しく光る芥川氏の住居があるのです。正目の通つた杉戸の門、滴るばかりの新綠に取り圍まれた二階建の家です。それは斯くあらうとわたしが想像に描いた樣な住居でした、靜寂な澁味の中に、何處か洒落と雅致を持つた芥川氏の藝術が持つて居る氣分を、それが裏付けて居ると思ひました。

先達て、女性改造の講演會で、あの慶應の大講堂の中で、當日の辯士として演壇に現れた芥川氏の瀟洒な洋服姿を思ひ出しながら、招ぜらるゝまゝに二階へ上つて行くと、そこへ書齋から襖を開けて現れた、不斷着の寛いだ芥川氏とハタと顔を合せました。

作品でない芥川氏に一度會ひたいものだと思つて居たのが、この芥川氏でした。

細面の大きな顔、房々と長く伸ばされた髪、何か遠い世界の或物を見詰めて居る樣な眼、飄然として無造作な服裝、それは何う見ても、現實の人間と云ふよりも、空想の世界の人間、藝術の中で見出される人物でした。全く藝術家らしい人だと思ひました。實際、芥川氏の樣な人は、この現實の世界には、さうザラには居りません。

「好い天氣になりましたなあ。」

「好い天氣になりました。」

「日本と云ふ國は好い國ですなあ。」

突然斯う云はれたので、わたしは好い國か惡い國か分らなかつたが、兎に角、同感して「好い國ですねえ」と應へました。

「惡い虫が居ないで好いです。蚊は居ても、蚊帳を吊れば除けられるが、支那には小さい豹蚊が居て困りました。蚊帳を吊つても、目からブン〳〵飛び込んで來るんですから、そいつに刺されたら、直ぐに腫れてしまふんですよ。日本にはさう云ふ毒虫が居ないだけで

も好いですなあ。」

　これでわたしは、成程、日本と云ふ國の好い國である譯が分りました。

「これから又入梅ですね。」

「入梅です。入梅は好いですね。僕は一年中で入梅の時期が一番好きです。」

　入梅が好きだなんか云ふ人に、わたしはまだ一度も出逢つた事がありませんでした。

「出不精ですからね。雨の降るのは、他の人の樣には苦にならないです。」

　何でも、シト／＼と雨が降つて、青葉がシツトリと濡れて居るのを家の中で靜かに眺めて暮すのは、シンミリとした氣持になれて好いのだと云ふのです。それでわたしは、成程入梅もさうして見れば好いものだと云ふ事が分りました。

「廣津柳浪と云ふ人は、あれで非常に近代的な人だつたんですね。あの人のかいた「雨」と云ふ作をお讀みですか？」

「いゝえ、讀みません。」

「あれは五月雨の季節に起る悲劇をかいたものですが、只雨が降り續いたと云ふ事實から悲劇が起るんですね。さう云ふ事は實際に隨分ある事でせうね。雨が降るので仕事に出られないとか、氣分が憂鬱になつて苛立つ樣になるとか云ふので──」

　それだけの話から、わたしは今迄全く忘れて居た氣むづかしやの廣津柳浪を愛慕する情を喚起させられました。

「日本には決闘をやる人が餘り無い樣ですが、何う云ふ譯でせうかね。實際、決闘をやらなければ、どうにもカタが付かない場合が幾らも起るでせう。自分が信じて居た者に裏切られたとか云ふ樣な場合ですね。」

　成程さうだ。芥川氏は藝術家だ。さう云ふ突き詰めた氣持を持つて居るんだと思ひました。珍らしく烏がカア／＼とシヤガレた聲で鳴き出しました。

「近頃はメツヤリ烏が居なくなりましたね。以前はこの邊には隨分烏が居たんださうですが──」

「全く烏は珍らしいですね。僕の居る蒲田の邊でも、烏の聲を絕えて聞きませんから」

それは考へて見ると、機械文明が自然の美を滅して居る恐るべき事實でした。

「どんなに恐ろしい話でも、今ではそんなに驚かなくなりましたが、善良な人間を罠にかけては、穴へ陥れて恬として恥ぢない樣な人間の多いには驚きますね。實際、斯う云ふ人間には憤慨せざるを得ませんね。僕の樣な人間がウカ／＼實社會へ足を踏み込むと、きつと斯う云ふ人間にヒツカケられるんだから、どうしても、引込思案になるんです。」

　實際、考へれば恐ろしい世の中です。人を信ずる美德を持つた善良な人が、さう云ふ人間の美德を食ひ物にしようとして大きな口を開いて待つて居る社會から、引込思案になる事は、詰り守勢的抵抗だと、わたしは深く感銘したのであります。

宇野浩二氏

　現文壇の拗ね者、と云ふよりも、現代の機械文明からの必然の産物である宇野浩二氏です。わたしは宇野氏が人間を機械の奴隷にし金の奴隷にする現代の文明に對する反逆兒であり、呪咀者である時、氏に對して或る人間らしい温か味を親しみを魅力を感じます。

　温かい血の通つて居る人間でしたら、誰れでも、この人間を冷い機械にしてしまふ現代

の生活を呪咀する氣持を持たない者は、恐らく一人もないだらうと思ひます。

わたしは宇野氏の豐な人間味を愛します。

それ故にわたしは宇野氏が好きです。

「小説家と云ふヤツは社會のバチルスですなあ。」

と宇野氏は、あの面長の頬の廣い心持尖つた顎をした、頤の頰のあたりに、皮肉な微笑を漂はせながら云ふのでした。若し社會の方が健全なものであれば、成程、小説家と云ふ者は、その健全(?)な社會を腐らせるバチルスに相違ないと思ひました。

「詰り、社會の方が病的で不健全だから、そこから自然に小説家の様なバチルスが發生する様になるのだとも云へますね。」

「さうです。どちらにしても、小説家は社會を腐らせる黴菌の役割をする者ですから、その社會を維持して行かうとする人に取つては、厄介な代物に相違ありませんなあ——」

「ハヽハア」

わたしは宇野氏のあの剽輕な如何にも小説家らしい眼付を見たら、面白くなつて笑ひ出してしまひました。

「黴菌だけど、併し、皆善良で正直な人間ばかりですな。就中、プロレタリア文學を唱へて居る人達は善良で正直だと思ひますよ。」

「さうかも知れませんね。」

「皆詩人ですよ。ポーエムを持つて居ますね。そしてロマンチイストですね。」

「さうですね、美しい社會を空想して、それへ突進しようとして居るんですから、ロマンチイストでせうね。」

「實に羨ましいですね。さうした生活は、物質的に惠まれたブルジョアには、さうした詩の世界は無いんですからね。ブルジョアの様に物質の所有に煩はされて居たら、全く詩の世界なんかは無くなつてしまひますからね。貧乏人は幸福ですよ。詩の世界は貧乏人だけが持ち得る天國ですな。」

「何にも持つて居ないから、現實の生活には滿足が得られないから、絶えず美しい詩の世界を空想して生きる様になるんですね。」

「詰り、何か餘計なものを持つて居ないから好いですね。」

「餘り何か持つて居な過ぎると、併し、悲痛ですね。」

「悲痛ですが、そこには慥かに或る明るさがありはしませんか?」

「過去に執着せずに、ただ、生きたいまゝに、新しい世界へ〳〵と前進する一方ですからね。未來主義ですね。」

上野櫻木町の宇野氏の家の二階は平和で靜かでした。窓から上野の森の若葉が手に取れさうな所です。そこには音樂學校と美術學校とが建ち並んで居ます。有名な美術家音樂家達の住居があります。宛かも藝術家の村へ來た様な氣分になるのでした。

斯う云ふ所へ住む人の家には、是非共一人の美しい細君が居なければならない様な氣がして居たら、丁度その時そこへ美しい奥さんが——全く美しい丸髷の奥さんでした——が現れて、わたしに挨拶をなさいました。

一體、人の細君と云ふものは、取り分けこの初夏には美しく見えるものなのでせうか?——尤もその時は、これから何處かへお出かけのとこで、「それではこれから行つて參ります」と、宇野氏に向つてしとやかに申して居られました。

「ウン」と、宇野氏は夫人に對してそれだけ

の言葉しかなかつたのですが、如何にもそれは夫人との深い仲を物語るに十分でした。

　この奥さんが宇野氏の小說の中によく現れて來る婦人のモデルだなと、その瞬間チラと思ひました。

　わたしは先程、宇野氏と二人で、餘り何かを持つて居ない裸の人間の幸福を讃美し合ひましたが、斯うなると、今度は、持つて居る事の幸福を讃美したくなりました。

　美しい細君を持ち、そしてその細君と仲の好い暮しをして居たら、それは慥かに、人生に取つて幸福の最も大なるものに相違ありませんから。

　わたしは今、「細君を持つ」と云ひましたが、勿論それは品物を持つと云ふ意味での「持つ」ではありません。女の方から云つたら、「亭主を持つ」と云ふでせうから同じ事です。

　宇野氏の話によると、日本の中產階級の男子が、外國人の様に帽子の數を持たないのは、女が男の帽子に就て彼れ此れと口八釜しく云はないからださうです。細君にあれにしなさい、これにしなさいと云つて勸められると、大低の男は細君の云ふ通りになるものださうです。內面的に見て、女の男に對する支配的勢力の大きなものである事をわたしは考へさせられました。

女子の水泳
泳げるまでの階段

體育協會水上委員　京田武男

近年我國に於ても女子の水泳や競泳が盛んになり本年五月末に、大阪で行はれた極東オリンピックに我國の若い女性が比律賓や支那の選手の中に交り、競泳に於ける榮冠を輝かした如きは改造期にある、殊に女性の運動方面に於ける特殊の現象として欣喜に堪へない處である。庭球に於ても同樣の現象を呈してゐるが海國の日本として特に水泳の方面に此の活躍を見せたことは何と云つてもうれしい事である。私は更らに大阪の茨木中學の競泳選手が近年頓に名聲を揚げて日本の競泳界に雄飛した事も日本の競泳史上に特筆すべく推賞すべき事であると思ふ。それにつけても考へ合せられる事は是非に日本人の全體が又男女を問はず若い人々が恐く泳げる樣になつて欲しいと云ふ事である。上手に泳げなくともいゝ。只單に浮く程度であつてもそれが普遍的にありたいと云ふ願望を抱いて居る。最も驚くべき事實は船頭さんで居て泳げないものが多い事と、海岸で育つて、しかも泳げない人々の多い事である。まして山間にある人々は泳げないのが當然と見られて居る。それらの人々には水泳を樂しむ方面から誘ひたいのである。水泳の必要論なぞと今更かびの生えた事は云はない。水泳の必要は十分判つて居るのに泳げないのは水に親しむ氣が起らないからである。水に親しむことは泳ぎの上達する所以であるが水を識らなければ親しむ氣持も出て來ない。泳ぐには必ずしも大海、大河を要しない。山間の川や溜水乃至は室内浴漕でも泳げる。泳ぎは亞米利加の水で習つたから日本の水では泳げないとか、晝習つたのだから夜は泳げない

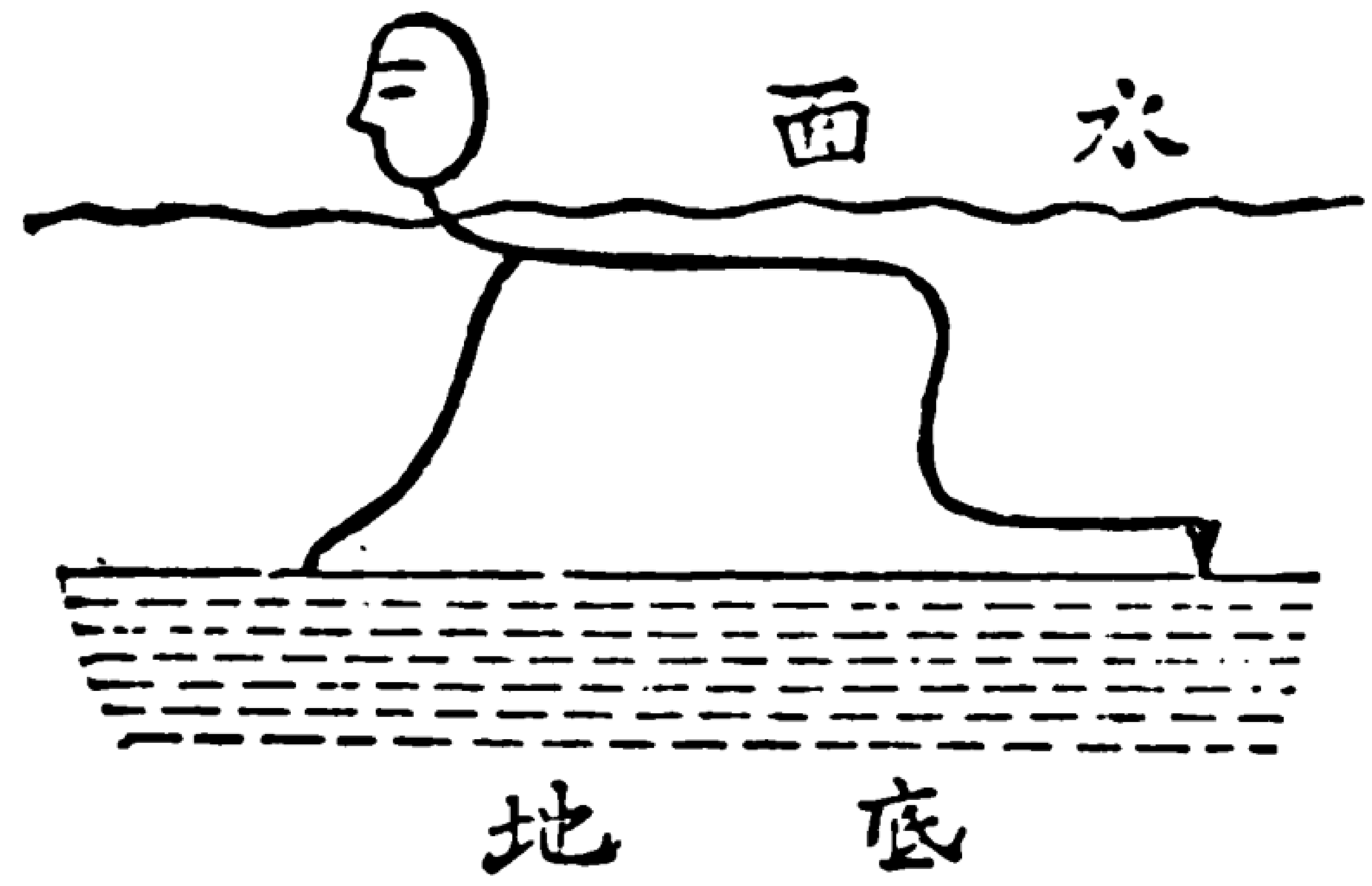
とか云つたものではない。習はうと思へば何時、何處でも習へるし一旦習つた泳ぎは忘れるものでもない。

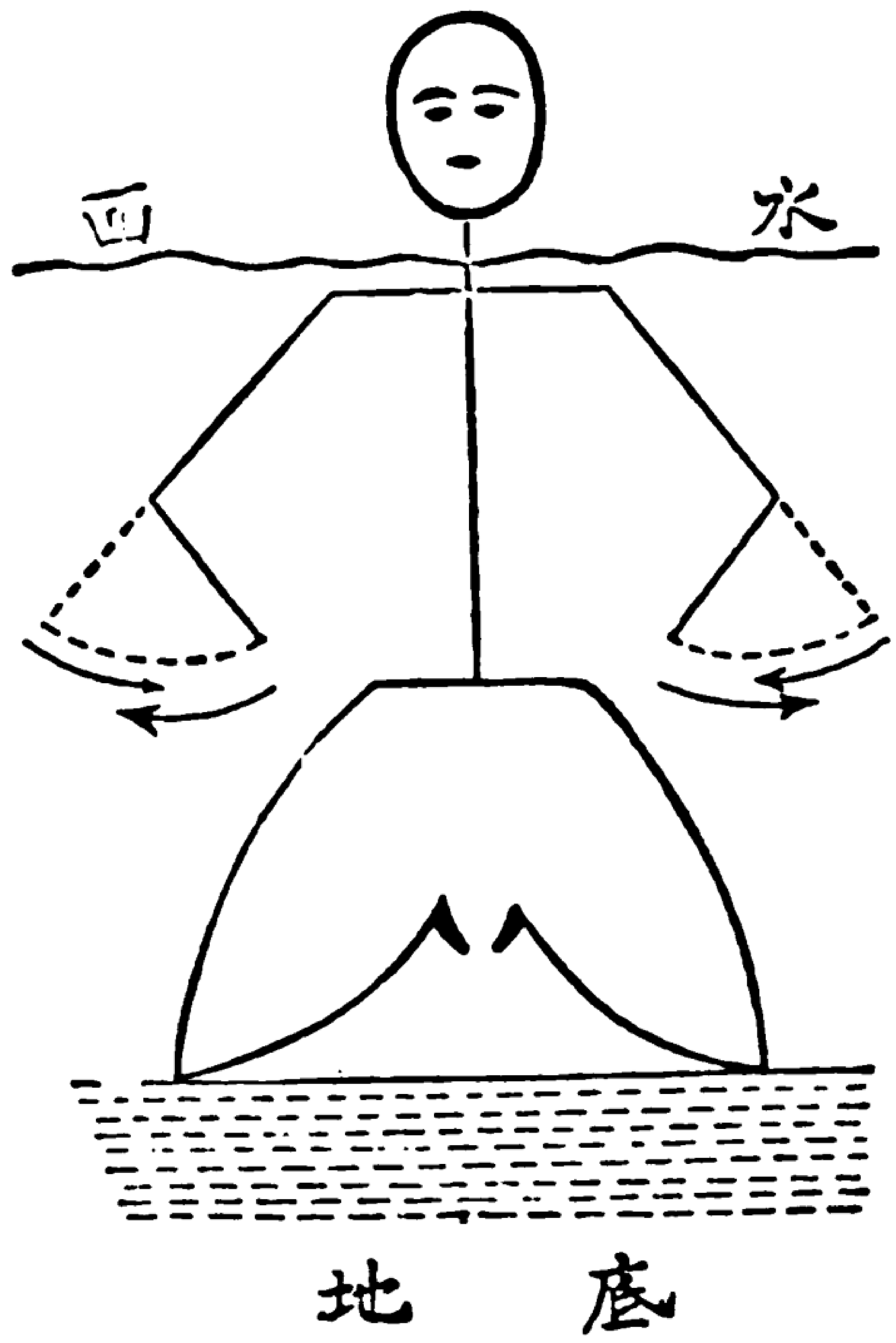
泳げても泳げなくても水に親しむと云ふことは泳ぎをする又は水に入る事の上に一番必要な條件である。隨つて子供の時から夏になれば海岸に行くとかして水との親しみをつけることが肝甚な事で、子供によると恐がつて水に入ることとすら忌むものがある。こう云ふのは一番困りものである。水との親しみをつけるのは恐怖心を去る唯一の道である。水に入つても危險や不安はないものであるとの頭への先入主を造ることが泳ぎうる又進歩の第一要件である。泳げて來れば興味が加はり技術も進歩して來る。それからは教へるにも手數はあまりかからない。それに今一つ水泳の必要論とは別に水泳が身體上に齎らす著しい效果を特筆する要がある。それは父兄や教師が第一に知らねばならぬ點である。水泳の身體上に及ぼす特質は他の運動競技と異なつて平生あまり働かない内臓の筋肉が運動する點である。他の運動方法によるよりも遙かに自然に且つ簡易に内臓の諸筋肉が整調的に動く。從つて若い人々の健康増進の上に著しい效果を生む。これが他の運動が追從し難い著しい特徴である。此の點から云つても男女共に少幼年時から興味ある運動法として水泳を採るに如くはない。これだけを前書として以下泳げる迄の階段を述べる。

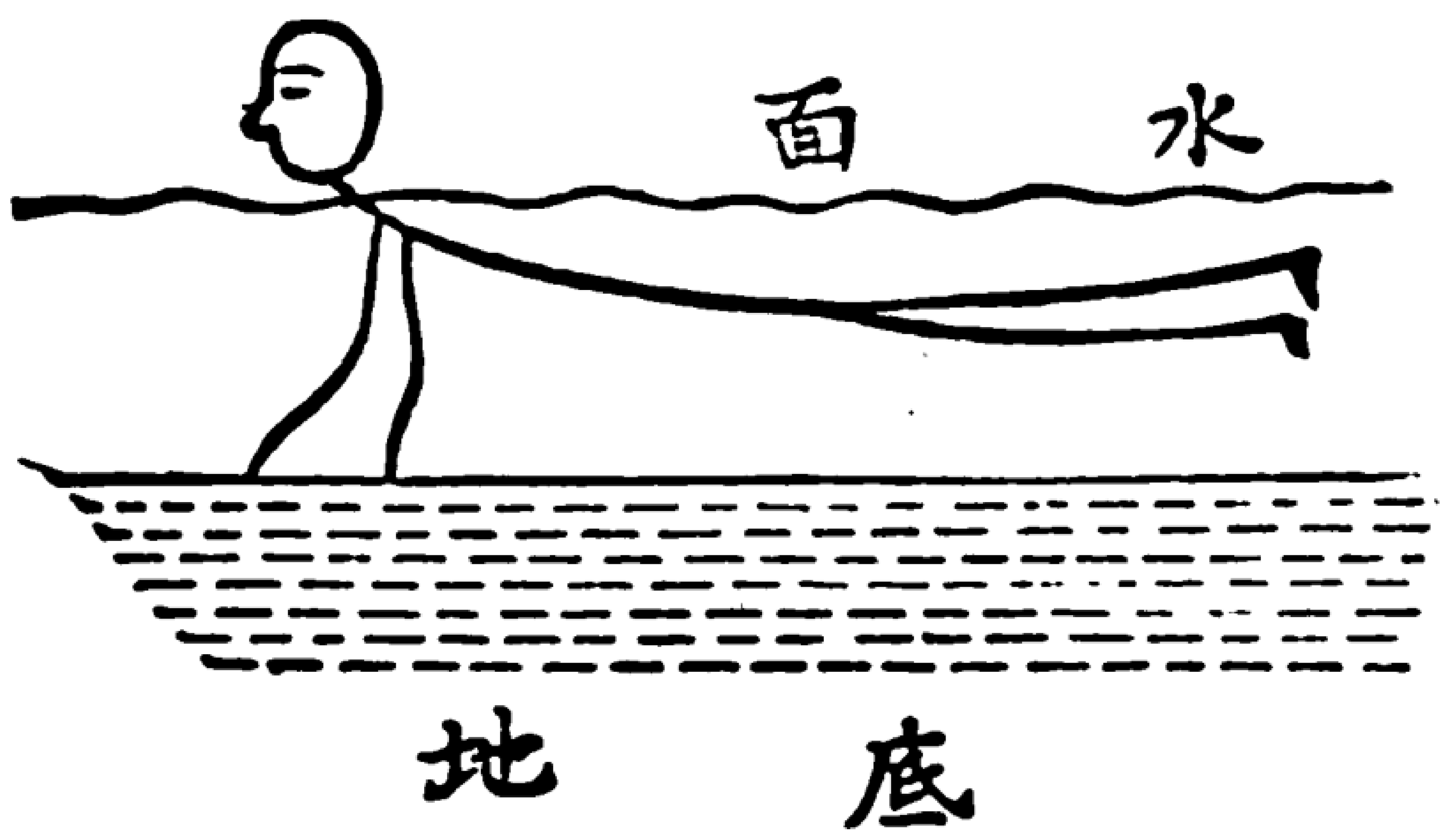
泳ぎは自習的にも出來るが教師があれば教師にいとぐちをほごして貰ふに限る。又、海、河、池、湖、等場所によつては初心者に對する教授法も違ふが大體共通した點を述べて且つ自習し得る樣に書いて見たい。泳げない若い人達は是非行つて欲しい。

第一、浮くことを覺へる方法から。

人間の身體は元來浮くものである。稀には浮かない人もあるが萬人に一人位なものだ。アルキメデスの原理によつても水中に於ける物體の重さは同容積の水を排除したる水の重さだけ輕くなる譯である。浮くといふのは手や足や體を如何に動かせばいゝか卽ち水に對する調子を覺えることである。それを覺えさせるには簡單な方法がある。先づ海なり川なりの岸の處で水の中に坐らせる。水は坐つて胸位迄の處にすれば少しも危險はない。それで肱をあまり體から離さない心持で掌を川なり海なりの底の方に向け指間をつけて水面下に備へはる壁でも塗る樣に肱から兩手を左右に働かす。働かすに從つて底に着て居る膝から體が浮き上る。これは手の働き一つでも身體が浮くものであるといふ實驗でこの手を押手と稱へて居る。(左圖參照)又川なり海なりで同じく底へ兩手をつけて體をのばし足は交互に水中にバタ／＼動かすと體全體が浮く。それで手で步ける。これも足の働きで體が浮く事を實



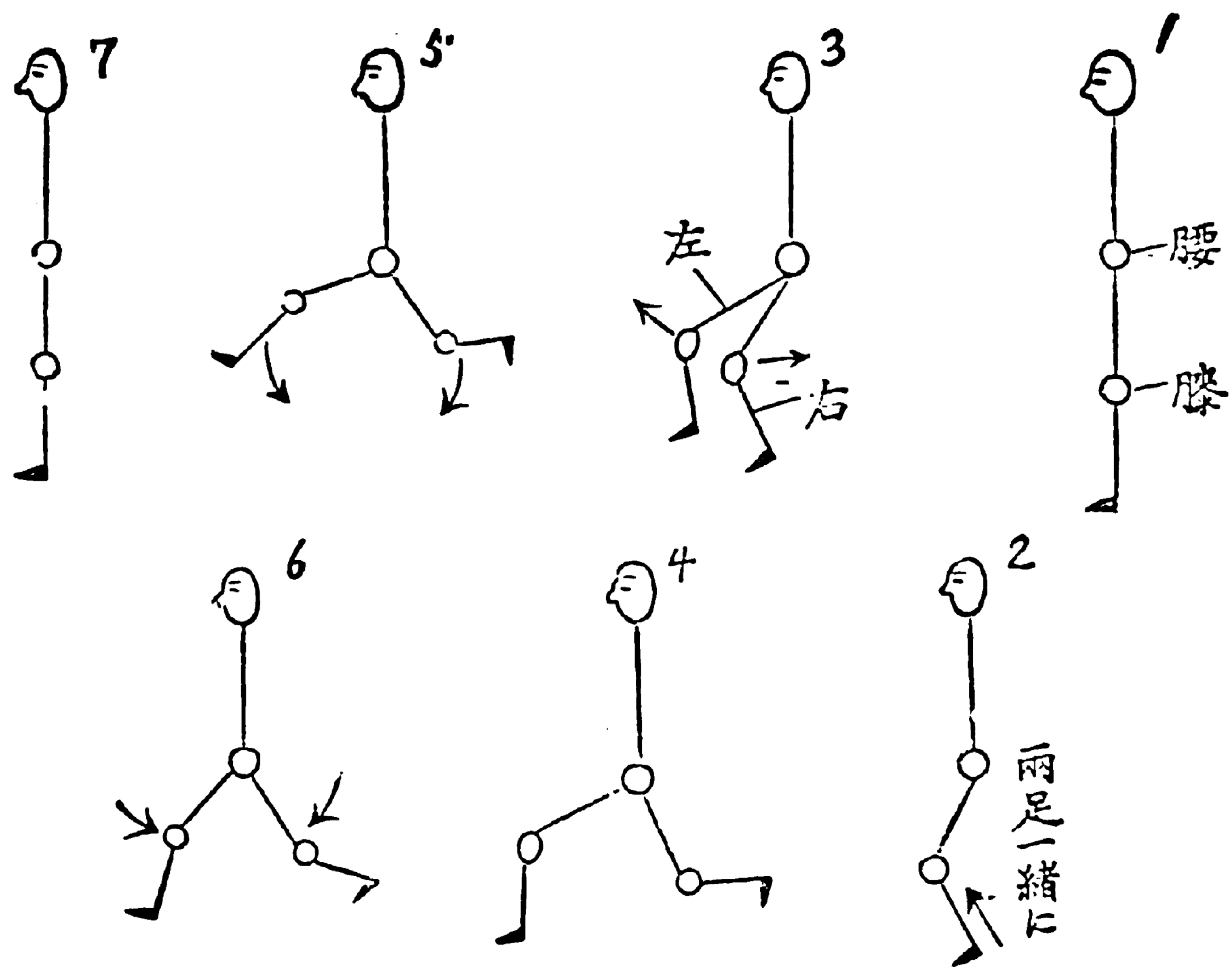




驗する方法である。之を號令的に云へば『手を着け』『體を伸ばせ』『バタ足』と云ふ様にして數へても宜しい。猶丸太を横たへ、それにつかまらせて、足をバタ〳〵やらせる方法もある。足を交互にバタ〳〵やれば浮くと同時に前進する。其の時に顔を下に向け水につけて兩手を前から交互に後ろに掻く。これで十分に浮いて前進する。之を『面冠』といふ。それが巧くなると顔は水から出して手も水の上に出さず水の中で交互に前後に掻く。足は前と同様にバタ〳〵踏む。これを『犬掻き』と呼ぶ、先づ犬掻き迄は泳げると云ふ部には入らない。浮くことを覺えたといふ迄である。これは教師がなくとも自習しうる。友達が居たら友達に自分の兩手を持つてあと退りに歩いてもらひ自分は兩足をバタ〳〵やりながら行くのもよい方法である。私の經驗では大概の子供なら身を入れて十分間もやれば浮きを覺えさせる。一寸のこつを覺える迄の事である。顔を水につけることを厭はぬ習慣をつけると進みが早い。

第二、泳ぎ易い泳ぎ方の二三。

十分に浮く様になつたらバタ足でない正規の足の働きを覺え込ませることが肝要である。その足はあほり足—扇足と稱へる。人によつて右を下に泳ぐものもあるし左下が樂な人もあるが普通右下の方が多いから右肩及右腰を下にした場合をとく。左下は其の反對である。先づ兩足を伸ばして揃へて置



く。次で右足の踝に添へる心持で左の足の趾部（足首）を上げてくる。次に左足を前に右足を後ろに開く。（第四圖）

今度は第五圖以下の如く右足を後に左足を前に兩方から圓を畫く心持で挾み合はせる。之を扇足と云ひ、横體乃至平體の泳法に用ゆる。この足を用ひて泳ぐ簡易な二つの方法を左に述べる。

◇一重伸（略體）——只今の足を扇る時に左手で水を後ろに掻きあほり右手を頭上に延ばして浮きを助ける。兩足を揃へてから兩足を擴げる間に右手を右脇に肱を體につけ左手は左肱を體につけ兩足を扇ると共に前述の要領で右手を頭上に左手を後下に掻く。

この邊はいかに上手に書いても書き盡せない。猶泳げる人に聞いて見て大體右の要領で泳いで貰ひたい。

貰ふといゝ。

◇兩輪伸——今の一重伸略體は横體であるが兩輪伸は平體である。水面に體を俯せて平らに泳ぐものである。今の扇足を膝を開いて平體に應用し、兩足を開いた時に兩手は胸の左右に肱をつける心持で揃へる。足を扇る時に揃へて前に伸ばし身體の伸びのある間に兩手で左右に圓をかいて又胸元に持つて來る。この通りに連續して泳ぐのを兩輪伸といふ。これは女性にも男性にも最も自然な泳ぎ方である。序に申して置くと兩輪伸の足に扇足を用ひずに、よく蛙が泳ぐ足（俗に蛙股

といふ）卽ち左足に同様に開いて蹴つて合せる方法を用ゆる事がある。それは觀海流では平泳といひます。

又競泳の方ではブレスト、ストローク（Brea t Strok ）といひ胸泳又は平泳（體育協會では統一的にかう云ふ譯語にして居る）と譯されて居ます。しかしこれは股間の平常用ひられない筋肉を使ふのが不自然とあるとして一般には扇足の兩輪伸が行はれて居る。殊に蛙股は女子には少し體裁が惡いと思ふ。

まだ泳法には平體、横體、立體と分れ、多くの泳法があるが、茲にはそれらの泳法について書くのが主眼でなく簡易の泳法の一二を示したに過ぎない。泳げる迄の階段を平易に書くのが主旨であるから泳法はこれだけにする。又この二つの泳法さへ出來れば素人として何處へ行つても差支へないからである。

話は又前に戻る。泳ぎを習ふに略ぼ適當の年齢の問題である。私は先づ十才からとして居る。尤も私は六才から初めたが平均して十才以上なら身體の抵抗力も相當について來るし敎へても判る年齢であるが十才以下だと團體で泳ぎを習ひに來ても取締に困る。尋常三年位からが宜しい樣に思ふ。殊に臆病な子供は大きくなつてからが宜しい。臆病な子供を水に入れて其の晩、熱が出たりひきつけたりするのがある。これ等は全く水に對する恐怖から來て居る。次に水溫であるが攝氏二十度以下は適當しない。十八度位の水でも五分以上入つて居ると唇が紫になつて來る。慣れたものならいゝが、上がつてから眼に充血を來したり下痢を起す。先づ攝氏二十度以上を宜しとする。あとは常識で考へても濁水や汚水で泳ぐより清水が宜しく、河底でも海底でも岸石や危險物のない處が宜しい。流れも急でないのが宜しい。次に特に初心者を戒しめたいのは河でも海でも陸に添ふて泳ぐ習慣をつけたい。初心者に限つて海なら沖へ沖へと泳ぎ河なら中央へ泳いで行く。それで疲勞を感じた時は陸から離れた處に居る。これは嚴に戒しめたい處である。次に入水したら必ず頭を一度水中に沈めることが肝甚で血行の整調を保つ爲めに一つは水中に於ける沈着の心を養ふ卽ちオチツキを出すことに於て必要條件である。（女は困るが顏だけでも浸すといゝ）。海水浴等では浮きを覺える手段として浮環又は浮き襷をかけるが、あれは成るべくやらぬが宜しい。泳ぐのに邪魔になるし又何時でも、補助器を賴みとする氣持になる。初め必要の場合以外には使用しない事にしたい。

調和均整の運動

沼田笠峰

水泳は男女ともに昔から行つてゐることでありますが、これを女子の競技の一つとして普及させるやうになつたのは、まだ日の淺いことであります。

第六回極東オリムピック大會に、庭球、ヴアレーボールとともに、水泳にも女子の選手が參加したゝめ、一層世間でその新らしい水泳競技に注意を向けるやうになりました。私は水泳については、殆んど經驗らしい經驗をもつて居りませんから、こゝでそれに關することを書くのは、何だか氣恥かしいのでありますが、たゞ選手たちが練習してゐるのを見て感じたことの二三を記して、皆樣の御批評を仰ぎたいと思ひます。

第一に、水中では陸上の競技よりもなほ一層多くの力量を要するだらう、といふことであります。陸上でのランニングにしても、なるべく空氣の抵抗を少なくするやうに、その姿勢、態度に氣を配らなければなりませんが、水中での泳ぎには、水を押し切つて進むのに多大の力を要します。

今度の極東オリムピック大會に、私の學校から水泳選手が五名出たのですけれど、その成績はお恥かしい狀態でありました。なぜ第一着になり得なかつたか、勿論その練習が足りなかつたのを大きな原因としなければなりますまい。けれども、他の選手たちと比べて、私の學校から出たものが、體力で負けてゐたことも見のがしてはならないことだと思ひます。泳ぎの方法、練習の如何よりも、からだ全體の『力』があの競技の成績に大きな影響を與へたのではないでせうか。――それほど私は、水泳によつて強い力が養はれると思つて居ります。

第二には四肢の協力が陸上の運動に於けるよりも、更によりよく行はれる、といふことであります。兩手で水を押しわける、兩足で水を搔く。そして身體を勢よく乘り進めて行くのですから、いかにも調和、均整の運動が試みられる譯であります。泳いでゐるものと平面の地點に立つてこれを見たのでは、四肢の動かし方や身體の運び方が、さほどよく解り

ませんけれど、上からこれを眺めますと、これほど理想的な運動はあるまいと思はれる位であります。

斯ういふ風に、水泳では全身を調和的に動かして行きますし、また常に身體を力一ぱい伸ばして居なければなりませんから、その結果として姿勢がよくなるのは、言ふまでもないことであります。また競技の場合になりますと、(陸上でも素よりさうあるべき筈ですが)全身を一點に集注して、他を顧みる餘裕がありません。卽ち、心と身體とがぴつたり一致するのは、水泳競技の特長ではないかと思はれます。

それから廣い海や河での競技ですと、ながい進路を眞直に進んで行けば好いのですが、制限されたプールで百メートル二百メートルの競泳をする場合には、プールの一端に着いて更に引き返さなければなりません。卽ち、廻轉をすることになります。その時、身體のかはし方、手足の押し切り方によつて、速力に大きな差が出て來ます。これを巧みに行ふには、練習とゝもに頭腦の活きを機敏にしなければなりません。これは陸上運動のコーナーに對するよりも、更に多くの注意を要することだらうと察せられます。

疊の上の水練といふことがありますが、疊の上ならぬ紙上の説明では、わかり難くもありますし、また興味を喚び起すことも出來なからうと思ひます。私は若い婦人たちが、親しく水泳を御覧になつた上で、自分自身これをお試みになることをお薦めします。競技となれば、すべての運動に多少の無理が伴ふかも知れませんが、先づ身體をよくするための試みとして、水に親しむ機會をつくるのが宜しい。そしてこれに慣れさへすれば、陸上の運動よりも水上のそれの方が、却て面白くなるかも知れません。

オープン競泳に出るまで

頌榮高女三年　江島歌子

私は小さい時から水泳が好きでしたが、尋常六年の夏、房州の海岸で遊びながら泳ぎの練習をいたしました。

昨年の夏、萬朝報社主催の水泳會に出て見ましたし、今年の正月にも、隅田川で行はれた寒中水泳の會に出ました。會

に出る度に、一生懸命にやりましたが、それはまだ練習だけのことでしたから、今度の極東大會ほど緊張した氣分ではありませんでした。そしてまた泳ぎ力にしましても、いくらか習つては居りましたが、今から考へますと、遊び半分のやうなお恥かしいことでございました。

三月の中旬には、もう近づく極東オリムピックの便りに新聞はいそがしいやうでした。私も運動に親しむ者として、オープンに女子が加へられると聞きましては、全く胸がおどるばかりでした。

けれども春風は未だ冷たく、練習も出來ず、空しく機會を待つて居りましたところ、二十一日から神田のYMGAで練習が出來ると聞きました時、どんなに嬉しかつたでせう。そして萬難を排してこれまでに御盡力下さつた方々に、何と申上げたら良いのかわかりませんでした。同じ學校の御友達であり先輩である湯木、御子柴、仁村姉妹の方々と、第一に加入を申し込みに參りました。それからはYMCAの柳田氏、明大の鈴木氏、一高の松澤氏外二三のコーチヤについて、一週に三日二時間ばかりづゝ、横濱のフリースタイル選手である岩崎さん、御子柴さんを好いお相手として、四月二十二日の豫選まで、練習を續けました。

豫選の日には、好敵手である岩崎さんが、お氣の毒に御家庭の事情で參加なく、私は過分にも關東女子水泳選手の一人に幸にも加へられました。私は榮ある極東大會へ參加する以上、東京女子の名譽のためと心得、いろ／＼の事情を振り切つて、五月早々大阪に參りました。そして二三日父の知人の邸へ宿も定まりました頃には、父もお友達も大阪へお出でになりました。

それから市立運動場にて、終日嚴格なるコーチの下に練習をつゞけました。たゞお氣の毒なのは湯木さんも御子柴さんも御病氣で、充分なる練習も出來ず、關西や滿洲の方々の猛練習を見ては、御自分の責任を考へられたことでせう、ひどく心配していらつしやいました。

月日は遠慮なく過ぎて、いよ／＼戰の日は參りました。同じオープン競技テニスに、關東方の田村さん、梶川さんの連日の御奮鬪は、どの位私等をむち打つたことでせう。そして競技の日は全く懸命にやりました。僭越ながら關東方女子の名譽のためと、自分では、立派に闘つたつもりです。併し選手權は滿洲關西へと、――不幸にも私等は涙をのんで破れました。そして、唯接戰であつた當時の記錄を唯一の御土産として引揚げました。歸京して一日、私達は心靜かに次の機會を心待ちにして居ります。（五月二十九日記す）

ブレストの練習

頌榮高女五年　湯本鎭江

私が水泳に趣味をもちましたのは、昨年の夏、房州に行き、約一箇月の避暑中でありました。

房州に行きました頃は、まだ水泳といふことはほとんど出來ませんでしたが、少しづゝ練習をしてゐる中に、體育上なんだか好い感じが致しました。それは食事の進むことゝ、身體が一層丈夫になる樣な氣が致しましたことでございます。その後約一箇月、練習を致して居りますうちに、かなり泳いでもくたびれない樣になりました。そのうちだん〳〵面白味が出て來て、なほ一層研究的に練習をして見たいといふ感じがいたしました。

今年は大阪に極東オリムピック大會が開かれ、女子の水泳がオープンゲームとしてある事になりましたので、皆樣もおすゝめ下さるし、自分も出場して見たいと思ひましたから、この四月から青年會館でいよ〳〵練習をする事になりました。何しろブレストといふ泳ぎは、まだその時はちつとも出來て居りませんでしたが、コーチの方の御熱心によりまして、今はどうにかかうにか追ひづいて行くやうになりました。私の練習の番は、一番はじめでございました。

三月三十日に百ヤード三分といふやうな割で、それがだん〳〵とつまつていつて、四月の二十日には一分五十六秒まで行きました。そしていよ〳〵四月二十二日には豫選がありました。その時は一分五十二秒といふので、豫選に入りました。それから三分から四分に近いのが、一分臺になつて來ました。ほんとうに私も初めは、こんなでどうして大阪に行く事が出來るだらうと思つて居りました。けれども皆樣の御熱心によりまして、私も出來るだけの練習をさせていたゞいたつもりで居りますが、なにしろ時が少ないので、思ふやうに出來ませんでした。

大會に出場して感じた事は、まだ〳〵練習も足りませんし、また他の皆樣が大變にお上手なので、私も出來るだけの努力は致しましたけれど、勝を得る事が出來なかつたのは殘念でした。是から一層熱心に研究をして見ようと思つて居ります。

オリンピック水泳競技合評

頌榮高女生徒
御子柴初子
仁村園子
仁村弘子

初子。今度のオープン大會では、他の方々のタイムを知つたり、間接に耳に聞いたりして、皆樣がよくお出來になるから、私などはとても駄目だらうと思ひました。

弘子。大阪の方とは一緒に泳ぐ機會もありましたが、京都の方は一緒に泳ぐことを避けて居られたやうですから、其方達の技倆の見當がまるでつきませんでした。

園子。他の方達のタイムを知つた時、私のが十秒位遲れてゐましたから、スタートとターニングを一生懸命にお稽古して、それで追付いて行かうと思つて居りました。

初子。他の皆樣のピッチがあまり早いので、私ももつとピッチをあげなければならないと思ひました。

弘子。何だか、あまり練習をし過ぎたやうに思ひますわ。

園子。そう、或人はもつと練習しなければいけないと云ひますし、又或人は、あまり練習をし過ぎると身體をこはすと云はれるし、どちらが好いのか解らないので、私たちは間にはさまつて、ずゐぶん困りました。

初子。長距離の人は少し位練習が過ぎても構ひませんが、短距離も長距離も滅茶〳〵に練習させられるんですもの。

園子。私なんかもう疲れ切つて了つて、梯子段もあがれないやうな日もありました。

弘子。私も、仕舞には身體が痛くて、寢返りも出來ない位でした。

初子。私は豫選の時三着でした。初め三着まで決勝戰に出られると聞かされて居りましたのに、審判長のお言葉が判然通じないで、二番までと聞きましたので、私はその決勝戰には出られませんでした。若し出られたとしたら、入賞出來る自信がないでもありませんでしたので、本當に殘念に思ひます。

園子。私は決勝戰の時、平常被りつけない帽子を被りましたので、困りました。いつもはゴムの帽子を被るのです

が、その日に限つて、布の、紐で喉に結びつける帽子を被りましたので、水に溺れましたらグット喉を絞めつけられて、苦しくて、五〇まで行つたら歸る勇氣もありませんでした。

弘子。バックは三人切りでした。初めスタートに立つた時は、何も耳に這入りませんでした。私のスタートは、何だか何時もよりまづかつたやうでした。競泳中も、自分が何番の位置にあるか少しも解りませんでした。それで、ゴールに手が觸れた時は、もう氣が遠くなつて了つて、それきり倒れてしまひました。でもヒリツピンの方やコーチの方々が手を取つて救ひあげて下さいました。氣がついて、何より先に何番でしたかと聞いた時、二番ですと知らされて、夢のやうな氣がしました。

初子。一等になられた飯村さんは、體格も立派でしたし、泳ぎ方も男の方のやうにきれいでした。飯村さんは足がよく利く方だと思はれます。二等になつた永井さんも、體格は、飯村さんに優るとも劣つて居ないと思はれます。息がよくあゝまで續くと思はれます。御二人は兎に角頭拔けた競泳選手と思ひます。

園子。ブレストの方の一着になつた京都の布施さんは、練習の時は遊んでばかり居られましたが、競泳の時には他の方を遥かに拔いて居られました。

園子。あの方は手が強いんぢやないでせうか。

初子。そうですわね、頭をぐつと深く水に入れる點など、他の人達には見られませんでした。

弘子。バックの入江さんは、ずゐぶんピッチがゆるかつたと思ひます。

初子。でも、あの方はクロールをなさるから、手も足もずゐぶん利いて居られたやうです。

園子。東京の方達は、一般に弱々しいと思ひます。

初子。そうね、關西の方は、細くてもどことなく確りしたところがあるやうに思ひます。

弘子。何しろ、私たちは練習する場所もありませんし、時日もなかつたのですから、其點から云つても、負けて居ると思ひます。

初子。私も、東京にいゝプールが一つ欲しいと思ひます。

弘子。そして、いゝコーチャーと。

園子。大阪の方では、市民も、學校も悉つて選手を歡迎してゐたやうです。私達は、それを見るにつけても、羨ましいやうな、寂しいやうな氣持がしました。

初子。本當にね、でも此の夏を期して、一生懸命にやるつもりです。でも應援があると違ひますわね。

園子。大會で、思ひ通りの成績を揚げることが出來なかつたのは殘念に思はれますが、秩父の宮殿下の御前游泳に出

世界三大偉人評傳と學說

山川均著　忽十一版

レーニンとトロツキー

定價一圓九十錢　送料十五錢　四六判上製

世界の大偉人――世界歷史に一大記錄をつくつた彼レーニン、プロレタリアートの爲めに萬丈の氣を吐いた彼レーニンは幟中漸く病の篤きを傳ふ、日露の折衝漸く熟さんとするとき、我々は本書を携へて彼レーニンの偉業を瞑想してゐる。

文學士 鹿子木員信、饒平名智太郎共著十版發賣

ガンヂと眞理の把持

定價貳圓卅錢　送料十九錢（四六判）

東洋が現代に有する最大の哲人として、又た印度革命の大立物としてレーニンと並び稱せらるゝガンヂ氏の哲學の體系たる『眞理の把持』と最近印度に横決する理想主義的革命の本體を明にす。

饒平名智太郎編　第六版發賣

ガンヂ審判の日

定價壹圓五十錢　送料十五錢（四六判）

理學博士 石原純著　三十七版

増補 アインスタインと

相對性理論

定價貳圓貳十錢　送料十七錢　四六判上製

ニュートン引力を否定して全科學界を革命せる氏の人となりと、「相對性理論」とを知ることの出來る一番評判のよい書籍は本書です、著者が石原氏であることが何より本書の權威です。

片山潜著

自傳

七版

定價壹圓八十錢　送料拾五錢

東京市芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二

だれましたのは本當に光榮に思ひます。
初子。そうでしたねえ。もうあれだけで、他のことは何もかもあきらめられます。私はあんなに緊張した、晴々した心持を今までに感じたことはありませんでした。

水泳に好適の場所

京田武男

水泳に適する場所について一言する。急湍・激流・怒濤を除けば大體差支はない。しかし底は砂地が一番宜しいが山間に入ればそんな贅澤も云はれぬ。危險物がなければ宜しいが底も成るべく平坦な處を選びたい。水面だけでは見えないが底に高低起伏の激しい處は不可。何となれば底地の具合で流速の交錯を來して居たり何とはなしに水中異常が起つて居るから熟練者でないと危險を伴ふことがある。若しも海水浴地であるならば防風林があると猶宜しい。空つ風や妙な波濤を牽制する計りでなく滞在するにも都合が宜しい。それから地形と潮流の關係で海蟲のある場所なぞは避けなくてはならない。例へば房州の那古や勝山の樣にゴミや海蟲が寄り易い樣な處もあるから。

尤もそれも時期があるから一概にも云へない。私の經驗では海岸とあれば福井縣三國の海岸、敦賀の海岸、相州江尻、沼津から、逗子葉山、横濱方面では子安、磯子、本牧から、金澤一帶が宜しい。北の方では松島灣がよく福島縣の海岸は荒らすぎる。千葉縣も外房州は荒すぎる。即銚子から四十九里一の宮へかけては遠淺だけれども大きな波濤が立ち過ぎる。北條から館山、鏡ケ浦から内海に入れば宜しいが木更津に近づくと水が汚れて居る。伊豆方面も宜しいが帝大の水泳部のある保田が宜い。只時々刺のある虫が刺すのが痛い。三浦三崎も三崎の入江なら宜いがくらげが多い。入江を出て松輪の鼻は危險だ。横須賀から浦賀の邊もよいが昔はふかが出たといつて恐れる人もある。しかしあの邊のふかは小さくて人は食はない。但し黒潮の一部分が東京灣に流れ込んで來る時は危險だ。東海道線では濱名湖が宜しいが辨天島附近なら好適である。それが今入の潮口に近くなると危險である。西に行つては和歌山が一番おだやかであるし淡路島から瀬戸

の海は宜しい。只淡路海峽はふかが居て危險區域とされて居る。南岸の高松の海もよく水任流の生れた處である。九州の方は知らぬから省く。湖では琵琶湖がよく信州の諏訪湖も宜い。磐梯山の麓猪苗代湖もいゝが水が冷えすぎて居る。攝氏十八度見當である。冷水といへば福井縣の九頭龍川も水は鮎が蹴る程清透して居るが瀧つ瀬の多く水も冷たい。福井と大野との中間の「小舟渡」は水泳場に適して居る。それは上流であるが下つて三國港に入るあたりは砂地で半淡半鹹の好適地である。其他天龍でも阿武隈でも皆泳げる。急流といふだけなら差支へない。岸地に近い處なら泳ぎ得るからである。日本は天恵的に海岸線や河沼に富んで居る。泳がうと思へば何處でも泳げる。室内浴潜等については玆にかゝぬが要するに泳がうとする氣持さへつけば何處でも泳げる筈である。私は一日も早く日本國民が全體として水泳に對するエンライトメントを持つことを希望して止まない。

女子の體質と水泳上の注意

醫學士　岡田道一

（一）水泳は最も理想的の體育法である。

ヨハーンペーテルフランク（1745—1821）は體育を健康増進上に向つて極力主張した世界最初の醫師であるが、彼は女子の體質に適する最も良き體育法としてボール遊び、舞踏と共に水泳を第一に擧げたのである。又ライテンストルフエルは水泳はすべての運動中で最も秀でたる體育方法であると稱しライトは水泳はあらゆる體操の中の最も理想の權化たるものであると唱へた。

水泳は身體全部の運動を促し、多くの筋肉はこれによつて強壯となるものである。骨格筋を圓滿に發達させる運動として游泳に優るものは他にない、即ち上體は良く伸展し全身は理想的の姿勢を取つて各筋は水の抵抗を受けてそれに反抗して行くからである。

又水泳の際は呼吸の要求は高まり吸筋の大努力を來すから呼吸器が丈夫になる、且水面上にはその空氣が清淨で塵埃、細菌、有毒瓦斯を含む量は至つて少ないから水面の空氣を呼

吸する場合は非常に衛生上の良効果がある。

『水泳は塵埃なき道の車行の如し』とでも云ふを得べきでせうか實にいかなる道でも水面の如き清淨の空氣には叶はないのである。

又水泳は血行をよくする、これは水泳から上つた後に全身が暖かくなるのでも分る。されば水泳を適當に發育期に在る者に課すれば心臟の發育を促進する事が出來る。

それから水泳は身體を清潔にする。これも非常に衛生上利益のあるものである。又冷水の刺戟は吾人の皮膚にある程度迄の發育を促し冬季に風邪を引かない豫防となり得る、又水泳後日光にどうしても皮膚を曝す事になるがそのため及水面から反射する光線が化學線に富む作用等から皮膚は著しく黑くはなるが抵抗力は增し少し位の皮膚病は忽ち治る、それは靈現とでも云はうかその力はいやちこであるのは一夏を游水浴をした女子の皮膚は色こそ黑くなるがその表面が滑かになるといふのは皆人々の知る所である。

それでかくの如く卓越せる遊戲である所の水泳を益々發達させたいものであるがかの獨逸の文部大臣ゴスレル博士をしては『水泳は理想的の體育法なり』と絕叫させた程我國の識者の間には左迄それを鼓吹する人がないのは恨である、その爲めか外國に比して盛んであるとは云へない。

日本は四周海を以て圍まれて居る國である。苟くも海國女子ともあるものは少しも泳ぎを知らぬと云ふ事があつてはならぬ、それと共に體育上でも遊泳を盛んにしたいと思ふものである。然し盲目蛇に怖ずで何が何でも運動すればよいと計りで矢鱈に泳いだところが體育の實際上効果があるものではない、それにはまづ自分の體質からして考へねばならぬ。

（二）女子の體質と水泳の注意

これはよくある事であるが一寸水に入つたと思ふと直ぐ死んだといふ頓死事件が起るのを見るがこれは皆異常體質の人である、中でも胸腺淋巴體質の人が多い。この異狀體質を醫學上どう分けるかといへばボルシャルト氏に從へば

（A）興奮性體質

（B）無力性體質

の二つに分ける事が出來る。

この中興奮性體質は或は滲出質といふて小兒の時代に方々にぐりぐりや濕疹の出來たりする人、牛乳をひどく嫌ふ人、卵、牡蠣、蟹、等に對して過敏で發熱、嘔吐や發疹を起すやうな人、天候の變化殊に暴風雨、嵐、降雨降雪等を數時間も前から豫感して頭痛、嘔氣、倦怠を起す人、その他發育不完全で年頃になるのに×××等の小さく不完全なもの等がこれに屬する。又無力性體質といふのはひどく內臟下垂を起したり神經衰弱を起したりするもので、彼の肺病の者の持つてる扁平胸とて平たい狹い胸や撫で肩のものもこれに屬する。

さて往々女子の中にはかゝる體質を有するものが多いがそれ等は決して人の見て居らぬ場所で水に飛込んだりしてはいけぬ。それが體質に關して特に注意すべき事でその他は一般の注意を守ればよい、一般に女子の水泳上の注意としては

(1) 水の溫度に注意する事

婦人は攝氏二十度以下の水に入らぬ樣にしなればいけぬ。若し二十度以下の水溫の水に入る時はその時間を數秒に止めなくてはいけぬ。

子供や女が遊泳をするに當つてぶる／＼震へて貧血の顏をして居るのをよく見掛けるがこれは彼等の身體から水によつて體溫が奪はれ過ぎた結果に外ならぬのである。

(2) 水泳の時間

遊泳の時間は日中の酷暑の時を避けるがよい。從つて一日の中で水泳に適する時間は餘りに太陽光線の直射が強くない朝にあるが、午前中は水溫が低いから一番よいのは十時から十一時迄である。午後は三時過ぎがよい。

一回の水泳時間はその初期では約五分間程水中にあつてそして出で、十分間乃至二十分間休んで又五分間位入るのがよい、そして馴れるに從つて一回一二分づゝ延すのはよいが少女の間は一回の水泳時間を三十分以上にしてはいけぬ。

(3) 水泳をする日の食事

毎日水泳をする人はどんな食事を採るべきかといふにどうしても水泳をして居る間は新陳代謝が盛んで食事が進むから食べ過ぎをし易いものである。それ故なるべく一定の時に一定のものを食べるやうにして無暗に間食をしないやうにしなければならぬ。よく水泳中は便秘に陷り易いからその時は野菜類小豆類を多く食さしむるのがよい。

食後直ちに又は空腹時に水に入るといふことはよくない。水泳後は咽が烈しいから豫め麥湯等などを用意して置き不潔な井戸水などを飲まぬやうにしなければならぬ。

(4) 水遊を禁ずべき場合

月經のある時は斷然水遊を止めなくてはならぬ、その前後一二日間も止めた方がよい、これは月經時にはいかなる運動遊戲もしてはいけないと云ふ事から推しても分り切つた話であるが、殊に水泳は下腹を冷し腹筋及下肢の大なる努力を要するからいけない。

それから病氣の場合殊に有熱時、下痢時は入水を禁じなくてはならぬ、腎臟炎や四肢の畸形などある時も然りである。

然し起立性蛋白尿といふて百名中二十名位のものは水泳をする場合に蛋白が出るがそれは別に腎臟炎とはちがひ一時性のもので少しも心配ないといふのは慶應大學小兒科の內村博士が調べて發表した所である。

一番恐ろしいのは癲癇の習慣あるもの、脚氣にて下脚の痲痺あるものでこれは水泳を禁じなくてはならぬ、又急性、慢性

の中耳炎鼓膜穿孔などいふ耳の病氣を持つものも水中に入る事は危險である。その他馳け足、競技等の激劇運動に於て禁ぜられる心臓の悪いもの、肺の悪いもの等は同じく水泳に於ても危險であるとして同樣に禁じられなくてはならぬ。

(5)水泳中及びその前後の注意

水に入る前に準備運動として徒手體操をやるのは身體を柔軟ならしめるのによい、又水游後は必ず乾燥した手拭で水分を十分に拭き取り引つゞいて皮膚を十分に摩擦するのがよい。耳にはゴムの栓、パラフイン、脱脂しない綿にワセリンをつけてつめて置くのもよい、そして常に海水帽を被つて髪の亂れぬやうに且日光の直射を受けぬやうに注意するのが肝要である。水泳後耳に水の入つた場合は直ちに脱脂綿かカンジンよりで水を吸ひ取るやうにしなくてはならぬ。

女子の水游中の服裝は游泳着を着しサル股を用ゐるのが一番によい、それは風俗上の問題であるが水泳の後は濡れた水着を取り換へてしばらく裸體になつて充分に日光浴をするのが一番よいのである、海岸の海女等のいかに健康色に輝いてるかは彼等の皮膚が常に腰卷一つの裸體となつて天日に曝されて居るからではあるまいか。

水游中又は水泳後寒けがしたり急に唇の色や指の先が紫になつたりする、又皮膚に粟粒のやうなものが出來て所謂鳥肌になるやうな場合は直に水泳を止めて陸に上り直ぐ衣服を着なくてはならぬ。それ等は心臓が悪いか又何か急に病氣の起つた證據であるからいけない。水游後皮膚が潮紅するのは血行のよくなつたのを現すのでこれは一番よい現象であると云へる。又水泳中よく脚の筋肉が痙攣を起す事がある それはコムラ返りといふて恐ろしいものであるがその場合決してあはてないでその患肢を屈曲して揉み延ばして恢復を計らなくてはいけぬ、よく周章るが多くはかゝる場合に溺死するのである、又はじめ水に入るときはすぐ飛び込んで泳いではならぬ一度全身を水につけて顔を洗ひ、小指にて外耳孔を濕すのがよい。

又海岸などに滯在して海水浴をする場合海岸の砂又は水面から強く日光が反射されるからそれを眼に受けて遊泳夜盲とて日暮になると鳥目のやうに見えにくくなる事がある、それを防ぐためには麥藁のつばの廣い帽子を往復に必ず被ぶるかパラソルをさすかするがよい。

髪の毛はよく結んで帽子の中にかくすやうにしてなるべく海水に當らぬ方がよい、そして砂がよく入るものであるから隔日位には髪洗ひを怠らずにした方がよろしい。

(6) 水泳をした日の睡眠時間

運動遊戯をした後は常に充分の睡眠を取らなくてはなりません、それ故海水浴等に滯在中は何時間位睡眠を取つたならばよいかといふに成人で八時間少女の間は十時間は是非必要

であるからそれ以上は必要であるそしてその睡眠時間もなるべく夜早く寢て朝早く起るやうに心懸けなければいけぬ。

(三) 理想的水泳場の設立を望む。

女子の體質として異常體質を除いてあらゆる體質に水泳の偉効ある事は前項に述べたが一般女子は外形上の體格を大きくする事に於て水泳が大なる役目をする事をも忘れてはならぬ。實驗上『水泳は一種の伸長法である』又『水泳は胸圍の增進法である』といふ事が出來る、そして水泳後に適當に榮養を採り攝生を重んずるならば體重も增す事は疑もない、然しかゝる好箇の體育法も監督者なしに無闇に水中に入る時は忽ち溺死と云ふ危險があるから一般には行はれない、又いかに厳重に監督するともいろ〳〵上流から不潔物や金氣や塵埃の流れて來る水の濁つた川の川口あたりでボチャ〳〵やつて汚水を全身に浴びて平氣で居るといふやうなのは衛生上から觀て寒心に堪へないのでそんなのはむしろ水中に入らぬ方がましである。

それで私は多くの女子に水淸らかに空氣の澄んで居る田舍の小川の淸冽なる流れに身をしたせよとはお勸めしたいが平常どうしても都會を離れられない者に向つては市民のために市設又は公設の水泳場の大なるものが設立されん事を望むのである。

然しいかに完全に工事が出來ても肝腎の水が水道の水で一向に流れないとすれば忽ち汚染したり青みどろが出來たりして水泳に堪へないやうになるのはよく見懸るところである。

それ故むしろ郊外の空氣のよい所に自然の河川の水を引いて場所の設備を望ましい。

外國ではそれ等の設備が完全に出來てそれ等へ通ふものゝ爲めに國立鐵道は無賃で運ぶといふ、我邦に於ても國家百年の計を樹てゝ市民體育を計るならば郊外に續々水泳場が出來て鐵道もその往復の運搬に便宜を計る事であらうと思ふ(終)

極東オリムピックの女性競技を觀る

本社特派員　濱本浩

女性選手の參加

一九一二年瑞典の首府ストツクホルムに開かれた世界オリムピツク大會に最初の日本選手三島、金栗の兩氏が參加した其の年、比律賓のY・M・C・A體育部主事ブラウン氏は、首都マニラのカーニバル祭競技會を擴張して極東三國の友誼と平和の機關たらしめたいとの目的で日支兩國に加盟を勸誘したので、兩國とも異議なくこれを承諾した。斯くて第一回極東選手權競技大會は一九一三年五月比島マニラに開かれ、續て第二回は一九一五年五月支那上海に、第三回は一九一七年五月東京芝浦に、第四回は一九一九年五月比島マニラに、第五回は一九二一年支那上海に開かれて、多數の三國選手が之に參加したが、女性選手の出場は今回の第六回極東選手權競技大會をもつて最初とするのである。是は決して小さな出來事ではなかつた。「血と虐政」に育まれた比島の、「北窓と纏足」に育てられた民國の、そして「高島田と丸帶」の日本の姉妹とが、碧く輝く初夏の空の下に、戰ひの後の握手を交へた事は歴史的にも亦、そこばくの記念さるべき出來事ではあるまいか。

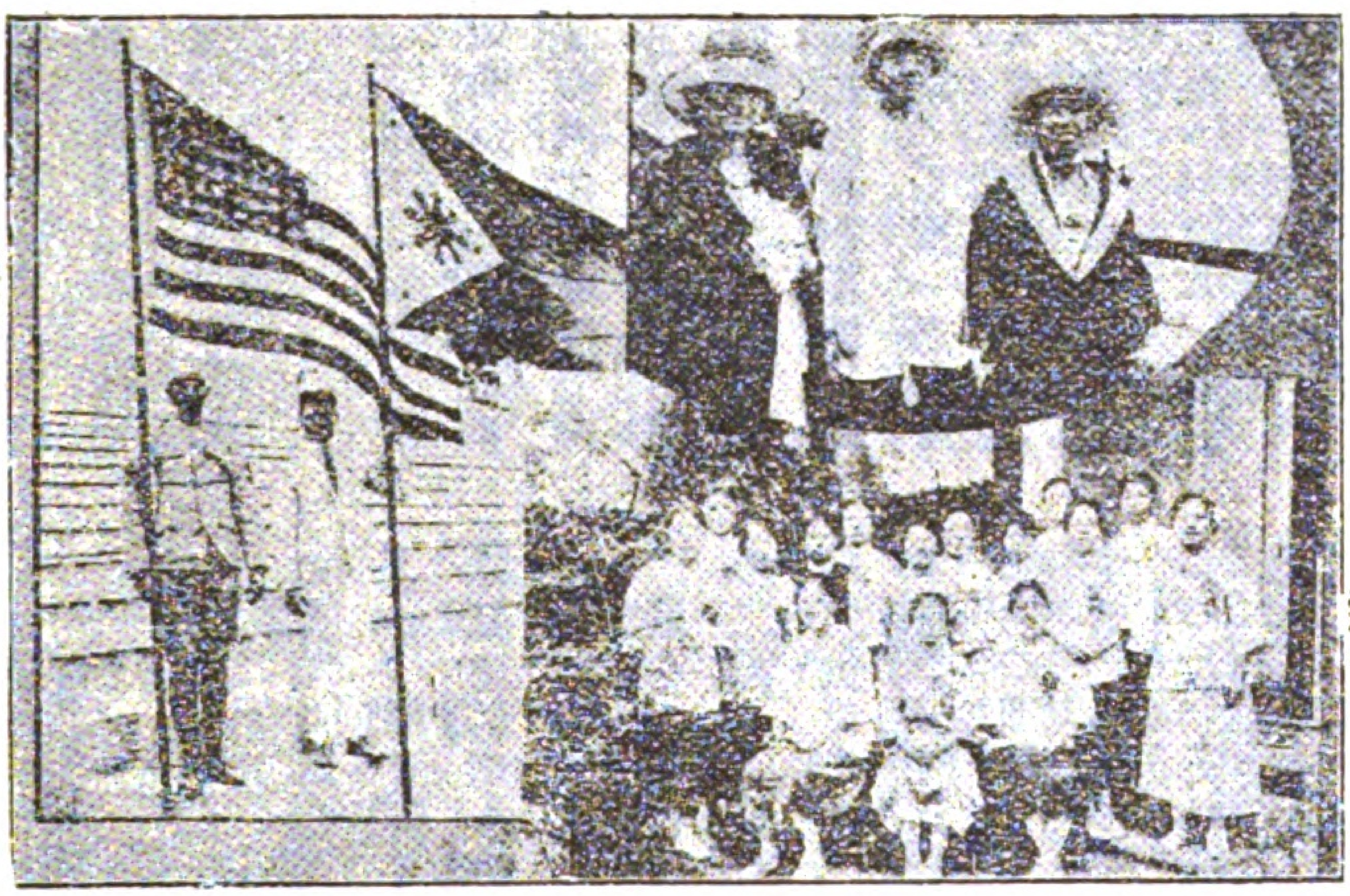
最初の女性オリムピツクには、庭球に比島の三選手、民國の二選手、日本の四選手、排球に民國の一個チーム、日本の二個チーム、水泳に日本の十一選手が參加したのみで、總て選手權競技からは除外され、オープン、ゲームとして扱はれたのであつたが、主催者及び見物の群衆から餘興視されはすまいかとの記者の杞憂は全く裏切られてしまつたのは嬉しかつた。それと云ふのも出場選手の態度が如何にも堂々と、そして緊張して居た爲め女性に對する男性の侮辱的な彌次性をして乘ぜしむるの間隙がなかつた爲めでもあつたらうが、一つには運動競技に於ける日本の女性が歴史的ハンデキヤツプを附してすれば決して其の力量が男性には劣らない事が認

められた爲めであるまいか。

民國選手の印象

中華民國女子選手二十名は五月十五日午前郵船熊野丸で神戸に入港した。一行は監督ミス・バアカー、女醫ミス・カフイン、マネヂヤー高梓、王仙露兩女史を初め庭球、バレイ・ボールの兩選手であつた、彼女等は何れも從來のレコードを中心に選拔されたものではなく、國際的友誼を厚くしやうといふ目的で北京天津三名、廣東二名、中央支那から十一名、皆で十六名の選ばれたる代表者女學生である。

代表者の高さんと王さんは二人とも二十二三歳の宗教學校出身らしい美しい婦人だつた、二人とも洋式の短いスカートに支那風な羅紗の上衣を着けて居た。兩脚を伸した儘で西洋人のやうに歩いた。新聞記者に會つて齒切れのいゝ流暢な英語で、よどみなく意見を話す、縁なしの眼鏡をかけた高さんの方が、より美しくそして先驅者らしかつた。



上圖比律賓女子庭球選手（右よりリサントス・フラコン・アレゴア）
下圖支那婦人選手（左比島旗はカタロン君星條旗はバコイ君）

選手達は支那服を着けたものもあつたが、多くはスカートを洋式にした改良服だつた、眞黑く陽に灼けた顏とがつしりした體格の彼女等は何れも二十歳前後で日本の陸上選手と齢頃は似て居たが、流暢な英語で快活に話したり、仕合の後に環を作つてエールを三唱したりした。

三人の比島選手

比律賓からは水泳選手も來る筈だつたが、五月十五日の午前比律賓選手をのせたプレシデント・グランドが神戸に入港したとき、皮膚の黒い六十名の男子選手の中に、嬉々として交つた三名の女子庭球選手を見たばかりであつた。皮膚の黒い三名の女性選手は純白の洋裝に黑い外套をはをつて居た。

コンセプシオン・サントス孃は三人の中での年長者でマニラ病院の看護婦だが、比律賓でいちばん古い女子選手で女子選手權の保持者であつた、年齢は想像がつかないが、容貌や服裝から見ても三十歳は越して居やうか、スタンドの彌次が「お婆さん」と呼び掛けたくらい彼女は老けて見えた。十六歳の女學生ペトラ・コレアグは皮膚こそ暗黒色であれ、可憐な野邊の花にも例ふべき少女であつた。ロリスアオ・フランコは三人中でいちばん丈が高かつた、單仕合の選手だが何處か日本人らしい顏をして居た。

日本の選手たち

庭球のシングルに大阪府立市岡高等女學校出身の金田咲子戸田定代の兩孃がある。金田さんは大阪の運送屋の娘さんで兄さんの格君もフイールドの選手として出場して居る。熱心なクリスチヤンで文學と音樂の愛好者である彼女は教師や級友達にも愛せられた。ラケツトで顏を隱して羞かむ姿も可憐だつた。戸田さんは住友銀行の行員をして居るだけ何處か職業婦人らしい落付きがあつた。ダブルの田村富美子、梶川久子の兩孃は何れもお茶の水高女の專攻科で、關西選手が如何にも町娘らしいのに比し山ノ手の令孃と云つた上品さがあつた。二人とも水陸を通じての年長者で耳隱しに結つた髮に網をかけて、運動家らしくすらりとした姿で悠々と運動場に現はれては巧なコントロールで美しい練習振を見せてくれた。補缺にはシングルの田村富美子、ダブルには梅田高等女學校の本永美穗子、吉川富子の兩孃があつた。

ヴオレーボールは關西チームの姫路高等女學校が優勢だつた。紺サーヂの制服に赤いネクタイを結んで二十日の午前苗村教諭監督で大阪に入つた。今村とよ　藤本綾　南木つや、横田かね、堀尾文子、河原ちえ、濱田和江、日名川芳子、近藤高朝子、高見千鶴子、黒田ふさえ、青山きみ、(補缺)大森はるえ、破魔イソ、高島貞子、岡本たか、の諸孃が其のメンバーであつた。

關西チームに對抗すべき關東チームは東京府立女子師範と同第二高等女學校の合併竹早チームで、これも二十日の朝佐々木、上山、中村の三教諭及びコーチヤーの三橋義雄氏に率ゐられて來阪した、大橋靜子、高山徳子、佐瀬順子、堀越敏子、卷花はる子、淺川はな子、渡邊慶子、齋藤しゆん子、成田なほ子、林富佐子、只野永子、森田すま子、(補缺)木内花江、後藤光子の諸孃であつた。

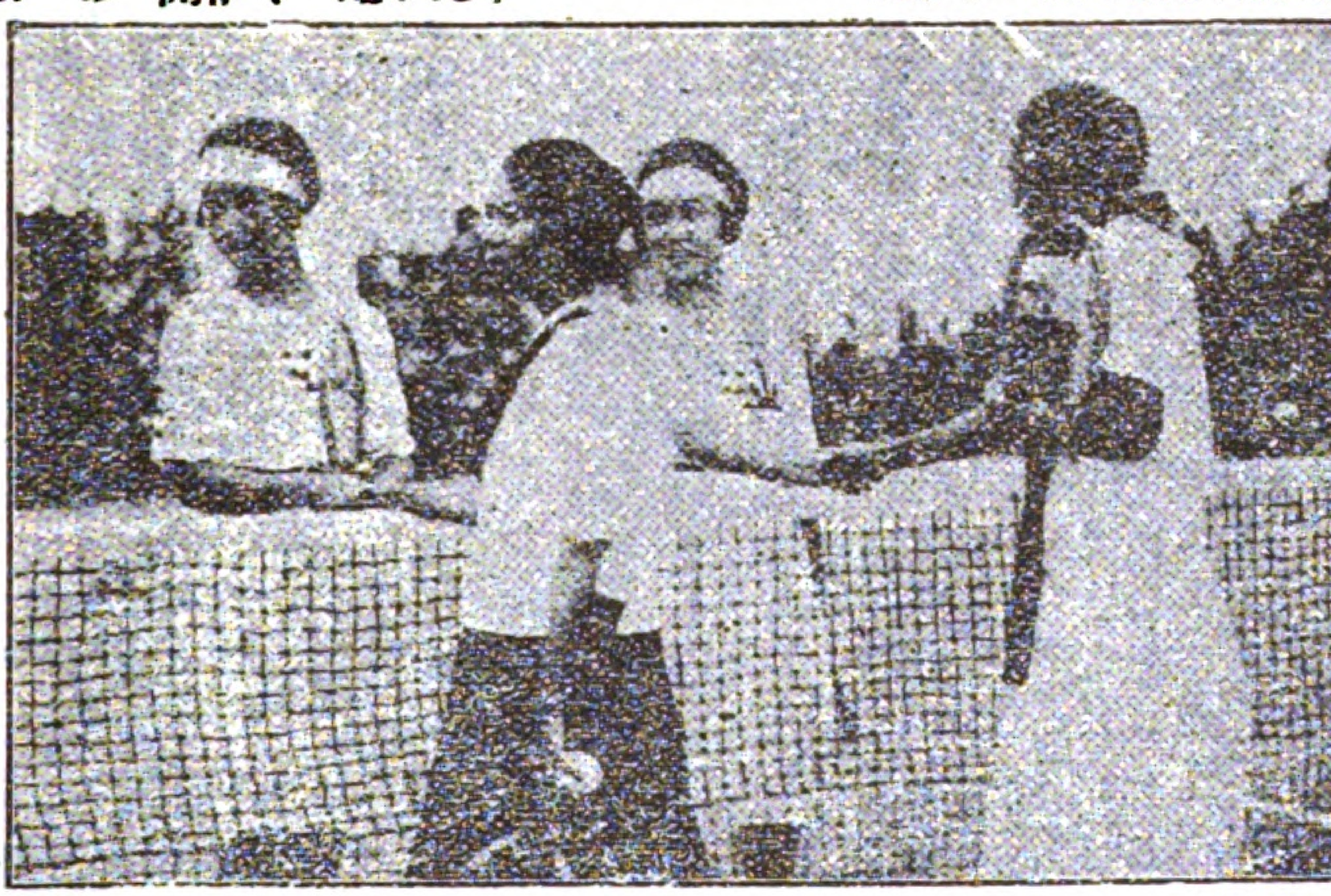
水泳は日本のみであつた。年齢も體格も二三の選手を除い

ては陸上選手に比すべくもなく、滿州選出の飯村敏子（大連市立高女）杉江正子（同廳立高女）の兩孃すら漸つと十五歳になつたばかりの年少者であつた。關東選手は有名な御子柴初子、湯本鎭江兩孃、仁村園子、同弘子の姉妹、と江島歌子の五名、關西は永井花子、櫻井靜枝、島村初枝、入江廣子、岩崎家壽子淺原芳子、小泉安子、八木靜子、近藤花子、本田咲子、布施苑子、長田俊江、河野富久子の十三選手であつた。

雨中の入場式

グラウンドで市岡高等女學校の生徒達が民、比兩國の女子選手に花環を贈つたり、藤田男爵や三井男爵の心づくしで三國女子選手のチーパーテーが開かれたり、合宿所を訪問しあつたりして男子選手が血眼になつての練習をよそに、女性は女性だけにいつしか敵も味方も親しいお友達になつた。五月廿一日、前夜から雨は土砂降りにふり頻りつゝ愈々極東選手權大會の第一日は開かれたのであつた。開場前後の雜踏や總裁宮殿下の台臨や其の他の光景は暫くをいて、今は女性選手のみに就て見やう。

午前十一時を過る五分、脱帽！敬禮！と動搖めく場内を壓するが如く君が代の奏樂が莊嚴に響き渡る、秩父宮が總裁席に就かれたのである。やがて群衆の動搖みが沛然たる風雨の響きに變じ君が代が、勇ましきファイゼスト・オフ・ゼー・フエイアの行進曲にうつる時、大會役員の八列縱隊に續いて五色旗を先頭に外套に包まれた支那軍が堂々とトラックを前進する。別けても目立つたのは國旗のやうに、色とりどりの美しい上表を着た婦人選手が、色彩美しい支那傘をさし小さな國旗を打ち振りながら巧みに歩調を揃へて、そして檢閲臺を過る時「頭ア右」をして殿下に敬禮を交した事であつた。支那髷に束ねて帽子は冠つて居なかつた。日向葵を想は



比軍向つて右ベトラ・カリアガ（十六歳）左コンセプシヨン・サントス（マニラ病院の看護婦）
日軍向つて右梶川久子左田村富美子（チーム後の握手）

す黄色のリボンに飾れた金色の參加章を胸に輝かして居た。

續て米國の星章旗と比律賓の國旗を押し立てゝ、空色の參加章を胸に飾つた比軍選手が毛布に身を包んで行進する。最後に續く日章旗の下に燃える緋の參加章も誇がに雨に濡れた日本軍が進む。水泳、庭球、バレーの女子選手が華やかな夏帽子から滴を落しながら先頭に立つ。水泳の仁村姉妹が豐かな斷髮で揃ひの洋服を着て小さな洋傘の相合傘で步む傍を關東選手の中で最も有名な御子柴初子が雨を浴びて悠然と濶步するのが人目を惹いた。

第一戰の印象

女子選手の國際ゲームは第一日の庭球戰が雨のため日延になつて二日目の二十二日午後、コートの乾くを待つて行はれた。民國の千戰瓣が棄權したのでシングルは金田咲子の不戰勝利になり日本對比軍の複仕合に其の第一戰が開始せられた。

一時三十分、滿員のスタンドに搖ぐばかりの拍手に迎へられて田村、梶川の兩選手が監督三井榮子夫人と共に入場、灰色の外套を脫いで純白のユニホームでコートに立ち輕快な練習を初める。輝くばかりの白絹の運動服を裾短かにつけて、伸のいゝ兩脚を白の靴下に包み白靴と云ふ素晴らしくハイカラな姿である。耳隱しに結つた髮を佛蘭西更紗の片で縛り稍々日燒けした顏に薄化粧を施して居た、何と云つても今回の出場選手中での花形であつた。引き續いてカレアガ、サントスの兩孃が肥滿した監督の白人婦人、單仕合のフランコ孃と入場、日本選手と抱き合はんばかり親しげに握手して練習を始めたが紺色の長いスカートが日本の工女を聯想さした。

其時、一方のコートでは比軍のアラゴン兄弟と民國の吳仕光、袁慶祥兩氏とで火の出るやうに猛烈な接戰が行はれて居た。午后四時、總裁宮が御臨場になつてスタンド下の委員席で籐椅子に腰を下されると、審判三保氏の挨拶で女子庭球の第一戰が開始されたのである。最初の間は田村組が固くなつて腕定まらず、練習の正確には似もつかず屢々ミスを繰り返した。殊にサントスのチョップストロークは却々侮り難く盛んに日本側を脅かした、だが實力に於て相當の相違があつた、軈て日本側が自重して粘り出すと、梶川のヴオーレー、田村のプレーシングが盛んに功を奏した。梶川のサーヴは鋭かつた。第二セットに入つて日本側のストロークはいよいよ確實となりベースライン深く突込むので比軍は全く怯むでしまつた。それに敵の虛を知つた田村組は盛んにバックハンドを强

襲し比軍が唯一の武器であつたチョップを封じてしまつた。

スタンドの日軍應援が「バック、バック」と叫んだのも全く其れがためであつた。色の褪せたヂャケツやカキー色のズボンをつけた比軍の應援團が躍起になつてコートの周圍を驅け廻つた甲斐もなく試合時間僅に四十分で日本軍の勝利となつた。勝負が終ると兩軍選手はネツト際に驅け寄つて固い握手を交へた。それから間もなく選手テントの前で日支比三國の各種女子選手が肩を抱き腕を組み、戰に破れたカレアガ、サントス兩選手を慰めて居るのを見た、斯うした美しいシーンは大會中女子選手の間にのみ屢々繰り返されたのである。此朝　隣接の蹴球グラウンドでは、破れた比軍と、勝つた民國選手との大爭闘が行はれて比軍中には五名の重輕傷者を出したのであつた。男性にのみ許されたと信じて居たスポートマンシップは今や却て女性の間に純化されて居るのを見る。



排球ゲーム後の日支兩主將の握手

人形のプレゼント

グランド・スタンド下の女子選手控室は幕で境界して三國に分つてあつたのを、いつの間に誰が徐いたのか境界なしの三國雜居、應援團や友人から贈られた花環や花束も誰のものとも區別せず室中を花に埋めて、爽かな英語で慰めたり勵ましあつたりして居る。

第三日目の午後五時頃、競技場から引き揚げた民國の女子ヴアレー・ボール、庭球選手と比律賓の庭球選手が休息して居ると、突然訪れた日本の女學生團があつた。彼女等は大阪市の各女學校を代表した大手前、宥眞兩校の女生徒十五名で、民比兩國選手二十四名と對座して、大手前の中西いさの子が流暢な英語で女性らしい挨拶をすると、民國の陳彦馥、比島のサントス兩孃が謝意を述べ　さて親交の印として、一人々々に可

愛い京人形が贈られると、選手達は大喜びで狹いベンチに目白押しに腰掛けて、先づ日本側が大阪市歌をうたへば、比國側が「マイフヰリッピン」を、民國側が歡喜に滿ちた「快樂」を手振り交りで聲高らかに合唱する。遂々「モシ〱龜よ龜さんよ」を日本が歌へば民國、比島と交互にお國の歌をうたひながら、やがて別れの黄昏が來た。「サヨウナラ」日本に來て覺へた別れの言葉を繰り返しながら。

日支排球試合

二十四日午後五時から民國對關西チーム（姫路高女）の國際オープン・ヴアレーボールが行はれた。

民國選手が支那風の長い上衣に紫紺の改良袴、黒の靴下を穿つた姿は、決して輕快なものではなかつた。それに纏足の名殘りか、兩脚が上體と不調和なほど短く、身體の安定がない。其れに引きかへ日本選手は白の水兵服に短いスカートをつけ、白靴下に包んだ健かな兩脚を膝の上まで現はして見るからに新時代の女性らしい。だが時代の娘達も稍々舞臺敗けがしたのか最初の間は盛んにミスを連發して民國側に七點を先取された。スタンドからトラック側まで埋めた女學生の應援團は鳴を鎭めて沈默するのに反し民國側の監督高女史はスケッチブックと五色旗を兩手に足踏みして喜ぶのが人目を惹いた。其内日本側が漸次勢力を加へ猛烈なサーヴを連續してぐんぐん敵を壓倒する應援團が奇聲を放つて騷ぐので民國側は益々氣を呑まれ遂に守備混亂して二十一對四の慘敗に終つた。日本委員の一人が「國際ゲームだから拍手に止め不謹愼な應援は考慮するやうに」と注意したが、婦人應援團は却々遠慮はしなかつた。民國側は握り拳でボールが打てないので最初國際ゲームは平手でする約束だつた、といふので中途で高監督から文句が出たが、遂々その儘で押し通してしまつた。

ゲームが終ると選手達は蝗のやうにネット側に飛んで行つて盛に握手したまでは上出來だつたが、民國側が手を繋いでエールを三唱したのに、日本側は之に沈默を以て酬ひたのは聊か寂しかつた。

民國對關東チームは二十六日午后四時から開始。民國側は一回戰に比し更に活氣なく、日本側のサーブを全てミスして廿一對十六で敗れた。關西チームは大黒帽に水兵服を着て居たが、關東チームはスポートシャツに白鉢巻を結んで一層輕快に見えたけれど、日本同志の勝負で關東チームは守備の連絡を缺いで敗れた。結局優勝は姫路高等女學校の諸嬢であつ

た。

女子の排球は主として腕をのみ用ひて戰つて居た、今後若し身體と兩脚の使用が自由になつたなら更に美事なゲームを見せるであらうに。

庭球の優勝者

比律賓對日本の複仕合に就ては前に記したやうに、比律賓は日本に比し數段見劣りがしたもの丶フオアのストロークは相當な技倆もあり凄いサーヴでスタンドを唸らせたりしたが民國の黄翠英、賀生曦組は元來が排球の選手なのか全くの未成品でストロークは全々利かず・サーヴも氣毒に思つた審判官が見て見ぬふりしたほど規則違反だらけであつた、日本の田村 梶川組に慘敗した比律賓のサントス・カリアガ組が樂々と優勝したのも不思議ではなかつた。仕合の經過は省略する。結局複仕合は東京の田村梶川兩孃が、單仕合は大阪の金田孃が全勝して優勝盃を得たのであつた。終りに斷つて置くが、女子の庭球戰は勿論硬球を用ひたのである。



女子オープン庭球單仕合に優勝した日本選手（右金田咲子左戸田定子）

プールの岸から

プールの水は冷たかろ、三方を圍んだスタンドは五分まで婦人の見物で埋まつて居る。委員長の末廣博士がメガホン提げて忙しさうにプールの岸を馳せ廻つて居る。スタンドには明色のパラソルが・まるでヒヤシンスの花壇のやうに——

女性の水上競技が全國的に行はれたのは今度が最初だつたが・收獲は決して少くなかつた、比、民兩國が出場しなかつたので、東京 關西 大連と地方的に分れて猛烈な競爭をした。だが二十五日の豫選で東京方は、かの有名な「御子チャン」を初め三名までも敗北し 殘るは江島・仁村（姉）の二人きりとなつたが、兩選手ともに勿論關西方の敵で

はなかつた。結局決勝は關西と大連の接戰に初まる。

決勝の二十六日午前は水溫二十一度半　開會以來の好晴高溫で水の子供の悅ぶ事ひと方ならず。ゲームが初まるとスタンドのパラソルが一時に萎むばかりに婦人達は香水の匂高きハンカチーフを頭にいただく。

女子競爭の最初は百米背泳で京都第二高女の二年生入江廣子が一分五十二秒五の二で悠々と優勝した　男子の決勝第一着上田治君が一分二十秒五分二であつた。五十米の決勝では大連高女の三年生飯村敏子が京都の永井花子と猛烈な接戰を見せたが體力に於て優れた飯村孃のラストヘビーが利いて三十八秒五分の三で從來の日本女子レコードを突破した。

百米平泳の決勝では京都の布施苑子が一分五十秒五分の二で。二百米の決勝では大連の飯村敏子が三分三十一秒五分の三で何れ新記錄優勝した。殊勳者飯村敏子さんに附き添ふて遙々大連から渡來した孃のお父樣は特等席の中央で相恰をくづして悅んで居たのも無理はない。

各選手の競爭が始まると水着姿の他の選手連が大タオルで半身をくるんでプールを覗き込みながら、盛んにお友達の聲援をするのも女性ならでは見られないシーンだつた。

比律賓の選手諸君が、日本の少女選手がプールから上るとタオルで拭いたり、毛布でくるんだり、親切に世話してくれるのに日本の男子選手は知らぬ顏して居る。國情が異ふためでもあらうが、弱い者と美しい者はいたはるがいい。

プールではウオーター・ポロの最中に、フヰールドでは潮の如き歡呼と拍手が起る。二十六日の正午の事で、今大阪全市の女學生千五百十二人が團體運動を開始したのである。

最初はサイド・パッス・ボールで晴かな拍手とソプラノの齊唱のやうな應援の聲に女子師範が一着を占めると、トラックの周圍に並んで居た他の一團が素早く交代しスローキャツチ・ボールを開始　市立實踐高女が優勝すると　引き續ひてアンダー・パス・ボールが初まる。誰かが「燕の子が親鳥の餌を爭つて泣き立てるやう」と云つた如くトラックの周圍の應援團がキャツキャア叫ぶ。

第六回極東選手競技大會は三國の女性選手の參加に依り單に色彩を施されたのみならず更に隣邦親善の意識を確實にせられた。女性競技の全くが選手權競技からオミツトされオープンゲームとして扱はれたのは殘念ではあつたが、記錄の上から見ても、精神的に考へても、其の收獲は豫想外に大なるものがあつた。

落日の餘光を浴びて五萬の群衆がスタンドから雪崩れ去つた後のフヰールドに何處から來たか紫の鳩か一羽、遠い野球グラウンドから天地も搖ぐ歡呼の聲が聞えて來る。



女學生の夏期生活

輕井澤の高原生活

日本女子大學校生

ふだんから精神修養と云ふ事を重んじてゐる私達の學校では、特に三年生四年生の爲に毎年夏休み、輕井澤に修養寮が開かれる事になつてゐます。それは山上生活、三泉寮生活などゝ呼ばれて、特に清く懐しい響を私達に與へて與れるものでございます。

山上生活は第一期、第二期の二つに分たれてゐて、一期が四年寮、二期が三年寮と云ふ事になつてゐます。

この生活を學校生活の一般的意味から云へば、或は特殊なものであるかもしれませんが、私達の學校としては、飽くまでも日常生活の延長、そして補足なのでございます。この立場から、山上生活の目的や意義は自ら明かになる事と思ひますが、言葉を加へれば、私達が人として如何に求めるか、その求める相を靜觀するために選ばれた境遇だと云へやうかと思ひます。どんなにも自由に作用く事を許されてゐる精神の要求は、かなりの障碍を突き破つて進む事も出來ますけれど、それらの障碍のない環境の中に、靜かに養はれる惠みも亦必要であると云ふ點で、輕井澤生活の恩寵の淺いものでない事が點頭かれるやうに存じます。あの自然、そしてあの集ひ、全て尊い二つなきものでございます。

この生活は、恩師成瀬先生が特に深い御こゝろを注がれてお開き下すつたもので、三泉寮に集ふ學生は、今も猶生きて私達を導いて下さる先生の御精神が、如何に偉きいかと云ふ事を今更のやうに感じるのでございます。それと共に忘れる事の出來ない今一つの事は、先生の御意志に贊同されて、特にその別莊の一部を、私達の爲に解放された三井家の御同情です。寮の周圍の豁けさ、廣さは私達を自ら深い落着に誘ひます。廣大な庭内には丘もあり、草原もあり、山もあり、大樹もあつて、望む儘の氣分を其處に求める事さへも出來るのでございま

す。行届いた陸内の設備も快く、殊に昨年からはより多くの人を收容する目的で、建物も擴張されるなど、私達への恵みは益々大きいものになつて參ります。

次に三泉寮でのありさまに就て、詳しく書いてはきりがありませんから、極大體を書いて置きたいと思ひます。

この生活を始めるに就ては、毎年一學期の終りに、幾度かの會合の時を作り、山上生活の方針に就て、極めて具體的な案を立てておきます。さうして輕井澤へ集つた最初の日から、直ぐに豫想した生活が始められるやうに致します。生活の目標、研究問題等は、回生に依つて自然決つて參りますが、例へば「隣人を愛す」が生活目標として選ばれたり「自我の研究」が研究問題として定められたり致します。これらに從つて、全體的の歩みを進めて行く方法としては大體會に依ります。主な會としては瞑想會、修養會、研究(討論)會など、次にはクラス會、回生會なども開きます。この會と會との間には自習日を設けて、多くの自由な時間を持つやうにしますので、各個人の望むところを極める事も出來るわけでございます。つまりはみんなの一番自然な心が流れる儘に、或は會になつたり別れ別れになつて考へたり、時には山登りに變更したり致します。

平常は科、寮、通學などの自らの差別の世界に住み馴れてゐた人々が、どうしてこんなにも素直に美しく結び合ふ事が出來るのかと驚くほど、自然で心持ちのよい空氣が、寮内を柔かに包むで、その朝に夕べに食堂に集る顔はみんな一樣な輝きを放つ事は、ほんとに一つの不思議のやうでございます。

一日の樂しい清い生活を思つて紅色の空を眺めながら讃美歌を唱ふ時など、自分が讃美してゐるのか、或は自分が讃美されてゐるのかわからない心持ちで、身も心も澄みきつてしまふ氣が致します。この心で瞑想し、研究して行く事と悦びは、描く説く事ではなく、默つて感じてゐたらうございます。

すつかりの拘泥から深く切放たれてしまふ時、自然も人も全く自分と一つである事が深く點頭かれます。そして私達は自分を祈る心で他人を祈る事を知ります。こゝで行はれる個人の會(修養會の一つ)は、この心が姿をとつたもので、繁雑に堪へない世間の俗境からは到底想像も出來ないものであらうと思はれます。私達は短い山上生活(大概三週間)に於て、永遠に愛すべき人間性の美を信じ得て、哭いて祈りたいやうな感謝に溢れながら、かの山を下るのです。

天地もまだ目醒めぬやうな黎明に起き揃つて、離れ山に御來光を拜した感激や、霧の日の淺間登山など、如何に鮮かな記憶を多くの友の胸に刻みつけますでせう。山との御別れに永久草を摘み集めて、私達の心で縊りませう——と云つては赤いリボンで結へた事などはほんとにいつまでも忘れたくはございません。

千葉の臨海生活

東京府立第一高等女學校

喧燥を極めた都會の中央にある、塵埃の多い校舍の中で、毎日單調な生活をしてゐる生徒に、夏休みを利用して物靜かな空氣の澄んだ海岸生活をさせることは、健康上からも、自治精神を養ふためにも自然の調和に接して美感を育むためにも、教育上極めて有效なことだと思ひます。それで本校では毎年七月二十三日から、八月四日まで、千葉

市の高等女學校の寄宿舍全部を借受けて、臨海生活を營むことにしてゐます。人員は宿舍の都合其他で昨年は八十八名に限りました。

一日の行事は朝と晝と夕にわけて大體次のやうな豫定を組んでをります。

朝──五時起床。冷水摩擦。深呼吸。整氣體操。海岸散歩。七時朝食。
　自八時至十時自習。

晝──自十時至十二時海水浴（甲組）十二時晝食。自二時至三時海水浴
　（乙組）自三時至五時自習。

夕──六時夕食。七時訓話。校庭運動。九時就眠。

そのほか滯在中の豫定行事としては、海の生物研究や、大巖寺見學（この寺は寄宿舍から約二十丁ばかりで、院内に鵜や白鷺などを、保護飼養してゐて、現に巣を作つてゐました。）それから附近の歩兵學校へ連れていつて、迷彩防禦機械や軍用鳩やタンクの實驗などを見學させますし、下志津の飛行場や千葉市中の見學などもその中に數へてゐます。

そのうち海の生物研究には、かなり周到に意を注いでゐますので、學校の標本室内に墓詣になつて變色してゐる死骸の比ではなく、生きて動いてゐる自然物そのものの中に、生物學の本當の研究のあることを敎へて、大自然に親しんでゆく敏感さや、興味をひき起させるやうにしてゐます。

海邊に立つたら、碧い泡沫をとばして散る涼しい波の花や、白い渡鳥を追ひかけたり、赫々と燃える大きな薔薇の花のやうな夏の太陽に熱くなつてゐる磯の貝殼をあさるばかりでなく、腰をかがめて仔細に科學的な目を働かすことを惜しませないやうにしてゐます。例へば干潮の時には磯濱の海底がよく現れてくるから、さういふ時に砂や岩面に孔があつたら、必ずそれを掘りわつて、中にゐる主人公をつきとめて見ること、主人公が見つかつたらすぐに手を下さずに、暫くなすが儘に任せて、運動の樣子や捕食の有樣などを注視すること、尙また、穴を掘る前には、その穴の形狀とか、大小などに注意をして、生物の種類によつて異ることを知るやうに、努めて深く大自然に踏みこますやうに導いてゐます。

かういふ風に、心靜かに自然を觀察し、造化の調和や緻密さを感知させ、科學的知識の素養を與へるばかりでなく、實際生活の訓育上からいつても臨海生活がもたらした效果は多大であつたと思ひます。

又實施前後に於ける生徒の健康狀態の差異について研べた結果も、非常に良成績で、海水浴十三日目の總量は七百七十六貫二百四十匁であつて、一人平均としても昨年は三〇八匁の增加を見てきました。終りに本施設に加入した者と加入しなかつた者との健康狀態の比較率をあげて參考に供しようと思ひます。

	海水浴中（加入者）	夏休中（一般生徒）
體重增加總量	二二・二二〇貫	一五三・九〇〇貫
一人平均增加量	〇・三〇八	〇・二一五
體重增加人員	六七人	五二人
同上百分比	九三・〇六	七六・八四
體重減少人員	五人	一八七人
同上百分比	六・九四	二三・一六
檢査人員	七二人	七一五人

從つて加入者の方が平均一人に付九十三匁宛增加したことになりま

す。

信州にて眞綿がけ

東京府立第五高等女學校

私共の學校は創立後まだ日が淺く、今年で漸く五學級とも揃つたばかりですが、夏季修學團は創立當時から試みてゐます。毎年七月の末頃から八月の始めにかけて、十日前後の日を割當ててゐますので昨年は學級別にして、一年生は千葉縣の佐倉へ行き、高等女學校の寄宿舎を借りうけて宿泊し、養鷄や園藝の講義と實習をさせましたが、實習は堀田伯家の農場で便宜を計らせて貰ひました。

二年生は信州の小諸へゆきましたが、この一團は海應院の本堂に宿泊して、小山國太郎氏の經營される製絲場で、眞綿がけの實習をさせましたが、この方は昨年が三度目の經驗です。糸を紡(つむ)いで織物にするまで、チョツキや胴着の仕立なども見學させることにしてゐます。學校內でも毎年養蠶と、糸のとり方の實習はしてゐますので、製作品は纒めて販賣會の時に賣つてゐますが、なかなか立派な物や、廢物利用の面白い物が出來上ります。

それから三年生は群馬縣應桑村の六里原といふところへ行き、ここでは體育を主として、動植物の採集をさせましたので、二年と三年生とは偶然淺間山を隔てて南と北の麓に住みあつた譯になります。

四年生は昨年相州の三浦半島へ行き、三戶の光照寺に宿泊して、海棲動物や海產物の觀察採集をしたのですが、何れも體育上とか修學上の效果があるばかりでなく、その間生徒はお互同志で家族的な生活を送り、炊事や、裁縫なども各自(めいめい)でしますので、(獻立は指導者の方で作りますが)共同生活についてもいい經驗と理解を持つことが出來ます。

遠く綠の地平線や、藍色の水平線をのぞみながら、動物や植物を硏究して自然の秘密を探り、雛や花を愛護することによつて、女性としての優しい情操を育むことにもなりますし、生徒は樂しんでその時を待つ有樣ですから、今年も何かよい方法を案じて淸澄な大氣の中へ暫くでも生徒を自由に解放する計畫でゐます。尙一年二年三年と各學年に分けてゐるのは、指導者や宿泊所の關係からで、昨年の經費(汽車賃共)は約十圓から十五圓以內で濟みました。

赤城登山

お茶の水高等女學校生

赤城の登山は、毎年夏休みに入つて間もなく、女學部の五年と專攻科の有志とが加つて實行してゐる。昨年は七月廿一日の朝六時に淺草驛から出發したのであつた。都大路の熱風と煙塵とをのがれて、綠によく霞に美しい赤城の山で二日の涼味を胸一ぱい吸ひ込まうといふ元氣のいい一行が、水沼驛に下車したのは十一時近くであつたらう。山登りはここから直ちに始まるので、鳥居峠の險しい曲折を越えて、大沼湖畔にある猪谷旅館に着くまでは約三里の行程であるが、峠にさしかかる頃には夕陽はもう既に高い山々に背いて、大樹の茂りあつた薄暗い綠陰を、黑く細く鳥居峠への路はどこまでもうねつてゐるのであつた。その間をシト、シト、シトと冷い土を踏んで一列に進んでゆく一

行の姿、手には杖、肩にはリユクサツクを掛け、短い洋服や、裾短かな袴に身をかため、脚絆と草鞋にしつかりと足を結へつけてゐた。頂上へ頂上へと路は幾曲りかして、やがて谷川にかかつた細い板橋の上へ出たが、路は愈々急になるばかりで、ごろ／＼と大石の轉る間を、一行は苦しい息をはづませ、重たい足をひきずりながら上つていつた。どの位登つたであらうか、目深く冠つた帽子をかゝげて見上げる行手はまだ／＼遙かに高く、谷底から湧きあがつてくる霧は、私共を忙しく上へ／＼と追ひあげて、光は峠の向ふへ沈んでゆくのであつたが、嚴かな山のどこからともなく湧き起る偉大な靈氣は、塵埃の中にゐた時のこせ／＼した私共の心に觸れて自と高められてゆく喜びをぬぐふことが出來なかつた。

「ヨイシヨ、ヨイシヨ、六根清淨」と峠の頂に近づくにつれて一行は伏に調子づいて、先生方の音頭の聲に合せて、太い聲や細い聲が、仰山な山彦を呼んでしん／＼とした靜寂の中に響き渡るのだつた。峠もやう／＼上り終つて、宛も蒼白い海の樣に夕霧の立ち込めた高原の頂に着いた時には、先にはたゞ崇いものとして仰いでゐた未知の山が、威嚴から温味に移つて、この山もとう／＼自分達の知己になつたといふ喜びに胸をはつて萬歲を三唱したいやうな何とも言へぬ誇らかな感じがした。

高原の中央には有名な大沼湖（火口原湖）が、鉛色のうす明りを漂はせて鏡の樣に靜かに光つてゐたし、風一つない冷々した夕の大氣の中に、黑檜山や地藏山、長七郎山、駒ケ嶽、小地藏山、荒山などが高く低く、その背黑い、なだらかな姿をくつきり聳てゝゐるのであつた。透明な水色の空も、黄金色の星の花も、温い友情の喜びも、「山に來た山に來た」と聲を揃へて私共の心に囁くやうで何故だか有難く涙ぐまれた。するともう悉く鼠色に昏れてしまつた山の野を、突然裂くやうな勢で赤い提灯が勢ひよく飛んでくるのであつた。それは猪ケ谷旅館からの親切なお迎へで、私共はその夜山上の第一夜を湖に近い宿の二階で明したのであつた。

明の日は、高原の散策をほしいままにした幸福に輝く一日で、海拔一千八百九十二米の黑檜山登り、一千八百四十二米の地藏山登りに大汗をかきながら關東八州を眼下に見て萬歲を高唱したり、涼しい大沼の湖上に舟を漕いで、三部　唱のメロデーに聞きとれた一時のえも言はれぬ心の和らぎ、初めて見る放牧の牛をカメラにおさめてみる面白さ、若い友達同志が一つ心にとけ合つて再び歸らぬ一刹那々々をどんなに敬虔な歡喜の中に過したことであらうか。翌日は曉の星がまだまどろむうちに宿を出て、朝霧の滴る高原の植物と別れを告げたのであつたが、歸りは反對に澁川道をえらぶことにしたので、午後二時頃漸く澁川驛に着くまでのその道中の長かつたこと、暑かつたこと、渴いたことは、また赤城山上と共に私共の夏季の思ひ出であらう。

熱源としての瓦斯と電氣の比較

女子大學教授 中村榮代

昔は電氣と云ふものを見出されませんでした。從つて人間生活の「電氣化」と云ふ言葉は、全く其の意味をなさなかつたのでありますが、電氣が始めて採用され出したのは今から凡そ百年程以前の事で、それ以來急速の進歩で今日に到つたのであります。而し人間生活の電化と云ふ事に私共が其の注意を傾ける樣になりましたのは極く最近の事であります。

現今用ひられて居ります電化の大要を次にあげて見れば（イ）照明としての電氣、（ロ）交通機關としての電車、自動車（ハ）電信電話殊に無線電信電話。（ニ）電氣冷藏器。（ホ）電氣庖厨具。（ヘ）電氣煖房具。（ト）醫術としての×光線。（チ）醫術としての手術刀。（リ）酸素吸入等があります。人智の開けない以前に於いては、只恐ろしいものとして見られてゐた電氣が如何に私共の生活に密接で、しかも有效な關係を持つて居りますかを伺ひ知るのにかたくない今日、物質文明の根源は人間生活の電氣化に依つて始めて其の極致に達する事が出來るのであらうと云ふ事は只々電氣屋さんの机上の空論ではなくなつたのであります。かやうに電氣が種々の動力として利用されつゝある今日、一方では燃料問題がやかましくさけばれる樣になり、各專門家の豫測に依れば、今後參拾年後の我國は石炭の飢饉を來すであらう。從つて瓦斯の供給は漸次に減少して行く現象であると云はれて居ります。然らば之れが救助は何に依つてなすべきかは目下の急務となつて研究されてゐる問題であります。換言すれば、凡そ宇宙間に棲息する動植物殊に私共の生活に缺く事の出來ない熱源は、何に依つて解決されるでありませうか。今日では日光を熱源として利用し、臺所の煮焚に用ふるとは不可能であります。それならば瓦斯の根源である石炭が豐富であると、自國でも許してゐる隣國の支那から其石炭を輸入し、それによりて瓦斯の不足を補ふのが最も適當な方法でありませうか。又は永久に石油や薪炭に依つて其の目的を達する事が出來るでありませうか。以上の樣に考へて見ますと、速に減損しつゝある天然燃料に依つてのみ、其の熱源としての目的を果さうとするのは、實に心細い極みと云はねばなりませぬ。故により積極的な方法はないものであらうかと各專門家はあせつたのであります。そして靜かに省

たとき、我國内には昔から惠まれた水源のある事に思ひ當つたのでありました。滾々として竭きない水力に依て電氣的エネルギーを熱エネルギーに代へ 以て燃料問題を徹底的に解決して行かねばならぬと云ふ事は當然の結果で、之れが私共に與へられた永遠の熱源である事は誰もが知る所であります。故に自然の要求の結果電氣萬能の時代は正に來らんとしてゐる狀態で、實際問題として私共婦人の前に展開されて來たわけであります。

□電化の中心は臺所に

扨て人類生活の電氣化は如何なる所から始めたらよろしいか。色々の說もあらうと思ひますが、我國婦人の立場から云へば先づ其の中心は臺所にと云ひ度いのであります。電力を臺所の煮焚一般に利用する事から電氣化が始まり、又普及されなければならぬとすれば、熱源としての電氣が今日迄使用されて來た薪炭や、瓦斯に比較して、より經濟的であり度いと云ふ事も婦人として尤も希望する所であります。而し直接に經濟的でなくとも、甚だしく不經濟でない限り、臺所の電化は清潔と淨水の上から其の長所を見出す事が出來れば熱源としての瓦斯と長短相補ふものとして推奬し度いのであります。即ちスウイツチ一つの切りかへで、種々の方面に便利に簡單に利用される點に於て、必ず各家庭に普及される運命にある事は論をまたないのであります。

いま今日市場に販賣されてゐる庖厨具としての電熱器を區別して見ると、次の樣になります。

(イ)裸熱線を用ひたもの。(ロ)熱線を絶緣して金屬内に藏したもの。(ハ)投込式のもの。(ニ)熱線を絶緣して鍋の底につけたもの、四種に大別する事が出來ます。其の能率を實驗して見ますれば大體に於て、

(イ)(ロ)の式のものは二〇―三〇%
(ハ)(ニ)の式のものは七〇―八〇%

の電氣エネルギーを利用する事が出來ます故に(ハ)(ニ)の式の電熱器が臺所用具としては經濟的で適當であると思ひます。

熱源としての電氣と瓦斯と木炭の價格比較。次表のKGCはキロ瓦カロリを示し、KWHはキロワツト時を示して居ります。

次(次頁上段)の表に依り一錢で買ひ得る熱量は、

電氣は一キロ時(一ワツトの電力を一時間使用)七錢五厘(現在炊事用として會社から供給してゐる價格)であります。

木炭は一貫目五十錢とすれば同一價格で電氣の約五倍の熱量を出します。

瓦斯は一〇〇〇立方呎が二圓二十五錢(東京の瓦斯會社調査)でありますから、同一價格として電氣の約四倍―四倍

半の熱量を出します。

一錢ニ買ヘル各ノ熱量

種類	單位	單位價格	使用能率（百分率） 100 %		75 %		50 %	
			K.G.C	K.W.H	K.G.C	K.W.H	K.G.C.	K.W.H
電氣	K.W.H	2錢	430	0.500	323	0.375	215	0.250
		3錢	286	0.333	215	0.250	144	0.167
		4錢	215	0.250	162	0.183	103	0.125
		75錢	114	0.133	86	0.100	58	0.067
石炭瓦斯	1000立方呎	225	471	0.548	353	0.413	236	0.274
炭	一貫	30錢	837	0.973	626	0.728	417	0.485
		40錢	628	0.73	473	0.550	314	0.365
		50錢	504	0.586	377	0.438	252	0.293

故に此の結果に依ると電氣よりも瓦斯や木炭が遙に熱源として價格の上から見れば適當の様に思はれます。而し以上は電氣瓦斯木炭共に使用能率を一〇〇%としての假說比較でありますが、實際の有效能率は電熱器の種類に依りては差もありますが、大體に於て次の様であります。

電氣　七〇―八〇。
瓦斯　五〇%
木炭　三〇―四〇%

でありますから、前表を今一度繰り返して參照していたゞけば、電氣を使用する事が經濟的にも不利にならない事は誰でもすぐに氣付く事が出來ると思ひます。以上列記した理由の他に、石炭瓦斯は漸次其の熱源の不足と共に、供給が減じ從つて其の價格の騰貴を見るとも決して下落の豫定はつかないのであります。之に反して熱源としての電氣は其の水源が比較的豊かである以上、適當に利用すれば其の需要供給の關係よろしきを得て、其の價格は下落すると云ふ傾向を豫想するのにかたくはありません。從つて、近き將來に於て電氣と瓦斯の熱源としての料金は、現在の正反對の現象を呈する事になります。若し、電氣會社一キロワツト時三錢位で送電する樣になるとすれば、（否必ず其の時代が來る事を確信します）「價格が高いから」とか「使ひにくいから」等と云ふ不合理的な不平は一掃され、立所に料金の解決もつき一般家庭に電力を用ふる時代が、最も近い將來に於て來るべきであります

□婦人の能率增進と電氣化

試みに私共が電力の根源に就いて靜かに考へて見れば、我國の水源は非常に豐富であるにも係らず、いたづらに高きから低きに流れてゐるのみで、何等の用もなさないでゐるものや、自然の詩趣をそゝるためにのみ放置されてゐるものや、其の存在のために反つて害毒を及ぼしてゐるものや、數へて見れば限りがない程ですから。之等を充分に利用し工夫すれば熱源の缺乏に苦しみつゝある現狀を救ふ事は左程難事ではないのであります此の際、政府なり資本家なりの貢獻に依り、水力發電の大會社が設立されたと假定すれば、現時一キロワット時七錢五厘（現時事用に供給されてゐるもの）は三錢位の驚くべき安價なものとなり一般に供給される事と思ひます。其の安價な電力が一般家庭でたやすく活用される事となれば一日の大部分ひいては一生涯の大部分を臺所であくせくと過した婦人社會的の地位に於て女中と何等の撰ぶ所もなく過してゐた主婦を臺所から解放し合理的に時間を節約する方法を會得せしめ、無能視された婦人をして有意義な方面に其の餘暇を費やさしめる事が出來ると思ひます。のみならず機械視されて何等の優遇をも受けなかつた女中を、他の方面に有意義に活動せしめる事が出來ると思ひます。此の意味に於て、私は特に將來の臺所は是非電氣に其の熱源を仰ぎ度いと切望してやまないのであります。實際に家庭に電熱器を使用されつゝある方々の御經驗によれば、今迄三人の女中を使用しても尚手不足で困つてゐたものが、今日では二人分を一人半位の女中の手で、充分其の用を足して行く事が出來ると、電氣化の效の大なる事を推奬されて居ります。

□女中一人の給料及び食費を電力に換算して見れば

凡そ女中一人を使用する給金及食費を、廿五圓位（一ケ月）と見積り之を電力に換算して見ますと一キロ時七錢五厘として廿五圓は三百三十三キロワット時の電力が使用される事になります。

鳥潟博士の實驗された報告によりますと、電熱器の能率の善惡及び寒暑の差等を考慮しても、十人位の家族の炊事用としては、一ケ月平均一二〇—二〇〇キロワット時あれば充分事が足りるとの事であります。

故に前の三百三十三キロワット時から、二百キロワット時を引いて、殘りの百三十三キロワット時の電力は、炊事以外の洗濯用掃除用等として利用する事が出來るのであります。

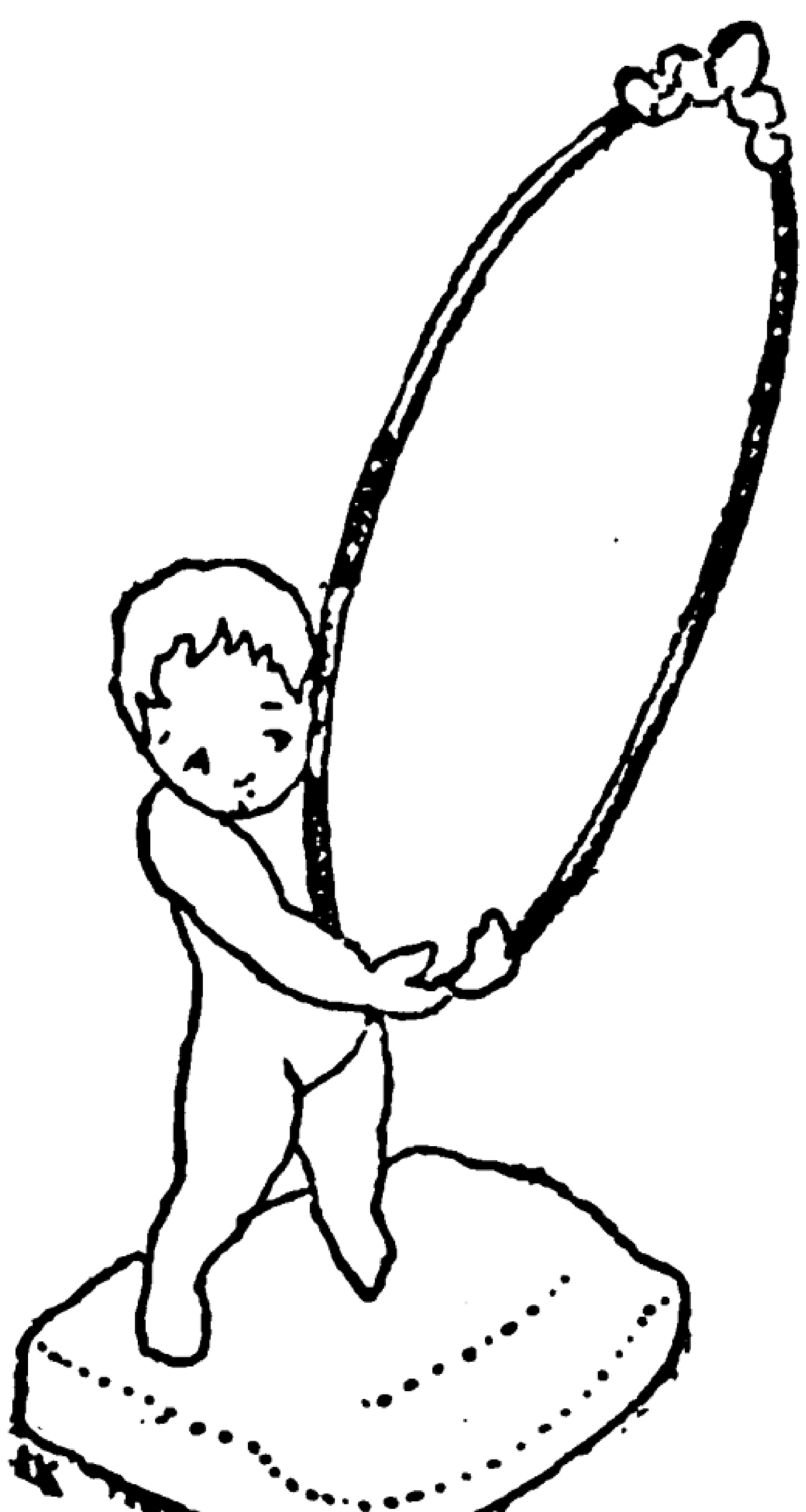
次の表は東電で調査されたものでありますが、參考迄に記して置きます。

電氣生活電熱料金表

家族人數	時候	一ケ月消費電量（キロ時）				電氣料金			
		炊事用	風呂用	暖房用	合計	一キロ時 2錢	3錢	4錢	5錢
5人	夏	71.3	255.0	3.0	329.3	6.58	9.87	13.16	16.45
	冬	142.5	600.0	400.0	114 25	22.[illegible]5	[illegible]4.27	45.70	57.12
10人	夏	142.5	375.0	5.0	522.5	10.45	15.67	2[illegible].90	2[illegible].12
	冬	2[illegible]8.0	870.0	6[illegible]0.0	1755.0	35.10	52.65	70.20	87.75
20人	夏	285.0	750.0	7.0	1042.0	20.84	31.26	21.68	52.1[illegible]
	冬	570.0	1750.0	900.0	3220.0	64.40	96.6[illegible]	128.80	161.00

（備考　夏冬共毎日一回入浴）

以上は、今迄利用されてゐない水力を利用したとしての電力の價格についての豫想でありますが、いよ〳〵電熱器設置の設計や、電力會社に申込む電力等に就いては、專門的になりますから、又の時に述べる事にいたしました。當東京全市の各家庭が電熱化された時、會社側から其の需要に應じて、充分に供給が出來るかどうかこれに就いても研究すべき項目が澤山ありますが、何れにしても、私共婦人として主婦としては一日も早く政府又は資本家の手に依つて、電力の民衆化の出來るやうに切望して止まないのであります。



兒童の臨海生活と林間生活

私立帝國小學校長　西山哲治

海濱に於ける兒童の生活

私の學校では大正八年の夏から毎年夏期休業中の一ケ月間、五六學年の生徒中希望者十數名を引率して、第一回は稻毛海岸、第二、三四回は九十九里濱に臨海學校を催して來たのである。毎年の結果に徴するに自治的共同生活の裡に兒童は種々精神上の修養を積み、學習、運動、食事、入浴、睡眠の凡てが規律的に行はれ、誠によい成績を示し、身體は健全になり、體重二三百匁以上增加したのもあり、丈夫になつてまつ黑なからだを兩親へ貴い土產として歸るのが普通である。

始めて慈父母の膝下を離れて都會より遠ざかつた海濱の農村又は漁村の靜かな部落に於ける一ケ月間に亘る兒童の生活は彼等の小さい心には大變動を與へられるのである。田舍の大自然に親しみ、都會にては見られざる農作物一ケ月間の生立ち、動植物を實際に眼にし手に觸れて此に理科のよい實驗をなし、又、これらは寫生の好材料、綴方や日記の好題目ともなる。大平洋の浪靜かな朝、寢るには惜しき美しい月を賞しつゝ樂しき濱邊の夕は子供ごゝろに次の如く父を憶ひ或は母を戀ひ、時には東京の空を眺めて我家懷しきなやみを抱き一晩一夜明くれば郵便配達夫によつて父よりの端書、又、母よりのなつかしき御便り、或は小包開けて見れば九月號の少年雜誌、ドロツプスにキヤラメル、牛肉、佃煮の罐詰などが出て來る。恰も大人が外國に於て故國よりのたよりを戀しがるのと同じ心地である。父母の許を離れし兒童の一ケ月間に亘る生活は吾々が一年も洋行したやうな氣分を味はつて居るのである。歸る日を待ちわびて、辛抱し、我慢するといふことも一つのよい修養である。父母の前を離して遠く父母の恩を偲ぶこともよい教訓を與へる。不自由な田舍の生活によつて始めて都會に於ける文明生活の有難味を解するのである。

猿股一枚の裸體生活は日光浴を十分にし、皮膚を鍛練するので食慾は益々旺盛となり、新鮮な空氣、野菜、魚類は身體の營養として申分なく攝取するのであるから健康上誠によい境遇に置かれて居るのである。

農村漁村の生活を味ひ、田園の大自然に親しみ、養蠶、漁業、稻野菜の手入等田舍の自然によつて活きた知識を得ることは著しいものである。九十九里ケ濱の名物である地曳網を手傳つて澤山の鰮を貰ひ

ひ、直ちに鹽焼やフライにして食べることも兒童には樂しい事の一つである。畑の西瓜や唐黍などを求めて直ちにお八つにすることも兒童の心に樂みを加ふることの一つである。

高原に於ける兒童の生活

信州小諸町の土屋秀夫君、矢島好五郎君、宮阪古梁君、清水芳仙君等の盡力によつて目下計畫中の布引遊園地に於ける土屋君の新築別莊一棟を一ケ月間兒童のために林間學校として提供されたので、昨年は私が九十九里ケ濱へ生徒十三名を引率し、別に同じく十三名を野村主事が引卒して布引に林間學校を催したのである。私は九十九里ケ濱の兒童を三輪訓導に託して八月四日より十一日迄信州へ出張して親しく海と山との兒童の生活振を比較したのであつた。

小諸の布引は流れ淸き千曲川を距てゝ布引觀音の山々と相對し、後ろには淺間山を望み、美しき緑の連山に包まれ、朝夕は七十度を下る程の涼しさ、山を下れば氷のやうな冷たい淸水が湧き出てゐる、林では鶯と蟬とが美しい聲を競つて居る、兒童は數町の山坂を下つて毎日二回水淸き千曲川に水泳をなし、海拔三千尺の高原に於て紫光線を全身に浴び、自然と日光浴をほしいまゝにしつゝ靜かな山の懐にすが〱しい氣分を養つて居るのである。鮮魚には乏しいが、新鮮な野菜と鷄卵とは安く深山に得られる、營養家の努力を眼のあたりに刺戟されつゝ毎日涼しい間は自習し、寫生し童謠の苦吟に或は一編の日記を面白く創作するのであつた。

或は溪流を汲み、或は薪を折るとの古句は布引に於ける四圍の生活情調其まゝのやうである。二人位の嬉しい高原生活にはそれも詩的で、飽かぬローマンスを心ゆくばかりつゞけることも人生最大享樂の一つかも知れないが、何分にも數十名といふ大家族の生活には一杯の水を汲むにも一町ばかりの山坂の細い小徑を上下するといふ有樣では東京からの女中などには到底勤まつたものではない。土屋君の下男が水汲人夫、風呂掛、或は十數町の小諸町へ毎日買物に使するといふ奉仕も止むを得ない次第であつた。風呂へ入るにも提灯つけて一山下りるといふ不便な土地で不自由な生活にも幸に土地の有力者のあつき情によつて此大家族の生活に多大の便宜を與へられた。山で不便な生活も都會で便利過ぎる生活に慣れた子供にはよい教訓を與へ、よい修養となつたであらう。

山の子供は海の子供程食べない、とは奇なる對照であつた。海では二升五合又は三升宛三度御飯をたき、生徒は七八杯も食べるといふに信州へ來た生徒は一日四升位しか食べない、輕く二杯か三杯位しか食べない、毎日山坂道を往復し、水泳して食慾が出ないといふのはどうしたものか、海では汗をかくが山では汗をかゝないからであらうか、米の質と副食物が子供に合はないのであらうか、毎日險阻な山徑を上下することは全身の筋肉を動かすよい運動となり、健脚となるべきであるに都會育ちの子供には山坂は大儀らしい。

毎日のつとめ

費用は何れも汽車賃共に一人分二十八圓で、山の好きな兒童は山へ海の好きな者は海へ、と一に兒童の好みに任せたのである。所持品と

しては學用品、毛布二枚、空氣枕、葉書二十枚、茶碗、箸、歯磨道具、手拭、猿股を一々記名して小行李に納め、自ら毎日整理するのである。小遣錢は三圓乃至五圓持つていつたが、繪はがき、雜誌、文房具、切手位買つた位である。その支出も自ら考へて使ふやうに訓練された。毎日交代に信州と九十九里ケ濱との通信が行はれ、山の自慢、海の誇を互に交換する。冷たい清水や淺間山は見られないと山から來れば、太平洋で泳ぎまはり西瓜やピン〳〵した魚のフライは山で味はれまいと海の子が山の子へ一本返すといふ有様である。

毎日の日課としては朝五時より六時までに起床、歯磨洗面、冷水摩擦、自分の毛布を自ら片づけ、當番二人は室の内外を掃除し、先生に挨拶、散歩、七時朝食、八時より日記をつけ手紙を認め、十時まで自習、十時半より十一時半迄水泳、正午猿股や手拭を物干にかけてから晝食、二時まで休息、二時半より一時間水泳、四時お八つ、五時半迄自習、當番は掃除、六時夕食、入浴後散歩　八時自ら床をのべ先生に挨拶して就眠するのである。

夏の子供が水を喜ぶことは著しいものである。山の子も海の子も水泳を唯一最大の樂みとして居る。一日を通じて山や海の子供が共通的に一番期待して居るのは水遊びである。毎日水泳の出來ない土地では如何に涼しい所でも子供は一向つまらなく思ふであらう。小諸の林間學校に千曲川の流れてゐたことは兒童のために幸福の大なるものであつた。

九十九里ケ濱へ行つた兒童は一ケ月間に平均二百二十四匁の體重增加を示し信州へ行つた兒童は、平均百九十五匁の體重增加の成績であつた。更に山へも海へも一ケ月間行かないで東京に居た兒童十三名について調査した結果は、夏休み前と夏休み後とで平均僅かに六十三匁だけの體重增加を示したのである。

運動講座設置

本誌は八月號より、運動講座を設置して、斯界の大家に囑し、婦人に適合する諸運動の解說、指導、運動界の狀況、諸競技の批判等を御願ひすることになりました。



讀者欄

『或女』に就いて抗議された松下八重子さまに

中川しげ子

有島さんの『或女』に對するあなたのお考へを讀んで、私は自分の粗雜な感情を恥ぢます。內面的に深く味ふことのできるあなたのデリケートな批判を、女としてことに羨まずには居れません。

『なぜ葉子の不信を怒つて日本へ來ないのか』といふ不服を木村に持たない私ではないのに、葉子の心を掴むでゐるかどうかも考へぬ彼の迂濶を氣づかぬ私でもないのに、いつと云ふこととなしにそれらが意識の底深く沈んで、思ひ入つた彼の惱ましい心持だけが涙ぐましく燒きつけられたのでございました。然し彼木村の愛をなまぬるいとどうして云へませう。烈しく燃える愛ばかりがほんとうぢやないでせう。靜かな愛とでも云ひませうか、とにかく根强い愛の故にこそ彼は葉子をいつまでも待つたのです、その木村を終り迄欺き通した彼女の罪、それを恐ろしく思ふのです、木村を捨てゝ倉地にいつた彼女、木部と別れた彼女を批難するのではありません。おつしやるまでもなく愛を感ぜぬ人との結婚は僞善です、罪惡です、葉子が愛どころか嫌厭を感じてゐる木村と遂に結婚しなかつたことは、貞操を本質的に考へる新らしい性道德の立場から正しいことだと云ひたうございます、葉子自身かうした新らしい思想に醒めてゐたわけではなかつたが、熱烈な戀は遂に彼女をして木村を捨てゝ倉地に走らせたのでした、誰か彼女のこの心持を憎むことができませう、けれどもあの善良な木村をあんなに苦しませそして最後まで欺いてゐたことを、恐ろしい罪として私は彼女の爲に悲しみます、さうです私はたゞ愁へるのです、彼女を責めまた憎むことはできません。これは私自身彼女の性格の中にひそむ何物かに魅せられてゐる證據ではないでせうか？また古藤を誘惑した葉子をも、征服慾にかられた美しい女の心にふと落ちかかつた惡魔の影として、むしろ彼女のさうした刹那をいたはりたい私なのです。あなたは彼女を惡い女だとしてゐる一人に私を數へていらつしやいますが、それは私の表現のつたなさがかうした誤解を起したのでせう、私は彼女を厭な女だなどゝ毛頭思ふことができません、私は岡や古藤の性格が大好きです、その岡や古藤などと並べてやはり、葉子を好きます。倉地も好きです、決して厭ではありません、しかし間違つた步みであつたとだけは云ひたうございます、これをしも美しい女への一種のそれみだとあなたはおつしやるでせうか妙な因襲的な觀念からだとけなしなさるでせうか？また彼女の死は罪の子としてでもなく、女王としてゞもなくすべてのものから解き放たれた安らかさと淋しさとに似たものであつたらうと、私には思はれます、しかし、かうしたことは凡て人それ〳〵の主觀に基くことで誰のいふところがどうと定めなくてもいいことだと思ひます。

藝術は人格の反映であります、作中の小さき一人〳〵にまでひらめく有島氏の美しい人格が、偉大な藝術となつて私共の前に輝いてゐることを推賞したい。時代思想に目醒めて、虐げられた無產者の爲に眞の味方たらんとする、賴もしい氏をたたへたい。私達の生命に光と力

を與へてくれる氏の魂の敬虔なる聲を聞きたい。あなたの云つておられることは有島氏全體を論ずる上から、いとも小さな問題であると云ひたうございます。さはあれ、かうしてお互に深く考へるところに、創作としての眞の價値があり、それによつてまた各々の魂が醇化され潤はされて行くことと思ひます。あなたの一文が私を益したことの少くないのを心から感謝します。

嵐の中に光るもの

——現代女流詩人とその詩——

中田信子

窓をあけると颯と吹き込む嵐、あたりは險惨な閃き、暴風雨は昨日までの靜穩な地上を、踏み躙り、吹き荒し、遂に濁流の巷となしてゐる。これを見て、誰れが恍惚として、陽に溶けさうな自己の悦樂のうたをうたへようか。今迄向つて居た机の上には、「紅薔薇」の感覺の柔かさを愛撫する。靜淡な詩題が書かれた用紙がのべられてあつても、すぐそれを消して、緊張した面持ちで、嵐の曲にうつるのであらう。

まこと詩は感情を偽つては出來ない。

恐怖に冷ゆる魂に、明るい詩が燃え上る筈はない。

外を見れば嵐はいよ〳〵凄い。數へ切れない灰銀の蝙蝠が、宇宙いつぱいはゞたいて、この地の苦難を深めてゐるやうだ。けれど私はその晦溟たる中に、光のやうによぎるものを見る。それは生くるがため必死となつて突き進み行く人間の姿である。傘は破れ衣は土にまみれ眩む許りの疲勞に堪へて、家族幾人かの生命を慈しむものの、輝かしい力と愛の姿である。

おゝ生命、力！愛、そして人間の努力よ。

そこに詩があるではないか、眞實、泪ぐましい程尊い詩があるではないか、單に感傷的な詩は、それらの詩のまへに、餘りに小さく、物足りなく思はれる。

女性！私もその一人である。けれど殊更内氣らしく、自らの詩境を狹くして、廣い世界を視る事を嫌ふのは、眞に女性の意味を曲解してゐるものである。私達は、私達のもつてゐる、思想、感情を、最も大膽に、自由に表現して、多くの男性と提携して進み行くのが當然である。私達女性の爲した作品が、何ら男性の心鏡に映らないものであつたら、同じ人間として、隨分寂しいものである。

藝術に境界はない。私達は男性とともに、あらゆる方面に心翼を伸ばし、あらゆるものに觸れて、それを眞面目に思索し、表現して行きたいものである。

個性——それはその人にとつては特長であり、他よりみればその人の缺點ともなる。

個性の尊さ！私達はそれを寶玉のやうにいはれる。けれど知らず〳〵自負して了つて、人の批評もかへりみず、讀書も怠る事は、太陽や慈雨を嫌ふて、椽下に匍ひ込む愚さである。

私達がたえず積極的に、お互の作品を批判し、或は刺擊され、導かれて行く事は尊い事である。

月毎の詩文雜誌を開く度に、多くの男性と歩を並べて進んで行く友

等の鮮やかな、努力のあとにひきつけられる。有名な歌人も皆一度は詩作にその心情をもやしたものだ。けれど今は、現詩壇に向つて、最も熱心に心をかたむけられてゐる、數名の氏等に就て書いて見たいと思ふ。

□山口宇多子氏――氏は廢刊した「詩玉」の同人で、昨年中はよく「日本詩人」誌上で、その作に接することが出來たけれど、本年になつては一度も私は見ない、氏の詩は温室の花の絢やかさではない。清澄な泉の溢れ出る響きを思ふ極めて深刻な敬虔な詩風の持主である。

女性のおち入り易い感情に溺れず、と云つて理智に冷え凝りもせず、すべてを深く、すべてをしつかりとうたはれてゐる。氏の詩境はこれからの私達の望むところである。

□澤ゆき子――、「烽火」の同人で、詩集「孤獨の愛」の著者である。

氏はあくまで靜的で「孤獨」の悲しみが、氏の詩篇に水色の幽號きをあたへてゐる。靜かな沼べりに泪にいためた心をのべて、飽くことたくうたはれる氏に、騷々しい巷の雜音は相應しくない。

氏の書信に接する度に、季節の光を胸にうけて、ひとり龍ケ崎の天地に、繭糸のやうにつやつやしい詩句を、盡きることなく爲邊とうたひ出してゐる氏の面影を、私はなつかしく浮べる。

□深尾須磨子氏――「明星」に熱心に筆をとられてゐる詩集、「眞紅の吐息」の著者である。

氏の詩は、強い意志と熱情をもつて、むつかゆい表現や、微温的な感傷を一切さけて、自由に、奔放にもえてゐる。實に明快な、健康なその詩風は、讀む者をしてぐん／＼ひきつけて止まない力をもつてゐる。

今後、大作を爲し得る素質の持主として、敬愛の念に堪へない。

□米澤順子氏――「聖き怨」を世に出して、その寶玉の如き磨かれた詩風を賞讃された氏の詩は、最近凝りすぎた型をひらいて、新らしい情感に觸れ様としてゐるらしく見られるのは、なんと言ふ嬉しさだらう。

氏の詩には奔放さと、胸をつく強い韻律とは、もとめ得られぬけれど、そのかはり、たくみな技巧のかげに、内部の大きい感動を暗示してゐる。

□松見初子氏―：「新進詩人」の同人で、詩集「人生の唄」の著者である。

明るいおだやかな詩風の持主であるが、時折り女性のため氣を吐いてくれるのは喜ばしい。

この頃、譯詩に力を注いでゐられる。この方面への進展も期待されるものがある。

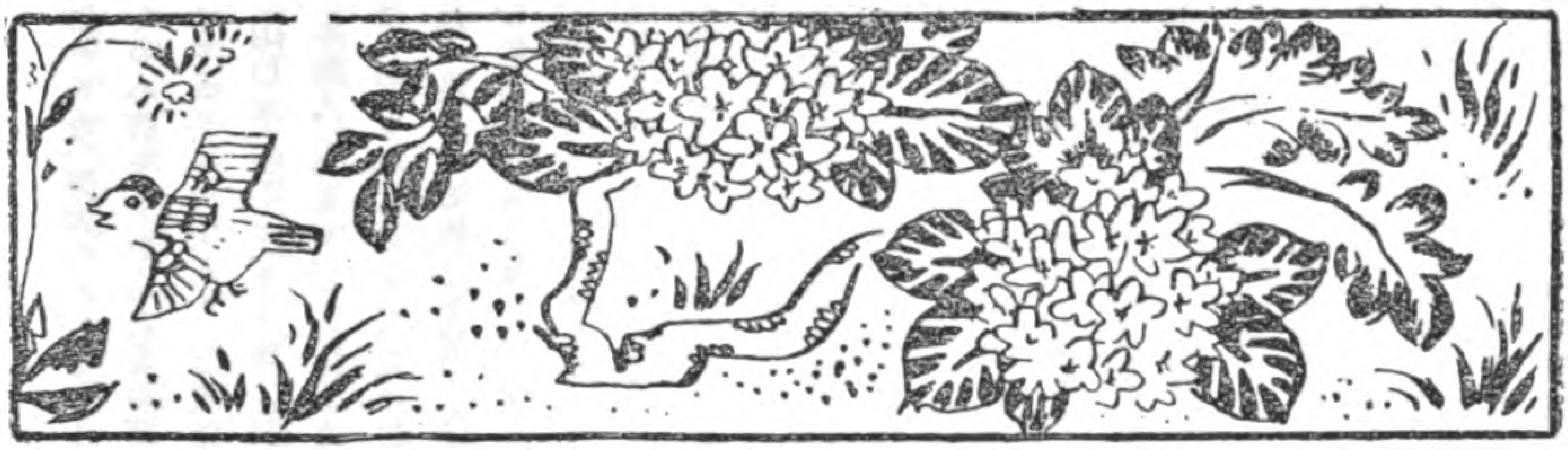
□八巻菊代氏――「感觸」の同人である。

氏の詩は聖らかな愛に充ちてゐる、その題材の如き、極めて自由で、感動も深い。職業婦人としての多忙の中を、どこまでも純一に熱心に、詩作する氏の態度は尊いと思ふ。

その他「新進詩人」の北山直子氏、「新詩潮」の三浦邦夜子氏坂本茂子氏、「帆船」の大井さち子氏「御形」の諸氏にも多くを期待する。

顧つて再び、私自身にうつる。

この頃の私はあまりに昨日の嘆きに疲れすぎた。あんなにも奔放に燃えて居た私の熱情は、姉の死とともに、冷固して了つた。ながい事背ざめてゐた私の魂よ。おゝ今こそ、あの嵐の中に光る、尊い人間の心に驚嘆して、深い感動の詩を、抑しながすやうな力で書いてゆかう。



旅の唄（入選）

時田千草

舟は駛る
おゝ赤塗りの舟が
いとゆるやかに
たゞひとつ
水夫（かこ）は歌ふ
朝の唄を。

志摩のはて
鳥羽の港の
雨の夜明け、
あゝ人よこひし
うれひ爽やかに。

佳作三篇

□夕べの惱み

小川久美

靜かに夕陽の沈むころは
魂がたゞ何となく
浮きいでて
無窮(むきう)の天にどよむばかり
翼はりあげて
どんな歌でもいゝ
歌ひ歌ひ、歌ひまくつて見たくて
胸一杯がうづき出す。

□掌

葛岡かつ

大いなる掌(て)の扉
夜としなれば
我をおほひ
との面なる
薔薇(さうび)も夢も
今更にふれん術なし、
今宵掌の示す姿に
心は戰き
色あせし皮膚のみぞ
恩にも明日をはらむ。

□青ざめた心

藤原貞子

青白い手が
跪きつゝ何かを掴まふとしてゐる。
眞赤な薔薇の花がむざんにも
こま／＼に砕かれた。
心の奥底で
暗い影が哄笑し
かよわい少女が
むせび泣いてゐる。

本誌主催文藝講演會の記

豫ねてお知らせしておきました本誌主催の文藝講演會は、五月十三日の午後一時慶應義塾の大ホールで開かれました。

何しろ本誌が初めての試みなので、果して成功するだらうかといふ不安がありましたのに、當日の意外といふより自覺しかつた盛況ぶりには當事者自身、茫然としてしまつた程でした。

その日暮春の空は快く晴渡つて、白い雲が瑞々しい若葉や、薄紅い五月の花の上に光つてゐましたが、十二時が過ぎるか過ぎぬ頃から、慶應大學前に停留の電車は、どれもこれも溢れるやうな人の渦を吐出すのでした。それから入口までの長いだんだら坂をひきもきらずに上り詰める人足の繁かつたこと、殊に定刻前から滿場肩摩の盛況で、最初の武者小路氏が登壇された頃には最早三階の隅々までがにつちりと人の層で埋れきつてしまひました。

「この學校が始つて以來の盛會だ！」といふ驚嘆の聲もそこここから洩れて、實に當日の入場者は、三千人の多數に上つたことを本誌の讀者にお知らせしたいと思ひます。

それではこれ程空前の盛況を示した私共の文藝會はどういふ内容を伴うて進行されたか、その時のお話の内容はいづれ本社が、何かの形で發表することでせうが、その日御出席を願へなかつた讀者のために簡單に感想だけをお傳へしてみませう。

講演をお願ひしたのは、武者小路實篤氏、久米正雄氏、長谷川如是閑氏、芥川龍之介氏、厨川白村氏、有島武郎氏の順序で、どなたも現代一流の名家ですし、著作を通してはよく御存じのとだと思ひます。

最初に登壇された武者小路氏は（實感に就いて）お話をなさいました。ほんたうの文學の價値は嘘が書いてないといふところにあるが、頭がよくても良心の鈍い人にはほんたうを感ずることが出來ないと、時代の空氣や、先入主に支配されたものは最早實感ではないこと、五年、十年、廿年と、本當に感じながら、自分の要求するところを益々深く要求していつたらその人の要求は、他の何物にも支配されないだけの力を持つであらうと語つてゆかれる氏の、一言一句にもおのづから瀧り、おのづから燃える醇樸な誠實と、なやましい熱情とはその儘聽衆の心を、しつかり捕へずにはゐませんでした。「ほんたうのことを聞くことが出來た」感銘が、私共の心を讓らず／＼深い内省に導いてゆくのに氣がつきました。

その次がニコ／＼した久米正雄氏でした。（文藝雜話）といふ演題でしたが、聽衆の顏がひとりでにくつろいでゆくやうな面白い失敗談や經驗談を輕快に話してゆかれ、その中から氏の纖細な藝術的直覺を通して、人間性を直截に、鋭敏に披瀝してゆかれるのでしたが、あるが儘の氏の面目が躍如としてゐたので、場内には時々好意のある笑聲がざわめくのでした。

その次に（藝術上の錯覺について）といふ標題で有名な評論家の長谷川如是閑氏がお立ちになりました。藝術は要するに錯覺であるが、藝術上の錯覺は社會の他の一切の制度がなしえぬところをなし、何物も

持つことの出來ない一つの暗示を示すものではあるが、實際上の社會組織や、社會の秩序は錯覺に基いては保たれない。從つて藝術家は實際的生活に於ては、必然的に悲劇的運命をまぬがれぬものであること、今日いふところのプロレタリアートの藝術も、つまりは生きるための努力と、それを生かさないところの組織の衝突から生ずる人間的奮鬪の狀態が表現されたものであること、此の世は比較的正確な科學的基調に基き、それに藝術的錯覺が相伴うてはじめて進歩するものである——透徹した氏の頭腦から一々明確に說き出されてゆく解釋は、私共の心に蟠めてゐた疑惑の曇りを鮮かに照してくれると共に、更に深い新問題に遭遇した驚きをもつて靜かに考へさせられるのでした。

次が爽洋的才維の冴えをもつて聞えた芥川龍之介氏で（三つの指輪）といふ題で、昔々のお伽噺をして下さいました。（これは本誌の八月號に四幕物の戯曲として載せられる豫定です。）それを持つてゐればどんな道術でも防ぐことの出來るといふ指輪を捨てた王樣と、誰にでも愛されるといふ貴重な指輪を捨てた王妃と、人の秘術を知ることの出來るといふ調法な指輪を捨てた宰相と、三つの指輪を捨てた三人の人達は、花畑の中で、ほんたうに幸福な生活をはじめることが出來たといふことでしたが、氏の落着と、才氣を通して聽衆の頭に快く閃いてくるものがありました。

本誌の催しのためにわざ／＼御上京下さつた厨川白村氏は（文藝上のリアリズムに就いて）といふ標題で、リアリズムにも色々な意味があるが、最も廣い正しい意味でのリアリズムは、失はれた人間性を恢復したい努力であつて、つまり人間性の眞實に徹しようとするのがリアリズムである。文藝は亦、人間性の本當のところを捉へて眞實に徹したいといふ努力であるからその意味で文藝はリアリズムである、と話され、人が神の座に入らうとすることも、機械化されることも共に人間性を亡すものであつて、失はれた人間味を恢復しなければならないとを切實に語られた氏の言葉の中には、若い聽衆の心に烈しく反感し、克明に印せられたものがあつたらうと思ひます。

最後に靜かに登壇された有島武郎氏は（描かれた花）のお話をなさいました。長谷川氏はさきに藝術は錯覺だと言はれたが、自分は錯覺といふ言葉の代りに藝術は人間の誇大性を現すものだと言はう。藝術家は創造するといふが、それは藝術家が自然の或る斷面を誇大することにすぎないので、僞りの藝術家は意識的にそれを誇大し、本當の藝術家は知らずしてそれを爲し遂げるものである。謂はば自然の幻覺が創造なのであるが、幻覺の持つ有頂天を無遠慮にも踏み躙るものが科學者で、地から上つて我々の心に住まつたものが科學であり、天から下つて我々の心に住つたものが藝術である。そして科學者は人間を裁判つて神に降伏したものであるといへる。何故なら人間は幻覺によつてのみ本當に生きることが出來るのだからと、美の幻覺を追究して、藝術に生きる尊さを語られるのでしたが、氏の言葉と人柄とが渾然として一つに融け、折柄電燈に照された聽衆の明るい額にも氏に迸る興奮の影がさやかに動いてゐるのを見ました。更に有島氏と長谷川氏との生活經驗の相異、立場の相異からくる藝術と科學に對する兩氏の思索についても考へさせられましたし、一つの表現をとつて空間に獨立してゐる藝術品に對する味ひと、人と言葉をどうしても切離すことの出來ない演壇の人としてその言葉を味ふ感じの相違についても考へさせられるのでした。

閉會は豫定どほり六時になりましたが、滿場立錐の餘地も殘さなかつた聽衆が、五時間前には持たなかつた何物かをそれ／＼の心にだいて、白いだんだら坂を下る人波を見送り——その足もとに夕靄が仄かにまつはるのを眺めながら、私共は今度の催しが決して無意義には終らなかつたことを深く喜ばずにはをられなかつたのでした。そして更に秋季に催す第二回の文藝講演會には、今から豫定を編んで、一層充實した、有意義なものとして讀者諸姉を迎へる意氣込みでをります。（T・N）

第三インタナショナルと其婦人部

山川菊榮

資本主義の勃興は世界中の國々の間の關係を政治的、經濟的、且つ技術的に緊密にした。紐育の金融市場の形勢や英國政界の空氣は啻に其一國のみの問題でなく、全世界の注意と興味を惹き、直接間接に世界各國の政界や經濟界に明暗の影を投じ、多種多様の反動を起させる。海陸を通じて交通や通信機關の發達はかうした形勢を益々助長し發展させて、世界中の民衆の思想や生活を、一國又は一都市の間のそれのやうになひ合せ、相互の利害關係を益々密接な複雜なものにして行つて居る。かうして密接にされ、複雜にされた國際關係は、一方では或は數個の政府の提携や同盟となり、或は種々の國際的協約となり、更に萬國赤十字、萬國平和協會、國際勞働會議其他無數の公私の團體となつて現はれると同時に、他方では國際社會黨、國際共產黨（第三インタナショナル）又は赤色勞働組合インタナショナル、アムステルダム國際勞働組合同盟の如き、勞働階級の國際團體ともなつて現れてゐる。

資本主義の諸國の間には國際團體の發達を促すやうな萬國共通の問題が數多くあるが、婦人問題も亦その中の屈指のものである。資本主義の文明は、貧富の隔絶によつて無產階級の家族生活を破壞し、女子と小兒の低銀勞働、結婚難、賣淫の隆盛等を促した。是等の結果としての道德上、肉體上の慘害は資本主義の社會それ自らの上に報ひて來て、その基礎を危くしてゐる。此容易ならぬ形勢に驚いた諸國のブルジョア階級は、是等の弊害の一部分を矯め、又はその表面を糊塗するために種々の姑息な僞善的な改善運動を起してゐる。多くの國際的婦人團體——婦人矯風會、婦人平和協會其他——は此目的のために發生したもので、其實際の性質は、國際的社交團體にすぎず、偶々一時的、皮相的な慈善救濟の事業に當るにすぎない。婦人の一般的な解放運動のために成立してゐる筈の婦人參政權同盟すらも、實質は萬國參政權運動の活力に充ちた中樞ではなくて、寧ろ參政權論者の國際的社交機關と

いはるべきものである。

かやうに在來存在した大多數の國際團體は、その基礎を資本主義社會の肯定の上に置き、その結束は極めて緩やかで、一朝事ある時に行動を共にするための團體であるよりも、事なき日に於て共に交驩するための團體であるといつた方が適切であつた。

ところが是等數多くの國際團體の中に唯一つ全世界に亘る行動の中心としての、極めて緊密に結合された國際團體がある。それは世界の無産階級運動の前衛たり、參謀本部たる第三インタナショナルである。

此第三インタナショナルは全世界の無産階級運動の中樞として、あらゆる問題に對して、最も精確な知識と、最も透徹した先見と、最も機宜に適した處置とを以て臨まうとしてゐる。そこで國際的な社會問題の一つである婦人問題に對しても、最も實際的な方策を樹てゝゐる。第三インタナショナル國際婦人書記局は全世界の無産婦人運動を統轄し、その團結を固め、その運動の指針となるために設けられたものである。

二

婦人解放といふ言葉は十九世紀來の流行語である。今日では多少進歩的な、自由主義的な色彩を有するいかなる團體も、いかなる運動も多かれ少かれこの標語に同意しないものはない。けれども單なる立看板は信用をおくに足りない。吾吾は、眞に婦人を解放するに必要な有效な實際的手段を離れて、抽象的な自由解放の流行文句に醉ふことは出來ない。そこで婦人解放の根本條件は何かといふ問題が起つて來る。此點に就てはブルジョア婦人運動は別として、社會主義諸派の中では、先づ第一に男女無産者を貧困の鐵鎖より解放せねばならぬといふ基礎條件に關して完全に意見の一致を見てゐる。けれども第三インタナショナルと他の諸派との違ふ所は、前者は單に此基礎條件を認めるだけに甘んぜず、何千年來、男子と異る生活、教育及び心理狀態を保持して來た現實の婦人の實際の心持、最も痛切な要求に適合した教育や運動の方法を講じて行かうとするに引かへ、後者の方は男女無産者は經濟狀態の改善によつて等しく解放されるといふ基礎條件を後生大事に守つてゐるだけで、それ以上に實際的、積極的な方法を講じてゐない點である。

第三インタナショナルは一九一九年二月に基礎をおかれたが、一九二〇年十一月、ロシア及びドイツ共産黨婦人の高唱によつて婦人書記局設置の議が纏まり、一九二一年七月及び一九二二年十一月、第三インタナショナルの世界大會と並んで、各國共産黨婦人部代表者の大會が開かれた。

婦人書記局は第三インタナショナル執行委員會に直屬し、

各國共產黨婦人部と聯絡通信の任に當り、世界的に無產婦人運動の根本方針を定め、其指導統轄の責に任ずる中央的組織である。上記の大會は、各國共產黨の内部に特に婦人に對する宣傳委員會をおくこと、其委員會は黨の執行委員會に直屬して、常にその指令の下に活動すること、婦人委員會には一名の通信員をおくこと、委員會は其國内の勞働婦人、職業婦人、主婦等の生活や思想に關する調査報告に從事し、其國々の實況に適した運動方針を樹立して、執行委員會と常に合議協力して之を實行すること、又これを第三インタナショナル婦人書記局に通信報告し、國際的に其運動を鞏固にすること等を決定した。第三インタナショナル婦人書記局は是等の各國の報告を基礎として根本方針を討議し、各國に適切なる忠告や助力を與へ、國際的問題に對して一致的行動を執る準備をしてゐる。

三

婦人書記局の任務は大體上述のようなものであるが、折角の計畫は出來ても、これを實行に移すことは中々容易でない。第一には各國の無產階級運動の内部に於ける、婦人運動に對する偏見がある。卽ち舊い社會主義運動の傳統によつて、男女は同一條件によつて解放されるものだから、特に婦人に對する啓蒙運動の必要はないといふ意見がある。然しこの說は、實際に運動を進めた上の經驗に照して、餘りに抽象的な迂遠な說であつて、プロレタリア大衆の一半たる婦人を除外しておけば、其運動は半身不隨となり、行動の上に事毎に支障を來し、本來味方たるべき者を敵の陣營に追ふ結果となることが明白になつたので、理論的にも實際的にも漸く力を失つて來て居る。

所が今一つの、一層重要な難關は、無產婦人自身の間に婦人部を組織し運用して行くだけの才幹と活動の能力とが、餘りにも缺乏しすぎてゐる點である。婦人委員會には勿論男子も參加し得るのみならず、男子の參加することは寧ろ望ましいことだとされて居る。然しそれにも拘らず、婦人自身の活動が基礎とならねばならぬことはいふまでもない。所が歐米先進諸國に於てはブルジョアの婦人運動が發達して居るので、有爲な婦人の多くが其方に吸引されて居つて、無產階級の運動がそのために厭おされがちなことが一つ、又無產婦人は極端なる貧困と無智とのために、男子に伍して組織的な運動に參加する餘裕が乏しいために、其中から眞に信頼するに足る闘士を發見し養成することが容易でないことも重要な原因の一つとなつてゐる。更に後進諸國では、ブルジョア婦人運動も發達してゐない代り、いかなる種類の婦人運動をも發達させるだけに資本主義的文明が成熟して居らず、各階級を通じて婦人は中世紀的な專制的な家族制度に壓伏されてゐる

といふ困難がある。

此間に唯だロシアだけは、既に無産婦人解放運動のあらゆる障害を打破し去つた、社會革命後の社會として、特殊の例外を作り、政府と共産黨とは協力一致して、婦人の教育や組織は勿論、母性保護、家庭勞働の輕減其他の法律上、政治上及び實際上の施設によつて着々婦人の事實上の解放を進めてゐる。

婦人書記局は西洋と東洋とで婦人の地位や生活に甚しい距離のあることを認めた。そこで資本主義が成熟し、或程度までデモクラシーが發達し、婦人が或程度まで家族制度の羈絆と男子に對する隷屬から放たれて、資本對勞働の戰ひに直接參與してゐる西洋では、共産黨又は勞働組合に婦人の加入をすゝめ、共産黨を通じての婦人參政權運動、選擧運動に力を入れてゐるが、資本主義の十分又は殆ど發達してゐない、手工業や小農業、牧畜業を主要產業とし、多くは全然無智文盲な、中世紀的な家族制度の奴隷となつてゐる東洋婦人に對しては、家族制度と家長專制とに對する抗爭を以て解放運動の出發點として居る。また東方民族のためには、昨年度に於てチフリスに一回、バクーに一回近東婦人大會が催され、同じく昨年一月にはモスコーに極東婦人大會が開かれた。東洋婦人の中で是に參與しなかつたのは日本だけである。

かように東西によつて婦人運動の目前の戰術を異にし、その事情を異にしてゐる上、モスコーに婦人書記局をおいては、西洋諸國との敏活な聯絡がとれないので、ヨーロツパ諸國との接觸のためには、婦人書記局の西歐部が伯林に移され此處から婦人機關誌『國際婦人』が發刊されて居る。書記局の東洋部はやはりモスコーにおかれて、東方婦人の運動の中心となつて居る。

既に與へられた紙數を超過してゐるので、各國の運動の實況を報ずることが出來ないのは遺憾であるが、第三インタナショナルに於ける婦人の活動の概略は前記のようなものである。要するて、此運動は婦人の大衆を無產階級運動の陣營に引きつけて、全無產階級の解放による婦人の全き獨立をかち得ようとするもので其目的と其理論に於ては飽まで徹底的非妥協的であると同時に、實際運動の上に於ては、無產婦人の現實の生活や心持を土臺として、一見些々たる日常生活の卑近な問題を捉へて彼等に接近し、その痛切な利害に觸れることによつて、彼等の間に階級意識を目ざまし、その組織を促して、全無產階級の國際的團結の鞏固な一聯鎖にしようとするものである。その運動は、國際的無產階級の問題としての婦人問題を、國際的な運動によつて、幾千年來の貧困と性的不平等との二重の鐵鎖から婦人を徹底的に解放しようとするものである。



室伏高信

◇世界の政治の舞臺

日本では加藤首相が居直りを宣言しました。佛蘭西でもポアンカレイが辭表を引込めました。英國ではボナ・ロウ内閣が仆れてボウルドキン内閣ができたがボナ・ロウ内閣もボウルドキン内閣もともに保守黨内閣であることに變りはないから、これも一つの居直りだといふことができましよう。

世界の資本國を通じて政治が反動的傾向を強めてきたことは非常に興味ある現象だと思ひます。政治の反動的傾向は政治の不安定を證據立てゝゐるのです。やがてきたるべき大なる建てなほしのための序曲であるのです。その序曲の吹奏者として加藤友三郎・ボアンカレイ、ボウルドキン、クノウなぞの名前を私たちは見るべきだと思ひます。

◇生活不安と思想不安

おしなべての方面に生活不安と思想不安とが滿てゐます、私たちの時代が前代に比べて財的に貧しい時代であるかどうかを私はいふてゐるのではない。今日の時代は前代の如何なる時代よりも富める時代であるかも知れない。プロレタリヤでさへも前代の奴隷に比べてどれだけ貧しいかを私たちは立證することはできないのです。それにもかゝわらず私たちは今日の時代のおしなべての方面に生活不安のみなぎつてゐるのを見ます。前代の如何なる時代にも見ることのできない生活不安を見よ。そしてそれとゝもにまた前代の如何なる時代

にも見ることのできない思想不安とを見よ。

今日が世紀末の時代であることを疑ふものはないでありましよう。世紀末的な懐疑・不安、動搖、焦燥を見のがして、私たちは現代に何ものを見出すことができましよう。

生活不安はブルヂョア時代の特質だといふことができます。人間が解放されたといふことは人間の腰につけられてゐた動產的な鐵鎖が斷ちきれたことであるが、それとともにもつと根本的な鐵鎖が私たちの首に卷きつけられてゐたことが神經のにぶい人間にもだん／＼と分つてきました。人間の神經はたしかににぶかつたのです。今日では人間の神經が高ぶつてきました。それがブルヂョア時代の特徵だといふことができます。生活不安が人間の神經を鋭敏にしてきたのです。主人から解放された人間は資本家から搾取されるのだと社會主義の理論家がいつてゐます。私はこの理論を間違だといはうとするのではない。私のいはうとすることは資本家の搾取といふことよりはもつと／＼深いところに現代社會の病が存在してゐるといふことであるのです。私たちはたゞ資本家といふ一個の人間の我まゝによつて支配されてゐるだけではないのです。私たちを支配してゐるのは決してたゞ資本家であるのではない。資本家にそんな巨大な力があるのではない。資本家でもない、政府でもない。見えざる神が私たちの首を締めつゝあるのを見よ。現代を支配する機械的な作用がそれであるのです。

資本家が勞働者を解雇する。何時でも解雇することができる。そこに勞働者や、そして月給取の生活不安があることを私は否認してゐるのではない。しかし何故に資本家が勞働者を解雇する？何故に多數の失業者ができる？失業の最大原因が不景氣にあることは何人も首肯することができましよう。その不景氣は何人が製造しますか　不景氣が失業の原因なら、勞働者を解雇するのはこの「不景氣」だといふことになりましよう。その不景氣を希望する資本家がありましようか。資本家のやうに景氣を氣にするものはありますまい。その景氣不景氣は如何なる資本家もどうすることもできない。それはどこからともなく、風のきたるがごとくに來ます。その風のごとくにきたるものによつて私たちは生活を左右されてゐるのです。それがブルヂョア時代であるのです。それが文明であるのです。

獨りプロレタリヤがこの風のごときものによつて支配されてゐるのではない　ブルヂョアだつて同じことであるのです、月給取りは最も多くそうであるのです。何故に月給取りが最も多くそうであるかを考へて下さい。知識階級が「知識」をもつてゐるからであるのではない。知識階級のできたこと自身がその理由の最もよき說明者であるのです。「知識」を賣物にすること自身が世紀末の現象であるのです。昔からの文明史

を見よ。知識を賣物にする職業のできた時は文明の爛熟した時である。そして一つの文明が正にその終りに近づいた時である。知識階級の存在は文明の末期現象であるのです。こゝに知識階級――月給取りの存在が生活不安の最もよき象徴であるのです。月給取りと名づけられた不幸な人々の神經の焦らだつてゐる顔付をお覧なさい。そこに文明の末期を見ることのできない人は詩人でもなく豫言者でもありえない。

生活不安は、私たちが目に見える人によつて支配される時よりは目に見えざる人によつて支配される時により多く根本的である。何故ならその見えざる神の魔の手が何時如何なる處からくるかを私たちは知ることができないからであるのです。人間の「知識」は非常に進歩したといひます。しかもこの憐れむべき「知識」は、私たちが何ものによつて支配されつゝあるかさへも證明してはくれないのです。こゝに生活不安は思想不安を伴つてきます

ニイチエのツアラツストラがいふたように神は死んだのです。宗教家や、神學者や、若しくは宗教小説を書いてゐる人たちは死せる神を復活せしむべく彼等の努力を費してゐます。しかも死せるものは甦ることを知らない。「知識」の木の實を食べた人間の世界にこの一度死せる神は永久に蘇生することはできないであらう。そしてまた新しい神は起つてはゐない。人々は迷ひ、疑ひ、惱み、焦り、浪々として市に彷徨てゐる。それが文明なのだ。文明の爛熟なのだ。大きな建てなほしのきたるべき象徴なのだ。

詩人と豫言者の出づることを、私たちの心は待つてゐる。

◇結婚か職業か

職業を求める女の著るしく增加してきたことは今日の日本の最も顯著な現象の一つである。東京市の中央職業紹介所に四、五の二ケ月間に職業紹介を求めてきた女の數だけで二千人に上つたといふことです。その數はだん／＼と增加して行くことでありましよう。職業婦人の階級の存在することもブルヂョア文明の一つの大きな特徴である。文明は常に婦人の世界に賣淫と職業婦人とを與へてゐるのです。文明が爛熟するに從つて賣淫と職業婦人とが正比例的に增加して行くのです。紐育に、倫敦に、伯林に、巴里に、世界都市の街頭を行く婦人の殆んど凡ては賣淫婦人か職業婦人であるのです。或は賣淫婦人にして職業婦人を兼ねてゐる女であるのでせう。

賣淫婦人も、職業婦人も、直接には結婚難の原因から生れる。知識階級の結婚難は文明の通有性である。紐育、倫敦、伯林、巴里に、知識階級の大部分は結婚難に襲はれてゐる。從つて中等階級の婦人がおしなべて結婚難に陷つてゐる　彼等が理想の結婚を求めてゐるからではない。彼女等が女の經

濟的獨立を求めてゐるからであるのではない。彼女等は經濟的獨立を强制されてゐるです　職業男子は最早や女性を結婚によつて永久的に隷屬されぬことが經濟的に不可能になつてきたのです。こゝに、幸か不幸か婦人も亦職業男子への經濟的從屬から解放されて、職業男子と並んで、職業婦人となつたのです。若しくはその群からさへ自發的に或は非自發的に離れて賣淫婦人となつたのです。こゝに職業婦人と賣淫婦人とはたゞ一歩である。

女が結婚から離れて職業に行くことは女が女の「性的資本」―Sex-Capital―を賣ることによつて生活してきたことから勞動または知識を賣ることによつての生活に變つてきたことであるように見える。また何ほどかまでそうでもある。しかも職業婦人が職業と性生活とを取りかへたのでないことは勿論である。結婚は無くなつても性生活は殘る。フロイド一派のいふようにそれが最も根本的な生活力の一つであらう。職業婦人の性生活はどうなる？どうなりつゝある？結婚から職業への轉化は性生活の××××××と行くことではないか。こゝに既成制度の危機は存在しないか。

しかも職業婦人にとつての第二の危險がこゝに横はる。現代社會制度のもとでは女は男と同等に評價されない。女のなすところの勞働は男のなすところの勞動と同等に買はれない。男の世界では女は男の敵ではないからである。男でさへも漸くに生活を支へてゐる。そのうへに女は虛栄によつてつられる。こゝに職業婦人は男子への經濟的全從屬から解放されたにしても、尚ほ半從屬を止むなくされるのである。この經濟的半從屬によつてまた性的に半從屬を餘儀なくされるのである。それがしばしば性生活の一時的從屬となる　それが職業化して賣淫となるである。

職業を求める日本の女性の多くは職業婦人となることを望むのではなくて、たゞ結婚までの一時のつなぎとして職業を求めるといふことである。また從つてよき結婚さへあれば何時でも職業を去る人たちであるといふことである。或はさうであらう。今日の日本では結婚はそれほどに困難ではないかも知れない。文明の程度がまだ幾分かは低いからであるしかもそうした時代は急速に經過しつゝありはしないか　事務所は、監獄だとは、バアナアド・ショウのいふたことであつた。事務所通ひを一度始めたものが容易にそこから拔け出ることのできない世界的の現象である。私たちの日本もまた正しくその時代にと進みつゝある。中等階級の女は、その望むと望まざるとにかゝはらず、大部分が職業婦人となるであらう。そしてこの職業の「監獄」から再び逃れ出ることはできなくなるであらう。こゝに新らしい性生活の形式と原理とが要求されつゝあるのである。

創作



出世五人男（長篇小説）

宇野浩二

やがて、赤木阿珂丸が入井の家に引越して來て、一週間の餘も經つたことであつた。

女中のお蘭の話には、當時この家の八つの貸間は悉く滿員で、中には一部屋に友達同志二人で住んでゐるものもあつたから、合はして十人以上の人間がこの同じ屋根の下に寢起きしてゐた譯であるのだが、阿珂丸は或朝手水を使つて、折から廊下に足音がしたので、大急ぎでコップと楊子を入れた洗面器を下げて、自分の部屋に歸らうとした途端に、一人の色の白い、小柄な、一見學生らしくない男と廊下の曲り角でちらと顔を見合はした事が一度ある切りで、その外は唯人々の色んな足音や聲やを障子越しに聞くだけで、一人として同宿の人間と顔を合はしたことがなかつた。無論、それは偶然のことではないので、彼は小便に立つのにも、顔を洗ひに行くのにも、他の人間と鉢合せをしない用心の爲に、豫め十分も掛つて部屋の中から外の氣配を窺つてから、一々鼠のやうな敏捷さで、部屋を出て部屋に歸つて來た。まして、彼は晝間の明るいうちに決して表へ出たことがなかつた、稀に日が

暮れてから錢湯に行つた次手に、ぶらりとその邊の夜の町を、それも妙にこそ〳〵と廻り歩いて來る位のものであつた。だが、元よりそんな風に暮すことは決して彼の持前の性質ではなかつたので、彼は心の中で次第に人戀しい思が沸騰して來るのを抑へるのに骨折つた。彼は屢々夜の散歩の時、足を延ばして、あの市中の町へ通じてゐる廣い坂を下りて、彼自身が十日前までその中で暮して來た、現に今も何人かの友達が賑かに飲み且つ歌つてゐるに違ひないところの、神樂坂の三階建の下宿屋を尋ねて見ようと思つたことが、幾度あつたか知れなかつた。或時などはその坂の中途まで歩いて行つたことさへあつた。が、彼は先達てあの三階建の下宿屋を別れて來る時に、友達に向つて斯う言つたことを忘れる譯に行かなかつた。「僕は當分靜かになりたいから、引越して行くよ。そこで少し頭と身體とを休めて、それからゆつくり勉強したいと思ふんだ。で、諸君にもわざと所を知らさないで行くよ、そのうち又寂しくなつたら出かけて來るから。」すると、友達の一人が、「まあ、それもいいだらう。が、三日も續くかね?」とひやかすやうに言つた。今、その記憶からでも、あれからこんなに間もなくの今、のこ〳〵と出かけて行つたのでは、見す見す兜を脱ぎに行くやうなものだと言ふ反省が、然しそんなつまらない意地を張ることは無意味ぢやないか、と打消すところの別の考に幾度か腰を折られながらも、矢張り彼をそこから引返させるのであつた。

しかし、晝間の表の景色はどんなだらうな、と彼は屢々考へることがあつた。それは丁度長い間病床に就いてゐる者が、たとへ半町でも一町でもいゝから、明るい日の當つてゐる、八百屋や荒物屋の店の並んでゐる、小僧の自轉車や紳士の俥やが走つてゐる町を、しみ〳〵と歩いて見たいと憧れる氣持に似てゐた。だから、彼は時々そつと立上つて、廊下に面した障子の一番隅の方を一二寸ばかり細目に開けて、外の樣子を眺めることを樂んだ。すると、彼の立つてゐるところから、廊下と狹い庭とを隔てゝ、低い申譯ばかりの塀があつたが、それは部屋の中に立つてゐる彼の目を遮ぎることが出來なかつた。そしてその塀の向うが空地であることが、一層彼の眼界を廣くすることに役立つた。空地の果には一かたま

りの低級な借家建が並んでゐた。彼の方から見るそれ等の建物は大抵側面か裏側かになつてゐるので、子供の襁褓がその主なるものである洗濯物の林とか、共同井戸端の一部とか、開け放しにされた裏木戸とか、自然そんな所に出没する女房たちとか、子供たちとか、御用聞たちとかゞ見られた。そしてそれ等のものは決して美しい眺めとは言へなかつたが、然し障子の隙間から人に知られぬやうにこつそりと覗いてゐる彼には、それ等が何とも自由な風俗畫のやうに、而も可成りの距離を隔てゝゐるだけに、一種藝術的に美化されて見えるのである。更に、少し大膽に障子の隙間を擴げて、斜めの方角に目を放つと、そこには空地の彼方を走つてゐる往來が見透かされた。それは裏町のことなので、滅多に人の目を引くやうな通行人もなかつたが、それでも近くにある女學校の生徒とか、近所の娘とか、何もそんな女に限つたことはないが、兵隊にしても、百姓にしても、さういふ往來の人を見ることとそのことが、十分彼の目の保養であつた。——あゝ、通る。一寸奇麗な女だな。おや？　見たことのある女だぞ……なアンだ、お蘭ぢやないか！……

空の色も、氣がつくと、春らしく多少澱みを帶びて來たやうに見えた。然し、日が落ちてまだすつかり暮れ切らない空に、最早や二つ三つと數へられる星の光は、未だ冬らしい色に輝いて見えた。さて、五燭の電燈がともる。さうして部屋の中に明りがつくと、彼は障子のどんな隅にも立つてゐることが出來なくなつた。何故と言つて、彼の影法師がそれに映るからである。彼は、然し、なるべく彼の行動がそこに映る機會を少なくする爲に、電燈を出來るだけ障子に近い場所に紐に依つて吊り下げた。それは又晝間から敷き放しにしてある彼の寢床の位置を變へないで、本を讀むことや、原稿紙に向うことが出來る爲にでもあつたのだつた。それにしても、彼の頭と障子との間は三尺と離れてゐなかつた。そしてその障子の向側は即ち一日に十何人の人が何度となく往復に踏んで通る廊下に外ならなかつた。が、それにも彼はいつとなく馴れてしまつた。

「御免なさい、赤木さん、御免なさい、」と或時、もう九時頃でもあつたらうか、聞き馴れない聲が、その障子の外に、そ

れ迄に廊下を歩いて來た筈のその聲の主の足音に氣がつかなかつた阿珂丸の耳をびつくりさせた。彼は暫く自分の耳を疑つた。

「赤木さん、お居でですか？　お差支なかつたら、あの、一寸……」と聲はつゞいた。それは太い、そして他を憚るやうな聲だつた。

「どうぞお這入り、」と阿珂丸は寢床の上に坐り直りながら答へた。そして心の中で、誰か知らないが、誰でもいゝ、――實際、彼はこの家に引越して來て以來、知る人にしろ知らない人にしろ、人の訪問を受けたのはそれが初めてだつたので、誰かと曾つて見たい、そしてどんな話でもいゝからして見たいといふ思ひが、その突然の訪問者の出現と共に、むく〱と湧いて來たのを感じたのである。

そこで、彼の聲に應じて、「御免なさい、」と言つて這入つて來たのは、見上げるやうな大柄の、然し見すぼらしい裝をした、手入れをしない髮の毛の汚ならしく延びた、色の黑い、四角な顏の、それで鯨のやうな目の小さい男であつた。が、色の黑い男に有勝な、眞白な齒を見せる笑ひ顏は、彼が性質の善良さを遺憾なく表現してゐるやうに思はれた。彼は部屋の中に這入ると、あたりを憚るやうな樣子で、大急ぎで障子を閉めて、「あのど、どうぞ寢てゐて下さい、」と言つた、幾分吃音でもあるらしかつた。

「私はその……」と彼がつゞけて言ふには、「私もその、や、矢張りこの家にゐる者ですが、少し、わ、譯がありまして、なるべく皆さんと顏を合はさないやうにして居りますんで……」

見たところ、彼は學生とも、無論勤人ともつかない、多分元學生とでも言はれる身分の者であつたらうか。阿珂丸は如何に友欲しく思つてゐた折柄だつたとは言ひながら、二三分間この男と向ひ合つてゐるうちに、これは餘り歡迎すべき訪問者ではなかつたなと心で後悔した。その男の裝の汚ならしさは言ふ迄もなく、皮膚の色と言ひ、顏の表情と言ひ、何か

斯う乞食に近い或るものが、阿珂丸に好い感じを與へなかつたのである、發音が吃音であることも、この際彼に尊敬の念を起させない一つの條件となつたに違ひなかつた。

「僕も來てから、もつとも未だ十日にもなりませんが、然し誰とも近附きになつてゐません、」と阿珂丸は無愛想に答へた。

「で、あなたはどの部屋に居られるんですか？」

「こ、この一番奧の、隅の部屋なんですが、」と相手は何故か躊躇した風で、「で、ですが、私はその部屋を借りてゐる人に厄介になつてゐるんです。……」

「どうしてなんです、部屋がないんですか？」と阿珂丸は聞いた。

「いえ、か、金がないんです、」と相手はその不細工に大きな身體を持て餘すやうな恰好で、「御免なさい、」と横坐りになつて言つた。「…僕、あなたにお願ひがあつて來たんです。あなたは小說家でせう…？」

「……」阿珂丸は嬉しさが半分と恥かしさが半分とで、目をぱちくりさせながら、「や、なアに……」と然し明らかに相手の言葉を肯定したやうな口吻で應じた、そして心の中で矢張り今迄通りの勉强をつづけて、本當に小說家になるのも惡くはないな、と考へた。さうだ。養豚事業や畫かきよりも、矢張り小說家の方が心地がいいぞ！……

「私は今度そ、その小說を書いて見たんですが」と訪問者はつゞけた。「いや、然し未だ半分しか出來てないんですが、それをあなたに見て欲しいんです。」

言ひながら、訪問者は懷中からぼろ〳〵になつた雜誌を取出した。一瞬間、阿珂丸は「おや、この男はもうそんな雜誌になど物を書いてゐるのか知ら？ すると俺よりは位が一等上の譯だが……」と思つて多少畏敬の念を感じた。そこで、

「あなたは一體これ迄どういふ事をして居られたんです、學校は？」と阿珂丸は聞いて見た。

「私は三年前に田舍の中學を出た切りです、それで、畫をやるつもりだつたんです、と訪問者は答へた。

「なに、畫？　畫つて、あの描く畫のことですか？」と阿珂丸は驚いた樣子で聞いた、彼は彼自身とこの男とが小說といひ、畫といひ（ことに依つたら、養豚もやり兼ねないぞ）同じやうな志を立てゝゐるのに、少なからず感動を覺えた。が、なアに、こんな男にどれ程の事が出來るものか、と直に彼は持前の輕蔑癖で考へた。

「あ、失禮しました、自分のな、名前を名乘るのを遲れまして……」とその時訪問者は言つた。「私は厨戸夏生と言ひます、厨戸……」と彼はそこで自分の名前を疊の上に指で書いて見せた。「ところで、その小說ですが、」と彼は膝の上の例の古雜誌を改めて右手に持上げて、「その小說は、實は、」と聲をひそめて、「この家の事を書いてあるのです、」と言つた。

「この家つて、こゝの家のことですか？」と阿珂丸は忽ち好奇心を刺戟されて膝を乘り出した。「ぢやあ、あなたはこの家のことをそんなによく御存知なんですか？　その小說といふのを拜見したいもんですね。」

「いや、それには未だよく書いてないんですが……」厨戸は古雜誌を一寸抱くやうにして、「これは後で見てもらふ事にしませう。赤木さん、この家の人たちはみんな、鬼、鬼ですよ、」と忽ち興奮した口調になつた。

「どうしてこの家の人たちがみんな鬼なんです？」と阿珂丸は膝を乘り出して相手の話を吊り出すやうに聞いた。

「いや、そ、それには私の履歴をお話しなければなりませんが、」と厨戸は始めた。

だが、私はこゝでこの牛のやうにのろ〳〵した、餘り頭腦の組織のよくないやうに見えるところの、而も吃音家の厨戸の話を、ありのまゝに追從して行く根氣を持たない、と言つてそれを全然省略する譯にも行かないから、彼に代つてその概略を簡單に傳へると、彼は今から四年前に故鄕の茨城縣の中學を卒業すると、畫家になる爲に東京に出て來て、溜池にあつた洋畫の研究所に這入つて勉強しながら、その翌年とその翌年との二度、官立美術學校の入學試驗を受けたが、二度とも落第したのである。そして去年の春二ケ月餘りの間、彼は流石に意氣甚だ銷沈して、國の父の家に歸つてゐた時、ふと或女と戀に陷ちたといふ事件が起つた。彼の父はその地方で相當に名を知られた漢學者であつた、で、さういふ種類の

人たちが大抵さうであるやうに、彼も亦平生嚴格な修身處世觀の持主であつた。だから、三男の夏生が二度まで入學試驗に落第したことさへあるのに、さういふ不義を働いたといふ事が耳に這入つた時、彼は老の目に涙をにじませた程憤慨して、その場で彼に放逐の命令を發した。

で、夏生は女と共に手を取つて東京に出て來て、「何とかして二人位食べて行けない事はありますまい。私も人の裁縫の仕事をするとか、工場へ通ふとかしても、暮しの足しをこしらへませう。あなたは、あなたは……繪をかく事でも何とかしてお金にならない事はないでせう、何とかすれば……」と女は聞いた。「な、ならない事もないよ……さうだ、圖案かきでも、ペンキ屋の下仕事でも、何でもするよ。そしたら、食ふ事位はとれない事はないだらう、」と彼は然し不安な調子で答へた。「まあ、でも、今のところは私のとあんたのと合はして二三ケ月位やつて行くだけはありますから、それで小さい部屋でも借りて、出來るだけ約しくやつて行きませうよ、」などと語り合ひながら、來かゝつたのが、丁度その前の日そこへ引越して來たばかりの、この入井の家の前であつた。

元、入井の人たちがその家に越して來る前までは、そこには持主の家族が空いた部屋に親戚の者を二人下宿人に置いて、小ぢんまりと暮してゐたのであるが、――もつともその時分は今の第三號の部屋のところ迄の廣さでしかなかつた、それを現に見るやうな下宿屋向きに建て増して、と言ふのは、今度息子が京橋の方の會社に勤めるやうになつたのを機會に、そこへ通ふのに便利のいゝ場所に借家を見付けて越して行つて、これ迄の持家を人に貸すことにしたのである。だから、入井の一家がそこへ引越して來た時は、初めてそこへ家を建てゝ下宿屋を初めたのと同じ譯で、一人の附屬の下宿人もゐなかつた。そこで、引越して來た翌日、早々表の門の傍の塀に「貸間あり」と認めた半紙を張りつけたところが、それから三十分と經たなかつた時に、第一番にそれを尋ねて這入つて來たのが、即ち厨戸と彼の情人である内縁の妻の輕子とであつた。

その時、彼等を案内したのは主人のお上であつた。彼女は不案内に始めた商賣が、貼札をすると、餘りに早速客がついたのに子供のやうな喜びを感じながら、いそ〱と彼等を迎へた。
「お二人ですか？」と彼女は尋ねた。
「えゝ、ふ、二人で……」と厨戸は後目たさうな調子で、「二人では、あ、あのいけませんか？」
「いゝえ、結構です。おほゝゝゝ」とお上は美しい顔に似合はず、皺枯れた聲に卑しい笑ひ聲を添へながら、「ぢやあ、一番奥の部屋がいゝでせう。」
そこで、彼等はお上の後に從つて、廊下傳ひに第二號第三號の部屋の前を素通りにして、それから例の便所の前の直角に二枚嵌まつてゐる不思議な扉のある場所を過ぎて、そこからは急に光線が缺乏してゐるのと、兩側に部屋が並んでゐるのとで、恰も船室の路のやうな感じのする廊下を、突當りの左側の第六號といふ部屋に案内された。それは六疊敷の陰氣な、じめ〱した部屋で、廊下の入口と、北側の窓とに障子が嵌まつてゐる外は、壁と、押入と、床の間と、――要するに、東京の一般の下宿屋の六疊の部屋に最もよく見る體裁のものであつた。
「この部屋は、」とお上が言つた。「便所が近くですから、便利ですよ。」
「はあ、何處のところです？」輕子が聞いた。
「こちらです、」とお上は部屋の外に出て、その方を指しながら、「そして、此方が非常口になつて居ります。」
「で、これで幾らでございます？」と輕子が聞いた。
「間代が四圓で、賄の方がお一人前七圓五十錢といふことになつて居ります。」
「あゝ、さう、」と輕子は半分口の中で言つたが、彼女は村の小學校を卒業すると、近くの町の師範學校に二年ばかり行つてゐたが、そのうち後から後からと弟妹たちが増えて來たので、家庭の都合上學校を半途で止めて、後は家事の手傳ひと、

機を織ることに暮してゐた。從つて東京の下宿屋がどんな制度であるかといふ事は全然知らなかつたので、「それでは、賄の方は入りませんから、部屋だけ貸してもらひます。」ときつぱり言つた。

「はア、」とお上は頓狂な聲で答へた。彼女はそんな部屋だけを貸すなどといふ考へは少しもなかつたのであるが、未だこの新しく始めた商賣の應待に全く馴れてゐなかつたので、夢中で斯う承諾したやうな返事をしてしまつたのである。「自炊なさるのですか？」と然し流石に不滿さうな顏付で聞き返した。

「あの………」とそこで厨戸は何か言はうとしたが、

「えゝ、」と輕子は側から引取つて、「部屋だけ貸してもらふ事にして、停車場に置いてある荷物をこれから取つて來て、早速今日からお世話になります、」斯う立て續けに言つて懷中から蟇口を出して、五十錢銀貨を四枚、手附金としてお上に渡した。

その時分から、お上は心の中で、謂はゞ商賣の口開けからこんな不覺な應待をして、こんな餘り嬉しくない客を受付けてしまつたことに、明らかに後悔を感じ出してゐた。が、何を言ふにも開業早々のことで、一體客がどの位集まるものだか見當が付かなかつたので、實は先程からも幾度断つてしまはうかと思つたか知れなかつたのだが、結局輕子の單純な、壓迫的な調子に負けてしまつて、漸く手附の金まで受取つたので、「ぢやあ、受取を？」と幾分不機嫌な顏をして聞いた。

「えゝ、どうぞ」と相手は然し平然として求めた。

その時、廊下に足音がして、同時に、

「姉さん！」と呼ぶ若い女の聲がした。それが花子であつた。が、足音は二人らしかつた。

「はい、」とお上は返事をして、「では、受取は彼方で、」と厨戸等に向つて言ひながら、先に立つて部屋を出た。

見ると、花子の後から、脊のずんぐりした、髯だらけの、達摩のやうな顏をした書生體の男が歩いて來た。

「お客樣？」とお上は花子に向つて、「さう。じやあ、私が御案内するから、お前、この方に手附金の受取をお上げしておくれ、二圓だよ。」

そして、この時厨戸夫妻と入れ違ひに部屋を求めに來たのが、己武良夫といふ男であつた。己はこの時代の學生としても最早や一昔前の遺風としか見られなかつた程、武骨な風采をしてゐた。彼は洗ひざらしの染絣（當時ニコ〳〵絣と呼ばれたもの）の着物を着て、中學時代からのものであるらしい、頂邊に茶褐色の日の丸型のしみのついてゐる學生帽を被つてゐた。が、それにはどうしたのか、紋章が附いてゐなかつた。體格は俗に脂肪肥りといふやつで、それに背が低かつたので、一層不恰好に見えた。顏は丸くて大きくて、目が細くて小さくて、それに鼻と言へば、忘れられてゐたのを、後から速製につまみ上げて造られたとしか思はれない程の存在を表現してゐるに過ぎなかつた。が、それ等の顏の空地を髭が埋めてゐる事と、分の厚い近眼鏡をかけてゐる事とで、一種の威嚴と調和とが保たれてゐるのは事實であつた。が、この男に就いて、最も著しい特徴をなしてゐるのは、そのやうな體格にも拘らず、頭の尖から出るやうな、羅宇屋の笛のやうに聞えるところの甲高い聲であつた。

「僕は一番惡い部屋でいゝんだがね、」と己はその甲高い西國訛りのある聲で言つた。物を言ふ度に、その細い近眼の目をくしやくしやさせるのが癖であつた。

「おや〳〵、」とお上は心の中で思つた。「開業早々、これは又どうしたといふのであらう、斯うしてお客の來てくれるのはいゝが、そろひもそろつて、まあ呆れたけちな人ばかりだよ。もつとも、書生つ坊と言ふ位だから、下宿屋のお客なんてみんなこんなものなんだらうか？」

「別にいゝ部屋惡い部屋と言つてありませんが、六疊が四圓、四疊半が三圓となつて居りますんですが、」とお上は言ひながら、氣がついて、「あゝ、三疊が一間あります、ここです、」と彼女は今厨戸たちに見せた六號室の向ひの、第九號といふ部

屋に己を案内した。「こゝなら二圓五十錢にしておきます。」

「六疊が四圓なら、三疊は二圓でいゝぢやないか？」と己はよくも部屋の中を見ないで言つた。

「おほゝゝゝ。でも、矢張り斯うして一間の押入もついて居りますから、」とお上は辯解した。

「ぢやあ、それはいゝがね、」と己が言ふには、「賄を特に安くしてくれないかね、その代り僕は外の人たち並にしなくてもいゝから、朝晝晩漬物でいゝよ。まあ、晩だけ鹽鮭ぐらゐつけてくれると結構だが、どうだね？」

「えゝ、ですけど、まさかそんな譯にも行きませんから、」とお上は言つた。「七圓五十錢といふのは、特別勉强してゐるつもりなんですが……」

「僕は本當に漬物だけでいゝんだよ、」と己は主張した。「面倒臭かつたら、どうだね、飯だけでいいよ。間代が五十錢として、それぢや全部で八圓として呉れ給へ。いゝだらう、儲けるのは外の客から儲けたらいゝぢやないか？」

「えゝ、ですけれど……」とお上は言つた。一體彼女にしても女性獨特の圖々しさのみならず、それ以上の厚かましさを持つてゐる事では、決して人に引けをとる者ではなかつた。だが、この時は何しろ商賣の最初の日であるといふことが、彼女を不斷の半分のその又半分にも氣を弱くしてゐた。實際、それはその翌日からの彼女の客の應待振りを見ても十分に分ることであつた。だが、その時ばかりは、先の輕子といひ、今の己といひ、すつかり相手に壓迫されてしまつた。「ではあなただけさういふ事にしておきませう。その代り外の方には默つてゐて下さいね。若しそんな事が知れて、皆さんにさういふ風にしてくれなんて言はれますと、私の方では御飯がいたゞけなくなりますから。ね。その代り・一切面倒臭いことは止して。それでは三度とも御飯だけといふのも餘り何ですから、お香のものだけをお附けするといふ定めにしておきませう。どうか、その代りこの事は外の方には決して吹聽しないで下さいね。」

「そんな事はいひはしないよ。」と己は答へた。實際、その後この男はずつと後になつて、必要上厨戸に話した外、他の下

宿人たちとは毎朝洗面所で顏を合はしても物を言ふことさへなかつた位だから、お上の心配は全く無用のものであつた。

それは一昨年の春のことであつた。ところで、厨戸夫妻や己やが來てから五日と經たないうちに、入井の家の八つの貸間は悉くふさがつてしまつて、而も初めにお上が案じた程のこともなくて、他の六つの部屋はそれ〲世間普通の書生で埋まつた。が、さうなつて見ると、一層彼女は厨戸たちや己にあんな不利益な條件で下宿さしたことを頻りに後悔したが、と言つて今更彼等に立退きを請求するといふ譯にも行かなかつた。すると、益々彼等が憎らしくなつた。

だから、その後彼女は自分自身では決して奥の六號と九號の部屋へ足を踏入れなかつた。彼女の性分として機嫌のいゝ日の夕食の後など、「吉川さん、音無しくしてゐますか？」「大澤さん、今晩はお出かけにならないんですか。雨が降りますよ。」「山名さん、山名さん！　おや、もう出かけたの、仕樣がないのね。」などと、それ〲の部屋に片端から愛嬌を撒いて歩くのが例であつたが、然し左側で言ふと五號室、右側で言ふと八號室の手前まで行くと、その奥の部屋にはまるで人間でなく鬼どもが住んでゐるかのやうに、くるりと踵を返すのであつた。そればかりでなく、彼女は廊下とか入口とかでも、出來るだけ注意して、六號と九號との客には顏を見合はさないやうに、若し見合はしても大急ぎで反らすやうにしてゐた。で、それから一ケ月後に、彼女の考へで、裏の非常口と切戸とを開放して、その鍵を花子を通じて六號の輕子に責任と共に渡しておいて、彼等にそこから出入することを許すやうにさへした。彼等もその方が心安くあつたので、早速それを利用した。お上にしても陰で「あんな人たちはなるべく表から出入してくれない方がいいよ。」と言つてゐた。

實際、お上がさういふのに幾分無理のないところもあつた。彼等は、外の部屋の客たちが、或者たちは洗面所で合つた時位は口をきき合ふとか、又別の者たちは部屋の外から聲をかける程度に附合ふとか、兎に角それ〲隣人の禮を盡して居ると見えるのに、彼等だけはまるで別世界の者のやうに暮してゐた。現に、その別世界の彼等同志、即ち六號と九號と向ひ合つて居る彼等同志でも、一ケ月の間全然口をきかずに過した位である。多分、例のお上の發案にかゝる非常口と裏

木戸を通行する制度が出來なかつたら、彼等は永久に物を言ひ合ふ機會を持たなかつたかも知れない。その最初の時に、六號室の輕子が向ひの部屋の前に立つて、「御免なさい、御免なさい。」と凡そ五度ばかり呼びつゞけたのに、中から何の聲も應じなかつた。然し確かに留守でも又寢てゐるのでもない證據に、「えへん、えへん、」と甲高い咳拂ひの聲がその間に二度も聞えたので、思ひ切つて最後に「己さん、」と彼女は名を呼んで見た。

「はい、」と甲高い聲が初めて返事をした。それは己にして見ると、嘗て自分の部屋を女中の外に訪問して來る者はあり得ないと信じてゐたのに違ひなかつた。全く、さう言へば、お上は言ふ迄もなく、花子でさへ滅多に彼の部屋に顏を出したことがなかつたから。彼は立つて來て、障子を開けて、敷居のところに立ちはだかつたまゝで、訪問者の顏を不思議さうに眺めながら、「何か用ですか？」と聞いた。

「この裏口の方から出入りしてもいいと言ふ事になりましたので、」と輕子も早速用件を話した。「それで鍵を私が預りましたんですが、どうでせう、あなたの方が朝も早いやうですし、夜もお歸りが遲いやうですから、これをお預かり下さいませんか？」

その通りで、己はこの下宿中で、多分朝飯をたく役目の花子の母親よりも早くから起きて勉強してゐたことだし、夜は何處かへ家庭教師として勤めに行つてゐるらしかつたから、歸りが大抵十一時近くになるのだつた。で、問題の鍵は彼の方で預かることを承諾した。彼はさういふ人物によくあるやうに、口をきゝ合つて見ると、却つて手輕に人に馴染な流の人たちには見られない、何處か一所人に好感を抱かせるやうな何ものかを持つてゐた、が、氣安さを感じさせないことは少しも變らなかつた。然し、兎に角、それが端緒となつて、それ以來この除外されてゐる二つの部屋の下宿人同志の交際の道が開かれた譯であつた。

「己さん、」とその後輕子は屢々障子の外から聲をかけた、そして中からの返事を待つて、皿に或時は豆腐の煮たのや、又

言つて、別の時は馬鈴薯の煮たのやをちよつぴり盛つたのを、障子を五寸ばかり開けて、「お上りなさい、」と言つて、疊の隅に置くと、直に又元の通りに障子を閉めて、そこ〳〵に自分の部屋に歸つて行つた。己はその皿に三度に一度は必ず目ざし鰯だの、鮭の切身だのを入れて、矢張り障子を五寸ばかり開けて、疊の隅に置くことに依つて向ひの部屋に返しに行つた。何にも入れない時は、半紙の代用のつもりであらう、原稿用紙を四つに折つて、必ず皿の上に載せてあつた。——然し、こんな風でこの向ひ同志の部屋の人たちの交際は、それから半年餘り過ぎてもそれ以上に少しも發展しなかつた。

中で、次のやうな例外があつた。と言ふのは、厨戸の方から三度ばかり、そのうちの二度までは輕子の留守中であつたが、己を尋ねたことがある。

「いつもお茶をありがたう、」と窓の障子の側に据ゑられた机に向つてゐた己は、その太つた身體を大儀さうに窓の方にねぢ向けて言つた。

「い、いゝえ、」と厨戸は恥かしさうに首に手を當てゝ言つた。

が、それから己は机の上にあつた本を膝の上に載せて、身體だけ禮として窓の方に向けたまゝで、目は始終本の上に落してゐるので、さうでなくても話下手の厨戸は一言も無駄口をきく機會を掴むことが出來なかつた。暫くすると、

「君、將棊をやりますか？」と己は聞いた。

「しよ、將棊ですか、」と厨戸は聞いた。「え、少し位なら……」

「ぢやあ、この次にやりませう、」と己は言つて、又膝の上の本に目をそゝいだ。

で、十分ばかりもぢ〳〵して坐つてゐたが、厨戸は思ひ切つて、さよならを言つて立上つた。己は本から目を放して、

「ぢや、さよなら、」と言つた。それが第一回の彼等の會見の全部であつた。

厨戸はもうあんな氣づまりな人のところへは行くまいと決心した。が、彼はその後輕子に攻められて、友達を尋ねた

り、友達から又友達に紹介されたり、或ひは新聞の廣告を見たりして、彼の所謂ペンキ屋の下仕事や圖案かきの仕事やを探して廻つたが、中々そんなものが見付からなかつたし、又たま〳〵見付かつても、彼の鈍な風采や吃音やが災をなすのであらう、とても採用されさうになかつたので、そのうち軽子が或工場に通ふやうになると、自然彼を鞭韃するものがない譯で、彼は毎日部屋の中でごろ〳〵してゐるにつけて、つい退屈を覺えるまゝに、或時又己の部屋へ第二回の訪問を思ひ立つた。

己はこの前の時から少しも動かなかつたかと思はれる程おなじ恰好で机の前に坐つて讀んでゐた。厨戸が「今日は、」と言ふと、「失敬」と彼は挨拶した。そしてそのまゝで十分ほど沈默してゐた後、

「今日は一番將棊をさしませうか、」と己は言つて、膝の上の本を机の上に遣つて、引出しから紙に包んだ駒をばらりと疊の上にさらけ出した。そしてそのまん丸い太つた手で駒を包んであつた紙の皺を延ばしたところを見ると、それが將棊盤の代りをなしてゐるのだつた。

その勝負は三分間以上を要しなかつた。多分厨戸は駒の動かし方をやつと心得てゐる位であるに引きかへ己は素人としては可成り強いと言はれる方に違ひなかつた。だから、對等どころか、飛車角を抜くどころか、恐らく王將と歩兵が三枚だけで向はれても、厨戸は到底己の敵ではなかつたらしいので、己はその一番が呆氣なく濟んでも笑ひ顔一つしないで、例の盤の代用をしてゐる紙を改めて風呂敷の代用にして、くる〳〵とその上に散亂してゐた駒を包むと、以前の机の抽斗しの中に入れてしまつた。

「も、もう大分暑くなつて來ましたね、」と厨戸は暫くしてから言つた。

「えゝ。」

その時の會見はそれが全部であつた。

それから又一ケ月程後の或日、厨戸は餘り仕事が見付からないので、仕事が見付からない辛さよりも、輕子にそれを攻められる辛さに、ふと己に相談して見ようと思ひついて訪問したことがあつた。厨戸が吃りながら、その事を己に言ひ出したところが、「何とか探して上げたいが、多分僕なんかには當分君の爲になる事はないだらうと思ひますよ。無論、耳寄りな事があつたら知らせますが、全然あてにしないでくれ給へ、」といふ彼の答であつた

「どうぞ、」と厨戸は頭を下げて言つた。そして、又將棊でも一番さして、それを機會に歸らうかと心の中で考へた。で、十分ばかり默つて坐つてゐたが、到頭己は將棊の話を出さなかつた、のみならず、矢張り此方を向いて、例の膝の上の本に讀み耽つてゐた顏を、ふと上げたかと思ふと、

「今日は僕一寸忙しいですから、失敬します、」と己は言つた。

そこで、厨戸はお辭儀をして、自分の部屋に逃げるやうに歸つて來た。

これは後で厨戸が知つた事であるが、己はその二三ケ月前まで高等師範の英語科の學生であつたが、何か教師に不正な行爲があつたのが分つて、その爲に學生間に騷が起つた時、彼はそれの主謀者の一人と目された爲に、といふよりも彼自身がその事を名乘つて出て、自分から學校を退いたのださうである。で、今は志を變へて、高等學校の入學試驗を受ける準備をしてゐたのであるが、無論そんな勉强家の彼のことであるから、その後入學試驗は無事に通過して、第一部の英文科に入學した。が、それは彼の後の話である。

そんな風で、己の方の部屋が、孤獨な男の而もさういふ武骨な英學生の生活で、謂はゞ沼のやうに落着いてゐた反對に、厨戸の方の樣子はすつかり違つたものであつた。彼の部屋には、彼と彼の情婦である輕子ばかりでなく、暇さへあると、花子がお上の目を盜んで遊びに來てゐた。彼女等は寄ると、厨戸を除け者にして、女二人で何か彼か、貧乏で惡い境遇に陷ちてゐる若い女が誰でもするやうな取止めのない話を享樂してゐるやうに見えた。が、時にはしく／＼と花子の泣く聲

が遲れて來ることもあつた。

花子は今の家へ來る迄、母親と二人で赤ン坊を抱えて、中澁谷の或裏町で二階借をして、親子で人仕事などをしながら、どんな人でもがそれ以上の缺乏に堪へられない程の貧しい生活をしてゐた。然しその一年半程前までは、彼女自身は神田の或牛肉屋に奉公してゐて、その中澁谷の二階には母親一人で娘の仕送りに依つて稍々安樂に暮してゐたのであつた。そのうちに思ひがけなく彼女は腹に子を持つた爲に、そこを止めなければならなくなつたばかりでなく、世間の多くのさういふ場合の例の通り、子の父親はいつとなく姿を消してしまつた。然し、彼女も彼女の母親も至つて氣の弱い、言ひ換へると、運命に殆ど無抵抗な性格だつた。で、男にそんな薄情な態度に出られても、強ひてそれを何とかしようといふ氣力も押しも持たなかつた。

それに比べると、花子の從姉妹であり、彼女の母親には姪に當るところの、入井のお上のお牛は、全く彼女等とは正反對の氣質を持つてゐるやうに見えた。お牛はその時から十二三年前の、十九歳の頃一度正式に緣づいたことがあつたが、不義をして夫の家を放逐されたのが始まりで、人の噂では、さういふ人生の裏道を歩く勝氣な女の誰もが辿るやうな幾つかの經驗の後、人の妾になつた。そして今も彼女は第何回目かの妾の生活をしてゐるのであつた。彼女は、花子の母親が死んだ夫に從つて、彼は下級の勤人だつたので、早くから東京に出てゐた關係から、從姉妹が東京で生れて育つたのと違つて、生れた時からずつと彼女等の祖父の頃からのまゝの北海道に住んでゐた。もつとも四五度も土地を變つたことはあるが、それも恐く北海道の内でのことであつた。今の彼女の旦那といふのは矢張り北海道の或町で高利貸をしてゐたもので、最早や六十歳に近かつた。それが、近頃息子などもそれ〳〵成人したし、彼自身も可成りな資産を造つたのを機會に東京に出て來るにつけて、妾であるお牛も連れられて來ることになつて、そして彼女は彼に依つて今見るやうな素人下宿を始めることになつたのだつた。それに就いて、彼女は不斷は年賀狀位の外殆ど音信をしてゐなかつた從姉妹の花子とそ

の母親である叔母とを呼び寄せて、彼女等を女中や飯たきの代りに置くことにした。それと共に、花子の子を彼女は自分の養女として貰ひ受けることにした。

さういふ花子や彼女の母親たちの境遇が、決して幸福な結果を約束しないだらうとは讀者諸君にも容易く考へられることに違ひない。そして、その通りで、お半は彼女の家に招いた叔母をも從姉妹をも、それから自分の養女に貰つた赤ン坊をも、少しもいたはらなかつたばかりか、何故か目の敵のやうに扱つた。多分、却つて見ず知らずの、桂庵から來た女中のお蘭に對する方が、ずつと優しい位だつた。と言つて、お半がお花や叔母等を特に憎む理由は少しもなかつたのであるが、人には肉親といふものを愛する心持と共に重荷に感ずる氣持があるものである。その心持は多分源は同じものに違ひないのだが、兎に角優しさをもつて現れる時とその反對の場合とがある。即ちお半のはその後の場合だつたのであらう。

自然、花子はさういふ境遇の不平を、彼女の最も手近の同年輩の女性である輕子に洩らすことで、どんなにか慰められた。すると、彼女等がその奥の部屋で何かこそ〳〵と話してゐるのを知ると、女中のお蘭がそれを忠義顔に一々お上に告口した。そこで、お半の目が意地惡く光れば光る程、花子の第六號の部屋を尋ねる樂みは數倍にされた。「私だつてお蘭だつて、ね、輕子さん、同じやうに働いてゐるんでせう。それでお蘭は給料を貰つてゐますけど、私には姉さんは一文もくれないんですよ。」などと彼女は輕子にこぼした。そして時とすると、二十錢とか三十錢とか言ふ小額の金を輕子に借りることさへあつた。

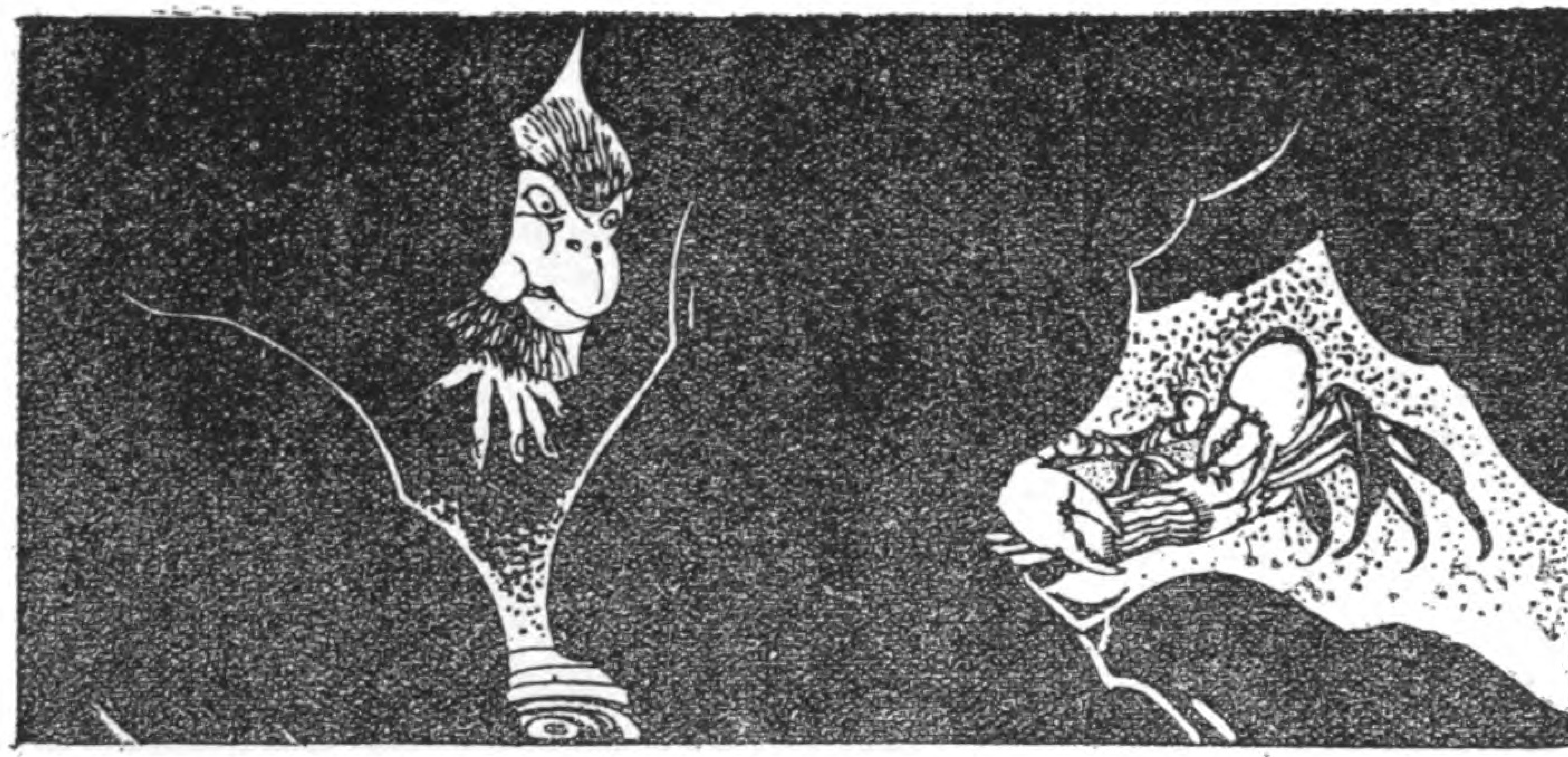
輕子は輕子で、何と云つても年の行かぬ女のことだつたから、好きな男とは言ひながら、そのうち工場などに通ふやうになつて、追々都會の色々の男たちを見るにつけ、厨戸が如何にも頼りない、不甲斐なしらしいのが目立つて來て、その男が自分の唯一の相談相手であるといふことに次第に心細さを覺えてゐた所だつたので、彼女も亦花子を喜んで迎

へた。すると、厨戸にしても、輕子と一緒になつてからは、彼女の目を盜んで時々昔の友達を尋ねることはあつても、彼等に今の住宅へ來られるのは困るので、わざと誰にも所を知らしてゐなかつた。だから、彼も幾ら彼女等に閑却されても、兎に角彼の部屋の今の唯一の訪問者である花子を迎へることに不賛成である筈がなかつた。それに花子が來てゐる間は、輕子のヒステリイが起らないといふ事だけでも、どんなにか彼の安心であつた。更に、この家のお上が花子のみならず、彼等にも好意の反對の感情を抱いて居るといふ事が、更に一層彼等の親密の度を増して行くことに役立つた。そしてさういふ狀態がかれこれ半年餘りつゞいたのである。

ところが、それがその年の十二月の或日、突然輕子が姿を隱したといふ事件が起つて、忽ち局面に大きな轉化を持つて來たのであつた。——

これが厨戸夏生が阿珂丸を尋ねて來て、彼の自作の小説を見せる前に、後者に話したところの彼の所謂履歴の一部分なのである。

こゝで、私は物語の本筋に戻つて、彼の不思議な小説を讀んで見よう。（つゞく）



沙魚の話（童話）

島崎藤村

お猿さんと蟹とは、はじめ大の仲好しでしたが、お猿さんが澁い柿をぶつつけてからは、蟹も仲たがひして、往つたり來たりしなくなりました。それからはお猿さんが遊びに行きましても、蟹は石垣の間に隱れてしまつて、もうお猿さんには逢ひませんでした。

そこでお猿さんが腹を立てまして、今に蟹の姿を見かけたら、もつと澁い柿をぶつつけてやると言ひました。

『蟹はそんなところで何を泣いてるんですか。』

と言ひに來たのは沙魚でした。沙魚は蟹から、お猿さんのぶつゝけた澁い柿の話を聞いて、

『そんなに泣くことは要りませんよ。この沙魚が從いて居ますから、もう大丈夫です



よ。」

と言ひなぐさめました。

お猿さんはそれを聞いて、なほ／＼腹を立てました。今度は沙魚のところへ川かけて行つて、沙魚の子供をみんな殺してやる、とさう言ひました。

それからお猿さんは釣竿をもつて來まして、沙魚の子供を釣つては殺しました。お猿さんが一日に百尾づつ沙魚の子供を殺しましたら、沙魚は一日に百三尾づゝ子供を生みました。お猿さんが一日に三百尾づゝ沙魚の子供を殺しましたら、沙魚は一日に三百三尾づゝ子供を生みました。

お猿さんはなほ／＼腹を立てまして、釣竿のかはりに石油をもつて來ました。それを河へ流しましたら、沙魚の子供が一日に千尾づゝも死んでしまひました。沙魚は自分の子供がそんなに澤山に死ぬのを悲しがりまして、もつと川上の方へ行つて一日に千三尾づゝの子供を生みました。さすがのお猿さんもこれにはかなはなかつたと見えて、沙魚の子供を殺すことを止めて歸つて行きましたが、そのために沙魚の子供が絕えなかつたばかりでなく、沙魚と蟹とはそれから一層仲の好いお友達になりました。

人に與ふる詩三篇

佐藤春夫

オルゴオルにそへて弟に與ふ

恥多き物語書き得て、得たる金いくらか。
病癒えそむる汝が枕べに置かばやと
オルゴオルを買ひ來て、春の夜ふけに
まづみづから試みなぐさむなり……
これはこれ詩人が心の臓なれば、
うた湧き出づる箱のよろしさよ、よろしさよ。
聞きつつをれば春の夜はそぞろに
こころはをさな子のごとく物好きになり
ふと、その箱のおもてに手をふるれば

思ひきや、これはこれ夢かとも古き思ひ出の
少女子がときめく心の臓をひそめをさめて
わが手にをののきひびくことのかそけさよ、
あやしさよ、いみじさよ、いとしさよ、
げに歌湧きいづる箱のよろしさよ、よろしさよ。
な言ひそ、弟よ、いま汝がいのち衰へて
人の世の喜びに枕べの小さなるこの箱一つと。
知れよ、汝が兄は命さかんなる日にもなほ旦つ
人の世のよろこびはただ小さなるわが心の箱一つぞ。

M・IとM・Kとに

世に美しき姉妹ありき。わがよき友となりしが、程なく故ありて
また相見るべくもなしと告げ来りし文の言葉かなしかりければ。

君を見ずして　何の五月
きらめける空　いたづらに

いぶせき窓をひらくとも
ひるがへるかの水色の裳見えず

君なくして　何の薔薇（さうび）
みどりの木かげ　いたづらに
求めたづねて行き行くとも
涼かぜのかの笑ひを聞かず

よき友よ　今はたよしもなし
さらば相見む、睦じき夢に
もろともにただに頼むよ
來し方の眞實（まこと）　後の日の夢と。

詩に就いて尋ねた人に見せる

「人生よ」

と詩人は言ふ
「私は願ふ
たつたひと言なりと
私の眞實を言はせてくれ！
私の啞の眞實が語り出しさへするなら
その爲めにならこの命と取換へてもいい」

「駄目だよ」
と人生が答へた
「そんな安つぽい命と
眞實との取引はおことわりだ——
その命をお前がもつと重んずる日には
おれなどに願はずとも
眞實はひとりでに言葉を出すであらう！」



天狗の鼻

豊島與志雄

むかし、或る處に大きな村がありました。北に高い山がそびえ、南に肥沃な平野がひかへ、一年中暖かく日が當つて、五穀がよく實り、どの家も富み榮えて、人々は平和に樂しく暮してゐました。

所がこの村に、不思議なことが起つてきました。夕方田圃から歸つてきて、いろんな御馳走を拵へて、一家揃つて樂しい食事をしようとしますと、何處からかふいにひどい風が吹いて來て、ランプや蠟燭の火を消してしまひます。急に家の中が眞暗になつたのに、皆びつくりして、大騷ぎをしてから燈火をつけますと、まあどうでせう、今迄お膳の上に並んでゐた御馳走が、一つ殘らず無くなつてるではありませんか。――さういふことが、毎晩どの家かに必ず起つてくるのです。

村の人達は大變困りました。その頃はまだ、電氣燈や瓦斯燈はなくて、ランプや蠟燭をつけてゐましたから、どんなにしても、ふいに吹いてくる風のために消されてしまひました。雨戸をすつかり閉めきつても、何處からかその風が吹いてくるので、どうにも仕方がありませんでした。しまひには、燈火が消えたらすぐにまたつ

ける用意をしておきました、その一寸暗くなつた間に、大事な御馳走はすつかり無くなつてしまひました。それかと云つて、大變勤勉な村人達でしたから、まだ明るいうちに仕事を止めて夕飯をたべる氣にもなれませんでした。

そしてなほ不思議なことには、村で一番立派な御馳走を拵へてる家に、さういふことが起るのでした。うつかり御馳走も拵へられませんでした。

一體何者が御馳走をさらつてゆくんだらう？と村の人達は考へてみました。けれど、いくら考へても分りませんでした。何しろ姿も見えなければ音もしないんですもの、ただ不思議な怪物といふより外、到底分りつこはありません。それでも村の人達は一生懸命になつて、その正體を見屆けようとしました。

するうちに、少しづついろんなことが分つてきました。大きな羽團扇を見たといふ者が出てきました。赤い高い鼻を見たといふ者が出てきました。緋の衣を見たといふ者が出てきました。何か人間の形をした大きなものが暗い空をふわりふわり飛んでゐた。といふ者が出てきました。

「天狗だ！」と誰かが云ひ出しました。

なるほど、いんろなことを考へ合せると天狗に違ひありません。きつと貪慾な天狗がやつて來て、羽團扇で燈火をあほぎ消して、人の拵へた御馳走をさらつて行つてるに違ひありません。村の人達は天狗だときめてしまひました。

所で、いくら天狗だからといつて、そのまゝ放つておくわけにはゆきません。村の人達はいろ〳〵相談して、その天狗を捕へようとしました。

がなか〳〵さうはまいりませんでした。戸の隙間からでもはいり込んできて、音も立てずに御馳走をさらつてゆくほどの天狗ですもの、自由自在の術を知つてゐて、人間の手に捕るものではありません。村の人達は、網を張つたり、罠を拵へたり、棒を持つて待ち構へたり、いろんなことをしましたが、何の役にも立たないで、毎晩どの家かで御馳走をさらは

れてばかりゐました。

所がこの村に、たつた一人のなまけ者がゐました。獨り者の爺さんで、お金があれば酒ばかり飲んでゐて貧乏なくせにいつものらくらして遊んでゐました。大變酒好きなので、猩々といふ綽名をつけられて、餘り人から相手にされませんでした。

この猩々爺さんが、天狗のことを聞いて、どうか自分が引捕へて皆をあつと云はしてやりたいものだと、醉つ拂ひながら頭を振り振り考へてゐますと、酒が手傳つたせいか、素敵なことを考へつきました。そしてはたと膝を叩きました。

「しめたぞ！もう天狗は俺のものだ。」

爺さんは懇意な家へ行つて、お金を澤山貰つてきました。肉や鳥や肴や酒を、うんと買ひ込んできました。酒は殊に強いのを選びました。そして午頃から夕方まで骨折つて、それは實に美事なお料理を拵へました。夕方薄暗くなると、大きなお膳の上に御馳走を飾り立て、強い酒の徳利をいくつも並べ、蠟燭を何本もともして、天狗が來るのを待受けました。

暫くたちますと、例の不思議なことが起りました。雨戸もすつかり閉め切つてあるのに、家の中に強い風が起つて、蠟燭の火が皆一度に消えて、眞暗となりました。爺さんはそれを待ち構へてゐたのです。すぐに大きな聲で云ひました。

「天狗さん、愈々來ましたね。私はあなたが好きで、この通り御馳走して待つてゐましたよ。どうかさらつて行かないで、こゝで食べていつてくれませんか。私はあなたが大好きだから、一緒に一杯やりたいと思つて、酒まで買つておきましたよ。」

「本當か？」とだしぬけに、銅鑼聲が闇の中から響きました。

「本當ですとも、本當ですとも。」と爺さんは大喜びをして答へ返しました。「私は決してあなたに惡いことをしようなどと、そんな考へを持つてやしませんよ。私はあなたみたいな人が好きですよ。大變な御馳走を拵へてお待ちしてたんで

す。一緒に飲んだり食つたり歌つたりしませうよ。まあお待ちなさい。私は眞暗な中では眼が見えませんから今蠟燭をつけます。」

爺さんは急いで蠟燭に火をつけました。そしてひよいと見ると、まがふかたなき大天狗が眼の前に立つてるではありませんか。頭に兜巾を被り、緋の衣をつけ、手に羽團扇を持つて、白い髯の生へ被さつた赤い顔に、高い鼻をうごめかし、金色の眼を光らして、にこ〳〵笑つてゐるのです。爺さんはその威光に打たれて、平伏してしまひました。「お前は感心な奴だ。」と大天狗は云ひました。「酒まで澤山揃へてくれた志に免じて、今晩はお前の家で酒宴をするとしよう。」

その言葉を聞いて爺さんは元氣づいてきました。そしてこの猩々爺さんと大天狗とは、夜通し酒宴をすることになりました。

爺さんは猩々と綽名されてるくらゐの酒飲みですし、天狗はまた名高い酒好きなものですから、丁度いゝ相手でした。けれどそのうちに、二人共酔つ拂つてきました。天狗を酔ひつぶさせるために爺さんが苦心して拵へた料理ですから、豚肉の串燒の中にも、鯰の肝の揚物の中にも、鯉の丸煮の中にも、その他いろんな美事な料理の中にはみな、強い酒がまぜてありましたし、それを食べながら、更に大きな杯をがぶ〳〵飲んだものですから、二人が酔つ拂ふのも無理はありません。爺さんは、自分から浮かれだしてきて、歌をうたひ初めました。

酒をたうべて、たべ酔うて、たふとこりんぞや、まうでくる、なよろぼひそ、まうでくる。タンナ、クンヤ、タリヤランナ、タリチリラ。

すると大天狗は、緋の衣の裾をからげ、羽團扇で拍子を取り、面白い足取りで、踊り出しました。

さういふ風にして夜遲くまで酒宴をしてるうちに、とう〳〵二人は酔ひつぶれて、其處にぐつすり眠つてしまひました……。

夜明け近くになつた頃、爺さんは喉が渇いてきて、眼を覺しました。見ると、大きな天狗が、赤い顔をなほ眞赤にし、高い鼻の穴をふくらまして鼾をかきながら、自分の側にぐつたりと睡つてるではありませんか。爺さんはびつくりして飛び起きました。そして暫く首をひねつて考へてるうちに、昨晩からのことを思ひ出しました。天狗を醉ひつぶさして引捕へるつもりだつたのが、自分の方も醉つ拂つて、天狗と一緒に眠つてしまつたのでした。それでも、天狗より先に眼を覺したのは幸でした。

爺さんはそつと立ち上つて、太い繩を持つて來て、まだ眠つてる天狗を、いきなり縛り上げてしまひました。大天狗は眼を覺して、自分の縛られてるのに氣付きましたが、もうどうにも出來ませんでした。たゞ眼を白黑さしてるばかりでした。爺さんはそれを見て嘲笑ひました。

「天狗の馬鹿やい、とう／＼捕つたらう！今迄村の者の御馳走を澤山さらつていつたから、その罰だと思ふがいゝ。これから村の人達の前に引出してやるから、おとなしくしてをれ。もうかうなつたら、どうにも仕方あるまい！」

それを聞くと、天狗はびつくりして身をもがきましたが、手足を太い繩で縛られてる上に、大事な羽團扇を向ふに取落してるのですから、何とも致し方はありませんでした。そしてしまひには、豆のやうな涙をぼろ／＼こぼしました。泣きながら頼みました。

「許して下さい。わしが惡つかたのです。許して下さい。もう決して御馳走をさらつたりなんかしませんから。わしは元からの惡い天狗ではありません。この姿の通り大天狗で、大勢の烏天狗を家來に持つて、立派な行ひをしてゐました。所がわしは、生れつき鼻がよく利いて、二里四方くらゐは何でもかぎわけられるのです。或る時、山の奥から村近くへ出て來ると、人間の拵へてる御馳走の匂ひがして、それを食ひたくて堪らなくなつたのです。そして一度盜み食ひをしてみると、旨いの旨くないのつて、もう木の實を食つたり霞を吸つたりしてゐるのが馬鹿らしくて、御馳走泥坊になつてしま

つたのです。所が今あなたに縛られてみると、初めて夢からさめたやうな心地になつて、自分の惡いことがしみ〴〵分りました。これからはつまらない慾なんか起さないで、山の奥に戻つていつて、大天狗にはぢない立派な行ひをします。どうぞお慈悲に許して下さい。許してさへ下されば、何でもお望み通りにします。一生行ひをつゝしみます。ほんとに許して下さい。私を村人達の前につき出してもあなたには何の儲けにもならないでせう。その代り私を許して下されば、何でも望み通りのものを差上げます。」

天狗が泣きながらさう云ふのを聞いて、爺さんはなるほどゝ考へ込みました。天狗を村人達の前につき出した所で、自分の利益には少しもなりません。それよりも、何か素晴らしいものを貰つて、許してやつた方がましです。その上、天狗はもう一生惡いことをしないと云つてるのです。

「それでは許してやつてもよい」と爺さんは云ひました。「だが、許すかはりに、この羽團扇をくれるか。」

それには天狗も弱りました。羽團扇がなければ天狗の役目がつとまりません。でいろ〳〵懇願したあげく、二里四方も利くといふ鼻を讓つてやることに相談がきまりました。

「たゞこんな上等の鼻を貰つたからといつて、慾を出してはいけません。」と天狗は云ひました。「慾張つたことをすると、鼻を取上げますから、そのつもりでおいでなさい。」

「よいとも。」と爺さんは承知しました。

そこで、大天狗は繩を解いて貰つて、羽團扇を拾ひ上げて、それで爺さんの低い鼻を三度あほぎながら、何か口の中で唱へますと、爺さんの鼻はみる〳〵うちに高くなつて、二里四方のものが何でもかぎ分けられるやうになりました。爺さんがびつくりしてるうちに、天狗は羽團扇をはた〳〵とやりながら、宙に飛び上つて、何處ともなく立去りました。

爺さんは天狗の鼻を貰つて、嬉しくてたまりませんでした。夜が明けると、すぐに表へ飛び出して、大天狗と同じやう

な爺さんの鼻を見て、驚いたの何のぢやありません。そして、猩々爺さんを此度は天狗爺さんと呼ぶやうになりました。

さて天狗爺さんは、大天狗から貰つた眞赤な高い鼻をうごめかして、自分の貧乏な家にぢつと坐つてゐますと、まあどうでせう、二里四方のものが何でも、眼に見るやうにかぎわけられるではありませんか。何處にどんな花が咲いてるかも分れば、何處にどんな御馳走が出來てるかも分れば、何處にどんな酒があるかも分ります。爺さんは家にぢつと我慢してることが出來ませんでした。晩になるとのこ〳〵出かけていつて、村で一番御馳走のある家へやつて行きました。村人達はもう天狗が來ないことを知つて、いつもより美事な御馳走を拵へてゐたのです。

「今晩は。」と云つて爺さんははいつて行きました。

「やあ天狗爺さんですか。あんたのお蔭でこんな御馳走を食べることが出來るやうになりました。まあお祝ひに召上つていつて下さい。」

さう云つて、どの家でも爺さんをもてなしました。

爺さんは大得意でした。それからといふものは、晝間はいゝ香りのする花を取りに出かけ、それを賣つて大變お金をもうけ、晩になると、立派な御馳走や旨い酒のある家をかぎつけて、其處でたらふく飲み食ひしました。いくら飲み食ひしたつて、たかゞ老人一人ですから、さう澤山ではありませんので、村人達はいつも心よくもてなしてくれました。それにまた爺さんは、村から天狗を追ひ拂つた大恩人ですもの。

そのうちに爺さんは、花を賣つたお金はどし〳〵たまつてくるし、御馳走や酒にはあきてくるし、何だか退屈でつまらなくなつてきました。この上は何か素晴らしいものか、まだ見たことも聞いたこともないやうなものが、何處かにありはすまいかと、高い天狗鼻をうごめかしながら、ぢつと考へてゐました。

すると、何處からともなく、さら〳〵と涼しい風が吹いて來て、その風上の遠くの遠くに、何とも云へないよい香りの

するものがありました。麝香でも肉桂でも伽羅でも蘭奢待でもない、いやそんなものよりもつとよい、得も云はれぬ香りでした。

「これは屹度天下第一の寶物に違ひない！」と爺さんは思ひました。

爺さんはもう有頂天になつて、その寶物を取りに出かけました。

よい香りは、村の後ろの高い山の方から匂つてきました。爺さんは天狗鼻をうそ〳〵させながら、山の奥へ奥へと登つて行きました。所が不思議なことには、いくら行つても其處へ行きつきませんでした。行けば行くほど、香りは遠い所から匂つて來ます。

「これは屹度大變な寶に違ひない！」と爺さんは考へました。

そのうちに、山はだん〳〵奥深くなつて、草木が一杯茂つてゐて、もう路も無くなつてしまひました。その上、爺さんは永い山路を歩いて來ましたので、腹はへつてくるし、足は疲れてくるし、弱つてしまひました。けれど、たゞ寶物を取るといふ慾で一杯でした。何もかもうち忘れて進んで行きました。

俄に、一際強くぷーんといゝ香りがしてきました。愈々來たなと思つて、爺さんは一生懸命に足を早めました。そして山奥の崖のふちまで來ますと、あつと云つて立止りました。

まあどうでせう、崖の下の谷間一面に、素敵な花が咲き亂れてるではありませんか。十疊敷もあるかと思はれるほど大きな百合の形をした花で、その天鵞絨のやうな花瓣は、赤や青や黄や紫やさま〴〵の色をして、その上に金色の花粉が露のやうに散りこぼれてゐて、それを澄みきつた日の光が、きら〳〵照らしてゐるのです。そして涼しい風が輕やかに流れるたびに、息もつけないほどのよい香りが、むら〳〵と立昇つてくるのです。餘りのことに、爺さんはぼんやりしてしまひました。

やがて我に返ると、爺さんは早くその花を折り取つてやりたくなりました。所が、崖の上からその谷間に下りるのが容易でありません。ごつ〳〵した岩の崖で、何十丈といふほど高いのです。爺さんはあちらこちら見廻してみて、漸く一本の葛を見付け出し、それに縋つて下り初めました。

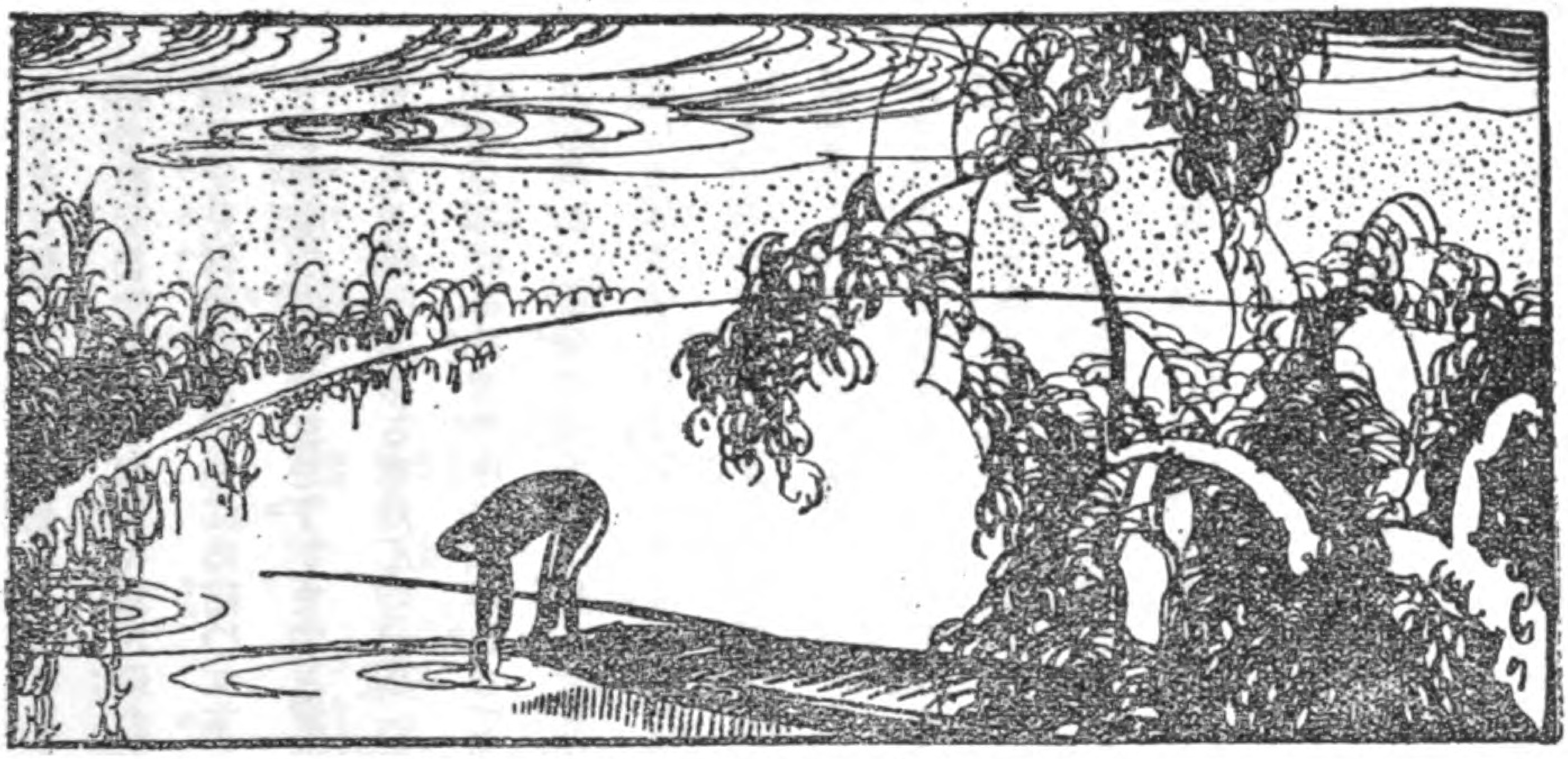
丁度崖の中ほどまで下りますとどうしたはづみか、葛がぷつりと切れて、あつと云ふまに、爺さんは眞逆樣に轉げ落ちました。轉げ落ちるとたんに、高い鼻が岩角にぶつかつて、ぽきりと大きな音を立てゝ折れてしまひました。

爺さんは谷底で夢中に飛び起きて、一番先に鼻へ手をあてゝみますと、さあ大變です、天狗から貰つた大事な大事な鼻どころか、自分の元の低い鼻までも根つこから無くなつて、顔がのつぺらぼうになつてるではありませんか。あたりを見廻してみますと、今迄咲き亂れてゐた花は影も形もなくて、自分の足下に、何か赤いものが一つ轉がつてゐます。よく見ると、それは眞赤な高い天狗鼻でした。

「まあこれさへあればいゝ！」

さう思つて爺さんは、急いで拾はうとしました。すると驚いたことには、その赤い鼻がふはりと宙に飛び上つて、舞ひ上りながら次第に大きくなつて、やがては空一杯の大きさになりました。そして爺さんが呆氣にとられてゐると、その空一杯の大きな鼻の向ふから「あはゝゝはゝ」と雷のやうな笑ひ聲が聞えました。

それはたぶん、天狗が笑つたのだらうといふことです。



泉水

室生犀星

わが家に古き泉水ありて、日もすがら涓滴の音絶ゆることなかりき。あたかも君が庭にある泉水を三倍したるくらゐのものなり。さるを日本橋の商ひの方も首尾悪く、日に落ち目となりたる程に何日の間にか泉水もかへり見るものなく、荷作りの新木や繩などにて、泉水の上を取り散らし、しまひに底水の腐り込みしならん、鯉金魚のたぐひ日に日に死にゆき、斑猫のごときあぶら浮き、水くさりはじめぬ。

父のゆきし後はもはや泉水に埃あくだを棄て、もはや泉水のかたちとてなく、歯朶の芽さへ年ごとに生えずなり、手入せざりし松の針葉はほほけ立ち枯れ枝さへ交りぬ。——されど商ひの方に死にもの狂ひとなりて励みしが、これさへ電燈を點さぬ家とてなきごとく、洋燈はやうやく御神燈の豆らんぷ賣れるのみにて、手のつけやうもなくその年の春店をしまひしが、がらす類はからうじてラムネの瓶と形をかふるための需要のみ。それとても棄て賣り同様にて、わが家のたつきの今は日にくるしくはなりにけり。——せん方なければ親戚協議の上にて、この店をいよいよ人手に賣りわたすことにし、われと外に二人の弟妹と母と、郊外に些やかな暮しこそ

なすべけれど、品物は金に換へ、商品の洋燈すこし荷作りとなし、いよいよ引越すこととなりぬ。いまは洋燈を商ふ店とてなくなりしが、そのころはみな洋燈店は町の古き舗にのみかぎりし、そのむかし行燈あぶらを鬻ぎしなり。母はその日古き汚なき泉水のほとりに佇ちゐしが、この池にいま一度依稀たる涓滴の音の絶ゆることなかりせば、越して行くにも心落ち着きすがすがしきものを、このやうに古鐵のごとく錆び埋れたる泉水をそのままにしてゆかば、亡き父のこころにも濟まず、みづからもあまりにこころ寂しきなりと言ひたまひぬ。おさなき弟妹らは母の眞心は知らず、唯泉水掘るに面白きこころ湧くとのみにて、いま一度水かよひさすべしと、口々に言ひつのりぬ。われは默してゐしが、

「さらばわれら三人寄りて、この水垢を汲み出し、淸き泉水となして母上に見せまゐらすべし。さすれば母上もこころすがすがしかるべし。」

かく言ひしが、母は手をふりて、いたくも痩せし頰に笑み一つ漏らしながら、低きこゑして

「そのやうにせずとも宜かるべし。この池淸らもとにかへるとも、何とてわれら元のごときたつきを得ん。」

かく言ひしはわれら三人の子を勞らせることに遠慮せるなり。そのこころ透きとほりて見えければ

「母うへはそこにて見たまふべし。見たまふほどにこの池の水淸らは澄みまゐらすべし。」

かくわれは言ひつつ、弟妹と他に下男一人を手傳はせ、埋れたる泉池を穿ちはじめぬ。繩の腐れしもの、席の切れ、古板など雜り交りたる池底にたまたま光れる金具の、浮み出でたり。

「そはらんぷの口金なり。いたくは腐れたるものかな。」

母上は口寂しく言ひつつ、泥まみれの口金を手にとりて眺めぬ。

「本氣拔きと言ひて、そのころ流行りたる口金なりしが、おかしくぞ形ゆがめる。」

かくいへる母うへの顏泣けるごとく、わが目にうつりぬ。まことに時移り時勢變り、出でて煌然たる電燈の光なき夜と

てはなくなりぬ。母うへの心悲しくぞあるべし。
午後過ぎに、われら三人泥まみれになり、やうやうに池さらへを終り、底洗ひなどせしが、あやめの古根一株、まだ腐りきれずに殘りて石の間にありぬ。――夏のはじめに、むらさきの頭もたげたるあやめの花の、わが心になほ仄かに浮み出でたり。
さるほどに母はつひでに――「その松葉の枯れしをふるひね。」と言ひ、自ら手を伸べてその枯れしを拔きたまひしが、いままでとは打ちかはりて、青う雨に打たれしごとくいさぎよくはなりたり。――父のねしころ、機嫌わるき日はいつにても植木屋を呼びに遣り、庭の手入させしほどに、むづかしかりし機嫌なほるが常なりき。されば母はそのころの植木屋の來し朝々の晴れし日かげをだに忘れしことなく、いまはただ心哀しく、一つびとつ思ひ出の種となりぬ。
「母うへ、見たまへ、水運び濟うさゞなみ打つものを。」
われは水を通したるほどに、靜まれる池の胸ふくらみ、いきいきと生きるがごとし。死にたる池の上に松のかげ折からの日かげを浸して、蒼くはかげを宿したり。まことに年々背丈ちぢまれる齒朶の葉も、二三日も經たらんには二三寸も伸び喜ばん風情のごとくにぞ見ゆ。かくして暫らく後に母うへの眼に濕れるけはひの見え、われは又よしなきことをせしかなと思ひぬ。埋れたる池をながめんよりは、生きたる池を見たまふは耐えがたくぞあるべし。
「まことに心爽々しくあるかな。年來の心に欝積したるもの霽れゆき、いまは明るき心地こそする。」
母うへは、水滿ちたる泉水を眺め、何やらん考へつつ言ひたまひぬ。――われら弟妹らもしばらく佇ち、わが家の再び立つことのなき今日の日をかへり見る心になり、幼なきは稚き哀しみを覺し、老ひたるは老ひたる悲しみに耽りぬ。
――いま君の庭の池を見て、その音をききつつこの物語りをするわれも、その母のこころに觸れてくるやうにて、一さう詫びしきなり。愚痴とは言ふなかれと、その友は言ひそへぬ。

「その母人はいまなほありや。」
予は尋ねて友に愁色あるを知りぬ。言はずとも最早亡き人のうちなるべし。
かく物語りせるうちにも、依稀たる涓滴は泉水のほとりより起り、座を隔つる予と友との間に落ちぬ。げにさびしきは水のしたたる音なり。

とくさ

石とくさとをもつて庭をつくるべし。
蒼い石と石とのひまひまに、蕭條たるとくさの並み立たんには雨ふらばいよいよ蒼かるべく、心あそばんに物寂びてよかるべし。——まことにわが心かたくなになり行き、己が思ふやうなる庭にあらざれば、ようは心の落ちつかずなりぬ。——かかる世にかやうなる心もてるものの、絶えて悲しき思ひ休まることとてなし。——かたはの心と言ひ棄てんにはあまりに投げ遣りなり。ぜいたくと言はんにはあまりに質素なり。物好きとののしらばやや當るべく、されど所詮その底にしづみたる物悲しげなる風情にいたりては誰人もようは解き得ざるべし。まことに己が世の一つとして思ふやうならざることの多きを知りながら、なほそれに馴れんとして專念なるぞ悲しき——。
けふ田舍の人きたりて、われにとくさの幾株かをもたらし、君にあらざれば又た誰かこの雜草をよろこんで受くるものぞ。——かく思ひはるばる汽車のなかより樂しみ持ちきたれるなり。まことに古へは二三丈もありたらんとくさは、やはり竹のやうに繁りたらんものを、いまは千年も經たるに節と節との間つまりてわづか長さ二尺にも足らず。——かく思ひ眺めんには何たる趣深く思高きものぞ。君先づこれを己が好めるところに植ゑたまへ、われ水をもて君が植ゑたるあと

を濡らしまゐらすべし。――われはこの田舎の人のこころを嬉しとなして、石のかたはら、水蓮の鉢を埋めたるほとりに、そのすゐすゐたる水々しきとくさを植ゑたるに、日のひかり充ちてその影みな參差として累なる、――或ひはもつれて縮まりてぞ見ゆ、――とくさは陰草なれば水を絶やすことなかれと田舎の人またねむごろに注意しつつ、あさ夕の水を怠ることきびしくいましむ。――われこころに思ふやう、この世にもし己が心のままなること爲し與へらるるときあらば、大なる石をもつて庭をたたみ、そのひまひまにとくさを植ゑ、そらを覆ふに松をもつてすべし。かくして俗念のいとまいとまには庭にいでて思ふさま心を遊ばせなぐさむべし、と。

人ごころ

世のうつりかはりは人のこころのみにはあらず、いつしかみやこ路に早や金魚賣の聲さへ色めきたるも昨日のこと、けさは濕りたる表どほりに苗賣の呼ばはるこゑ寂びて過ぐるなり。――誰ぞや門の內に苗屋を呼び入れ、三文の糸瓜を三錢とは高きあたひにあらずやなどと言ひあらそへり。――苗屋は苗をひさぐにはあらず、その節うつくしく聲秀いでたる唄を賣らんとはするなり。されば猶霜きびしき夜のころより、へちま、とうなす、いんげん、とうちさの類を呼ぶ聲をならしつつ、世の春めきたらんには一早く巷にいでて、己が心をかたむける唄うたはんと樂しみくらしつつ、いまやうやく人の世にはいできつるなり。さるを三錢の苗を値切りたまふはよくよく風流雅人の道わきまへたまはぬ人ぞかし――われらの苗は土飼ひたまふともあるひは生えぬことあるとも、われらの苗の素性わろきためならず、この世の春いまだ寒かるためなるべし――かく苗屋のこゑすさまじく隣人の門よりきこゆるも、まことに春はしづかにめぐりきたれるなり。――

　金魚賣　出でて春行く　みやこかな

ごはわかきころの句なり、いまならばなほ巧みにしつらへあらんものをと思ひつつ、かく思ひ出でては錄するなり。



弓削道鏡

上司小剣

一

下野國の藥師寺では、今日、前太政大臣禪師が、別當となつて、晉山するといふので、もの〳〵しい準備が調へられた。三門には幕を張り、別當所の大玄關には、美しく盛り砂がしてある。注進の小者は、一刻毎ぐらゐに立ち歸つて、

『お乘物は、たゞ今、鬼怒川をお渡りでござりまする。』

『お乘物は、たゞ今、花田にお小息みでござりまする。』なぞと、引ツ切りなしに注進する。昨夜、常陸の下妻に泊つた道鏡の一行は、もう僅かな道をゆつくりと、毛の國に向つて進むのであつた。國境までは、塔頭の役僧一人と寺侍一人とが、郞黨五人を具して出迎へに行つた。

官位を剝がれて藥師寺の別當に貶されたのだとは言へ、前太政大臣禪師である。更らに法王の待遇をさへ受けて、一時は飛ぶ鳥をも落す勢ひ、政令は皆其の胸から出て政權は其の手に握られたのである。日本國中、誰れ一人指をさすものもなく、鎌足以來、兎角政權爭ひの渦巻きをつくる因となつた藤原氏、——近頃は外戚とし

て威張ることを工夫し出した——藤原氏は、一時は全く道鏡の前に屏息してしまつた。

曾つて藤原仲麿は兵力をもつて道鏡に向つて來たが、道鏡の策略は巧みにその裏をかいて、仲麿を殺してしまつた。藤原永手藤原ー川繼も、また藤原家の浮沈今日にありとして、道鏡を除くべき苦肉の策を講じたけれど、道鏡はびくともしなかつた。彼等は卑怯にも、事が破れこと、責をば、時の帝に塗り付け、御いたはしくも帝が淡路の島に遷されたまひて、淡路の廢帝となられるのを座視してゐた。聖武帝の皇女として、一度は父の帝の位を繼がせたまふた孝謙女帝は、ここに重祚して稱徳女帝とならせられた。女帝の御母は、篤い佛法の信者として、貧しい多くの癩病者どもに自ら浴みをさせ、其の膿毒に御手の汚れるのも厭はせられなかつた光明皇后で、實に藤原氏の出である。

されば、女帝は藤原氏を外祖父にもたせられていられるのであるが、藤原氏の跋扈を喜ばれずに、道鏡といふ人物を登用して、藤原氏を押さへられた。

貴族と僧侶とが、特權階級の最上位を占めて、宮廷にのさばり歩いてゐたのであるが、其の貴族と僧侶とは、常に見苦しい權力爭ひをして、醜態を暴露した。さうして、いつも〲勝つた方が負けたものに、スツカリ其の見苦しさを塗りつけて、己れ獨り、忠臣面や、正義顔をしてゐた。勝てば官軍、負くれば賊……は、いつの世も同じことであつた。

道鏡は一時、僧侶の權力を代表して、貴族の權力を代表する藤原氏を破つた。前の帝聖武の御代に僧の玄昉が占め得た地位よりも、更に高く、更に確かな地位を道鏡は占め得たのであるが、悲しいことには、僧侶といふものが、一代限りであつた爲め、妻帶の出來る貴族の世襲的根强さがなかつた。殊に其の女を宮中に入れて外戚になるといふやうな藝當は、僧侶の到底出來ないことであつた。流石の道鏡も、遂ひにこの世襲的威力の根强い藤原氏に負けて、永手や百川の爲めに追ひ退けられたのである。さうして、いろ〱の惡名をば、一人の肩に背負はされてしまつた。

今一つ、僧侶のうちの傑出したものは、多く蕃族であつたり、賤民の出であつたりして、宮廷を跳ね廻る上に引けふ

が多かつた。これも、僧侶が貴族と權力を爭ふ上の、一つの弱點になつてゐた。しかし、道鏡は立派な弓削氏の出で、士族の家柄である。卿太夫家の藤原氏に對して、多く遜るところがない。——

道鏡は、平城の都から毛の國まで、長い道中を輿に揺られつゝ、こんなことを考へつゞけながらやつて來た。

二

藥師寺の別當と言へば、たいしたものである。土地は僻遠の毛の國に在つても、東國敎化のつとめを帶びた大きな伽藍で、墾田幾千町、封何百戸、其の別當は王公にも比すべきものである。政敎一致の時代だもの。後世の逮夜坊主とはわけが違ふ。

都では東大寺、東國では藥師寺、西國では筑紫の觀音寺、この三ケ寺が、當時日本の三大寺といふことになつてゐた。律宗が唐から入つて來て、天皇、皇后以下四百餘人の貴族等に授戒し、戒壇といふものを開いたのも、この三大寺であつた。律宗は希臘敎が、印度を經て、變形して來たものだとも言はれてゐるが、日本へ來ると、先づ法相宗と提携した。當時佛敎の宗派といふものは、三論とか倶舍とか法相とか華嚴とか言つて、いろ／＼あつたけれど、言はゞ學派の名で、この寺は何宗、あの寺は何宗と、確かにきまつてゐたのではない。どの寺も皆八宗兼學と言つた工合で、同じ寺に宗派のちがつた僧が共に住まつてゐた。道鏡は法相に學び華嚴に通じ、律宗をも體得し、其の他の各派に渉つた學者で、しかも政治上の手腕に並々ならぬところがあつた。

藥師寺の塔頭一同は、うや／＼しく南大門の前に並んで、新別當、前の太政大臣禪師の輿を迎へた。輿は其のまゝにすうと進んで、講堂の前に卸ろされた。都から隨いて來た警固の武士に侍僧あまた、それへ當藥師寺から鬼怒川べりまで出迎へた僧俗を加へて、行列はなか／＼長い。

平城の都の夏は、蒸し暑い。其の八月の半ばに政變があつて、雌伏してゐた藤原氏がまた頭をもたげた。百川、永手の輩が、勢力を占めて、六十二歳の白壁王が皇太子に押し立てられ、やがて位に即かせられた。道鏡は其の日に、一日の猶豫もなく、下野の國に下向を命ぜられたのである。三日でも都に置かうものなら、どんなことで勢力を挽回するかも知れないと、藤原氏に恐れられたのである。

秋とは言へど、都の八月は蒸し暑さにたへられないほどであつた。佐保川の水も炎天に乾きかけて、殘りの細い流れは、湯のやうになつてゐた。道鏡は輿の戸を固く閉ざして、二人の輿丁に舁かれつゝ、思ひ出の多い河内の國を經て東國に向ふことに定めた。藤原氏を憚りながら、生駒山の麓まで、涙片手に見送つた人の數は、千人にも及んだ。くらがり峠には刺客が待ちうけてゐるといふ噂も、輿の中へ傳はつたけれど、道鏡は恐れなかつた。しかし何事もなかつた。河内の國でゆる〳〵名殘を惜んで、いざ東國へと向ふ道すがら、不破の關あたりまでは、時々怪しいものゝ影が、行列の前後にちら〳〵したけれど、道鏡の生命は先づ安全に、鳥が鳴く東の空を近くに仰ぐことゝなつた。道鏡には生來初めての、富士の高嶺の姿を、あの山の麓に輿を駐めて、ゆる〳〵と眺めた。時の駿河の國司は、硬骨の人で、藤原氏を恐れもせずに、手厚く道鏡をもてなした。其の他の國司にも、窃々道鏡に心を寄せるものがあつて、この政治上の失脚者は、安全に、何んの不自由もなく、長途の旅行をつゞけ得たのであつた。

三

藥師寺の講堂の前に卸された道鏡の輿の前へ、眞ツ先きに進んで、拜伏したのは、長老の玄珍であつた。從者が黒塗りの扉を眞一文字に開くと、柿色の法衣を纒ふた道鏡は、端然として坐つてゐた。つひ先頃まで、廟堂に座して、百官を叱咤した威風は、自ら四邊を拂ふて、玄珍を初め、多くの僧俗を俯伏せしめた。侍者の進むる淺沓を、靜かに見やつてから

また一度瞑目した道鏡は、やがて輿から立ち現はれた。都をばむし〳〵と汗を促がす殘暑の中に出で立つた法衣の袖には、もう九月も末の冷たい秋風が吹いてゐた。下國もズツと下國の、毛の國の荒涼の氣は、この失脚の政治家、宗教家の姿をば、哀れ深く押し包んだ。人々の眼には皆涙があつた。

しかし、頭の毛の少し伸びた、六尺ゆたかな、五十恰好の偉丈夫は、法衣の袖をかき合せつゝ、堂々として、講堂の中に進んだ。些か長途の旅行の疲れも見せず、甃石の上に鳴る沓の音は、から〳〵と秋晴れの空に響いた。

金堂に向つて、徐ろに拜禮した道鏡は、講堂の正面の榻に凭つて、南を向いた。其の左右には玄珍を初め、多くの僧が立つた。堂の外にも無數の僧俗が群がつた。

『よしなに賴む。』と、道鏡の挨拶は簡單であつた。

『都からの音沙汰には、法王をば、無前の妖僧と申して居りまする。』と、玄珍は恐るゝ色もなく、卒直に言つた。

『はゝゝゝ。』と道鏡は大口開いて笑つた。『僧が權力を得て、失脚すると、皆妖僧になるものぢや俗人は都合がよい。惡人とは言はれても、妖人とは呼ばれぬからのう。』

『宇佐の神託の儀は、如何のもので……』と、玄珍はまた憚り氣もなく問ふた。前々から、塔頭で打ち合せをしておいて、これ〳〵のことを問ふてみようと、評議がきまり、玄珍から口を切ることになつてゐたのである。

『はゝゝゝ。』と、道鏡はまた笑つて、『子供だましの小細工をやりをつた。答へるのも馬鹿々々しいが、しかし政權を得たいと焦慮る人の心は恐ろしいものぢや。神も佛も皆手品に使はれるからのう。』

『しからば、法王には、何一つ、御身に落度がなくて、政權爭奪の犧牲になつたと仰せらるゝか。』と、玄珍は些か語氣を强めて問ふた。道鏡は暫らく瞑目した。

『落度があつたかなかつたか、それは愚衲の口から聞くべきことでない。……しかしぢや、反對黨が言ひ觸らすほど、愚

衲が大逆無道の人間なら、今こゝにかうやつて、愚衲は生きてゐられぬ筈ではないか。生命を保つてゐる上に、藥師寺の別當といふ、僧侶としては榮譽な役を仰せ付かつたところから考へて、愚衲の身に絡まつたことの總てを考へてみてくれ。……愚衲の信任を得た帝が、女性におはしたことは、愚衲の大きな不幸であつた。』と流石の道鏡も大きな眼をしばたゝいた。

『帝が河内の國の由義の離宮に御幸ましました時、法王が異味をすゝめられ、それから帝の御惱がおこつたと申すのは、如何の儀でござる。』

　女珍はまた威儀を正して、かう問ひかけた。道鏡はハラ〱と落涙して、

『この道鏡が政權を握つてゐられたのは、女帝の信任が第一の力であつた。其の力の根元とも申すべき、聖壽の一日も長からんことを祈りこそすれ。何しに、御命を縮め奉らうや。道鏡の進めた御食に毒はないが、反對黨の流言には毒がある。………由義の宮の御幸は去ぬる寶龜元年二月のことで、梅の花が盛りでござつた。成るほど其の折り、道鏡は唐土から傳はつた大豆の料理を調へさせて、大御食に進め奉り、いたく御感賞にあづかつた。女帝は寶龜二年の四月、猿澤の池の畔に八重櫻の匂ふ頃、都へ還御あり、この八月に崩御あらせられたでないか。毒あたりに、それほど長い年月のかゝるものか。考へても見られよ。』と、道鏡は法衣の袖で涙を拭いた。

　それから道鏡は、別當就任の披露に先年河内の由義の宮で、自分が唐土から傳へて造つたといふ大豆の料理を調へることに約束して、翌日の齋に齋堂で大衆を饗應した。其の大豆の料理といふのは、全く大豆の原形を留めない、大きな四角い、白い柔かなもので、いかなる老僧の齒にもさはることがなかつた。

『法王、これは何んと申す珍味で。……』と、長老の女珍が道鏡に問ふた。

『それは、トウフと名づける。』と、道鏡は朗らかに答へた。

『トウフとは？』

『豆腐る、と書き申す。』

『この豆腐を、帝に進められたか。』

『其の通り。』

『腐るといふ字がわるかつたのぢやな。反對黨が其處へ附け込んで、異味を進めたなぞと、言ひ觸らしたか。』と、玄珍は首を傾けた。

道鏡は、やがて紙と筆とを呼んで、一首の卽詠を書き付け、『これが今の愚衲の心ぢや。愚衲はもう猿になつたつもりぢや、決して人の眞似はしない。』と言つて歎息した。其の歌はかうであつた。

奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の
こゑきく時ぞ秋はかなしき
猿丸太夫

其の日から彼れは、猿丸太夫といふ匿名を用ゐた。三年の後、道鏡は薬師寺の方丈で死んだ。

――一三・五――

校正室より

◇近來女性の競技熱は全く大したものです、彼の大阪の國際競技では毎日、毎日數萬と云ふ觀覽者があつたのを見た皆さまはいかにお感じになつたでせうか、近來のスポーツ熱、文藝熱は全く第三者の想像もつかぬ賑はしさです。

◇「女性改造」は此の方面に向つて本月號より種々の新競技を登載することになり、既に一流の人々に向つて執筆を擔任して貰ひました、隨つて女性スポーツに關するものは本誌が獨特の異彩を放つでせう。

◇賀川豐彦氏は眼病のため渡歐を一時延期されました。わたしどもは氏の全快を祈つています。

◇夏休みをいかに暮す? これは三、四日しんみりと研究する價値がありませう、しかし從來の如く單なる歷史上、地理上の一小趣味に囚はれて一夏をすごすのは無意義だと思ひます、旅行ならば國際的に、研究ならば系統的に、感情より意思へ、空想より實際へ、抽象よりは具體的に、自分の能に應じ、趣味に考へ、何か一つまとまるものへ向つて出發すべきだと思ひます。

◇文藝、哲學等の研究も周圍の事情に制せられず、自由に自分で良書を選擇し、そして好んで雜俳の書に就かず、自分で消化し得る程度の書籍を求むることが第一です。或は高山に、或は海岸に、悠々自然に親しみつつそして無理のない勉强をすることが第一です、運動競技の如きはその間にありて適度の研究、適度の競技が欲しい、あまりに「解思」することによりて快活の精神が失はれますから。

◇皆さんの藝術の表現を助長し、完成する意味で八月號から別頁にあるが如く短篇小說を募集することにしました。それから讀者諸姉に解放しました「讀者欄」を有益に、有意義に使用して下さることをお願ひします。

◇宇野浩二氏の長篇小說「出世五人男」について、五人とは誰々かそのモデルを敎へてくれなぞ云ふ註文が舞ひ込みますが、そんなことは出來ません、皆さんで讀んで居らるるうちにハハア……と感づかれるでせう、隨分この小說には或る期待がかけられ・居るやうです。

女性改造定價表

册數	定價	郵稅
壹册	五十錢	壹錢五厘
六册	參圓	郵稅共
十二册	六圓	郵稅共

註文の注意

◇增大號其他定價變更に依る前金拂込み不足は不足金の拂込みを待つて發送す
◇註文は凡て前金とす
◇前金切れの際は發送を停止す
◇外國發送の註文は壹部郵稅拾六錢を申受く(但し支那を除く)
◇見本は發送せず
◇郵稅切手代用は壹割增のこと
◇拂込みは振替によらるるが最も便利なり

本誌一頁廣告料 一等百圓 二等七拾圓

⊙本社廣告取次所 博報堂 弘盛舍 日本電報通信社

(七月號金五十錢)

大正十二年六月十三日印刷納本
大正十二年七月一日發行

編輯兼發行印刷者 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎

印刷所 東京市京橋區南鍋町廿七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京芝區愛宕下町一ノ一 改造社

電話芝 一六三八 二八五四 四三〇三 八四〇二
東京振替

法學博士 福田德三著
社會運動と勞銀制度
(9版) 定價三圓九十錢 送料廿一錢

世界的經濟學者としての博士最近業の大著です。勞働運動は今から眞劍に入る、そしてその指導者も假仕込では駄目だ、紛紛斯界に卓越した博士の本書は社會運動と勞銀制度の基調をなす名著である。

法學博士 福田德三著
社會政策と階級鬪爭
價版 (72版) 定價二圓八十錢 送料十九錢

「資本主義は必然的宿命によつて崩壞するものではない、この儘に放擲する時は人生與の生幸福は全くその爲に蹂躙せらるゝの外はない我々は人爲の政策を以てこれに對抗せなければならぬ」と云ふ立場より博士一流の卓論を以て本書はなる。

法學博士 福田德三著
ボルシエヴヰズム研究
(10版) 定價二圓九十錢 送料十七錢

レーニンの國家理論、ボルシエヴヰズム、マルキシズムに關する世界的文献で、學徒の必讀に値すべき名著、博士の説によればレーニンも眞正のマルキストではない、勞農露國を科學的に研究するには本書を措いて他にない。

慶大教授 小泉信三著
價値論と社會主義
(5版) 定價三圓 送料三十一錢

三田の新人として多大の尊敬を受けつゝある小泉氏が、社會主義と價値論につき精緻なる筆致と、嚴格なる推理の餘りになれる權威と、趣味と實益を兼備せる名著である。

ラッセル原著・宮本鐵之助譯
數理哲學概論
(4版) 定價二圓八十錢 送料十九錢

本書は努めて數學專門語を避け明快通俗に記述し、何人にも理解し易からしめたものである。文化科學と自然科學の理念と其成果を完全に認識せんとせば先づ數理哲學の門を叩くの外はない。

理學博士 桑木彧雄著
物理學と認識
(4版) 定價一圓五十錢 送料十五錢

アインスタインの原理は科學と哲學とを密接な關係にまで引きよせたこの物理學上の新原理が惹起した空間や、時間の考方の變化は明かに哲學上の問題である、本書は實に科學と哲學との密接な關係につき博士が蘊奧を傾けたものだ。

石原純著 岡本一平畫
アインスタイン講演錄
(5版) 定價一圓八十錢 送料十五錢

アインスタイン教授の來朝記念錄とも云ふべき有益な著書、日本に於ける十回の大講演を石原博士が筆記したもの、學界に「相對性原理」が分明する通俗書として全國の各小學は云ふに及ばず有識者より註文殺到しつゝある。

理學博士 石原純著
アインスタインと相對性理論
(37版) 定價二圓二十錢 送料十七錢

ニユートン引力を否定して、全科學界を革命せるアインスタインの相對性理論は既に絕對となつた。今までの物理學の公理定義は根本から轉覆された、本書を一讀せずして教育したら其生徒は知らず知らず時代後れになります。

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二

志賀直哉著
直哉傑作選集 **壽々**（4版）
定價二圓八十錢 送料十九錢

志賀氏は明治、大正に於ける小說界の最高權威である。日本の藝術を論ずるものは先づ氏の透徹した藝術境を窺はねばなるまい。

芥川龍之介著
沙羅の花（5版）
定價二圓八十錢 送料十九錢

志賀氏と共に獨特の地步を有する芥川氏の半生に亙りての精練せる傑作を一齊としたもの、氏の藝術道は近時三昧に入れるの感がある。面白き隨筆、小品も數多く本書に收めらる。

山本有三著
山本有三戲曲集（6版）
定價二圓八十錢 送料十九錢

天才戲曲家として一作を出すごとに讀者の血を躍らすのは山本氏の戲曲である、本書に收められたる五篇「津村教授」「嬰子殺し」「生命の冠」「女親」「坂崎出羽守」は總て舞臺や批評で賑々たるものであつた。

里見弴著
直輔の夢（10版）
定價一圓八十錢 送料十七錢

谷崎氏の「愛すればこそ」の名著と大正十一年度文壇の双璧と稱せらるゝ傑作。肺に惱める一青年と、同病に懊惱せる藝妓上り、及び東京市の疑獄事件に連座せる某重役との深刻な戀愛關係を描寫した纖細たる情緒を氏一流の隨筆にて描いたもの。

中村吉藏著
錢屋五兵衛父子（5版）
定價一圓五十錢 送料十五錢

北越の快男兒「錢屋五兵衛父子」は封建末期に於ける事業界の一大巨人であつた。彼が晩年の運命的な悲壯な沒落は舊社會解體の一つの豫兆であつた、彼一家の最後の悲壯事を著者獨特の筆致で描いたもので幕末の光景紙面に躍つて讀者の心を搏つ。

野上彌生子著
小說六つ（3版）
定價二圓七十錢 送料十九錢

女流作家も多い、しかし野上氏に比すれば總ての作家は丸で比較にならぬ、本書は氏の半生涯に於ける小說の傑作六大篇を集めたものです、現今一番全國女流に讀まれています。

長與善郎著
青銅の基督（4版）
定價二圓 送料十七錢

力強き筆「殉教の世界へ」の不思議な魅力の結晶に成る、德川時代長崎の一南蠻鑄物師の壯烈悲壯な死を題材とした奇しき運命を如實に描き出し深刻悽愴の氣迫る。

島田清次郎著
小說 **勝利を前にして**（13版）
定價二圓四十錢 送料十九錢

文壇の寵兒たる著者近來の大傑作である。長篇小說「絕對道」を收む青春の燃え盛すやうな情熱に加ふるに、シンミリした人生味の溢い所が出て來た氏の一轉機を劃した力作。

東京芝區愛宕下町 **改造社** 振替東京八四〇二


商品券は東京、大阪、大連京城の三越の
何品とでも御取替が自由ですから中元
御贈答品として非常に重寶されてます
◆◆旅行用具は三越の品に限ります海や山へ御旅行に
必要な品が悉く三越に取揃へてあります、御旅行案内書や
地圖もあります、品が丈夫で低廉な品が澤山到着しました
中元御贈答品は三越の品
何人もお喜びになるのは三越の品で御
座います、中元御贈答用品として本年
はお恰好品を澤山取揃へて御座います
従來月二回（十日廿五日）を定休日と定め
て居りましたが御華客様の御不便不尠に
鑑み爾今定休日を廢する事に致しました
三越呉服店
◆◆東京駿河町◆◆

THE JOSEI KAIZO

A LADY'S MONTHLY REVIEW OF SOCIAL AFFAIRS, LITERATURE, EDUCATION, POLITICS, ETC. PRICE. FIFTY SEN A COPY.

OFFICE: KAIZŌ SHA, 1, ATAGOSHITA MACHI SHIBAKU, TOKYO.

大正十一年九月十三日第三種郵便物認可 大正十二年六月十三日印刷納本
大正十二年七月一日發行（毎月一日一回）
第二卷第七號 七月號 定價五拾錢（送料二錢）



東京秀英舎印刷

復刻版　女性改造（戦前編）第2回配本（第4巻〜第6巻）
2007年12月10日　発行
揃定価（本体60,000円+税）

発行者　船橋　治
発行所　不二出版
東京都文京区向丘1-2-12
☎03(3812)4433
印刷所　三　進　社
製本所　青木製本

ISBN978-4-8350-6074-3（全3冊 分売不可 セットコード ISBN978-4-8350-6072-9）